

2019 年度 学位論文 博士（歴史学）

ケルト社会の地域性とアイデンティティとしての信仰  
—紀元前 3 世紀以降のウィンデリキアを例に—

関西学院大学大学院文学研究科

62917007 番

九鬼 由紀

## 【要旨】

本稿は、これまで「汎ヨーロッパ」的にとらえられることの多かった「ケルト」の社会やその人々について、地域ごとの個性すなわち「地域性」を見出し、個々の地域の文化を独立して掘り下げることによって、地に足の着いた「ケルト」像を描出することを目的としている。

カエサルによるガリア遠征以前、アルプスより北の地域には、ギリシア語で「ケルトイ (Κελτοί)」ないし「ガラタイ (Γαλάται)」、ラテン語で「ケルタエ (Celtae)」あるいは「ガッリー (Galli)」と呼ばれた人々が生活していた。今日「ケルト人」と総称される彼らは、歴史学、言語学、そして考古学それぞれでの定義が異なっており、それを総合して語られる社会は、あたかも「ケルト人」という「ひとつの民族」が、ローマの支配がおよぶ以前のヨーロッパ地域に、大きな覇権を築いていたかのように、皆一様に同一の文化を保有していたかのようにえがかれる傾向にある。これでは、各地域の細かな差異が見過ごされてしまい、正確な「ケルト」の理解につながるとはいえないであろう。本稿では、各地域の差異が生じる点として、社会と密接にむすびついていたとされる「信仰」に目を向け、考古学資料を通じて、「地域的な“ケルト”」をあきらかとする端緒となることを目指している。取り扱う時代は、テラモンでの敗北（紀元前225年）を経験し、いわば「没落の時代」へと入っていく紀元前3世紀以降である。アルプス以北の地域が、ローマその他の外敵の脅威にさらされながらも、いっぽうでそれらから多大な文化的影響を受け、先立つ時代とは異なる姿を見せていくこの時代には多彩な出土物があり、資料もある程度豊富に存在している。本稿ではとくに第2部において、それらの資料をもとにして、遺物にほどこされたモチーフや出土状況などからそれらに込められた「ケルト人」の精神世界を読み解いていきたい。

本稿は、第1部の3章、第2部の4章、そして補論の計8章構成となっている。

第1部「「ケルト」の地域性」では、本稿が取り上げる時代背景の確認と、「ケルト」に定義づけられるヨーロッパ各地域の様相を分析する。まず第1章「「ケルト」社会の同質性—オッピドゥムの出現と「都市化」—」では、本稿の舞台となる紀元前3世紀以降の「ケルト」とされる世界で一様にして起きた居住体系の大きな変化、すなわち「オッピドゥム」の出現と、それにとまなう社会的・文化的変容に目を向ける。第2章「「ケルト」の姿」では、3つの「ケルト」の定義に含まれる8地域のうち、「ガリア」をはじめとした7つの地域の「ケルト」の諸相を確認する。また、歴史学における「ケルト」の中心である「ガリア」の社会と信仰についても、若干の言及をおこなう。第3章「ケルト社会の地域性—ケース・スタディとしてのウィンデリキア—」では、本稿で取り扱う「ウィンデリキア」について、その「ケルト」社会を概観したあと、第2部でもちいる資料の確認を中心に、先行研究の確認をおこなう。

第2部「ウィンデリキアの信仰の諸相—アイデンティティとしての信仰—」では、現在のバイエルン州を中心とする「ウィンデリキア」地域における「ケルト」社会の様相と、彼らの信仰を取り上げる。第1章「ウィンデリキアとその周辺の「都市」における信仰の機能—マンヒングの事例を中心に—」では、この地域においてもっとも資料の豊富である「マンヒングのオ

「オッピドゥム」を中心とした計3か所の事例に目を向け、囲壁のなかでの宗教的活動の痕跡と、それらが共同体において果たした役割を推測する。つづく第2章「「都市」の外側と共同体—方形土塁 Viereckschanzen は何を意味するか—」では、第1章と対照的に、オッピドゥムの外側にスポットを当て、ドイツ南部、南西部に点在する「方形土塁」の役割について考察する。1950年代以降に発掘が進められた事例を中心に分析をおこない、「聖域」と呼ばれてきたこの構造物で、どのようなことがおこなわれていたかを推測する。第3章「モノから見る信仰のかたち—植物・動物・ヒトをかたどって」では、オッピドゥムや方形土塁で出土した遺物の装飾から、信仰の表現方法について考える。各節ごとに「植物」「動物」「ヒト」の装飾をそれぞれどこした遺物を分析し、そこに込められた思想や、表現の解釈をおこなう。第4章「ケルト社会における貨幣の機能—貨幣の図像モチーフを手掛かりに—」でも、貨幣に刻まれたモチーフの分析をおこなうことで、新しくもたらされた「貨幣」という要素が、ウィンデリキアの信仰にどのような影響をおよぼしたのかを考える。

そして補論「「ケルト」とは何か」では、本稿の根本である「ケルト」概念が形成されるまでのいきさつと、その結果生じているこの概念のもろさ、そしてそのような状況下での「ケルト」研究の意義について、研究史を概観することで考えていく。

## 【目次】

### 序章

はじめに	1
1 3つの「ケルト」—歴史、言語、そして考古—	1
2 先行研究の整理	7
3 本稿の目的と、本稿の構成	11

### 第1部 ケルト社会の地域性

第1章 「ケルト」社会の同質性—オッピドゥムの出現と「都市化」—	16
1節 オッピドゥム—ケルト人の「最初の都市」—	16
2節 「都市」の萌芽	20
3節 「都市化」をもたらしたものの、「都市化」がもたらしたもの	23
4節 小括	28
第2章 「ケルト」の姿	32
1節 ガリア・イベリア・ガラティア—歴史にえがかれた「ケルト」世界の諸相—	32
2節 ボヘミアとモラビア—地中海世界へ居ついた「ケルト」—	36
3節 ブリタニア・ヒベルニア・アルモリカ—「島のケルト」とその生き残り—	37
4節 ケルト社会の都市化と信仰—ガリアの場合—	41
5節 小括	45
第3章 ケルト社会の地域性—ケース・スタディとしてのウィンデリキア—	48
1節 ウィンデリキアの「ケルト」の展開	48
2節 えがかれなかったウィンデリキア	51
3節 ウィンデリキア・ケルトの研究状況—ドイツにおける古代研究のなかで—	52

### 第2部 ウィンデリキアの信仰の諸相—アイデンティティとしての信仰—

第1章 ウィンデリキアとその周辺の「都市」における信仰の機能	
—マンヒングの事例を中心に—	
	58
1節 マンヒングのオッピドゥム	58
2節 都市マンヒングに見るケルト人の信仰のかたち	
—紀元前3世紀から紀元前2世紀の構造物による分析—	
	62
3節 「都市」における信仰の痕跡—紀元前2~1世紀の2事例をもとに—	
	70
4節 小括	81



<b>第2章 「都市」の外側と共同体—方形土塁 Viereckschanzen は何を意味するか—</b>	87
1 節 ドイツ南部のケルトの「聖域」—方形土塁 Viereckschanzen—	87
2 節 方形土塁の果たした役割	95
3 節 ポヘミアの方形土塁	104
4 節 小括	106
<b>第3章 モノから見る信仰のかたち—植物・動物・ヒトをかたどって—</b>	111
1 節 信仰における異文化の影響—マンヒングの《崇拜の木》を例にして—	111
2 節 図像表現に見るウィンデリキアの象徴的観念—ケルトの動物の神聖性—	129
3 節 図像表現に見るウィンデリキアの象徴的観念 —マンヒングの《分銅》にみる「神のすがた」の描かれ方—	146
4 節 小括	148
<b>第4章 ケルト社会における貨幣の機能—貨幣の図像モチーフを手掛かりに—</b>	152
1 節 ケルト世界の貨幣製造	152
2 節 貨幣の神聖性の検討—「埋蔵貨」の事例から—	156
3 節 図像のモチーフに見る貨幣の神聖性	161
4 節 小括	169
出土貨幣一覧（マンヒング／ベルヒンク・ポランテン／イルシング／ガガス）	172
<b>補論 「ケルト」とは何か</b>	
はじめに	201
1 19世紀までのケルト研究	201
2 20世紀における「ケルト」の展開	206
おわりに	209
<b>終章</b>	213
参考文献一覧	216

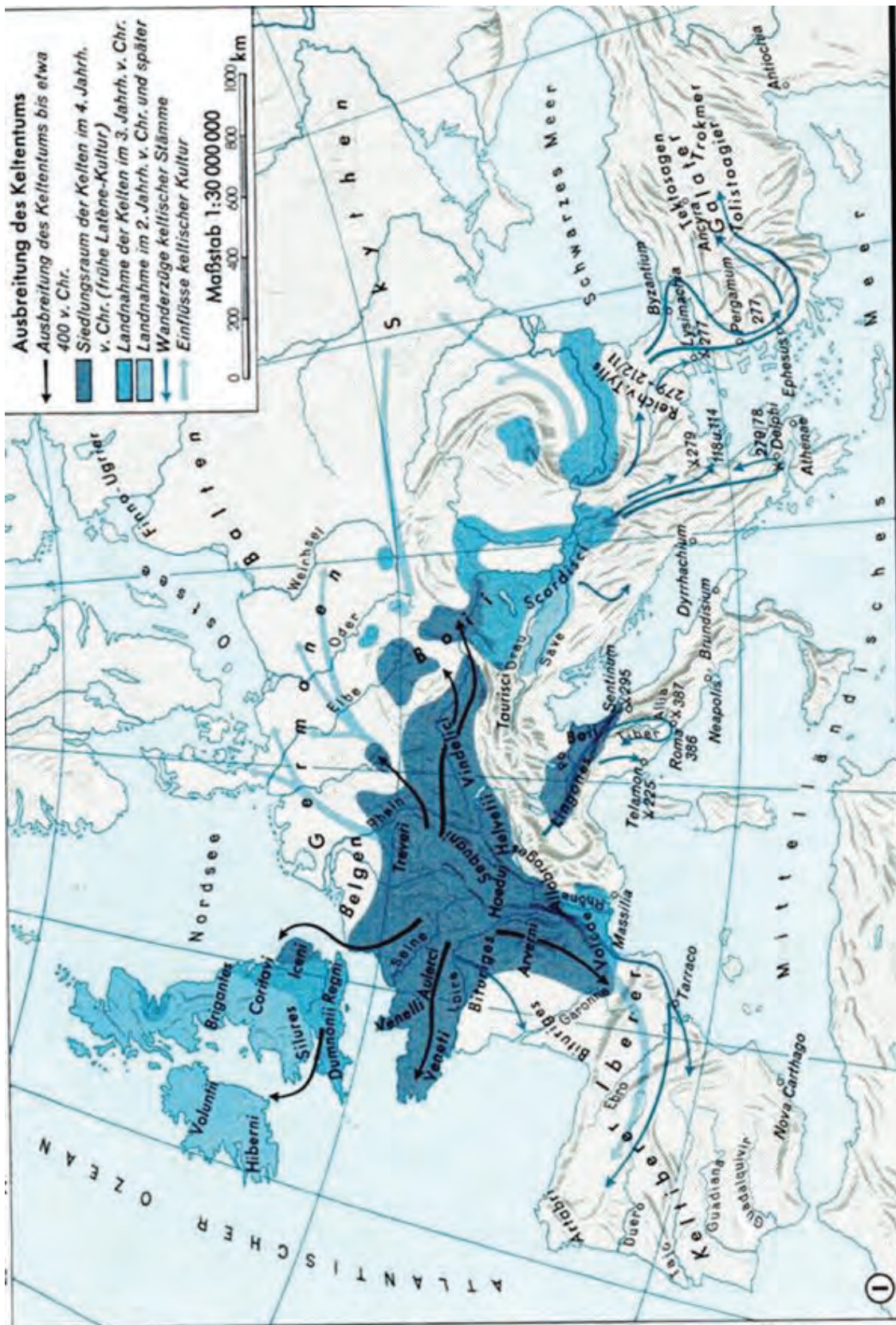


图 I : 「ケルト」の世界 [出典 : Putzger Historischer Weltatlas, 18.]

## 序章

### はじめに

紀元前 58 年、ユリウス・カエサルによって属州ガリア・ナルボネンシス以北への侵攻がはじまった。より好い土地を求め西進していた「ヘルウェティイ族」による属州プロウインキアへの侵入をはばむことが、その主たる目的であった<sup>1</sup>。この出来事をきっかけとして、ローマによるアルプス以北の制圧、そして、それらの地域へのローマ文化の流入が一気に押し進められたのである。

ローマに飲み込まれる以前、アルプスの山並みよりも北の領域には、ギリシア語で「ケルトイ (Κελτοί)」ないし「ガラタイ (Γαλάται)」、ラテン語で「ケルタエ (Celtae)」あるいは「ガッリー (Galli)」と呼ばれた人々が生活していた。彼らは、今日「ケルト人」と呼ばれている。

### 1 節 3つの「ケルト」—歴史、言語、そして考古—

『オックスフォード古典学辞典 *Oxford Classical Dictionary*』において、「ケルト」は「ガリツィアからガラティアの、地中海地域北部におもに居住した人々の集団に、古代の作家があたえた名前（ウェールズ人、スコットランド人そしてアイルランド人への適用は近代のもの）<sup>2</sup>」と説明される。また、『ケルト文化事典』においては、「ケルト」は「出自は異なるものの、ケルト語といわれる言語を話す諸民族の総体<sup>3</sup>」であるとされる。

本稿は、そのような「ケルト」の社会のありようの解明を試みるものであるが、まず、この「ケルト」というシンプルな単語に込められている複雑さについて知っておく必要がある。

「ケルト」と呼ばれる集団には 3 種類あって、そのそれぞれでしめすものが異なってくるのである。

#### 1-1) 歴史

ケルト人は文字を持たなかったため<sup>4</sup>、自分たちの社会生活について、みずから手で書き遺すことはなかった。それゆえ、彼らの実態は非常に茫洋としたものである。古代のケルト人については、同時代もしくは数世紀後のギリシアそしてローマの古典に描写されている。それらのなかで彼らはギリシア語で「ケルトイ」「ガラタイ」、ラテン語で「ケルタエ」「ガッリー」と呼ばれ、またその人々の居住域が「ケ



ルト」や「ガリア」と称された。

しかし、その言葉が設定される範囲（原住地域）は作家によって異なり、また「ケルト」と「ガリア」という呼称も区別してもちいられてはいない。ここでは、その著作において「ガリア」、すなわち「ケルト」の範囲を記載している、カエサル、ストラボン、プリニウスの認識を確認しよう（図1）。

カエサルは、ガリアを、広義ではピレネー山脈からライン川まで、狭義ではセーヌ川、マルヌ川、ガロンヌ川に囲まれた地域とする<sup>5</sup>。同様に、ストラボンは、ピレネー山脈からライン川までを<sup>6</sup>、プリニウスはピレネー山脈からスヘルデ川までがガリアであると記している<sup>7</sup>。西端がピレネー山脈であるということは3者ともに同じであるが、東端については異なっている。「ガリア」、すなわち「ケルト」はもっとも東端でもライン川までしかおおよぼず、それより東は「ゲルマニア」とであるとみなされている。

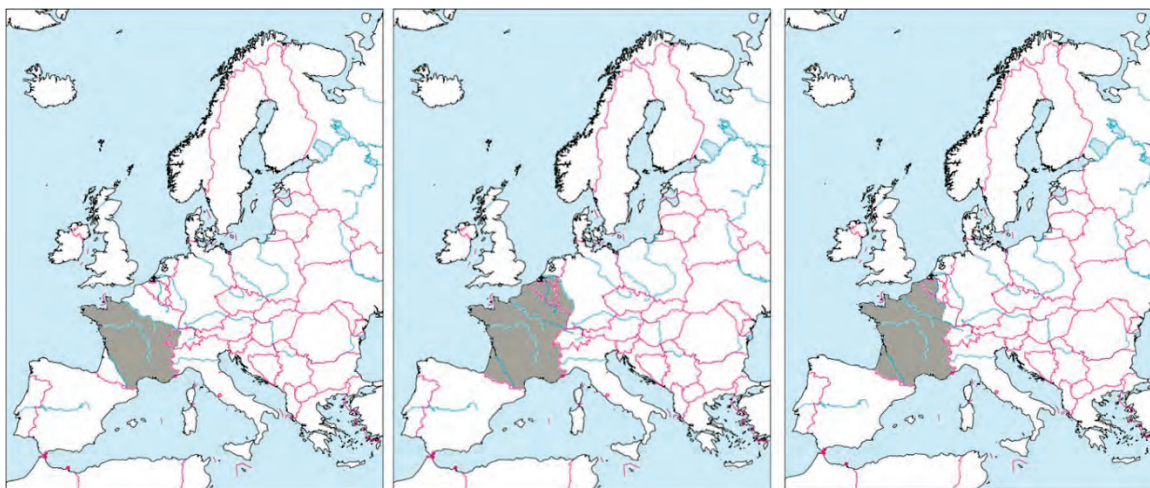


図1：（左より）カエサル（狭義）、ストラボン、プリニウスの「ケルト（ガリア）」（黒塗り箇所）

ケルト人はしばしば「好戦的な野蛮人」として描写された。ポリュビオスによれば、紀元前400年ころ、パドゥス川（ポー川）流域の豊かな平野へとケルト人の大軍勢が押し寄せ、先住のエトルリア人を追い出してその地に住み着いたと伝える<sup>8</sup>。またリウィウスは、ケルト人のアルプス越えは、当時のケルト人の王アンビガトゥスの命により、ベロウェスとセゴウェスというふたりの若者が率いたと伝えている<sup>9</sup>。彼らはまずメディオラヌム（現在のミラノ）を築いた。イタリア侵入の10年ほど後（ポリュビオスによれば紀元前390年もしくは387年）、セノネース族がローマ市まで攻め入った。ローマ軍はケルト人の侵攻を阻むことができず敗走、ローマ市内は破壊と略奪のかぎり尽くされた。この後の顛末はポリュビオスとリウィウスで異なるが<sup>10</sup>、ケルト人はユピテル神殿のあるカピトリウムを除くローマ市全

域を7か月間に渡って制圧した。

ポンペイウス・トログスは、「神聖なる春<sup>11</sup>」としてもととの居住域からイタリア半島へやってきたケルト人の、もうひとつの動向を伝える。イタリア半島へ渡りながらもそこへ定住しなかった一団は、一路パノニアへと向かった。彼らはそこでさらに二手に分かれ、一方はギリシアを、他方はマケドニアを目的地とした。ベルギウスを指導者とした集団は、戦火を交えたのちマケドニア王プロトマイオスの首を斬りおとした（紀元前281年）。いっぽう、将軍ブレンヌスに率いられたケルト人の軍隊は、紀元前279年にギリシアのデルフォイへの侵攻を試みるが、敗北を喫した。さらに紀元前225年には、タラモネ湾に面する町テラモンにおいて、ケルト軍ガイウス・アティリウス率いる軍勢とルキウス・アエミリウス率いる軍勢に挟撃を受けて惨敗した<sup>12</sup>。そして、紀元前58年から紀元前52年にかけてカエサルのガリア遠征が進められ、アレスシアの攻囲でケルト人は完全にローマに屈することになるのである。

歴史学における「ケルト」とは、主としてアルプス以北のライン川より西の地域に住み、紀元前5世紀末以降イタリア北部やギリシア、小アジアに侵攻し、やがてローマに征服された人々とその居住域であるといえる。しかし、それらの言葉はあくまでも地中海世界の人々による「他称」であり、そもそもは「野蛮人」を意味する。著述家たちがそのように呼ぶ指標となったものは不明瞭である。

## 1-2) 言語

言語学において「ケルト」が説明される際、それはケルト系の言語の話者と、その居住地域をしめしている。

インド・ヨーロッパ語の一派としてのケルト系言語は、地理的な観点から「大陸ケルト語」と「島嶼ケルト語」の2種に大別される。「大陸ケルト語」はすでに消滅してしまっている。ガリア語（フランス、ベルギー）、ケルト・イベリア語（スペイン、ポルトガル）、レポント語（イタリア北部）、ガラティア語（小アジア）、そして東方ケルト語がこちらに該当する。大陸ケルト語は現在消滅している。それゆえに、これらの言語の痕跡は碑文や地名への名残<sup>13</sup>によってのみたどることができる。大陸については、それらの痕跡の存在する地域が、言語学的な「ケルト」となる。いっぽう「島嶼ケルト語」には、ブルトン語（ブルターニュ）、コーンウォール語（コーンウォール）、アイルランド語（アイルランド）、マン島語（マン島）、スコットランド・ゲール語（スコットランド、ヘブリディーズ諸島）、ウェールズ語（ウェールズ）などが含まれる。ウェールズ語などは、現在も学校教育に取り入れられるなどして受け継がれている<sup>14</sup>。

ケルト系言語の分化については、インド・ヨーロッパ語の伝播とともに議論の対象となってきた。通説では、インド・ヨーロッパ語から派生した「原ケルト語」が

中央ヨーロッパで生まれ、その居住者がヨーロッパの各地に移動して言語を伝え、その結果として先述の「ケルト語」の広がりができたと考えられてきた。つまり、ケルト語の分布はケルト人の大規模な移動のあった証拠とされてきたのだ。

これに対し考古学者のコリン・レンフルー（Colin Renfrew）は、インド・ヨーロッパ語のヨーロッパへの到来を、通説よりも早い紀元前 4000 年以前に設定し、ケルト語の分化と発展はその各地域で起こったと主張した<sup>15</sup>。つまり、ケルト語は「原ケルト語の話者」の移動によって各地へ伝わったのではなく、「インド・ヨーロッパ語の話者」が各地へ渡っていて、そのうえでおのおのの言葉に枝分かれをした、ということである。「元となる中心」と「影響を受けた辺境」という序列ではなく、おのおのの同等な関係でのインタラクションによって「ケルト語」が発展したと考えるのは建設的であろう。

言語学における「ケルト」とは、「ケルト系の言語の話し手であり、主にイベリアからドナウ川流域、ブリテン、アイルランド両島と周辺諸島、イタリア北部、小アジアにいた人々」となる。しかし、レンフルーの言うように、人々の移動にもなってそれらが広がったのではないのであれば、彼らが同一の人種であるとは考えにくい。

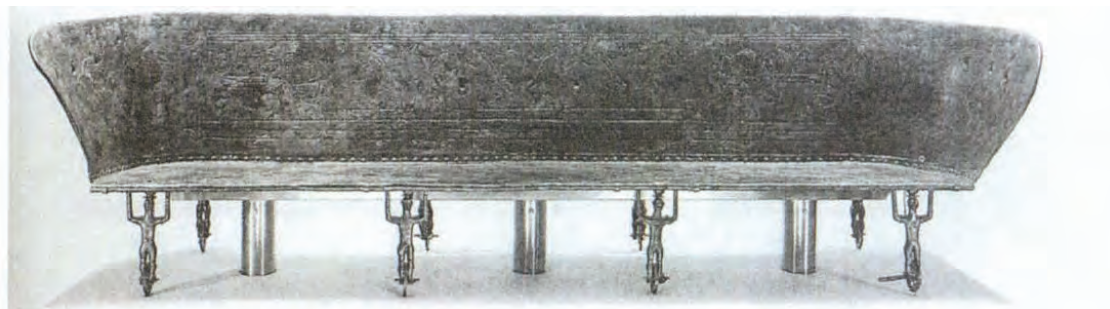
### 1-3) 考古

考古学においては、ヨーロッパ地域の鉄器文化がケルト人によるものとされる。

中央ヨーロッパ地域における鉄器の使用は、メソポタミアやバルカン半島、そしてイタリアからの伝播を受けてはじまった。とくにイタリア北部、及び中部のエトルリア人先住民のヴィラノーヴァ文化圏を介してその影響を受けたようである<sup>16</sup>。その中心であったのが、現オーストリアのハルシュタット [Hallstatt] であり、この地で栄えた文化を「ハルシュタット文化」と、その隆盛期である紀元前 12 世紀から紀元前 5 世紀を「ハルシュタット期」と呼ぶ。ハルシュタット期は、青銅器時代に属する A 期・B 期（A 期：紀元前 1200 年頃～紀元前 1000 年 B 期：紀元前 1000 年～紀元前 800/750 年）と、鉄器時代に属する C 期・D 期（C 期：紀元前 800/750 年～紀元前 650/550 年、紀元前 650/550 年～紀元前 350 年）の 4 段階に分かれる。

ハルシュタット B 期後半から C 期にかけて、ケルト社会は交易によって富を独占した一部の権力者によって支配されるようになり、岩塩採掘とその輸送によって栄えた共同体を有した。権力者は、「丘上要塞（Fürstensitze）」と呼ばれる砦に囲われた居住地に住まった。権力者たちは首領となり、地中海地域に塩や鉱物を輸出し、逆に相手からは武器、装飾品、ワインなどを輸入する交易の仲介役として振る舞った。紀元前 8 世紀頃、この交易はハルシュタット文化圏の東部を中心におこなわれ、この時期にはすでにハルシュタット文化圏の東部と西部で、装飾文様のパターンに違いが見られる<sup>17</sup>。この時代は、ギリシア植民市からの輸入品そのものやそれを模

倣した作品が納められる巨大な墳墓によって特徴づけられる（図2、図3）。とりわけ紀元前8世紀以降の、ハルシュタット以西のフランス東部、スイス、ドイツ南部、オーストリア西部地域が「ケルト」とむすびつけられる。



**図2：エバーディンゲン・ホーホドルフ出土の青銅のベンチ**

〔出典：ロイド&ジェニファー・ラング、『ケルトの芸術と文明』, 29頁。〕



**図3：ヴィクス出土のクラテル**

〔出典：Miranda Green, *Celtic Art*, p.14.〕

つづく紀元前5世紀後半から紀元前1世紀前半の「ラ・テーヌ文化」は、スイス・ヌーシャテル湖畔のラ・テーヌ遺跡 [La Tène] にその名を由来し、おもにライン河



中流域を中心として発達した文化である。中央ヨーロッパでは A 期（紀元前 450 年～紀元前 400 年頃）、B 期（紀元前 400 年頃～紀元前 250 年頃）、C 期（紀元前 250 年頃～紀元前 140 年頃）、D 期（紀元前 140 年頃～紀元後）の 4 フェーズに分かれる。B 期、C 期、D 期はさらに、B 期を B1（紀元前 400 年頃～紀元前 350 年頃）と B2（紀元前 350 年頃～前 250 年頃）、C 期を C1（紀元前 250 年頃～前 200 年頃）と C2（紀元前 200 年頃～紀元前 140 年頃）、D 期を D1（紀元前 140 年頃～紀元前 100 年頃）、D2（紀元前 100 年頃～紀元前 10 年頃）、D3（紀元前 10 年頃～紀元後）に区分される。ラ・テーヌ期は、対外との活発な接触の結果、土着の職人の手による独自の様式が生み出され、紀元前 2 世紀以降にいちじるしい発展を遂げた時代である。それは、イタリア半島や小アジアへ向けた大規模な移動、他文化との接触と衝突、そして敗北という事象に彩られていた。歴史における「ケルト」の一連の出来事も、この時代に起こった。また、この時代に生まれた独特の幾何学模様や渦巻を配した美術は「ケルト美術」の代表的なものである（図 4、図 5）。「ラ・テーヌ＝ケルト」、という図式がここで生まれるのである。

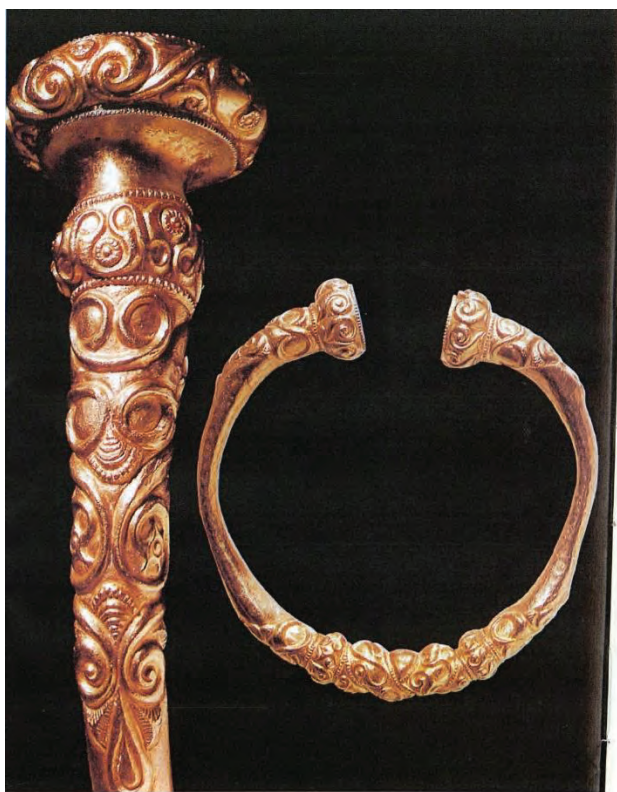


図 4：ラインハイム出土の黄金のトルク [出典：ラング，前掲書，56 頁。]





図 5 : パルスベルク出土の青銅のフィブラ

[出典 : Venceslas Kruta et. al. (eds.), *The Celts*, p.325.]

考古学における「ケルト」は、「ハルシュタット、ラ・テーヌ両方の文化の遺物の多く残る中央ヨーロッパを中心に繁栄し、地中海世界とは異なる独自の文化を發展させた人々」を指す。

## 2 節 先行研究の整理

さて、20 世紀、とくに 2 つの大戦を経たあとにおける「ケルト」研究は、考古学の証拠や碑文の分析、あるいは中世アイルランド文学をもちいて、ケルト人の「社会」や彼らの「宗教」にフォーカスした論考が数を占めるようになる。カエサルが、ケルト人は「宗教儀式には非常に熱心である<sup>18)</sup>」と記したように、社会と宗教は密接な結びつきを持ち、宗教は社会を統制するためのものであったと考えられていることや、考古学的な「ケルト」発祥の地であるハルシュタットやラ・テーヌの事例が、

墓地や聖域の発見を発端としていることもあり、その点においても、ケルト文化は宗教と結びつけられるくらいにある<sup>19</sup>。ここでは、本稿のメインテーマでもあるこれら2つの項目について、先行研究を確認したい。

## 2-1) 「ケルト」の共同体・居住地に関する研究

「ケルト」であるとされる鉄器時代の中央ヨーロッパ地域の社会について、1990年代以降、その共同体のかたちの多様性に目が向けられるようになってきた。これまでは、鉄器時代の経済や社会の「中心」は、いくつかの防壁で覆われた大きな居住地であって、それらの興隆により鉄器時代の発展はもたらされたと考えられてきた<sup>20</sup>。しかし、当時の中央ヨーロッパでは、より小規模で防壁を持たない居住地においても、大きな居住地と同様に、生産（手工業）・商業の核活動がおこなわれていたことがあきらかとなっている<sup>21</sup>。

本稿が取り扱う時代においては、第1部第1章にて詳述する「オッピドゥム」が、大きな居住地に該当する。イギリスの考古学者ジョン・コリス（John Collis）は、オッピドゥムの出現には地域ごとに多少の年代のずれがあるものの、それらはおおよそ紀元前2世紀から紀元前1世紀のあいだに起こったとあきらかとした<sup>22</sup>。彼は著書 *Oppida: Earliest Towns North of the Alps*（Department of Prehistory and Archaeology University of Sheffield, 1984）や *The European Iron Age*（Routledge, London, 1984, rep.1997,1998）において、素朴な農村社会が、時代をくだるにつれローマにも比肩しうる洗練された社会—彼はそれを「都市」と呼称する—へと変容していくさまを描出する。また、ドイツのオッピドゥム遺構の発掘にもおおくたずさわるピーター・ウェルズ（Peter S. Wells）は、オッピドゥムを「紀元前2世紀から紀元前1世紀の、特別な状況下での特別な共同体」と見なす必要性を説く<sup>23</sup>。コリスとウェルズは、両者ともオッピドゥムを「著しく手工業の発展した共同体」であると見なし、その点で先立つ時代の社会とは異なることを強調している。これに対し「オッピドゥムの定義」をしめしたオリヴィエ・ビューフセンシュッツ（Olivier Büchsenschütz）<sup>24</sup>、およびフランソワーズ・オドゥーズ（Françoise Audouze）は、オッピドゥムを「防壁建造の伝統への回帰<sup>25</sup>」の結果であるとする。いずれの主張においても、オッピドゥムが後期鉄器時代の社会における重要な要素であったとみていることには相違ない。他方でグレッグ・ウォールフ（Greg Woolf）は、あきらかに「社会の中心」として見て取れるオッピドゥムは数える程度であり、大半のオッピドゥムのありようと重要度は、防壁を持たない居住地と大差ないと述べて、コリスやウェルズとは少々違う立場をとっている<sup>26</sup>。居住地の重要性を、規模や防壁の有無で分けていないという点では、1990年代以降の研究の潮流に則したものといえるだろう。

本稿の舞台となる時代には、目に見える埋葬の事例は少ないが、紀元前8世紀から紀元前6世紀にかけては、防壁ある居住地と関連づけられる巨大な墳墓が点在

しており、ベッティナ・アーノルド (Bettina Arnold) の研究が詳しい。彼女は、墳墓が「支配者の正統性をしめすために」、直線上に並ぶように造営された可能性を指摘している<sup>27</sup>。このような先の時代の墳墓は、オッピドゥムにおいても重要な役割をになっていたと考えられる。それについては第2部第1章にて考察をおこなう。

## 2-2) 「ケルト」の宗教・信仰に関する先行研究

「宗教」や「信仰」については、ケルト研究で最も研究が活発な分野であり、文学、芸術、考古学さまざまなアプローチから研究が進められている。概説的に、「ケルト」宗教には、①自然信仰と多神教、②ドルイドによる祭祀、③独特の死生観、の3つの重要なファクターが挙げられる。

### ①自然信仰と多神教

アンヌ・ロス (Anne Ross)、ミランダ・グリーン (Miranda J. Green)、ジャンルイ・ブリュノー (Jean-Louis Brunaux) などの複数の宗教研究者が、ケルト人が自然のすべてに神が宿るという汎神論を有していたと唱えている。ユルゲン・ツァイドラー (Jurgen Zeidler) は、神々は岩や水、土などに宿ると考えられたと。特定の神への信仰心は、地名に部族神の名を組み入れることや<sup>28</sup>、あるいは美術装飾における特定の抽象的、幾何学的な文様によって表現された。「ケルト美術」の専門家であるルース・ミゴとヴィンセント・ミゴ (Ruth and Vincent Megaw) はヨーロッパ、ブリテン、アイルランドを問わず出土したケルトの美術品の様式から、ケルト美術の装飾には宗教的な意味合いが含まれていたと指摘する<sup>29</sup>。

神々は土地や部族ひとつひとつと結びつき、さまざまな性格を有し、それぞれ違う名前と呼ばれた。ロスは、部族神はその部族の人々の父と見なされ、その役割は部族の繁栄や土地の肥沃をもたらすことの他に、正しい裁きを与えるという王と同じ役割を持ったと述べる<sup>30</sup>。ローマによる征服の後も、神々への信仰はかたちを変えて生き残った。疋田隆康氏は、ローマ支配下のガリアで作製された奉献碑文のエピセット (添え名) を分析し、ガリアではローマの征服後も、ケルトの部族神や地母神、水源信仰がローマの神の名も下に、また動物崇拝がローマの影響で具現化し崇拝され続けたことを明らかにした<sup>31</sup>。ケルト人の内面に土着の信仰がどれほど強く根付いていたかが、この点から理解できる。また、相京邦宏氏のミラノ碑文の分析<sup>32</sup>から、ケルトの宗教は他の文化の要素を積極的に取り込み、土着の要素と融合させ発展することのできる柔軟性を持ち合わせていたことも分かる。

### ②ドルイドによる祭祀

聖職者ドルイドは、末期の「ケルト」社会においてもっとも重要な位置を占めた役職だとされる。第1部2章において詳述するが、彼らは人々に、彼らが「ディース・パーテル<sup>33</sup>」の子孫であると教え、一日を昼からではなく夜から数え、カシの木に生えるヤドリギをととても珍重したとされる。

この「ドルイド」は、「ケルト」なるものの神秘性を象徴する存在であり、研究者たちの興味を引いてきた。鬱蒼とした森の奥深くで、ルカヌスの言うところの「恐ろしく無慈悲な神々<sup>34</sup>」への人身供犠を執りおこなうというイメージは、古典の作家によって誇張されているということは認められている。ロスは、ドルイドは部族に利益をもたらすための強大な力を持った聖職者であったと述べる<sup>35</sup>。ブリュノーも同様に、ドルイドが「平民 *civitas*」のうちでもっとも誉高く、王とも同等の存在であったとする<sup>36</sup>。アイルランドのケルトの祭礼—インボルク、ベルテイン、ルーナサ、そしてサァオイン—を取り仕切る存在であったとも考えられるドルイドは、その神秘的で浮世離れしたイメージゆえに、多くの書籍が著されている。グリーンをはじめ、スチュアート・ピゴット (Stuart Pigott) などにも、ドルイドを扱った文献はある<sup>37</sup>が、どれも概説の域を出ているとは言い難い。

### ③独特の死生観

上記のドルイドとも密接に関連し、「ケルト」の信仰とされるもののなかで、もっとも特異なものが「他界」への信仰である。

「他界」とは英語 *Otherworld* の訳であり<sup>38</sup>、この世とは違う死後の世界である。ケルト人にとっての「他界」をしめす最も詳細な古代の史料は、紀元後 1 世紀のローマの詩人、マルクス・アンナエウス・ルカヌスの『内乱記』で、ガリアの民族学的記述の部分において記されている。ルカヌスによると、ドルイドは人々に、死んだ者の魂はエレボス<sup>39</sup>の静けさの国や、ディース・パーテルの下の太陽のない暗い場所にくだるのではなく、同じ魂が“*Olbe alio*”にとどまって人間の四肢を動かすと教えたという<sup>40</sup>。このラテン語 *Olbe alio* は“*Different scene*”と英訳される。つまり死後、その魂は「(現世と)異なる場所」に行くということである。ルカヌスは、もしこの話が本当であれば、死は連続的な生の間地点である、とつけ加える<sup>41</sup>。またカエサルは、ドルイドが人々にとくに教え込むことは「魂は不滅であり、死後は別の身体に転生する」ということであると記し<sup>42</sup>、アミアヌスは、ドルイドはピタゴラス派と通じるものがあり、魂は不滅であると教えたと伝える<sup>43</sup>。ストラボンも、ドルイドが魂と宇宙の不滅を信じていると残している<sup>44</sup>。ジョーン・アルコック (Joan P. Alcock) は、これほどに記録が残されているゆえんを、ケルト人の「他界観」が、地中海世界の人々には馴染みのないものであったからだとする<sup>45</sup>。

ブリテンやアイルランドなど、いわゆる「島のケルト」の史料にも、「異界」についての記述が存在する。神話には、アイルランドの覇権争いでスペインの「ミレシウスの息子たち」に敗れ、土地を追われた「トゥアハ・デ・ダナーン (女神ダヌの一族)」の生き残りが逃げて行った場所として「異界」が登場する。落ち延びた神々は、その目に見えない「異界」から出てくるたび、人間と恋に落ちた<sup>46</sup>。

イギリス文学者の井村君江氏は、この「他界」についてさらに詳しい説明をしている。すなわち、アイルランドの「他界」には 2 種類の場所が存在する。ひとつは西の方角にある海のかなたの不老不死の楽土「常若の国」であり、もうひとつは山腹



の洞窟である。前者には神々や神話の英雄たちが住まい、後者には小さくなり妖精となった神々が潜んでいる。海の向こうの「他界」にいる英雄たちはハロウィンの日や国の大事の際にこの世に再来すると信じられているが、他方洞窟の妖精たちは塚や円型土砦、そして墳墓などに棲みつき、土の神、農耕神、農民の神として信じられるようになったとされる<sup>47</sup>。井村氏によると、丘は身近にあることから、そこから入る地下の他界は人々に身近にとらえられ、そのためにあらゆる宝石や地上の豪華な生活を反映した、「農民たちの夢を土の中に美しく実現させた」きらびやかな明るい他界が信じられるようになったとする<sup>48</sup>。

### 3 節 本稿の目的と、本稿の構成

前節においてみたように、「ケルト」研究はとくに「宗教」の視点から、考古学や文学の資料をもちいることで進展をしてきたことがわかる。「ケルト」研究が著しく乏しい我が国においても、鶴岡真弓氏や井村君江氏をはじめとした美術史家、文学者などによって、アイルランドやウェールズ、そしてブルターニュの資料をもちいた研究があり、一定の成果が挙げられているといえよう。

しかし、それらの概説的なケルト宗教のイメージは、とくに②と③においては、そのほとんどがガリア・ブリテン・アイルランドに残存するケルト文化の痕跡によって構成されたものである。ガリアのケルト人（ガリア人）についてはカエサルやストラボン、ルカヌスなど古代ギリシア、ローマの著述家によって多く記録が残されているため、ブリテン島とアイルランド島については比較的ローマの侵攻が遅く、ケルト文化が紀元後まで残ったと考えられていることが理由として挙げられる。とくに中世アイルランド文学は古代のケルトをそのまま映し出したものだと考えられてきた<sup>49</sup>。そしてそれらでは、ガリアとブリテン、アイルランドのケルト人が全く同じ文化を共有していたものとみなされている。厳密に言えば、ガリアをふくむ中央ヨーロッパ地域に居住した「ケルト」人が、イタリア半島や小アジア、そしてブリテン島以西まで広範に散らばることで彼らの文化を根づかせ、ローマ支配を唯一受けなかったアイルランドにのみ、その文化が長く生き残ったのだ、と。あたかも「ケルト人」という「ひとつの民族」が、ローマの支配がおよぶ以前のヨーロッパ地域に、大きな覇権を築いていたかのように、皆一様に同一の文化を保有していたかのようにえがかれる。たとえば、フランス、コリニー（Coligny）出土のケルトの暦を記した金属板が、中世アイルランド文学に登場する「コナハトの女王メイヴ」と関連づけられ<sup>50</sup>、ガリア南部出土のベレヌス神への奉献碑文が、アイルランド島ケルトの夏の祝祭「ベルテイン」とむすびつけられる<sup>51</sup>。つまり、対象とする地域での物証はないが、遠く離れた別の「ケルト」であった場所での証拠があるために、その地域でも同じような文化的事象があったと無条件にみなされてしまうのである。は

たして、そのようなことによって「ケルト」を語ることは許されるのだろうか。3つの「ケルト」が包摂する地域は、西はアイルランド、東は小アジアと非常に広範である。それをひとくくりの概念によって考察することは、各地域の細かな差異が見過ごされてしまい、正確な「ケルト」の理解につながるとはいえないのではないだろうか。本稿の目的は、巨視的にとらえられる傾向にある「ケルト」に地域性をみだし、個々の地域の文化を独立して掘り下げることによって、地に足の着いた「ケルト」像を描出することにある。

本稿が取り扱う時代は、テラモンでの敗北を経験し、いわば「没落の時代」へと入っていく紀元前3世紀以降である。この時代は、アルプス以北の地域が、ローマその他の外敵の脅威にさらされながらも、いっぽうでそれらから多大な文化的影響を受け、先立つ時代とは異なる姿を見せていく。多彩なおおくの出土物は、発掘者たちによって分析・考察がなされ、資料もある程度豊富に存在している。本稿では、とくに第2部において、それらの考古学資料をもとにして、遺物にほどこされたモチーフや出土状況などからそれらに込められた「ケルト人」の精神世界を読み解いていきたい。

本稿は第1部の3章、第2部の4章、そして補論の計8章から構成される。第1部「「ケルト」の地域性」では、本稿が取り上げる時代背景の確認と、「ケルト」に定義づけられるヨーロッパ各地域の様相を分析する。第1章「「ケルト」社会の同質性—オッピドゥムの出現と「都市化」—」では、本稿の舞台となる紀元前3世紀以降の「ケルト」とされる世界で一様にして起きた居住体系の大きな変化と、それにとまなう社会的・文化的変容に目を向ける。第2章「「ケルト」の姿」および第3章「ケルト社会の地域性—ケース・スタディとしてのウィンデリキア—」では、「ケルト」とされる8つの地域の諸相を見、その地域性を確認する。

第2部「ウィンデリキアの信仰の諸相—アイデンティティとしての信仰—」では、現在の南ドイツ地域にあたる「ウィンデリキア」を舞台に、この地に生きたケルト人の社会と、彼らの信仰を取り上げる。第1章「ウィンデリキアとその周辺「都市」における信仰の機能—マンヒングの事例を中心に—」では、現バイエルンの「マンヒングのオッピドゥム」はじめ3カ所のオッピドゥムに目を向け、囲壁のなかでの宗教的活動の痕跡と、それらが共同体において果たした役割を推測する。第2章「「都市」の外側と共同体—方形土塁 *Viereckschanzen* は何を意味するか—」では、1章と反対にオッピドゥムの外側にスポットを当て、ドイツ南部、南西部に点在する「方形土塁」の役割について考察する。第3章「モノから見る信仰のかたち—植物・動物・ヒトを象って—」と第4章「ケルト社会における貨幣の機能—貨幣の図像モチーフを手掛かりに—」では、それぞれ出土遺物のモチーフから、ケルト人の宗教観について考える。そして補論「「ケルト」とは何か」では、「ケルト」研究の歴史から、「ケルト」概念の形成のいきさつを見、これからの「ケルト」研究の意義について考える。

---

## 【註】

- <sup>1</sup> カエサル『ガリア戦記』1巻7；1巻10；1巻12；高橋宏幸訳、『カエサル戦記集 ガリア戦記』，岩波書店，2015年，6～7，9～10，10～12頁。
- <sup>2</sup> Simon Hornblower, Antony Spawforth, Esther Eidinow (eds.), *Oxford Classical Dictionary* (4<sup>th</sup> ed.), Oxford University Press, 2012, p.295.
- <sup>3</sup> ジャン・マルカル（金光任三郎，渡邊浩司訳），『ケルト文化事典』，大修館書店，1999年，66頁。
- <sup>4</sup> Venceslas Kruta, “Celtic Writing,” in Venceslas Kruta et al. (eds.), *The Celts*, Rizzoli, New York, 1999, pp.516-532, p.516.
- <sup>5</sup> 『ガリア戦記』1巻1；高橋宏幸訳，1～2頁。
- <sup>6</sup> ストラボン，『地誌』，第4巻1章；飯尾都人訳，『ギリシア・ローマ世界地誌』，龍溪書舎，1994年，304頁。
- <sup>7</sup> プリニウス，『博物誌』，第4巻17章105；中野定雄他訳，『プリニウスの博物誌』，雄山閣，1986年，201頁。
- <sup>8</sup> ポリュビオス『歴史』，第2巻17；城江良和訳，『歴史 1』，京都大学出版会，2004年，154頁。
- <sup>9</sup> リウィウス，『ローマ建国以来の歴史』，第5巻34章；毛利晶訳，『ローマ建国以来の歴史 2』京都大学出版会，2006年，347～348頁。
- <sup>10</sup> ポリュビオスによれば，自分たちの制圧した領土がウェネティ人の侵攻を受けたために引き上げた（『歴史』，第2巻18）と，リウィウスによればローマ側がガリア人に黄金を支払うことで和解しようとしたが，支払いが完了する直前に独裁官カミルスがその場に到着し，ガリア人をローマから追い払ったとされている（『ローマ建国以来の歴史』，第5巻49章）。城江良和訳，156頁；毛利晶訳，381頁。
- <sup>11</sup> 危機を迎えた際に祈願のために捧げられる春の初物のこと。ポンペイウス・トログス，『地中海世界史』，24巻4章；合阪學訳，『ユニアヌス・ユスティヌス抄録 地中海世界史』，京都大学学術出版会，1998年，311頁。
- <sup>12</sup> ポリュビオス，『歴史』，第2巻27～31，城江良和訳，『歴史 1』，168～172頁。
- <sup>13</sup> ケルト語由来の地名は語尾が「ブリガ」、「ドゥナム」で終わるものが多く，その語尾を持つ場所はケルト人の居住地であったとみなされる。ジョン・ヘイウッド（井村君江監訳），『ケルト歴史地図』，東京書籍，2003年，54～59頁。
- <sup>14</sup> 北村一親，「ケルト語の特異性」，『岩手大学人文社会科学部』，50，1992年，1-16，1～2頁。
- <sup>15</sup> コリン・レンフルー（橋本楨矩訳），『ことばの考古学』，青土社，1993年，321～322頁。
- <sup>16</sup> 三浦弘万，「ヨーロッパ基層文化の生成と発達-ケルトの人びととその文化に焦点を合わせて-」，『創価大学人文論集』，18号，2006年，1～72，38～39頁。
- <sup>17</sup> 原聖，『興亡の世界史 07 ケルトの水脈』，講談社，2003年，108～109頁。
- <sup>18</sup> 『ガリア戦記』，6巻16；高橋宏幸訳，194頁。
- <sup>19</sup> Ruth and Vincent Megaw, “The nature of celtic art,” in Miranda, J. Green (ed.), *The Celtic world*, Routledge, London, 1995, pp.345-375, .
- <sup>20</sup> Peter S. Wells, “Changing models of settlement, economy, and ritual activity: Recent research in late prehistoric central Europe,” in *Journal of Archaeological Research*, vol.2, no.2, 1994, pp.135-163. pp.135-136.
- <sup>21</sup> たとえばエバーディンゲン・ホーホドルフ [Eberdingen-Hochdorf, Kr. Ludwigsberg, Baden-Württemberg] など。
- <sup>22</sup> John Collis, “The first towns,” in Miranda J. Green (ed.), *The Celtic world*, Routledge, London, 1995, pp.159-175.
- <sup>23</sup> Peter S. Wells, “Settlement and social systems at the end of the Iron Age,” in Bettina Arnold, D. Blair Gibson (eds.), *Celtic chieftdom, Celtic state: the evolution of complex social*

---

*systems in prehistoric Europe*, Cambridge University Press, Cambridge, 1995, pp.88-95, p.95.

<sup>24</sup> Olivier Büchsenschütz, “The significance of major settlements in European Iron Age society,” in Arnold and Gibson (eds.), *ibid.*, pp.53-63.

<sup>25</sup> Françoise Audouze, Olivier Büchsenschütz (trans. Henry Cleere), *Towns, villages, and countryside of Celtic Europe: from the beginning of the second millennium to the end of the first century BC*, BCA, London, 1991, p.235.

<sup>26</sup> Greg Woolf, “Rethinking the oppida,” in *Oxford Journal of Archaeology*, 12(2), 1993, pp.223-234, p.231.

<sup>27</sup> Bettina Arnold, “The material culture of social structure: rank and status in early Iron Age Europe,” in Bettina Arnold and D. Blair Gibson (eds.), *Celtic chieftdom, Celtic state. The evolution of complex social systems in prehistoric Europe*, pp.43-52, p.45.

<sup>28</sup> Miranda J. Green, *The gods of the Celts*, A.Sutton, Gloucester, 1986, p.22.

<sup>29</sup> Ruth and Vincent Megaw, “The nature of celtic art,” in Miranda J. Green (ed.), *op. cit.*, pp.345-375, pp.366-369.

<sup>30</sup> Anne Ross, *The Pagan Celts*, Batsford, London, 1986, p.124.

<sup>31</sup> 疋田隆康, 「古代ガリア社会におけるケルトの伝統-ガロ=ローマ文化の形成」, 『史林』, 86 卷 4 号, 2003 年, 535~566, 562 頁。

<sup>32</sup> 相京邦宏, 「ケルトとローマの文化的融合とその限界-ミラノ碑文の分析を中心に-」, 『社会文化史学』, 27 号, 1991 年, 1~16, 9~10 頁。

<sup>33</sup> ローマの冥界の神。ケルトの神では「ダグダ」、もしくは「スケルロス」に相当するとされる。Ross, *op. cit.*, p.124 参照。

<sup>34</sup> ルカヌス, 前掲箇所。

<sup>35</sup> Ross, *op. cit.*, p.113.

<sup>36</sup> Jean-Louis Brunaux (trans. Daphne Nash), *The Celtic Gauls: gods, rites and sanctuaries*, Seaby, London, 1988, p.61.

<sup>37</sup> 邦訳があるものとしては、グリーン (井村君江, 大出健訳), 『図説ドルイド』, 東京書籍, 2000 年; ピゴット (鶴岡真弓訳), 『ケルトの賢者「ドルイド」: 語りつがれる「知」』, 講談社, 2000 年など。

<sup>38</sup> 『ケルト事典』では「異界」と訳される。ベルンハルト・マイヤー (鶴岡真弓監修, 平島直一郎訳), 『ケルト事典』, 創元社, 2001 年 (第 2 刷, 2006 年), 25 頁。

<sup>39</sup> ギリシアの冥界の神。

<sup>40</sup> ルカヌス, 『内乱記』, 1 卷 450-457; trans. James Duff Duff, *The civil war*, London, 1925, rep. 1988), pp.36-37 を拙訳。

<sup>41</sup> 『内乱記』, 1 卷 457; 同上。

<sup>42</sup> 『ガリア戦記』, 6 卷 14; 高橋宏幸訳, 221 頁。

<sup>43</sup> アミアヌス, 『歴史』, 15 卷 9 章 8; trans. John C. Rolfe, *The surviving books of the history*, London, 1935, rep. 1982, pp.180-181 を拙訳。

<sup>44</sup> ストラボン, 『地誌』, 4 卷 4 章; 飯尾都人訳, 『ギリシア・ローマ世界地誌 I』, 龍溪書舎, 1994 年, 342 頁。

<sup>45</sup> Joan P. Alcock, *Daily life of the pagan Celts*, Greenwood, Oxford, 2009, p.155.

<sup>46</sup> 八住利雄編, 『イギリスの神話伝説-アイルランドの神話伝説 [I]』名著普及会, 1987 年, 79~80 頁。

<sup>47</sup> 井村君江, 「ケルト民族の Fairyland 観」, 『鶴見大学紀要 第 2 部 外国語・外国文学編』18 号, 1981 年, 27~52, 35~38 頁。

<sup>48</sup> 同, 44~45 頁。

<sup>49</sup> 田中美穂, 『島のケルト』再考, 『史学雑誌』, 111 卷 10 号, 2002 年, 56~78 頁, 56 頁。

<sup>50</sup> Miranda. J Green, *op. cit.*, p.27.

<sup>51</sup> トーマス・パウエル (笹田公明訳), 『ケルト人の世界』, 東京書籍, 1990 年, 167 頁。



第1部

ケルト社会の地域性

## 第1章 「ケルト」社会の同質性—オッピドゥムの出現と「都市化」—

本稿が取り上げるのは紀元前3世紀から紀元後1世紀後半のケルト社会である。その時代、これらに属する地域はみな一様に「ある変化」を遂げた。それが、「都市化」である。

本章では、ケルトの「都市化」の実態と、「都市化」にともなっておとずれた文化的変化に光を当てる。

### 1節 オッピドゥム—ケルト人の「最初の都市」—

紀元前3世紀のケルト社会は、テラモンの戦いでの敗北を皮切りに、ケルト人が攻め入る側から攻め入られる側へと転じた時代であった。その激動の時代のなかで防御の必要が生じ、その結果生まれたのが「オッピドゥム (Oppidum)」である。

「オッピドゥム」とは近代考古学の用語で「前ローマ、とくにラ・テーヌ文化の防壁のある城郭<sup>1)</sup>」を指す言葉であり、もとはローマの町をしめすものであった。コリスによって「ケルト人の最初の都市<sup>2)</sup>」と称されるケルト世界のオッピドゥムは、基本的には円形の防御建築の体をなしており、ゲルマン北部から南部、南東部のローマ人の地域、イギリス南部、チャンネル諸島、中央ヨーロッパ、東アルプスの麓、ドナウ流域に点在している (図6)。これらの建造様式は、ガリア・キサルピナ (現在のイタリア北部) を経由して、ケルト人の居住域である北方へ伝播していったと考えられている<sup>3)</sup>。

オッピドゥムの定義に関するひとつの指標としては、ビューフセンシュッツに倣い、以下の4つの項目が挙げられる。すなわち、①「記念碑的な門を伴い、周囲の地域と居住地域とを区別していること」、②「先の時代の砦 (丘上要塞) より居住域が広くその立地の地形に順応していること」、③「例外はあるが、丘の上に建造されていること」、④「ローマによる征服後、ケルト時代の構造物は破壊されたために、発掘によってのみその内部構造が分かること」<sup>4)</sup>。しかし、その立地条件や規模、人口については、その場所の政治的、あるいは経済的重要性によって左右されるため、すべてのオッピドゥムに適用できる共通の定義はない。

現在確認されているオッピドゥムに共通している要素は、「囲壁の存在」、「門 (入口) の存在」、そして「多くの家々の存在」の3項目が挙げられる。以下、それらについて詳細に見ていこう。



図 6：主要なオッピドゥム [出典：Barry Cunliffe, *The Celtic world*, p.64.]

### ① 囲壁

危機の時代に多く建造されたオッピドゥムにとって、「囲壁」は重要であった。オッピドゥムの防壁は、必ずしも自然の地形を必要とせず、川の流域や平原に、その領域をぐるりと囲むような堅牢な壁を築いていた。囲壁は石と木材、そして土で造られた。オッピドゥムの外側の縁の部分には溝が掘られ、その後ろ側に木を組み上げ、溝を掘ったときに出た土を木の上に敷き詰め、残った土を囲壁背面の傾斜に利用した。目に見える部分には石垣が造られた。木材どうしをつなぎ合わせるために鉄釘が用いられた。囲壁の基本的な構造はこのとおりである。

囲壁の建築法には2つの様式があった。ひとつが「ガリア壁 (mulus gallicus)」であり、もうひとつが「ケルハイム型壁」である。「ガリア壁」は井桁状に組まれた木材を骨組みとして、その間に土を敷き詰めた造りになっている。カエサルはこの囲壁について、『ガリア戦記』のなかで詳述している。

さて、ガリアの城壁はどこでもほぼ次のような構造である。まず、木材を城壁面と直交する向きにして、・・・これら木材を内部で繋ぎ止めておいてから、大量の土盛りをかぶせる。このとき、上述の木材と木材のあいだの壁の前面となる部分には大きな岩をはめ込む。こうして木材を並べて固定し終わると、その上に次の層が重ねられる。・・・このあとはすべて同様の築造工事が適正な城壁の高さになるまで行なわれる。この造りは変化に富む外観で見栄えがよい。交互に並んだ木材と

岩が層ごとに直線的に整列しているからである。のみならず、実用的で、城市の防衛にたいへんに適合している。・・・

(『ガリア戦記』7巻23)<sup>5</sup>

いっぽう「ケルハイム型壁」は、第2部第1章2節でも取り上げるケルハイム [Landkreis. Kelheim, Oberbayern] のオッピドゥム (総面積 650ha) で見られる様式である。地中深くに垂直に打ち込まれた木材を、1m から 2m 間隔で配置し、水平には木材を組まず、土と平たい石を敷き詰めたものである。ライン川以東に多く、ドイツ南部ではケルハイム型が一般的である。囲壁の建造には職人ではなく、もっぱら農民など、建築を生業としない一般の人々がたずさわった。

### ②門

入口には木造のやぐらのような構造物が造られ、そこから整備された石の舗装路が複数敷設された。居住区域と商業的区域や公共構造物などが、それらの舗装路によってきちんとしたネットワークを有していた。洗練された入口は来訪者にその都市の威厳を示し、また訪れる人々を見張る監視塔として、戦時の際には前哨として、やぐらは機能した (図7)。



図7: マンヒングの東門の構造物 (復元)

[出典: Susanne Sievers, *Manching: Die Keltenstadt*, S.110.]

### ③家屋

家屋はオッピドゥム内を通る道に沿って並べられた。家屋は木造であり、囲壁と違って鉄釘は用いられず、木の柱の接合部をたがいにはめ込んで建造する技術によって造られた (図8)。

建物は、用途ごとにそれぞれ様式が異なっている。正方形もしくは長方形で、内部を柱と壁で仕切った長屋は一般的な居住に、内部に2つ、もしくは3つの通路がある切妻屋根の建物は家畜小屋として、4本から9本の柱で構成された、屋根が高く高床式の建物は穀物倉庫として、くぼみに建てられたもの（図9）は手工業、とくに鉄工業の作業所として、それぞれ利用された<sup>6</sup>。住居は草ぶき屋根で、壁は泥とイグサが敷き詰められた。土のままの床には丸い石と粘土で造られた炉床がひとつ設えられていた。家屋の様式の多様さは、この囲壁のなかにさまざまな職種の人々が暮らしていたことをしめしている。

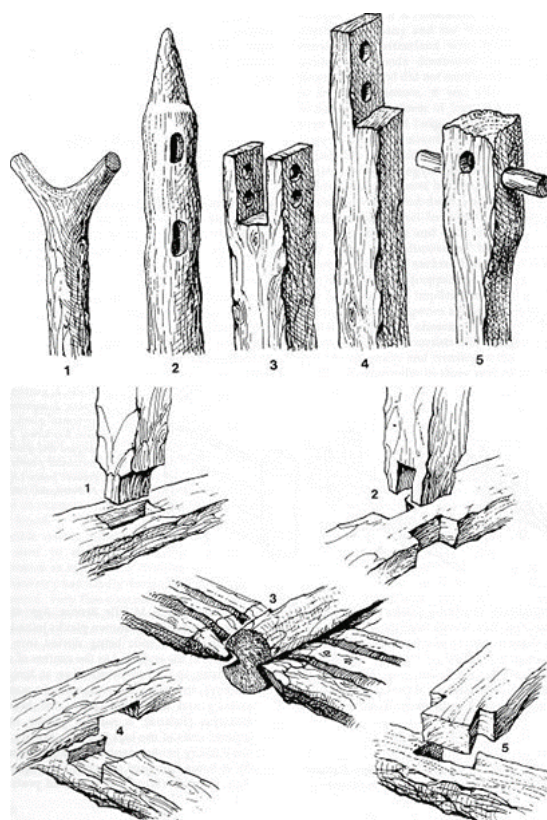


図8：建物の工法

[出典：Françoise Audouze and Olivier Büchschütz, *Towns, villages, and countryside of Celtic Europe*, pp.52-53.]



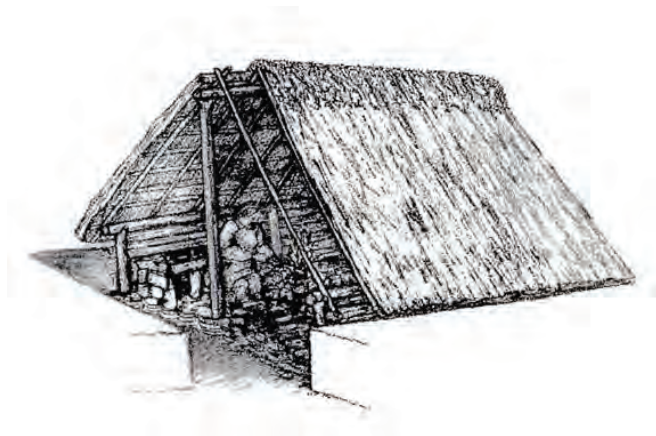


図 9：手工業の作業場 [出典：Sievers, *op. cit.*, S.45.]

## 2 節 「都市」の萌芽

「都市」として見なされるオッピドゥムであるが、その景観は、現在我々のイメージする「都市」というよりも、むしろ農村のそれに近いものであったとされている<sup>7</sup>。そのなかで、それまでの時代とはまったく異なるすがたの社会が形成されていたのである。先述のとおり、オッピドゥムの建造様式はガリア・キサルピナを経由してもたらされたものである。それまでの社会構造とは非常に異なる「都市」を生み出す装置となる「オッピドゥム」という様式は、なぜこうもケルト世界に浸透したのであろうか。本節では、鉄器時代以前までさかのぼってアルプス以北の居住様式の変遷を確認し、ケルト社会が「都市」を形成するためのもととなったものを探る。

### 2-1) 共同体のかたちの変遷—鉄器時代まで—

青銅器時代後期のケルト社会の景観は、点在する複数の村落によって構成されていた。大半が平原や谷や高地に造られた、防御のための囲いを持たない開けた居住地であった。湖畔に居住地が造られる場合もいくつかあり、人々は馬、牛、ヤギ、ヒツジを放牧し、また小麦やキビやライ麦、ソラマメなどを栽培して<sup>8</sup>、自給自足の生活を営んでいた。

紀元前 12 世紀以降、それらは、そのような自給自足の社会から一歩前進し、手工業や交易に従事する共同体があらわれはじめた。中央ヨーロッパ地域における、最初の「防壁のある居住地」の出現である。それらの居住地はそのレイアウトにおいて、それまでの居住地と異なる様式であった。家々が幾列にもつらなり、防壁に直面してか、急斜面のような自然の防壁の端に沿って並んでいる。中央には広く開けた空間がある。もしくは、家が平行に並び合い、領域の端の方に開けたスペースを

形成している（図 10）。そのどちらかのレイアウトが採用されていた<sup>9</sup>。共同体は 1ha から 2ha の大きさだった。

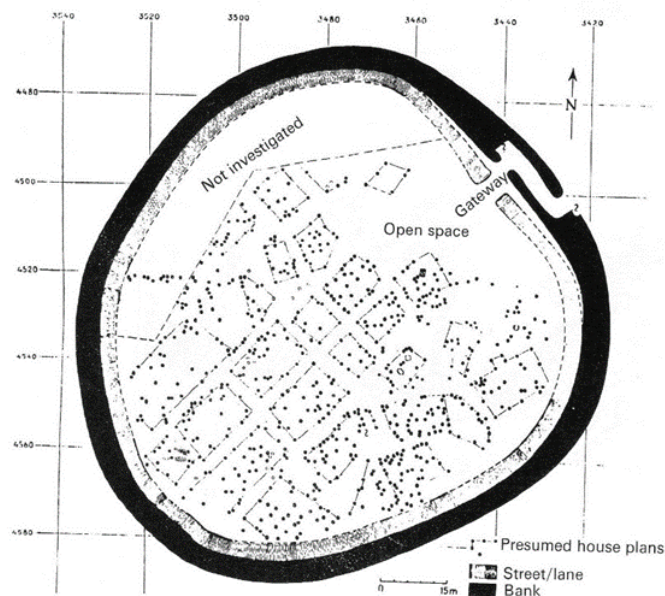


図 10：青銅器時代の防壁のある居住地

[出典：Audouze and Büchenschütz, *op. cit.*, p.208.]

紀元前 8 世紀には鉄器時代に突入する。この時代になると、青銅器時代の「防壁のある居住地」はさらに進化を遂げる。小高い丘の頂上に造られる「丘上要塞（Fürstensitze）」の出現である。丘上要塞はとりわけ現在のバーデン・ヴュルテンベルク州など、ドイツ南西部に多い。

ジークマリンゲン郡ホイネブルク [Heuneburg, Landkreis Sigmaringen, Baden-Württemberg] の丘上要塞では、放棄されるまでに 5 度<sup>10</sup>の囲壁の改築がおこなわれている。フランツ・フィッシャー (Franz Fischer) は、このホイネブルクの防壁の建築が「中央ヨーロッパの手工業の伝統と全く対をなす地中海世界の手工業の伝統」であると述べ、さらにそのような居住地の建造には、共同体の指導者が地中海世界に滞在した経験のある必要があるとする<sup>11</sup>。ホイネブルクの防壁は、石の基礎の上に泥レンガを置いて造られたものであり、ギリシアの手本を忠実に模倣したものであった。結局この工法はドイツ地域の気候に合わずすぐ放棄されたが、ケルト世界の防壁の様式に、ギリシアのそれが少なからず影響を与えたということは、十分に考えられる。

紀元前 4 世紀のケルト人の大移動は、アルプス山脈の南の地域、フランス南部やイタリア北部に、小さな要塞を造らせた。それとは対照的に、彼らの故郷アルプス以北では、防壁のある大きな居住地は放棄され、人々の住処は散逸する農村ばかり

になった。それらは一世代ほどで放棄される短命なものであった<sup>12</sup>。バイエルン地域でも前5世紀の間は大きな居住地が出現し、とくに北部では丘上要塞が発達していた<sup>13</sup>けれども、ケルト人の移動とともにそれらは放棄され、小さい農村での居住に切り替わった。そしてこの状況は、紀元前3世紀前半までそのままだった。

## 2-2) 「都市」の「核」の形成

オッピドゥムが形成される直前のケルト社会は、防壁を持たない小規模な農村ばかりで構成されていたけれども、「防壁のある大きな居住地」を造ることじたいは、青銅器時代から中央ヨーロッパ地域の社会に根づいた伝統であった。その伝統を素地として持っていたために、「オッピドゥム」の様式はすんなりとケルト世界に受け入れられたと考えられる。ケルト人は、オッピドゥムという大きな居住地を「いちから」形成したわけではなかった。たとえば、バイエルン地域では紀元前2世紀以降、ふたたび大きな居住地での居住が開始されるのであるが、興味深いことに、かつて紀元前5世紀に大きな居住地があった場所でそれが再開されたのである<sup>14</sup>。これらの居住地が「オッピドゥム」として発展するのだが、それは、防壁のある居住地の「再利用」と言うことができよう。

また、オッピドゥムの街並みを構成した多くの家屋も、様式は依然変わらぬままで、そのレイアウトが秩序だった並びにされただけであった。家屋の建造方法は青銅器時代から変わらなかった。変化したことは防壁の構造と、入口の位置である。青銅器時代の防壁は、ある程度自然の地形を利用し、土手と溝によって領域を囲むかたちを取った<sup>15</sup>けれども、オッピドゥムは地形に依存しない堅牢な防壁を有していた。また、オッピドゥム以前の防壁のある居住地の門は、たとえば断崖の横のように、敵の侵入が困難な場所に造られることが多く、単純な入口であった。まだ原始的で単純ではあるものの、ケルト世界には確かに「都市」の構造を受け入れる下地が存在していた。そこにガリア・キサルピナ経由の要素が追加されるだけで、オッピドゥムが出来上がったのである。そして、ギリシアからの知恵もその形成に貢献したといえる。第2部1章で詳しく見るマンヒングのオッピドゥムの囲壁には、建造者が三平方の定理を知っていた痕跡があるからである<sup>16</sup>。

オッピドゥムは、すべての構造が計画的に造られた空間であった。囲壁の堅牢かつ整然とした造りと、秩序だった居住空間のレイアウトは、もともと存在した工法と様式を踏襲しつつ、アルプス以南の地中海世界の知恵を参照したことによって誕生した。地中海世界の知恵を伝えたのは紀元前3世紀後半にアルプス以北へ戻ってきたケルト人だった。彼らは危機に迫られて紀元前2世紀に囲壁を建造するまでの間、アルプスの北にとどまっていた人々と同じように共同体を形成し、後のオッピドゥム社会の基礎を作り上げたと考えられる。ホーホシュテッテン [Hochstetten-Dhaun, Landkreis Bad Kreuznach, Rheinland-Pfalz] などに、農業をおこなわず、手工業と交易の中心地として機能する新しいかたちの共同体が形成されており<sup>17</sup>、その



形成されはじめた年代から、ケルト人の移動の終了と彼らの帰郷に関連していると考えられる。

### 3 節 「都市化」をもたらしたものの、「都市化」がもたらしたもの

一部の研究者は、オッピドゥムとケルト社会の「都市化」との関連づけに否定的な見解をしめす<sup>18</sup>が、先行研究においてオッピドゥムがケルトの「都市」、あるいはそれに近いものであったという見解はおおむね受け入れられている。では、いったいどのような状況をもってして「都市化」が起こり、「都市化」の結果として何が生じたのだろうか。

#### 3-1) 「都市化」をもたらしたもの

オッピドゥムの平常時の基本的な役割は、貴族や一般民衆の居住、生産活動、農作物や家畜の集積、周囲の村落に提供する資源の貯蔵であり、緊急時には住人やその周辺民を収容し守る避難所であった。外患はローマ人やゲルマン人であった。ゲルマン人は家族総出で故郷を離れ、ケルト人の領域に侵略してきた。オッピドゥムが資源の集積場としても機能したのは、このような者たちから物資を守る目的もあったと考えられる<sup>19</sup>。

物資がオッピドゥムに集中すると、それを求める人々もそこに集まってくることになる。設置された門や複数の街道の存在は、その空間が人の往来を前提としていたことをしめしている<sup>20</sup>。オッピドゥムは排他的な居住地ではなく「開かれた部族の中心地」であった。また、オッピドゥム社会はその囲壁の内側のコミュニティだけでなく、外に散らばる農村にも影響力を持っていた。多くの品物がオッピドゥムに集まり、たくわえられ、それを手にするため多くの人が囲壁内を動きまわった。「都市化」の要因は、外敵の侵入によるオッピドゥムへの人とモノの集中だったといえよう。

#### 3-2) 「都市化」がもたらしたもの

「都市化」は、ケルト社会に多くの変化をもたらした。

##### 3-2-1) 一般民衆の地位の向上

堅牢な石壁の内側での居住は、たびたび異民族の侵入を受けていた人々に比較的 안전한空間を提供し、そこにおける生産活動の発展をうながした。鉄工・青銅工・ガラス工・木工・皮革工・骨工など、さまざまな素材の工芸の技術が発達し、オッピドゥムの内外に作業場が造られた。オッピドゥム内における職人の数の増加は、彼ら職人たちの社会的地位を向上させた。また、オッピドゥム内に品物が集まることによって市場が形成されるようになり、商人たちが自分で取引をおこない、利益

を享受していた。それによって、商人たちの地位も向上した。彼らは、かつてのように権力者に隷属するのではなく、自分たちの手によって生産活動を実施し、自分たちでその利益にあやかっていた。彼らはある程度自由を与えられていた<sup>21</sup>。ケルト社会の「都市化」の結果のひとつは、オッピドゥムに住まう一般民衆の地位の向上であった。

ところで、手工業の発展はオッピドゥムのなかで突如として起こったわけではない。職人の技術はそれ以前の段階から洗練され、彼らは作業場をもうけていた。この背景には、ケルト人の勢力の拡大にともなう武器製作の需要の高まりがある<sup>22</sup>。そのようにして、オッピドゥム以前から発展を遂げていたケルトの職人の技術は、オッピドゥムという環境に集約されることでいっそう洗練された。装飾品だけでなく、農耕器具、釣り道具、洗面道具、医療器具、調理道具、錠前や鍵など、さまざまな生活用品が、需要に応じて製作された。

### 3-2-2) 権力者の弱体化

手工業者や商人、農民などの一般民衆が、オッピドゥム社会の恩恵を受けてその地位を向上させたいっぽうで、権力者たちの力は向上するどころか、むしろ衰退していた。権力者は、住人に対し保護や経済支援、そして贈与などを行う義務を負っていた<sup>23</sup>が、彼らは絶対的な権力を持っているわけではなかった。それまで高い地位にあった者は、この時代には単体で強い権力を持つことはもはやできなくなっていた。権力者の弱体化は、「都市化」以前からはじまっていた現象だった。それには2つの原因がある。

#### ①戦争状態の鎮静化

ハルシュタット期、ケルトの権力者は絶対的な権力を持っていた。彼らは交易の利益を独占することによってその権力を高めた。権力は世襲されたと考えられている。ホイネブルクなどの丘上要塞は、「交易」という経済的要素によって力をつけた権力者とその関係者の居住地であった。

権力は、死後も顕在化された。彼らは居住地から良く見えるような場所に巨大な墳墓を造り、玄室に大量の副葬品を納めさせた。先述のホイネブルクの近郊には、それと関連付けられるホーミヒェーレ [Hochmichele, Gemeinde Altheim, Landkreis Biberach] の巨大な墳墓（直径 80m 弱、高さ 14m）がある。その 6 号墓室からは従者と思われる男性と女性の亡骸と、多くの副葬品が出土した<sup>24</sup>。

史書にもあらわれるように、ラ・テーヌ期のはじめ、部族の有力者たちは人々を率い、大挙して異国の地に侵入していった。ケルトの軍勢は複数の部族からなる連合軍で、同じ部族のなかでもさらに有力者とその郎党から成るグループに分かれていた。テラモンの戦いの前夜、複数のグループのリーダーが集まって戦争に関する会議をしている様子は、ポリュビオスによって記録されている<sup>25</sup>。この時代の権力者は、軍事力によって権力を確立した存在であった。軍事力によって人々を率いた彼らのいくらかは、紀元前 3 世紀にアルプス以北へ戻り、そして共同体を成立させ

た。それがオッピドゥムのひとつの基盤となる。しかし、ケルト人の勢力拡大の終焉は、権力者の権力の源である軍事力を揮う機会を奪ってしまった。軍事力を発揮することができなくなった結果として、個々の権力者の権力は衰退していった。

## ② 宗教的権威の乖離

権力の弱体化のもうひとつの要因として、宗教に関する事柄がある。ケルト人の社会が宗教と密接に結び付いていたことは、先行研究でもしばしば述べられることである<sup>26</sup>。フランスの言語学者エミール・バンヴェニスト (Émile Benveniste) は、インド・ヨーロッパ語族の王権概念について述べている<sup>27</sup>が、それを要約すると次のようになる。インド・ヨーロッパ語圏の端にあたるケルト世界や古代イラン世界において、首長すなわち「王」は *rex* という単語であらわされる<sup>28</sup>。*rex* はラテン語の動詞 *rego* (導く、支配する) に派生し、さらに *rex* はギリシア語の *orego* (伸ばす)に通ずる。*rex* の役割は「大地の上に聖別された空間を画定すること」であり、それは「明らかに呪術的かつ具体的な性格をもち、内と外、聖なる王国と俗なる王国、国土と異国の領土などの境界を定める作業<sup>29</sup>」であった。王 *rex* はそれゆえに政治的よりもむしろ宗教的な存在であった。彼らの役割は、規則をさだめ、何が正しいかの線引きをおこなうことであり、それは祭司の役割に近いものであった。

ケルト世界では、とくにハルシュタット後期の社会において「権力者」と宗教の結びつきが見られる。ケルトの部族にはそれぞれ部族神がおり、神はその部族の父であると思われていたと考えられている<sup>30</sup>。数少ない権力者は神に準ずる存在であり、彼ないし彼女は神と通じ、神からの託宣を告げ、「祭司」として部族を支配していた。彼らは死後に部族神と関連付けられることによって、宗教的権威を保持し続けた。ジェラルド・ウェイト (Gerald A. Wait) は、その保障のためには生前のその者の権力をしめす必要があったと述べる<sup>31</sup>。そのため、この時代の権力者の埋葬一墳墓一は、目立つような巨大さで、その玄室には地中海世界からの輸入品や、装飾をふんだんに施された衣服や道具が納められた。それらの副葬品が、死者の生前の権力をしめす「鍵」となったのだ。

ラ・テーヌ期におけるケルト人の移動の活発化は、軍事能力に優れた者に権力を与えた。しかしそのいっぽうで宗教的権威の保持に重きが置かれなくなり、徐々に支配者と宗教的権威の分離がはじまっていった。「軍事指導者」としての側面の肥大は、「権力者」の祭司としての側面を薄れさせていった。そして「権力者」の権威と宗教的権威は、前 3 世紀には切り離された<sup>32</sup>。移動の収束がこの時期である。軍事力を揮うことも、祭司として人々を統べることもできなくなった権力者たちは、弱体化するばかりであった。そして、オッピドゥムの成立と「都市化」によって、権力の失墜は確実なものとなったのである。

### 3-2-3) 新しい文化の到来と定着

「都市化」とそれにいたる過程は、文化面にも大きな変化をあたえた。地中海その他の異文化との濃厚な接触を経て、ケルト世界には 3 つの新しい要素<sup>33</sup>がもたらされたのである。

#### ①埋葬の形式の変化

青銅器時代には火葬が主流であった。焼いた骨を骨壺に入れて地中に納めるその慣習は「骨壺葬文化」あるいは「骨壺場文化」と呼ばれる。しかし、鉄器時代、すなわちハルシュタット期に入ると、骨壺葬は土葬に取って代わられた。

ハルシュタット期の埋葬は首長の墳墓が中心であり、フランスのブルゴーニュ、スイス、ドイツ南西部に集中している（図 11）。平民の埋葬は確認されていない。これは、平民は死ぬとごみ捨て場のような穴に捨てられるか、屋外に晒しておき、野生動物に食べさせることなどによって葬られたからである<sup>34</sup>。

ラ・テーヌ期においても、初期のうちは土葬であったが、ハルシュタット期のような豪華な副葬品を伴う墓は少なくなった。そして中期から後期にかけて、一部の地域で、青銅器時代と同じような火葬墓が出現したのである。この埋葬形式の変化は紀元前 4 世紀終わりあたりにフランス北部で起こり、紀元前 3 世紀の間に徐々に東方と南方へ広がっていった。漸進的に広まっていった火葬は、紀元前 180 年から紀元前 170 年ころに一般的になる。

通常、火葬された骨は、青銅器時代と同じく骨壺に納められた。スイス、ベルン近郊のエンゲハルプインゼル [Engelhalbinsel] にある火葬墓では、土器の破片の詰まった小さい穴に、鉢で覆われた陶器の骨壺があり、中年女性と幼い子供の骨、そしてフィブラ 5 個と鶏 2 羽と仔豚 1 頭の骨の残骸が出土している<sup>35</sup>。なお、被葬者が裕福な場合は、死体を副葬品と共に薪の上に直接置いて、その上に後で墳墓が建てられた。カエサルの記録も、下記のように残されている。

*葬儀はガリア人の暮らしぶりに比して盛大で豪勢である。なんであれ故人が生前に好んでいたと思われるものをすべて火中に投じる。動物もである。少し前までは、奴隷や従者も、故人から受けた寵愛が確かであると、本来の葬儀がすんだあと、一緒に焼かれた。*

(『ガリア戦記』, 6 巻 19<sup>36</sup>)





図 11：ハルシュタット期の埋葬（▼印）の分布（赤が C 期、青が D 期）

[出典：ジョン・ヘイウッド（井村君江監訳），『ケルト歴史地図』，33 頁。]

## ②聖域の建造

儀式をおこなうための構造物としての「聖域」は、紀元前 2 世紀以降、「都市化」の波のおとずれとともに建造されるようになった。

「ケルト」の信仰とされる 3 体系—ドルイディズム、神々への信仰、自然信仰—は、それぞれが関連しあって存在した。自然にあるすべてに神が宿ると考えていた彼らは、自然に対しての信仰に篤く、その儀式を取り仕切ったのがドルイドであるとされてきた。しかし、ジェーン・ウェブスター（Jane Webster）は、これらの根拠となっている地中海世界の古典の記述が、ただしくその「ケルト」の異教的な特質をしめしているとは限らないと指摘する<sup>37</sup>。それらの著作のなかでは、「ケルト」の聖域はギリシア語で「テメノス Τέμενος」や「ヒエローン Ιερόν」、ラテン語で「ファナム (fanum)」や「テンブルム (templum)」と表記される。これらはみな「寺院」や「聖域」を指す。この言葉の使用は、ケルトの聖域とギリシア、ローマのそれらとのあいだに構造的な類似があったことをほのめかすが、それらは「解釈 (interpretatio)」がなされている可能性がある<sup>38</sup>。それゆえ、言葉からの信ぴょう性は薄くなってしまっているのである。また、それらの記述は紀元後 1 世紀、すなわちガロ・

ローマ期のものであるため、純粋にケルトの信仰を伝えているとは限らないとも指摘する<sup>39</sup>。

自然のなかの聖域の多くは「森林」と「水辺」に設定される。森林は「ケルト的な信仰の場」とされ、ドルイドが「ネメトン *Nemeton*」と呼ばれる聖なる森の奥で儀式を執りおこなうという、神秘的なイメージをもって語られる<sup>40</sup>。しかし、それらを伝える記述はローマによる征服後のものである。その同時代には、すでにドルイドは衰退の一途をたどっていたため、実像をえがいているとは考えられていない。

「ドルイド *Druid*」が樹木との関連づけを過剰に強調されるのは、プリニウスの「ドルイド=カシの木の人 (A MAN OF THE OAK)」という記述に影響を受けたからであろう。その語源についてはあらゆる説<sup>41</sup>が提示されてきたが、それらのほとんどはカシやナラの木とドルイドを結びつけている。

水辺は、とくに「泉」が水源信仰のための神聖な場と考えられてきたが、水源信仰はローマ征服後にかつてのケルト世界に広まったと考える見方が現段階では有力である<sup>42</sup>。

「沼」も同様に、ケルト人が奉納物や、生け贄を沈める場所と考えられてきた。しかし、事例の大半が現在のデンマークにおいて発見されている<sup>43</sup>ことから、沼地での宗教儀礼は、ゲルマン人の風習であったとも考えられる。

このように、「ケルト」の信仰と自然の関連性は、地中海世界の著作によって少々大袈裟に結びつけられていることがわかる。アルプス以北の人々が、「自らで記す」ということをおこなわなかったために、彼らが自然に対してどれほど畏敬の念を持っていたかは判然としないものがある。このような背景を持ったうえで、紀元前 2 世紀以降、彼らの信条を反映した「聖域」が建造されるようになっていくのである。

「聖域」の詳細については第 2 部第 2 章にて論じよう。

### ③貨幣の製造

貨幣もまた、オッピドゥムの建造と「都市化」により、ケルト世界にもたらされたものであった。彼らの貨幣はまずマケドニアにおけるそれや、あるいはマッサリアのドラクマ銀貨の模倣からはじまり、紀元前 2 世紀ころには模倣を脱し、彼らのオリジナルの図像を刻印した貨幣を作るようになっていた。その詳細と、貨幣に刻まれた図像解釈については、第 2 部第 4 章において述べる。

## 4 節 小括

ケルト人の「都市」オッピドゥムは、もともと存在した「防壁のある居住地」を造る伝統のうえに、地中海世界よりもたらされた影響が組み合わさって生まれたものであった。ケルト人が地中海世界に拝借したのは囲壁と居住区画のレイアウトだけであった。その社会の基盤となったのは、紀元前 3 世紀後半に異郷から戻った人々

の共同体だった。それらの共同体は、軍事的な指導者に率いられたものを母体としたが、そのなかではすでに手工業が発展途上にあり、権力者の弱体化が進んでいた。オッピドゥムの出現はそれに拍車をかけたただけであり、突然生じた変化ではなかった。

この時代の「ケルト」の世界は、特定の権力者への権力の一極集中というよりも、むしろ複数のそれらの集団が社会に存在していた時代であったといえる。そしてその「権力の一極集中」がなくなった背景には、「神と通じ裁きを下す」という宗教的権威の乖離があり、「権力者」のもとを離れた宗教、つまり「信仰」は、この時代にはいわば宙に浮いたような状態になっていた。そのような状況における「ケルト」の社会と信仰の関係性を考えるのが、本稿の目的のひとつである。

---

#### 【註】

- <sup>1</sup> Simon Hornblower and Antony Spawforth (eds.), *Oxford Classical Dictionary*, Oxford University Press, Oxford, 1949, 4th edition, 2012, p.1041.
- <sup>2</sup> John Collis, “The first towns,” p.170.
- <sup>3</sup> Ferdinand Maier, “The oppida of the second and first centuries B.C.,” in Venceslas Kruta et. al. (eds.), *The Celts*, pp.423-439, p.437.
- <sup>4</sup> Olivier Büchschütz, “The significance of major settlements in European Iron Age society,” p.61.
- <sup>5</sup> 高橋宏幸訳, 234～235 頁。
- <sup>6</sup> Françoise Audouze and Olivier Büchschütz, (trans. Henry Cleere), *Towns, villages, and countryside of Celtic Europe: from the beginning of the second millennium to the end of the first century BC*, pp.56-70 ; Susanne Sievers, *Manching: die keltenstadt*, Konrad Theiss Verlag GmbH, Stuttgart, 2003, S.42-46.
- <sup>7</sup> Hansjörg Künster, “The history of Vegetation,” in Venceslas Kruta et. al. (eds.), *op. cit.*, pp.440-443, p.443.
- <sup>8</sup> 三浦弘万「ヨーロッパ基層文化の生成と発達—ケルト文化の人々に焦点を合わせて—」, 35 頁。
- <sup>9</sup> Françoise Audouze and Olivier Büchschütz, *op. cit.* p.208.
- <sup>10</sup> ハルシュタット期以降。骨壺葬文化時代における同地の利用を含めると 6 段階となる。Wolfgang Dehn, „Die Heuneburg an der oberen Donau und ihre Wehranlagen,“ in Deutsches Archäologisches Institut Römisch-Germanische Kommission (Hrsg.), *Neue Ausgrabungen in Deutschland*, Mann, Berlin, 1958, S. 127-145. S.131-133 参照。
- <sup>11</sup> Franz Fischer (trans. Bettina Arnold), “The early Celts of west central Europe: the semantics of social structure,” in Bettina Arnold and D. Blair Gibson (eds.), *op. cit.*, pp. 34-40, p.38.
- <sup>12</sup> Jean-Jacques Charpy, “The Champagne region under Celtic rule during the fourth and third centuries B.C.,” in Venceslas. Kruta et. al. (eds.), *op. cit.*, pp.265-282, p.267.
- <sup>13</sup> Hans-Peter Uenze, “Bavaria,” in Venceslas. Kruta et. al. (eds.), *op. cit.*, pp.288-293, p.289.
- <sup>14</sup> *Ibid.*, p.291.
- <sup>15</sup> Françoise Audouze and Olivier Büchschütz, *op. cit.*, p.88.
- <sup>16</sup> Franz and Mary Schubert, “Metrological research into the foot measurement found in the Celtic oppidum of Manching,” in *Cotnplutum*, 4. 1993, pp.227-236, p.228.
- <sup>17</sup> Françoise Audouze and Olivier Büchschütz, *op. cit.* p.232.
- <sup>18</sup> Colin Haselgrove, “Late Iron Age society in Britain and north-west Europe: structural

---

transformation or superficial change?,” in B. Arnold and D. B. Gibson (eds.), *op. cit.*, pp.81-87, pp.81-84.

<sup>19</sup> Peter S. Wells, “Settlement and social systems at the end of the Iron Age,” p. 92.

<sup>20</sup> Olivier Büchsenschütz, “The significance of major settlements in European Iron Age society,” p.61.

<sup>21</sup> Ferdinand Maier, “The oppida of the second and first centuries B.C.,” p.429.

<sup>22</sup> Peter S. Wells, “Settlement and social systems at the end of the Iron Age,” p.92.

<sup>23</sup> Ferdinand Maier, “The oppida of the second and first centuries B.C.,” p.429.

<sup>24</sup> ホーミヒューレの男女2人の被葬者の副葬品には、青銅と鉄で装飾された4輪のワゴン、大鍋、編み細工の籠などがある。ほかに、女性の着ていた衣服には絹で刺繍が施されていた痕跡があり、男女ともに衣服にフィブラが付いている。女性はガラスや琥珀でできた鎖を首に、男性は鉄の首輪とベルトを着けている。男性の装備品は大きなナイフと大量の矢の入った矢筒である。Otto Hermann Frey, “”Celtic princes” in the six century B.C.,” in Venceslas Kruta et. al. (eds.) *op. cit.*, pp.80-102, pp. 86-87.

<sup>25</sup> ポリュビオス, 『歴史』, 2巻 26章; 城江良和訳, 166-167頁。

<sup>26</sup> 鶴岡真弓, 「インド=ヨーロッパ語と神話に再建される『祭司王』の概念」, 初期王権研究委員会編, 『古代王権の誕生 IV ヨーロッパ編』, 角川書店, 2003年, 255~265頁; 疋田隆康, 「古代ケルト社会の『祭司と剣』—ガリア、イベリア、ブリタニア—」, 同, 296~315頁。

<sup>27</sup> エミール・バンヴェニスト (蔵持不三也他訳), 『インド・ヨーロッパ諸制度語彙集II 王権・法・宗教』, 言叢社, 1987年, 5~11頁。

<sup>28</sup> ケルト語において *rex* は *rix* になり、部族の有力者の名前に *rix* が組み入れられる事例がある。ガリアの部族ハエドゥイー族の有力者オルゲトリクス (*Orgetrix*) や、ローマに歯向かった「英雄」ウェルキンゲトリクス (*Vercingetorix*) が挙げられる。

<sup>29</sup> エミール・バンヴェニスト, 上掲書, 10頁。

<sup>30</sup> Anne Ross, *The pagan Celts*, p.124.

<sup>31</sup> Gerald A. Wait, “Burial and the Otherworld,” in Miranda J. Green (ed.), *op.cit.*, pp.489-511, p.509.

<sup>32</sup> 疋田隆康, 「古代ケルト社会の『祭司と剣』—ガリア、イベリア、ブリタニア—」, 302~303頁。

<sup>33</sup> Patrice Brun (trans. Sinéad Ní Ghabhlaín), “From chieftdom to state organization in Celtic Europe,” in Bettina Arnold and D. Blair Gibson (eds.), *op. cit.*, pp.13-25, p.17.

<sup>34</sup> Joan P. Alcock, *The Daily Life of Pagan Celts*, Greenwood, 2009, p.151.

<sup>35</sup> Gilbert Kaenel and Felix Müller, “The Swiss plateau,” in Venceslas Kruta et al. (eds.), *op.cit.*, pp.275-282, p.279.

<sup>36</sup> 高橋宏幸訳, 196頁。

<sup>37</sup> Jane Webster, “Sanctuaries and sacred places,” in, Miranda J. Green (ed.), *op.cit.*, pp. 445-464, p.446.

<sup>38</sup> *Ibid.*, p.446; 「解釈 *interpretatio*」については Jane Webster, “Translation and subjection: Interpretatio and the celtic gods,” in Jeremy David Hill, Christopher G. Cumberpatch (eds.), *Different Iron Ages: studies on the Iron Age in Temperate Europe*, BAR, Oxford, 1995, pp.175-183 も参照のこと。

<sup>39</sup> Jane Webster, “Sanctuaries and sacred places,” p. 445.

<sup>40</sup> ルカヌスのほかに、ポンポニウス・メラ『地誌』III. 2.18にも記述がある。

<sup>41</sup> たとえばジェイムズ・ジョージ・フレイザー (James George Frazer) は、「ドルイド (Druid)」を、アイルランド語で *dair* や *duir*、スコットランド語で *dru* や *daru*、ウェールズ語で *drew* すなわち英語の *oak* (カシ) と、インド・ゲルマン語で *wid* か *uid* すなわち英語の *wisdom* や *knowing* (知識、知ること) の合成で「カシの木の賢者 *THE WISDOM OF THE OAK*」としている。ジェイムズ・ジョージ・フレイザー, 『金枝篇』, 第4章第2節; 吉川信訳, 『初版 金枝篇 下』, ちくま学芸文庫, 2003, 2010年, 356, 376頁。そのほかの解釈については井村君江, 「ケルト神話の宇宙観-ドルイドを中心にして」, 鎌田東二・鶴岡真弓編, 『ケルトと日本』, 角川書店, 2000年, 28-64, 33-34頁を参照のこと。



---

<sup>42</sup> Jane Webster, *op. cit.*, p.450.

<sup>43</sup> *Ibid.*, p.450.

## 第 2 章 「ケルト」の姿

歴史学、言語学、そして考古学のそれぞれで、「ケルト」という言葉が指すものは多岐にわたる。それぞれの定義を統合すると、現在、「ケルト」に当てはまるのは以下の 8 つの地域となる。①「ガリア」、②「ブリタニア」、③「イベリア」、④「ガラティア」、⑤「ボヘミア」と「モラビア」、⑥「ウインデリキア」、⑦「ヒベルニア」、そして⑧「アルモリカ」。

本章では、ウインデリキアをのぞく 7 つの地域の「ケルト」の姿を概観し、「ケルト」の地域性が表出するゆえんを探っていくこととする。

地域名	歴史学 (古典で「ケルト」「ガリア」の脈絡での記述があるか)	言語学 (ケルト系言語話者の居住域・ケルト系言語由来の痕跡があるか)	考古学 (ハルシュタットカラ・テーヌ文化の出土物があるか)
ガリア	○	○	○
ブリタニア	△ (ガリアとの関わりで)	○	○ (島南東部のみ)
イベリア	○ (「ケルト・イベリア人」)	○ (碑文多数)	○ (中央部、西部のみ)
ガラティア	○	○	△ (きわめて少数)
ボヘミア・モラビア	△ (ポイイー族のみ)	○	○ (紀元前 5 世紀以降)
ヒベルニア	×	○ (現在も話者有)	△ (きわめて少数)
アルモリカ	△ (ガリアの一部)	○ (現在も話者有)	○ (紀元前 4 世紀以降)
ウインデリキア	×	○	○

表 1 : 「ケルト」のカテゴリ

### 1 節 ガリア・イベリア・ガラティア

#### —歴史にえがかれた「ケルト」世界の諸相—

現在のフランス北東部・中部・南部にあたる「ガリア」と、スペイン・ポルトガルである「イベリア」、そして小アジア地域の「ガラティア」は、すべて「文字にあらわされたケルト」である。

## 1-1) ガリア

イタリア半島へとつながる現在のフランス南東部地域は、カエサルのガリア遠征以前にローマ属州が設立されている（ガリア・キサルピナとガリア・ナルボネンシス）。そのため、これらの地域はローマの影響が色濃くおよんでいる。また、古くより、マッサリアなどのギリシア植民市との密接なかかわりも持っていた。ストラボンが「・・・マッサリア市は当代よりすこし前すでに非ギリシア・ローマ民のための学校の役を果し、ガリア族をギリシアびいきに仕上げ、契約文もギリシア語で書くまでにしていた<sup>1)</sup>」と述べている。そのいっぽう、現ラングドック地方[Languedoc]に残される城砦や、アントルモン [Entremont, Département Haute-Savoie, Auvergne-Rhône-Alpes]、ロックペルチューズ [Roquepertuse, Département Bouches-du-Rhône, Provence-Alpes-Côte d'Azur] の聖域のように、土着の伝統が残された部分も少なくない<sup>2)</sup>。

アルプスの北、および西側の地域、広義の「ガリア・トランスアルピナ」が、『ガリア戦記』の舞台である。それによると、「ガリアは全体が三つの地域に分かれ<sup>3)</sup>」ており、それぞれ北より順に「ベルギカ」、「ケルティカ」とも呼ばれる狭義の「ガリア（ガリア・コマタ）」、そして「アクィタニア」となる。これらの地域は、紀元前3世紀まで地中海世界の影響をあまり受けていなかった。シャンパーニュ地方にのこる居住の痕跡からは、紀元前5世紀から紀元前1世紀にかけてのこの地域の社会の変遷が容易に理解できる<sup>4)</sup>。小規模な家族単位の共同体は、紀元前3世紀以降、より大きな、戦士階級の人々に率いられる共同体へ集約した。火葬墓の出現もこのころに年代づけられる。そして、紀元前2世紀以降に部族国家的な社会が形成されていき、カエサルに記録される時代へ入るのである。

### 1-1-1) 『ガリア戦記』が語る「ケルトの世界」

紀元前1世紀後半のガリアのケルト社会は、それまでの「絶対的な王 (*rix*)」の権力が分割された情勢であった。行政をになう「マギストリ (*magistri*)」、軍事担当の「エクイテス (*equites*)」、そして宗教をつかさどる「ドルイデス (*druides*)」の3つの階級が、このころには形成されていた<sup>5)</sup>。ビブラクテ [Bibracte] を主邑としたハエドゥイー族の場合、彼らは議会 (*Senatus*) で「ウェルゴブレトゥス (*Vergobretus*)」と呼ばれるマギストリを1名選んだ。ウェルゴブレトゥスの任期は1年限りで、軍事的な権限はなかった。

「エクイテス」は騎士であり、軍事をにない、戦争を起こすことができた。その能力を決定するものは、「家柄」の良さ、「富」そして「庇護民」の多さであった。「庇護民 (*Clientes*)」は貴族の取り巻きの「平民 (*Plebus*)」のことであり、さらに“*Ambacti*”と“*Clientes*”に分かれる<sup>6)</sup>。彼らは経済的に支援を受けながら、争いのあるときには歩兵として主人の軍勢に加わった。

ドルイデス、すなわち「ドルイド」は、戦争にはかかわらず、宗教儀式をおこな

うほか、さまざまなもめごとの仲裁をおこなう司法的な権限も有する存在であった。ドルイドについては4節で詳述することにしよう。

ガリアのケルト社会では、少なくとも地中海世界の人々の目に留まるころには、権力の分散と明確な階層分化がすすんでいた。歴史学における「ケルト」の中心となる「ガリア」は、紀元前2世紀以降のローマとの接触によって急速な発展を遂げ、またラ・テーヌ後期の出土物やラテン文字ガリア語の碑文など、多くの物証にも富んでいる。研究においては、この地域で得られた「ケルト」の証拠が、ほかの地域にも敷衍されている状態だといえるだろう。

## 1-2) イベリア

イベリア半島には非インド・ヨーロッパ語系の先住民がいた。ここに、紀元前500年より前にケルト系の言語を話す人々が到来し、先住民と混ざり合った。これがイベリアの「ケルト」である「ケルト・イベリア人」の起源とされる<sup>7</sup>。序章に引用したヘロドトスによる「ケルト人」の記述は、イベリアに住む彼らのことを指ししめしている<sup>8</sup>。彼らは第2次ポエニ戦争（紀元前219～201年）でカルタゴのハンニバルに加勢した。史書においては、彼らは「ケルト人」ではなく「ケルティベリア人」や「ケルトイベリア人」などと記され、ケルト人とは別の民族としてえがかれている。カルタゴの敗北後、ケルト・イベリア人はふたたび独立を取り戻した。紀元前197年にローマ属州ヒスパニア・キテリオルとヒスパニア・ウルテリオルが設立された後も、彼らはローマに歯向かい、戦いをしかけた。3つの戦争、すなわち、ルシタニア戦争（紀元前155年～紀元前139年）、ケルト・イベリア戦争（紀元前155年～紀元前133年）、そしてカンタブリア戦争（紀元前26年～紀元前19年）のすべてで敗北を重ね、イベリア全土はローマの手中に収められた。

さて、ケルト・イベリア人は、とくにメセタと呼ばれる半島中央部の高原地帯にその文化圏を築き、のちにこの文化は半島西部へも伝播した。オッピドゥムも知られている。それらは、壁に囲まれた領域がいくつか連なって形成されている<sup>9</sup>。イベリア半島で最大のオッピドゥムはウラーカ [Ulaca] のそれであり、面積は70ha、人口は1050から1400人であったと推定されている。ガリアやウィンデリキアのオッピドゥムと比較すると小規模であるが、そこには石造りの住居が立ち並び、ピレネー山脈の向こうの地域の様式に似た手工業品の生産も活発化していた。

しかし、文化面では、イベリアの「ケルト」は、ピレネー山脈の向こうの地域とは異なる様相を呈し、非常に独特であった。特筆すべきは、ローマ支配下に入るまで、青銅器時代からの火葬の風習がつつけられていたことだろう。また、この社会における権力者のありかたも、ほかの「ケルト」の地域とは異なっていた。産業の発展によって社会階層が形成されたイベリアであるが、そこでは指導者は「首長」「小王」と呼ぶべき存在であり、抜きん出たものではなかった。その彼らを特別なものと見なさせる要素として、この地特有の「ホスピティウム（契約）」がもちいら

れたという<sup>10</sup>。また文化・信仰の面においても、先住のイベリア人との融合の結果として、他の地域とは異なる鳥葬の習慣や火葬の風習の持続、ヴァラッコス (Varracos) という家畜保護の宗教的な意味を持つ石の彫像の製作など、他の地域にはない要素が含まれている<sup>11</sup>。

イベリアの「ケルト」は、とくに半島中央部においてその特色が顕著に見られ、そこでは先住イベリア人の文化と融合し、ピレネー山脈を隔てた向こうのケルト世界とは異なる社会的、文化的な展開を見せていた。それは、ほとんどイベリア的であったということもできよう。

### 1-3) ガラティア

・・・ガリア人の若者の数が大いに増え、その結果、彼らはアジアをあたかも何かの群れのように満たした。その後、オリエントの王たちはガリア人の傭兵軍なしではどんな戦争も遂行しなかったし、王国から追放された時、ガリア人の所以外へ逃げて行った者は一人もいなかった。

(トログス、『地中海世界史』, 第 25 巻 2)<sup>12</sup>

ガラティアは、「ケルト」のもっとも東端の居住域である。その居住者の先祖は紀元前 3 世紀以降にかの地へ到来した。

イタリア半島へ侵入したケルト人の一部はパンノニアへ向かい、前 380 年にイリュリアへ侵略した。パンノニアまで到達したケルト人はさらに 2 つに分かれ、一方はマケドニアに、他方はギリシアに攻め入った。マケドニアへ流れ着いた集団は、ビテュニア王に傭兵として仕え、紀元前 275 年にはシリア王アンティオコス 1 世の軍勢と戦火を交えた。この戦いに敗北はしたものの、彼らはそのまま小アジアに住み着き、プリュギア地方を手に入れた。この集団が「ガラタイ」であり、彼らの定住地が「ガログラエキア (ガラティア)」である。

ストラボンによると、ガラタイは「テトリストボギイー」、「トロクミイー」、そして「テクトサゲース」の 3 つの部族にわかれ、その 3 つの部族がそれぞれ 4 つの支族を持ち、合計 12 の集団が小アジアの地中海沿岸の地域を略奪してまわったとされている<sup>13</sup>。このうち、テクトサゲース族はもともとマッサリア近郊の部族の一部である。

小アジアにおいて、考古学上の「ケルト」の証拠はとぼしい<sup>14</sup>。これは、周辺地域がギリシア文化圏であったために、すぐにそれらに同化したためと考えられる。ヘレニズムの彫刻は、彼らの野蛮さを強調する。《瀕死のガリア人》(図 12) に見られるように、「ガラタイ」は全裸で戦いにおもむいている。これは、テラモンの戦いでローマと戦ったケルト人部族、ガエサティ族と同様の風貌である<sup>15</sup>。この点



において、「ガラタイ」はケルト的な要素を保持していたとすることができるだろう。



図 12：瀕死のガリア人（イタリア・カピトリーノ美術館所蔵）

〔出典：『ケルト歴史地図』，25 頁。〕

## 2 節 ポヘミアとモラヴィア—地中海世界へ居ついた「ケルト」—

現在のチェコの「ケルト」については、歴史的には「ボイイ族」にその痕跡をもとめることができる。

・・・さらにボイイ人とリンゴネス人がポエニ峠を通過してイタリアに入った。・・・彼らは川を筏で渡り、エトルリア人だけでなくウンブリア人をも追い出して、この場所に定住した。

（リウィウス、『ローマ建国以来の歴史』，第 5 卷 35 章<sup>16)</sup>

ボイイ人はセノネス人が領地から追い出されたのを見て、自分たちも同じ運命に見舞われるのではないかと不安になり、エトルリア人にも参加を呼びかけたうえで、総力をあげて遠征に出た。

（ポリュビオス、『歴史』，第 2 卷 20<sup>17)</sup>

ボイイー族は現在のボローニャ付近に移動し、テラモンの戦いでローマと戦った部族のひとつである。彼らの故郷、ボヘミアー「ボヘミア」の名はボイイー族に由来している一では、紀元前5世紀後半に初期ラ・テーヌ文化がもたらされた。ザーヴィスト [Závist, Jihomoravský kraj, Okres Blansko] の防壁ある居住地は、この時期のボヘミアの「ケルト」社会の中心であった。それが突如終焉を迎えると、次に「平坦な土葬墓」を造る集団があらわれる。その埋葬形式の変化は紀元前4世紀にあった。これらの文化の保有者は、スイス中部や西部、バーデン・ヴュルテンベルク各地域から到来したと推測される<sup>18</sup>。モラビアへの「ケルト」の到来は、これと軌を一にしている。「ケルト」とされる文化が東へと漸進していったことがよく分かる事象である。

モラビアにも、ボヘミアより少し遅れて「平坦な土葬墓」がもたらされたが、この地域の副葬品には、イリュリアに由来するものが含まれている<sup>19</sup>。これは、ケルトとイリュリアのかかわりをしめすものである。ボヘミア、モラビアのケルト社会そのものについての記録はないが、イタリアに渡ったボイイー族の社会については、ポリュビオスに残っている。そこでは、取り巻きを多く抱えることが権力の条件となっていた<sup>20</sup>。

ボヘミアとモラビア、そしてその周辺地域は、紀元前5世紀後半以降「ケルト」の色を強くし、近隣他部族の影響を受けながら、一定の繁栄を築いていた。

### 3 節 ブリタニア・ヒベルニア・アルモリカ

#### —「島のケルト」とその生き残り—

#### 3-1) ブリタニア

ブリタンニアの内陸部の住民はもともと島の生まれであると言い伝えられている。対して、沿岸部の住民は略奪や戦争を仕掛ける目的でベルギウムから移住した者たちで、ほぼすべてが出身母体の部族の名を自分たちの部族名とし、ブリタンニアに来て戦争を仕掛けたのちに居坐り続け、農地の耕作を始めた。

(カエサル、『ガリア戦記』, 5巻 12<sup>1</sup>)

スエッシオーネース族はわれわれ [筆者注: レーミー族] と隣接する部族で、もっとも広く、もっとも豊穡な農地を所有している。まだわれわれと同世代にディーウィキアークスといい、全ガリア最有力の王がいた。彼はこの地域の大部分のみならず、

ブリタンニアにも王領を保持した。

(同, 2 卷 4<sup>22</sup>)

「“島のケルト” 否定論」では、ブリテン島への大陸の「ケルト人」の移住はなかったと強く主張される<sup>23</sup>。しかし、これらのカエサル<sup>23</sup>の記述がしめすように、大陸とブリタニアのあいだに何らかのかかわりがあったということは、否定されるべきではないだろう。

ブリタニアには、北部には先住民のカレドニア人が、南部にはおなじく先住民のブリテン人の居住があった。大陸北西部をとおして、ラ・テーヌ期の鉄器文化を受容した南東部では、2ha 前後の丘砦 (Hillfort) が散見される。これらの居住地では、ガリアに類似する部族社会が形成されていた。いっぽうカレドニア人は、「ブロッホ」と「ドゥーン」という、やぐらを兼ねた小さな石造りの住居 (図 13) を建て、家族単位の小さな社会を形成していた<sup>24</sup>。

ローマによるガリア制圧後、すなわち紀元前 55 年以降、ブリタニア南東部の部族はローマの影響を受けはじめた。オッピドゥムの出現は、ブリタニアではこれ以降である<sup>25</sup>。しかし、他方でローマの勢力拡大に抵抗する側面もあり、カッシウェッラウヌス率いる多部族混成集団による反乱も起こされた。紀元後 43 年のクラウディウス帝のブリタニア征服では、カルティマンドゥアやブーディカのような女性に導かれ、ブリテンの先住者たちは戦った。このような「女性の軍事指導者」の存在は、指導者の地位に就くことに性別が問われないことをほのめかしている。



図 13 : ブロッホ [出典 : 木村正俊『ケルト人の歴史と文化』, 106 頁。]

ブリタニアの「ケルト」は、ガリアとともに「ケルト」研究の中心となる場所である。しかし、大陸北西部の影響が色濃く及んだのは島の南東部だけであって、北部などではあまりケルト的な要素が強くは見られず、先住民の文化のなかにケルトの文化が入り込んだようなかたちとなっていることに注意が必要である。

### 3-2) ヒベルニアとアルモリカ

ヒベルニアはアイルランドの、アルモリカはブルターニュのそれぞれ古代の名称である。アルモリカはガリアの一部として、カエサル時代にはまとめて「アルモリカエ」と呼ばれる複数の部族の居住地として記録される。彼らは、ウェルキングトトリクスの召集に応じて、合計3万人の兵を提供した<sup>26</sup>。

考古学的にみると、ブルターニュ半島は大陸のほかの地域と一線を画していた。鉄器の使用は紀元前600年ころまで下る。これは、紀元前800年から紀元前700年ころに鉄器を使用し、ハルシュタット文化を栄えさせたフランス東部地域よりも100年遅い<sup>27</sup>。この地域の青銅器文化は「アルモリカ文化」と呼ばれるが、それが紀元前600年ころまで保持されていたことをしめしている。

ヒベルニアも状況は似ている。初期鉄器時代（≡ハルシュタット文化）の遺物はなく、ラ・テーヌ文化に属する遺物の出土は、紀元前3世紀から紀元前2世紀に年代づけられるものがあるくらいである。両地域は、考古学的な「ケルト」と呼びあわすにはあまりにも貧弱である。

この2つの地域は、紀元後の「ケルト」のありようとして、とくにキリスト教とにかかわりにおいて、ブリテン島をはさんで密接にむすびついている。

4世紀、ブリテン島にキリスト教がもたらされた。そしてキリスト教が定着し、島出身の聖職者が生まれると、彼らは島を離れて西側と東側へ、つまりヒベルニアとアルモリカへと渡り、その教を伝えた。アルモリカにおいては、7世紀以降に年代づけられる聖人伝が、ブリテン島からの伝道をつたえている<sup>28</sup>。この地域に広まったキリスト教は、大陸の他の地域とは異なり、ケルト、もしくはそれ以前の自然信仰的な特色を備えたものとなっている。

他方、ヒベルニアにおいては5世紀の聖パトリック（St. Patrick）や7世紀の聖コロンバヌス（St. Columbanus）などの尽力により、キリスト教が定着した。こちらも、ケルト十字（図14）にみられるような、異教的な要素をおおく含んでいる。ヒベルニアの修道士による装飾写本（図15）にみられる、優美な曲線やさまざまなモチーフの文様が絡み合った装飾も、キリスト教以前の原始的な異教の名残であると考えられてきた。そして中世になり、アルモリカが「ブルターニュ」へ、ヒベルニアが「アイルランド」へとその呼称が変化したころ、アイルランドの修道院においてあらゆる文学や法律文が編まれた。それらの修道院で書かれた作品のなかにも、キリスト教以前の「ケルト人」の文化が生き残っているとされてきた。





図 14 : ケルト十字 [出典 : Miranda J. Green, Celtic Art, p.157.]



図 15 : 『ケルズの書』 [出典 : 原聖, 『ケルトの水脈』, 巻頭資料。]



アイルランドとブルターニュは、その後長きにわたって苦難の時代に突入する。それは、イングランドやフランスという、大国による支配と抑圧の時代であった。しかしそのなかで、両地域は異教的な—それが「ケルト」的と呼ばれた—要素を持つキリスト教の信仰を守りつづけた。そして、それらの「ケルト」的なものが、抑圧されてきたその地域の人々の拠り所となった。悠久の時をひっそり生き長らえた「ケルト」。大衆文化における「ケルト」のイメージは、この2つの地域の「ケルト」の姿を投影したものと言えるだろう。

#### 4 節 ケルト社会の都市化と信仰—ガリアの場合—

各地域の「ケルト」の諸相は以上のとおりである。これらのうちでもっとも史料が豊富であり、「ケルト」研究の基盤となっているのがガリアである。次章以降、ウィンデリキアという、この基盤からいささかはずれた部分を掘り下げていくためにも、この地域の「ケルト」の実態について、もうすこし深く追究するべきであろう。

##### 4-1) ガリアの都市化—オッピドゥムとそれ以前—

先述のとおり、「ガリア・トランスアルピナ」に地中海世界の影響がおよぶのは紀元前3世紀以降である。しかし、これは人による直接の影響にかぎっての話であって、交易による物質的な影響は、とくにガリア中部や東部におよんでいた。

オッピドゥム以前のこの地域において、繁栄の証拠を鮮明にしめしているのがヴィクス [Vix, Département Côte-d'Or, Bourgogne-Franche-Comté] である。ヴィクスには、「ヴィクスの王女」と呼ばれる女性が眠る墳墓が残されている (図 16)。

直径 40m の平坦な塚の下の 3m 四方の墓室のなかに、30 歳から 40 歳代の女性の遺体が安置されていた。遺体は、中央のワゴンの残骸の上に仰向けに寝かされ、多くの副葬品をともなう。小さなペガサスのような装飾が施された透かし彫りの冠もしくはトルクが頭のそばに、腰に青銅製のネックレスと、おなじく青銅製のリングがあり、琥珀と閃緑岩、そして蛇紋岩それぞれのビーズでできたネックレス、青銅製と褐炭岩の腕輪、青銅製のアンクレット、といったように。さらに、衣服を留める 8 つのフィブラは、そのほとんどが珊瑚でできていた。

副葬品のうちで特筆すべきは、墓室の北西側の角に置かれていた青銅製のクラテル (混酒器) である (序章図 3 参照)。クラテルは高さ 1.64m、重さ 208.6kg で、ケルトの出土物の中では最大のものである。持ち手の部分はメドゥーサと蛇をかたどっていて、頸部には馭者と重装歩兵が交互に並ぶフリーズが施されており、地中海世界からの文化的影響を想起させる<sup>29</sup>。

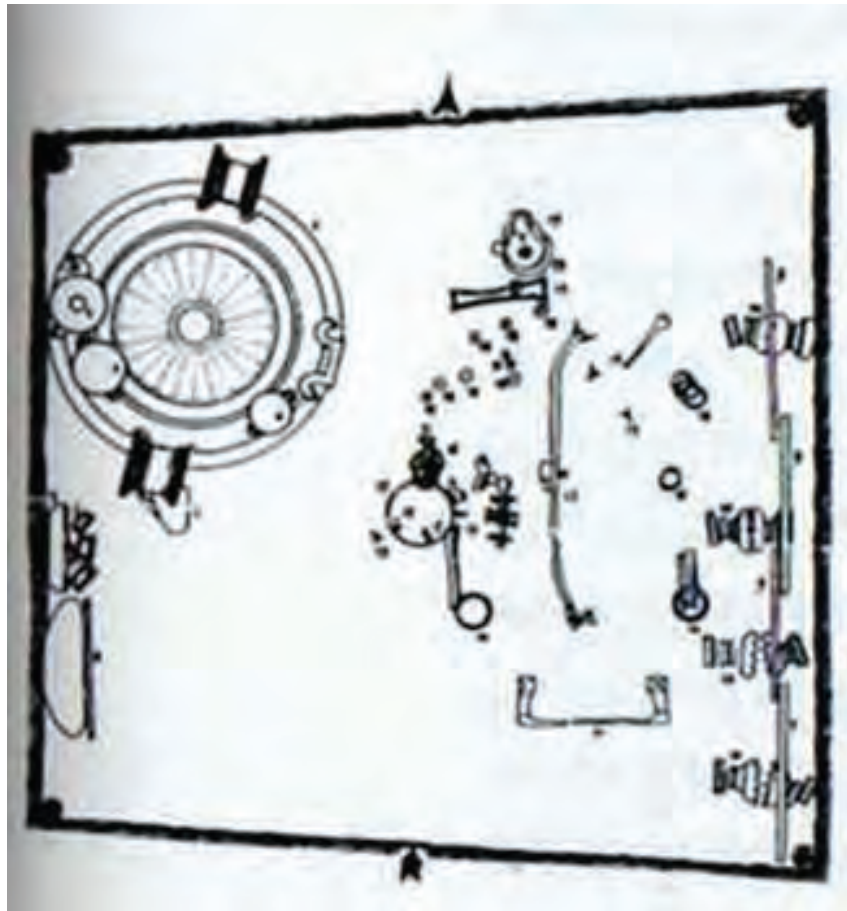


図 16 : ヴイクスの「王女」の墳墓 内装

[出典 : Jean-Pierre Mohen, “The princely tombs of Burgundy,” in Kruta et al. (eds.), *The Celts.*, pp.116-122, p.120.]

この墳墓とむすびつく居住地が、ラソワ山 [Mont Lassois] の山頂にある。居住地は、幅 13.5m、高さが最低でも 3.1m の防壁によって囲まれており<sup>30</sup>、その面積は最低でも 55ha であったと推定される。南側に入口があり、入口を入って右側に居住区画が、左側に家畜の飼育場が広がるレイアウトが推定されている<sup>31</sup>。この秩序だった居住地のありかたは、ハルシュタット期の「丘上要塞」が、単なる権力者の住まいにとどまらず、後代のオッピドゥム社会にも似た構造を呈していたことを示唆するものである<sup>32</sup>。

さて、オッピドゥムの出現は、ガリアでは紀元前 2 世紀後半に起こった。マンドゥビイー族の主邑であり、ガリアとローマの最後の戦いの舞台であるアレシア [Alésia, Département Côte-d'Or, Bourgogne-Franche-Comté] のオッピドゥムは、ナポレオン 3 世の治世下において、「ガリア人がローマ人に打倒された場所」として持ち上げられ、以降積極的に発掘が進められた<sup>33</sup>。溶けた金属くずやテラコッタ製のつぼ、そして炉の発見・出土は、アレシアのオッピドゥムにおける手工業の発展を

しめしている<sup>34</sup>。

#### 4-2) ガリアにおける信仰—ドルイドの役割を中心に—

ドルイデスは神事に関わる。公的および私的な犠牲式を司り、神意の解釈をする。彼らのもとには多数の若者が修行のために集まり、彼らは人々からたいへんに尊敬されている。というのも、公的および私的な問題のほとんどすべてに決定を下すからである。犯罪が発生した場合、殺人がなされた場合、遺産相続や土地の境界をめぐる争いが起きた場合もやはり彼らが裁定を下し、賞罰を決定した。の争いが起こったときも同様に判決を下して補償や刑罰を決める。個人でも部族でも彼らの裁定に従わない者があった場合、その者に彼らは犠牲式参列を禁じる。・・・

(カエサル、『ガリア戦記』、6巻13<sup>35</sup>)

ケルト世界の聖職者として頻繁に登場する存在が「ドルイド」である。ドルイドは、その起源は不明である<sup>36</sup>が、紀元前3世紀以降に強い力を持ったガリアの社会階級、およびその階級に属した人々のことである。その存在や役割については、紀元前4世紀から紀元後2世紀の地中海世界の著述家たちによって記録されている。以下は、ストラボン、マルクス・アンナエウス・ルカヌス、アミアヌス・マルケリヌスによるドルイドについての記述である。

また、三番目のもの〔筆者注：ドルイド〕は自然の探究に加えて道徳哲学にはげんでいる。そして、本人たちも一番正しい人間だと信じられているから、個人と公共を問わず問題が起れば判定を下し、陣列を整え合戦に及ぼうとしているのを止めたりしていた。とりわけ、殺人事件を捌く仕事はこの氏族に任されていた。

(ストラボン、『地誌』、4巻4章2節<sup>37</sup>)

・・・そしてドルイドは、・・・異国の儀式と彼らの崇拜の気味の悪い式典に戻った。彼らにとって唯一なものは恩恵を受けた知識、もしくは無知である。それはおそらく、神々と天空の力であろう。彼らは深い森のなかに住んでいる。彼らは、魂はエレボスの静けさの国やデイス〔パテル〕のもとの太陽のない場所に降りるのではなく、同じ魂が別の場所で四肢を動かすと教える。・・・

(ルカヌス、『内乱記』、1巻450-458<sup>38</sup>)

ドルイドは残りの知識層よりも最も高尚な存在で、友愛の組織において一緒にいるけれども、ピタゴラスの権威に定義づけられているので、不明瞭で重大な問題の研究によって高められる。そして人々すべてをあざけり、魂の不滅を訴える。

ドルイドは、神と通じることのできる唯一の存在であり、冥府の神をあがめた。それだけでなく、哲学、天文学、占星術、薬学、魔術に精通する知識人であり、戦争の調停や裁判、犠牲の儀式の執行の一切をになう人物であった。

とくに、犠牲の儀式の執行は、ドルイドにとってもっとも重要な役目であった。カエサルが述べているように、公的な目的であろうと私的な理由であろうと、生贄を捧げる際には必ずドルイドがその場に居合わせなければならなかった。もしこの決まりに従わなかったり、あるいはドルイドの決定に背いたりした場合、その者（あるいは集団）は共同体から締め出された。儀式の生贄には動物も人間も差し出されたが、とくに人身供犠については、古典の著者たちに、しばしば嫌悪の目線でもって記されている。

ところで、カエサルは、ケルト社会には騎士とドルイドの2つの階級しか権力を持ちえる存在はいないと『ガリア戦記』で述べている<sup>40</sup>けれども、実際にはドルイド以外にも知識人層が存在しており、ストラボン、アマミアヌスが記している。3つの知識階級があり、ドルイドはその最上位にあたる。ドルイドになるには20年の修行を要する。第2番目の知識階級は「ウァーテス (Vates)」である。彼らも修行に20年を費やす。彼らは預言者であり、ドルイドの犠牲の儀式の執行に立ち会う。詩や韻文を作ることに長け、予言的な詩を詠唱する人物である。「バルド (Bard)」は知識階級のなかでは最下位だが、その知識量はおびただしい。7年間修行を積むことでバルドになることができる。権力者を賛美する詩を唄う吟唱詩人であるが、権力者が彼らを冷遇すると、今度は逆に風刺したりけなしたりする詩を唄った<sup>41</sup>。その風刺詩を唄われることを、権力者はとても恐れたという。

このように、ドルイドやその下につづく知識階級たちは尊敬され、あるいは畏れられる存在であった。彼らが大きな権力を持ちえたのは、オッピドゥム社会にいたるまでの「権力の変遷」が背景にある。

第1章で述べたように、ハルシュタット期におけるケルトの権力者は絶対的な権力を持ち、かつ、神とむすびつき儀式を執りおこなう「宗教的な権威」もまとっていた。そこに変化をもたらしたのが、ラ・テーヌ期におけるケルト人の移動の活発化とその収束である。軍事力を背景にのし上がった権力者たちはそれを揮う機会をなくし、また移動の過程で祭司として人々を統べることもできなくなっていたため、弱体の一途をたどっていった。疋田隆康氏は、宗教的権威と「王権」の関係性を述べた論考のなかで、紀元前3世紀末には、ガリアの権力者の「王権」は不安定な

ものになっていただろうと述べている<sup>42</sup>。そのなかで権力の分散が進み、政治的なことは複数の上流階級の者による集会にまかされ、儀式の執行や、裁判に関する権利がドルイドの役目となったのである<sup>43</sup>。権力者の権威を保証していた「宗教」は、このようにしてドルイドの手に渡り、彼らは畏怖される存在となるにいたったのである。

ガリアにおいて、ドルイドは神に仕え、儀式を執行するというその役目によって絶大な権力を持った。オッピドゥム形成期には「権力者」から宗教的権威が離れ彼らは弱体化し、反対に宗教を担った集団が力をつけた。ガリアではその力を持った新興集団がドルイドであった。彼らは俗世間から離れて深い森の奥に暮らし、冥府の神を崇め、人身供犠をおこなう。人々に魂の不滅と輪廻転生を訴え、彼らの教えに背くものを排除する。異郷の作家たちの目には、そのようなドルイドの姿がとても奇異に映ったのであろう。それゆえに多くの記録が残されたのである。

## 5 節 小括

3つの分野の定義において「ケルト」とされる8つの地域は、そのひとつひとつにつぶさに目を向けてみると、「ケルト」という言葉で単純にひとまとめにすることはできない、社会的・文化的な多様性を持っていることが、本章の分析で理解できた。おのおのの地域の「ケルト」は、その地域の「ケルト」以前の文化や風土、そしておのおのにおよんだ異世界からの影響を如実に受けて、個別の世界を繰り広げていたと考えて良いだろう。そこに目を向けず、巨視的に「ケルト」を語ることは、「ケルト」の地域性の「無視」につながるのではないだろうか。

「ドルイド」についても同様のことがいえよう。「ドルイド」の存在が史実として確認されているのは、ガリアとブリタニアだけである<sup>44</sup>。聖パトリックの布教の時代にヒベルニアにいたとされるドルイドも、ガリアのそれとは異なりながら呪術師のようであったという<sup>45</sup>。

その地域の独特の状況が、社会的なありかたに影響を及ぼすことは十分にありえるだろう。では、本稿のメイン・テーマであるウィンデリキアの場合はどうだったのだろうか。次章以降はウィンデリキア特有の状況の確認や、ウィンデリキア出土の遺物に現れる異文化の影響などについて考察をくわえていく。

---

### 【註】

<sup>1</sup> ストラボン、『地誌』, 4巻1章3節5; 飯尾都人訳, 312頁。

<sup>2</sup> トーマス・パウエル、『ケルト人の世界』, 114~116頁。



- 
- <sup>3</sup> 『ガリア戦記』, 1 巻 1 ; 高橋宏幸訳, 1 頁。
- <sup>4</sup> Olivier Buchsenschutz, “Celts in France,” in Miranda J. Green (ed.), *The Celtic World*, pp. 552-580, p. 556; Jean-Jacques Chappy, “The Champagne Region under Celtic Rule during the Fourth and Third Centuries B. C.,” in Venceslas Kruta et. al. (eds.), *The Celts*, pp.265-274, pp.265-267.
- <sup>5</sup> Jean-Louis Brunaux (trans. Daphne Nash), *op. cit.*, pp. 50-54.
- <sup>6</sup> *Ambacti* は貧しい身分の者、*Clientes* は主との関係が非常に緊密な、出自を問わない私兵の集団をさす。毛利晶, 「ガリア社会の従者制度」, 『史学雑誌』, 84 巻, 11 号, 1975 年, 1525~1533 頁, 1528 頁。
- <sup>7</sup> 古典の記述による。ケルト・イベリア人の起源については不明な点も多い。Martín Almargo-Gorbea, “The Celts of the Iberian Peninsula,” in Venceslas Kruta et. al. (eds.), *op. cit.*, pp.394-419, 参照。
- <sup>8</sup> *Ibid.*, p.394.
- <sup>9</sup> Jesús R. Álvarez-Sanchís, “Oppida and Celtic society in western Spain,” in *Journal of Interdisciplinary Celtic Studies* volume 6: *The Celts in Iberian Peninsula*, 2005, 28, pp.255-285, p. 258.
- <sup>10</sup> 疋田隆康, 「古代ケルト社会の『祭司と剣』—ガリア、イベリア、ブリタニアー—」, 初期王権研究委員会編『古代王権の誕生 IV ヨーロッパ編』, 角川書店, 2003 年, 296-315, 306~307 頁。
- <sup>11</sup> Jesús R. Álvarez-Sanchís, *op. cit.*, pp.266-270.
- <sup>12</sup> 合阪學訳, 『ユニアヌス・ユスティヌス抄録 地中海世界史』, 京都大学学術出版会, 1998 年, 320-321 頁。
- <sup>13</sup> ストラボン, 『地誌』, 12 巻 5 章 1~2 ; 飯尾都人訳, 159~160 頁。
- <sup>14</sup> 鈴木慎也氏による報告がある。鈴木慎也, 「小アジアのケルト人—ガラティアの物質文化に関する一考察—」, 日本西洋史学会 (2017 年, 於: 一橋大学)
- <sup>15</sup> ガエサティ族についてはポリュビオス, 第 2 巻 28 ; 城江良和訳, 『歴史 1』, 170 頁。
- <sup>16</sup> 毛利晶訳, 『ローマ建国以来の歴史 2』, 353 頁。
- <sup>17</sup> 城江良和訳, 『歴史 1』, 158 頁。
- <sup>18</sup> Pavel Sankot, “The Celtic population of Bohemia in the fourth century B.C.,” in Venceslas Kruta et. al. (eds.), *op. cit.*, pp.294-296, pp. 294-295.
- <sup>19</sup> Miloš Čižmář, “The Celtic population of Moravia in the fourth century B. C.,” in *ibid.*, pp. 297-301, p.301.
- <sup>20</sup> ポリュビオス, 2 巻 17 ; 城江良和訳, 『歴史 1』, 154 頁。
- <sup>21</sup> 高橋宏幸訳, 144 頁。
- <sup>22</sup> 高橋宏幸訳, 56 頁。なおスエッシーネース族は現在のソワソン近郊にいた部族。
- <sup>23</sup> 「“島のケルト” 否定論」については補論を参照のこと。
- <sup>24</sup> トーマス・パウエル, 『ケルト人の世界』, 240~244 頁。
- <sup>25</sup> John Collis, “The First Towns,” pp.170-171.
- <sup>26</sup> カエサル, 『ガリア戦記』, 7 巻 75 ; 高橋宏幸訳, 279 頁。
- <sup>27</sup> 原聖, 『ケルトの水脈』, 106-109 頁。
- <sup>28</sup> 同上, 182-184 頁。
- <sup>29</sup> John V. S. Megaw, “The Vix burial,” in *Antiquity*, 40, 1966, pp. 38-44 ; Jean-Pierre Mohen, “The princely tombs of Burgundy,” in Venceslas Kruta et al. (eds.), *op. cit.* pp.116-122, pp.119-121.
- <sup>30</sup> René Joffroy, „Das Oppidum Mont Lassois, Gemeinde Vix, Dep. Côte-d’Or,” in *Germania*, Bd. 32 Nr. 1/2 (1954), S. 59-65, S.61.
- <sup>31</sup> Piere-Yves Milcent, “Hallstatt Urban Experience before the Celtic Oppida in Central and Eastern Gaul. Two Cases-Studies: Bourges and Vix,” in Manuel Fernández-Götz, Holger Wendling, Katja Winger (eds.), *Paths to complexity: Centralisation and Urbanisation in Iron Age Europe*, Oxbow Books, Oxford & Philadelphia, 2014, pp. 35-51, p.42.
- <sup>32</sup> ミルセントはこれを「ハルシュタットの都市的経験 (Hallstatt Urban Experience)」と呼ぶ。

- 
- <sup>33</sup> Michael Dietler, “A Tale of Three Sites: The monumentalization of Celtic oppida and the politics of collective memory and identity,” in *World Archaeology*, 1998, 30:1, pp.72-89, p.76.
- <sup>34</sup> George Allen, “Excavations on the site of the ancient town of Alesia,” in *The Classical Weekly*, vol. 28, no. 22, 1935, pp. 169-176, p.171.
- <sup>35</sup> 高橋宏幸訳, 191～192 頁。
- <sup>36</sup> 「ドルイド」は前 8 世紀末、スキタイ人の西進によって居住地を追われた南ウクライナのキンメリア人によってもたらされた階層と宗教観が起源であるとされるが、その真偽は定かではない。原聖, 『ケルトの水脈』, 138-139 頁参照。
- <sup>37</sup> 飯尾都人訳, 341 頁。
- <sup>38</sup> Trans. James Duff Duff, *The civil war*, p.38 を拙訳。
- <sup>39</sup> Trans. John C. Rolfe, *The surviving books of the history*, p.179 を拙訳。
- <sup>40</sup> 6 卷 13 ; 高橋宏幸訳, 191 頁。
- <sup>41</sup> Anne Ross, “Ritual and the druids,” in Miranda J. Green (ed.), *op. cit.*, pp.423-444, p.430.
- <sup>42</sup> 疋田隆康, 「古代ケルト社会の『祭司と剣』—ガリア、イベリア、ブリタニア—」 302 頁。
- <sup>43</sup> 同上, 311 頁。
- <sup>44</sup> 同上, 310 頁。
- <sup>45</sup> 原聖, 『ケルトの水脈』, 207～208 頁。

## 第3章

### ケルト社会の地域性—ケース・スタディとしてのウィンデリキア—

本章では、第2部の考察の舞台となる「ウィンデリキア」に焦点を絞り、この地で展開された「ケルト」社会の様相と、前章で取り上げたガリアのそれとの違いを確認していくこととする。

#### 1節 ウィンデリキアの「ケルト」の展開

ウィンデリキア (Vindelicia) は現在のドイツ南部にあたる。古典におけるウィンデリキアの記述は、ガリアのそれよりもはるかに少ない。しかし、比較的詳しい記述はストラボンとプトレマイオスによってなされている。

紀元後1世紀の著述家ストラボンは、その著書『地誌』において、ウィンデリキアはヘルウェティイ族、ボイイ族、イリュリア人<sup>1</sup>と境界を接する「ウィンドリキ族」の居住域であり、彼らはその部族のなかに複数の支族を持ち、近隣諸部族の地域を荒らしてまわる盗賊部族であったと記している<sup>2</sup>。

また、エスティオネス、ブリガンティイという部族がそれぞれブリガンティウムとカンボドゥヌムを主邑とし、リカッティイ族の町がダマシアであったという記述もある。カンボドゥヌムは現在のケンプテン [Kempten (Allgäu), Regierungsbezirk Schwaben, Bayern] である。プトレマイオスの『地理学』では、ウィンデリキアのダヌビオス川、現在のドナウ川沿いの8つの町の名と、ダヌビオス川沿いのクリマに含まれる19の町の名前が記載され、またこの地域の北部に居住する6つの部族、すなわち、ルウニカタイ族、レウノイ族、コンスウアンタイ族、ベンラウノイ族、ブレウノイ族、リカティオイ族の名が書かれている<sup>3</sup>。部族名の記載こそあるが、これらの部族がどのような社会を形成していたのかについては記述がなく、歴史学からそれを読み取ることはできない。そのいっぽうで、ウィンデリキアは考古学的なケルトの証拠が非常に豊富なことが特徴である。



図 17： ウィンデリキア（Vindeliker）とその周辺

[出典： Sievers, Manching: Die Keltentstadt, S.136.]

現在のバーデン・ヴュルテンベルクにあたるドイツ南西部地域の繁栄、つまりハルシュタット文化の興隆は、当該の地に多くの遺物を残した。しかし、近接する南部（バイエルン）地域は、丘上要塞を築けるほどの強い力を持つことはできなかった。これは、ハルシュタット文化の繁栄が交易によってもたらされたからであって、南部はこの交易の主要なルートからはずれていたために、繁栄の恩恵を受けなかった。

紀元前 5 世紀ころには、この地域においてラ・テーヌ文化がはじまった。この時代には、他の地域と異なり、ギリシアやエトルリアからの輸入品を含まない戦士の墓が出現した。戦士階級の台頭をほのめかすものである。バイエルン、ボヘミア西部、ザルツカンマーグート、オーバーエステライヒのあいだでの考古学的な統一性が見られ、この一帯のケルト人の部族が同じ文化を有し、パンノニア方面の東方移動を起こしたとみられる<sup>4</sup>。

さて、紀元前 2 世紀に入ると、これらの地域にもオッピドゥムが成立した。ウィンデリキアのオッピドゥムは、ガリアのそれと大きさ、構造、人口の点で似ている<sup>5</sup>。各地のオッピドゥムの総面積を見ると、ガリアのビブラクテは 170ha 以上、アルキモエンニスに相当するケルハイム（第 2 部 1 章に詳述）は 650ha。イベリアで最大のオッピドゥムであるウラーカが 70ha であることと比較すると、ガリアやウイ

ンデリキアのオッピドゥムは、比較的大規模化する傾向にあったことがうかがえる。また、構造という点においても、「ガリア壁」の構造がウィンデリキアのオッピドゥムでも見られるなど、ガリアのケルトとウィンデリキアのケルトとが何かしらのかわりを持っていたと考えられる証拠もある。

ウィンデリキアのケルト社会には、紀元前2世紀ころには明確な社会階層が形成されていた。この時代に年代づけられる長さ4mの鎖付きの首輪の存在(図18)は、これは奴隷階級の存在をほのめかす<sup>6</sup>。スザンヌ・ジーヴァース(Susanne Sievers)は、ウィンデリキアにおけるこれらの「自由を持たない人々」には、鎖につながれた罪人や捕虜のような「奴隷」として扱われた人々のほかに、地主の領地に住み耕作する農民(Bauern)や、金づちなどの専門的ではない道具を作る手工業者が含まれたと述べる<sup>7</sup>。彼らは上位の者たちの庇護民であり、戦時には武器を手にとりともに戦った。下層の者の武器が投石機や弓矢であったいっぽう、上位の者は装飾のほどこされた刀剣を手に、馬に乗って戦った。ウィンデリキアにおける施政については不明であるが、先述の権力者と庇護民との関係性を考慮すると、ガリアのそれと似ていた可能性が高いとも考えられるだろう。

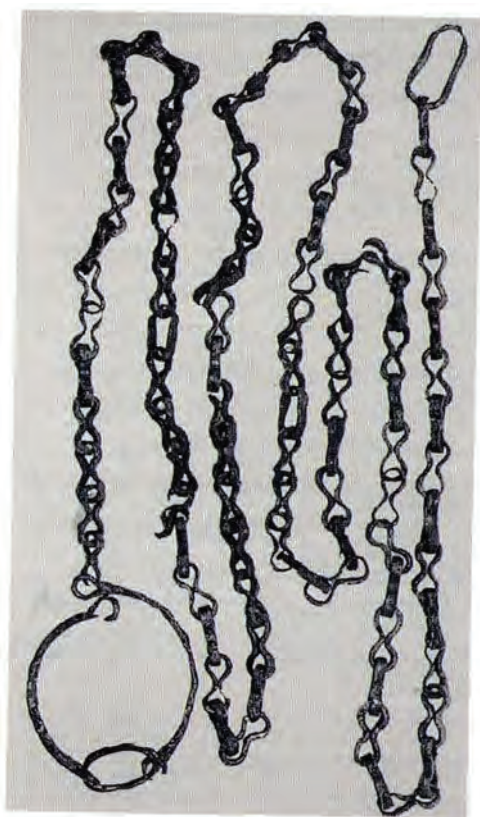


図18：奴隷用の鎖付きの首輪 [出典：Susanne Sievers, *Ebd.*, S.124.]



## 2 節 えがかれなかったウィンデリキア

かぎられた証拠からではあるが、ウィンデリキアとガリアのケルト社会は、外見上はあまり変わらないものであったということができよう。では、なぜ、ウィンデリキアの「ケルト」は歴史的に記述がなされなかったのだろうか。すなわち、なぜウィンデリキアは「歴史的な“ケルト”」たりえなかったのだろうか。

序章でしめしたとおり、古代の作家たちはライン川を「ケルト人」の領域の東端と考えていた。ライン川以東はゲルマン人の領域で、ゲルマン人はガリア人よりも文化的に劣っていると考えていた。地中海世界の人々にとって、ライン川は「道徳的な境界線」であった。古典著述者のその意識が、実際には文化的に似通っていたにも関わらず、ライン以東がケルトとみなされなかった理由である可能性が指摘されている<sup>8</sup>。考古学的にはライン川以西、以東での文化的な違いはほとんどなかった。

さらに、歴史的にウィンデリキアがほとんど描かれなかった理由と考えられることがある。

ガリアにかかわらず、ボヘミアのボイイー族や小アジアのガラタイなど、歴史記述において「ケルト」「ガリア」として記録されるのは常に地中海世界との戦争の脈絡においてである。つまり、その状況は必然的に好戦的であり、非常事態である。通常の状態の記録ではないのである。ガリアのハエドゥイー族の政体も、ローマ侵攻という非常事態に対する特別なものの可能性がある<sup>9</sup>。ギリシア、ローマの古典における「ケルト」の社会構造の記録は、記録者の世界との戦争的な意味での対峙があったことをしめす。言い換えれば、ウィンデリキアにおいてその記録がないことは、そのような対峙がなかった可能性をしめしているのである。

ウィンデリキアのケルトの外患はローマ人ではなくゲルマン人だった。紀元前 113 年にゲルマン人が南進し、現在のバイエルンに侵攻したと考えられている。それから半世紀ほど後に、ウィンデリキアのケルトは没落を迎えた。紀元前 50 年から紀元前 30 年のあいだのことである<sup>10</sup>。このころ、ローマはまだウィンデリキアには侵攻していなかった。ローマのウィンデリキア侵攻は紀元前 16 年にはじまった<sup>11</sup>ことであって、そしてこのころにはウィンデリキアの「ケルト」はすでに衰退していた。この「ケルト」の衰退は、バーデン・ヴェルテンベルクのデュンスベルク [Dünsberg bei Fellingshausen, Landkreis Gießen, Hessen] のオッピドゥムにおいて、この時代にゲルマン人が居住していた痕跡のあることから分かる<sup>12</sup>。ガリア戦記において、現在のトリーア近郊にいた部族トレーウェリー族が全部族の会議に出られなかった理由についての記述（紀元前 52 年ころ）も、それを保証するだろう。すなわち、彼らは「領地が遠いうえにゲルマニア人に苦しめられていたことから、戦争から完全に手を引き、いずれの側にも援軍を派遣していなかった<sup>13</sup>」。ウィンデリキアのケルトが歴史学の「ケルト」ではないのは、この地域のケルト人が「ローマの敵」として、彼らと対峙することができなかったからだと考えられる。

### 3 節 ウィンデリキア・ケルトの研究状況—ドイツにおける古代研究のなかで—

さて、本節ではこのようなウィンデリキアの「ケルト」の研究状況について、とくに 19 世紀以降のドイツ考古学の研究史と重ね合わせながら確認していきたい。

1806 年、ナポレオンによってベルリンが占領され、大陸封鎖令が発布された。彼による支配への対抗心の結果として、ドイツの「過去」への探求心が高揚し、おおくの古代史研究がなされるようになった。連邦各地に創設された古代史研究協会は、1852 年にひとつにまとめられ、ドイツ歴史・好古協会連合（Gesamtverein der Deutschen Geschichts-und Altertumsvereine）が発足する<sup>14</sup>。

1820 年代後半より、アマチュアによるドイツ各地の発掘がさかんにおこなわれるようになった。当時の歴史家たちは、考古学に「文字史料以前の“ドイツ”の歴史」を与えてくれることを期待していたのであり、そしてその考察されるべき「ドイツの祖先」のなかに、「ケルト人」も含まれていたのである<sup>15</sup>。

1846 年と 1857 年に、ヨーロッパ古代史の研究におけるエポックメイキングな出来事があった。すなわち、ゲオルグ・ラムザウアー（Georg Ramsauer）によるハルシュタットの岩塩坑および墓地の発掘と、フェルディナント・ケーラー（Ferdinand Keller）らによるラ・テーヌ遺跡の発掘である。これらによって、ヨーロッパ古代についての年代学が進展した。

フランスにおいてナポレオン 3 世によるガリア人のオッピドゥムの発掘が進められていたころ、医師であり先史学者でもあったルドルフ・フィルヒョー（Rudolf L. K. Virchow）が、出土物の特徴とその分布の分析によって、「民族」とその居住域を決定するという考え方を提唱した。フィルヒョーが亡くなった 1902 年、フランクフルト・アム・マインにて、ドイツ考古学研究所 [Deutsches Archäologisches Institut / DAI] の一部門、ローマ・ゲルマン・コミッション [Römisch-Germanische Kommission / RGK] が設立された。RGK はフィルヒョー死後における彼の「古典的な考え方」を、図らずも保守する役割を負うこととなった<sup>16</sup>。その背景には、1926 年に文献学者のグスタフ・コッシーナ（Gustaf Kossina）が掲げた「文化グループ」論への反抗があった。第 1 次大戦以前より、RGK は国家の調査機関としてドイツ考古学の進展に尽力した。

1908 年、フィルヒョーの師事を受けたベルリン出身の考古学者パウル・ライネッケ（Paul Reinecke）は、バイエルンの古代遺跡研究に着手した。彼は、ミュンヘンの州立博物館と、ベルリンの古代史博物館に収蔵されていた、青銅器時代とハルシュタット期の墳墓の副葬品の分析によって、ドイツ南部地域の先史時代の年代区分をおこなった<sup>17</sup>。

紀元前	ライネッケ による呼称	埋葬による区分	出土物による分類
1200	ハルシュタット A	初期骨壺葬	終期青銅器時代
1100			
1000	ハルシュタット B	後期骨壺葬	
900			
800	ハルシュタット C	初期 ハルシュタット	初期鉄器時代
700			
600	ハルシュタット D	後期 ハルシュタット	
500			
	ラ・テーヌ A	最初期 ラ・テーヌ	後期鉄器時代
400	ラ・テーヌ B	初期ラ・テーヌ	
300			
200	ラ・テーヌ C	中期ラ・テーヌ	
	ラ・テーヌ D	後期ラ・テーヌ	
100			

表 2 : ライネッケによる時代区分

[出典 : Luana Kruta Poppi, “The archaeological sources,” pp.44-45; Peter S. Wells, “Changing models of settlement, economy, and ritual activity: Recent research in Late Prehistoric Central Europe,” p.138; Werner Krämer, Die Ausgrabungen in Manching Band.9: *Die Grabfunde von Manching und die latènezeitlichen Flachgräber in Südbayern*, S.17 をもとに筆者作成。]

また、ドイツにおいて古代の居住地の学術的な発掘がはじまりだしたころ、ゲルハルト・ベルス（Gerhard Bersu）がネルトリンゲンの〔Nördlingen, Ldkr. Donau-Ries, Schwaben〕の新石器時代の遺跡発掘をおこなった（1911年）。彼は1924年にRGKの研究員として着任したものの、ドイツにおける「ケルト」の研究に直接的な影響をおよぼすことはなかった。ナチスの台頭によってその職を追われ、イギリスへ移住したからだ。1938年から1939年にかけて、彼はウィルトシャーのウッドバリー遺跡の発掘をおこなった。彼は、出土した柱穴の配置から、その住居の形態を推測するという手法をとり、イギリスの考古学に新しい視野をもたらしたのであった<sup>18</sup>。

1930年代から第2次大戦の終結までのあいだも、ドイツにおける考古学研究は一定の成果を挙げていた。しかし、それらはすべてナチス主導におこなわれた<sup>19</sup>ものであり、ヒトラーの唱える「アーリア人の優位性」を証明するためのものにすぎなかった。

終戦をむかえてから数年後、ドイツにおける「ケルト」研究に新しい風が吹き込んだ。1950年、クルト・ビッテル（Kurt Bittel）がホイネブルクの発掘に着手し、地中海世界からの輸入された品を多く残す丘上要塞をあきらかにした。ビッテルはこのほかにも、バーデン・ヴュルテンベルク州の「ケルト」の総説を出版<sup>20</sup>するなど、網羅的な著書を数多く著わしている。そして1955年には、ベルスの後任としてRGKに奉職したヴェルナー・クレイマー（Werner Krämer）によるマンヒングのオッピドゥムの発掘調査が開始される。第2部第1章の考察の中心となる、この巨大なオッピドゥムの発掘は、ドイツのみならず、ヨーロッパ全体の「ケルト」の共同体への概念への大きな変革をもたらした<sup>21</sup>。クレイマーは「マンヒングの研究者」であって、その論考も発掘成果や出土物の報告であるものが多い。

近年は、発掘調査の進展や、航空写真などによる目視不可の遺構の分析によって、それまで考えられていた古代の建造物の「役割」の再考が試みられている。ギュンター・ヴィーラントやマヌエル・フェルナンデス・ゲッツ、そしてホルガー・ヴェンドリングなどをその例として挙げることができるだろう。ヴィーラントはおもに方形土塁（第2部第2章で詳述）の発掘にたずさわっており、ビッテルの後におけるこの分野の主要人物である。エディンバラ大学のゲッツは、ドイツやボヘミアなどのオッピドゥムの出土物から、それらの「機能」の再定義を試みている<sup>22</sup>。ヴェンドリングも同様で、彼は主としてマンヒングの発掘成果よりそれをおこなっている<sup>23</sup>。

書籍としては、1980年より刊行されている *Das archäologische Jahr in Bayern*（以下 *AJB* と表記）が、その1年でのバイエルンでの考古学調査を、年代順に網羅しており、各論文は短く、端的な報告にとどまってはいるが、その資料価値は高いといえる。

このようにみると、ウィンデリキアの「ケルト」研究は、総説や個別の事例検討

が豊富ではあるが、それらを組み合わせて総合的に論じていたり、あるいは出土物の「報告」から一步踏み込んで、その役割を「解釈」したりしているものは少ないといえる<sup>24</sup>。第2部からは、これらの先行研究においてなされてきた「報告」をもちいて、遺構や出土物の役割の「解釈」に取り組み、ウィンデリキアの「ケルト」とされる古代社会の様相へのアプローチを試みることにする。

## 【註】

- <sup>1</sup> 「イリュリア人」は現在のクロアチアに居住した人々のことを指す。
- <sup>2</sup> ストラボン『地誌』，4巻6章3節8～9；飯尾都人訳，359頁参照。
- <sup>3</sup> 「ウィンデリキアのダヌッピオス川沿い」の町として、①アルトブリガ ②ボイイオドゥロン ③ウィンデリキア人のアウグスタ（アウグスタ・ウィンデリコールム） ④カッロドゥノン ⑤アブゥディアコン ⑥カムボドゥノン ⑦メドゥロン ⑧イヌウトリオンが、「ダヌッピオス川沿いのクリマ（2本の緯度線に挟まれた箇所のこと）に含まれる」町として①タロドゥノン ②フラウィウスの祭壇 ③リウシアウァ ④アルキモエンニス ⑤カンティオイビス ⑥ビバコン ⑦プロデンティア ⑧セトゥアトコン ⑨ウスビオン ⑩アビルゥノン ⑪フウルギサティス ⑫コリドルギス ⑬メディオラニオン ⑭フェリキア ⑮エブゥロドゥノン ⑯アンドゥアイティオン ⑰ケラマンティア ⑱シンゴネ ⑲アナウオンが挙がる。  
クラウディウス・プトレマイオス，『地理学』，第2巻12章；織田武雄監修，中務哲郎訳，『プトレマイオス地理学』東海大学出版会，1986年，34～35頁参照。
- <sup>4</sup> Miloš Čizmař, “The Celtic population of Moravia in the fourth century B. C.,” p.297.
- <sup>5</sup> Peter S. Wells, “Industry, Commerce, and Temperate Europe's First Cities: Preliminary Report on 1987 Excavations at Kelheim, Bavaria,” in *Journal of Field Archaeology*, Vol. 14, No. 4, 1987, pp. 399-412, p. 400.
- <sup>6</sup> Susanne Sievers, *Manching: Die Keltenstadt*, Konrad Theiss Verlag GmbH, Stuttgart, 2003, S. 123-124.
- <sup>7</sup> *Ebd.*, S. 125.
- <sup>8</sup> Collin Wells, “Celts and Germans in the Rheinland,” in Miranda J. Green (ed.), *The Celtic World*, pp.603-620, p. 609.
- <sup>9</sup> Peter S. Wells, *The barbarians speak: How the conquered peoples shaped Roman Europe*, Princeton University Press, Princeton, New Jersey, 1999, pp.64-98.
- <sup>10</sup> Susanne Sievers, *op. cit.*, S.141.
- <sup>11</sup> Rudolf Pörtner, *Bevor die Römer kamen Städte und Stätten deutscher Urgeschichte*, Weltbild Verlag GmbH, Augsburg, 1995, S.324.
- <sup>12</sup> Joyce Wittur, “Reconstruction of the oppidum on the Dünsberg (Germany),” 2001, URL : <http://leute.server.de/wittur/Duens/oppidum.pdf>, p.21.
- <sup>13</sup> カエサル，『ガリア戦記』，第7巻63；高橋宏幸訳，267頁。
- <sup>14</sup> Georg Kossack, “Prehistoric archaeology in Germany: its history and current situation,” in *Norwegian Archaeological Review*, 25, 1992, pp. 73-109, p.76.
- <sup>15</sup> *Ibid.*, p.78.
- <sup>16</sup> *Ibid.*, p.82.
- <sup>17</sup> Paul Reincke, *Mainzer Aufsätze zur Chronologie der Bronze- und Eisenzeit*, Habelt, Bonn, 1965.
- <sup>18</sup> Christopher Evans, “Archaeology and modern times: Bersu's Woodbury 1938&1939,” in *Antiquity*, 63, 240, 1989, pp. 436-450, pp. 436-437.
- <sup>19</sup> Ingo Wiwjorra, “German archaeology and its relation to nationalism and racism,” in Margarita Díaz-Andreu and Timothy Champion (eds.), *Nationalism and archaeology in Europe*, Westview Press, Boulder, Colorado, 1996, pp. 164-188, pp. 177-179.
- <sup>20</sup> Kurt Bittel, Wolfgang Kimmig, Siegwalt Schiek, (Hrsg.), *Die Kelten in Baden-*



---

Wuerttemberg, Konrad Theiss Verlag, Stuttgart, 1981.

<sup>21</sup> Werner Krämer, „Zwanzig Jahre Ausgrabungen in Manching, 1955 bis 1974,“ in *Ausgrabungen in Deutschland, gefördert von der Deutschen Forschungsgemeinschaft, 1950 - 1975, 1. Vorgeschichte. Römerzeit*, Verlag des Römisch-Germanischen Zentralmuseums, Mainz, 1975, S. 287-297, S.287.

<sup>22</sup> Manuel Fernández-Götz, “Reassessing the Oppida: The role of power and religion,” in *Oxford journal of archaeology*, 33(4), 2014, pp. 379-394.

<sup>23</sup> Holger Wendling, “Manching Reconsidered: New Perspectives on Settlement Dynamics and Urbanization in Iron Age Central Europe,” in *European Journal of Archaeology*, 16, fasc. 3, 2013, pp. 459-490.

<sup>24</sup> それらを試みた学位論文は存在する。Alexandra Nowak, *Opferkulte der Kelten - Brandopferplätze, Höhlen- und Quellheiligtümer*, Grin, 2010 ; Laura Geyer, *Manching und die keltische Oppidakultur*, Grin, 2011 などである。

第2部

ウィンデリキアの信仰の諸相  
—アイデンティティとしての信仰—

## 第1章 ウィンデリキアとその周辺の「都市」における信仰の機能 —マンヒングの事例を中心に—

第1部で見たとおり、紀元前最後の3世紀間におけるケルト世界は、まさしく「斜陽」の時代であり、かつもっとも洗練された時代であった。本章では、そのような激動と変化の渦中において生まれ、繁栄したオッピドゥムのなかで、人々がどのようなかたちで彼ら自身の「信仰」を体現していたのかを検討することを目的としている。

### 1節 マンヒングのオッピドゥム

ドイツ南部の群立都市、インゴルシュタット [Ingolstadt] から南へ7キロメートルほどくだったところに、マンヒング [Manching bei Ingolstadt, Ldkr. Pfaffenhofen a. d. Ilm] という街がある。この街の、現在では空港となっているところに、かつて、ケルト人のオッピドゥムが存在した。このオッピドゥムは、ドイツ南部の、そして「ケルト」世界全体で見ても、非常に特徴的な要素を多く有している事例であり、パウル・ライネッケ (Paul Reinecke) による時代区分の指標としてももちいられた<sup>1)</sup>。

古代のインゴルシュタット地域は、ドナウ川を南北に渡る際の重要なポイントとなっていた。ドナウ川の支流パール川 (Paar) が中心に流れるマンヒングは、そのため、他の地域より先立って集住がはじまった。紀元前300年ころのことである。

紀元前120年ころ、囲壁が建造された。南西部をパール川と接し、この地域では比較的めずらしい「ガリア壁」によって囲まれたその領域は約380haであり、円形の外壁の東西の直径は2.3km、南北の直径2.2km、総距離は7kmにもおよぶ。この「都市」の繁栄の期間はそれほど長くはなく、紀元前40年ころに遺棄された。オッピドゥムの名残は、今もなお航空写真によって見ることができる (図19)。



図 19：マンヒングのオッピドゥム 航空写真 縮尺約 17000 分の 1

[出典：Sievers, *Manching: Die Keltenstadt*, S.8.]

19 世紀以来、多くの好古家たちの関心を引いてきたマンヒングのオッピドゥムであるが<sup>2</sup>、1955 年から 2010 年にかけて、ドイツ考古学研究所ローマ・ゲルマン・コミッションにより大規模な発掘調査が行われている（図 20）。発掘が完了しているのは 380ha のうち 25ha のみである<sup>3</sup>が、その成果は多く、現在、出土品はミュンヘンの州立先史コレクションと、インゴルシュタットの市立博物館に収蔵されている。

先行研究においては、このマンヒングのオッピドゥムが、ウィンデリキアのケルト社会において非常に重要な居住地であったことが強調されている。ヴェルナー・クレイマーは、マンヒングは古代インゴルシュタット地域における東西、および南北交易の拠点であったと述べる<sup>4</sup>。これは、先に述べたようなドナウ川の支流に隣接しているという立地からだけでなく、オッピドゥムのなかを縦横に走る街道（図 21 の A～G 参照）の存在からも裏づけられるだろう。これらの街道は紀元前 3 世紀ころに整備されたものである。すなわち、オッピドゥムが形成される以前からあるインフラである。

また、ルパート・ゲプハルト（Rupert Gebhard）や R. D. ボット（R. D. Bott）らは、マンヒング出土の陶片の化学的分析から、このオッピドゥムが、ドイツ南部および南西部、そしてボヘミア地域への技術、ないし文化伝播の中心であったと主張する<sup>5</sup>。両者とも、かの地で製作されたと考えられる黒鉛陶器やガラス製品が、ボヘ

ミアなどのほかの地域でも見つかっていることをその根拠としている。ゲプハルトは、ある場所でその場所のものとは違う製法の陶器が発見されていることは、大きな都市を中心とした地域的な交易のつながりがあったことをしめしていると述べる<sup>6</sup>。ゲプハルトの結論に則するならば、マンヒングと同じ製法の陶器が他地域で出土していることは、マンヒングを中心とする交易のネットワークが存在していたということになる。

他方でポットは、ほかの地域での同じ製法の陶片の出土は、交易の結果ではなく技術伝播の結果であると結論づける<sup>7</sup>。ある地域にいる、高い技術力を持った職人による装飾・様式・外見が模倣され、その場所以外でも広まった、というのがポットの主張である。しかし、陶器の流布が技術伝播によるものであったとしても、そのオリジナルの陶器がほかの地域へもたらされる必要があることには変わらない。マンヒングに端を発する陶器の様式がほかの地域でも発見されることは、クレイマーの述べる整備された交通網の存在とあいまって、マンヒングが交易の要衝として機能していたと考えることを可能にするのである。

以上のように、マンヒングの膨大な発掘成果からは、この地域に暮らしたケルト人の社会のありかたを、おぼろげながらもかいま見ることができる。そして、その成果のなかに、「信仰」と結びつく遺構や遺物が数多く存在していることもまた事実である。この地における信仰のかたちを考えることは、ウィンデリキアの「ケルト」社会全体のそれを見るにあたっての一助にはなるであろう。

そこで本章では、まずそれらのうちの「遺構」、すなわちハードウェアに焦点を絞り、信仰と関連するであろう遺構がケルトの「都市社会」のなかでどのように機能していたかを考えていきたい。





図 20 : マンヒングのオッピドゥムの発掘場所 [出典 : Ebd., S.18.]



図 21 : マンヒングのオッピドゥム 舗装路 [出典 : Ebd., S.38.]

## 2 節 都市マンヒングに見るケルト人の信仰のかたち

### —紀元前 3 世紀から紀元前 2 世紀の構造物による分析—

囲壁の内側は、大きく 6 つの発掘区画に分けられる（図 20 参照）<sup>8</sup>。とくに中央区画（Zentralfläche）は、先述した街道が通り抜けるほか、住居遺構の集中している状況から、多くの人々の居住と往来があったと考えられる<sup>9</sup>。

本節では、そのような場所において出土した 2 基の構造物について、それらのオッピドゥムにおける機能を推測していく。なお、遺構の表記はヴェルナー・クレイマーとフランツ・シューベルトによる発掘報告（Werner Krämer und Franz Schubert, 1955-1961 *Einführung und Fundstellenübersicht* [Die Ausgrabungen in Manching Band.1] , Franz Steiner Verlag GmbH, Wiesbaden, 1970.) に準拠している。

#### 2-1) Zentrales Tempelchen [Stslg. Inv. Nr. 1956/281-298; 図 22 の 20]

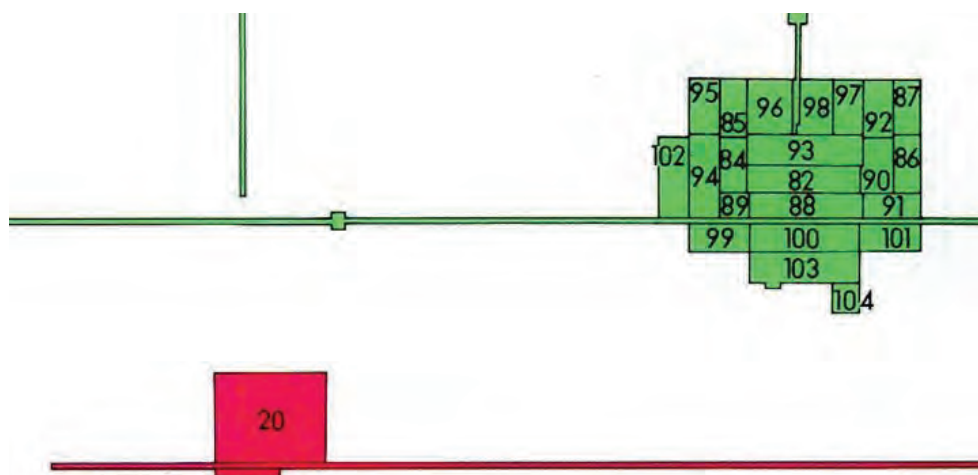


図 22 : マンヒング中央部

[出典 : Krämer und Schubert, *Die Ausgrabungen in Manching Band.1*, Beilage7 より抜粋。]

この遺構は「聖堂」と称される。35 m<sup>2</sup>の領域に、建造年代の異なる複数の建造物の柱の穴が重なり合い、その周囲にぐるりと溝が掘られている（図 22）。それらの柱穴は、四辺形の建物と、2 基の多角形かもしくは円形の建物をかたちづくる。出入口は東側にしつらえられたと推測される。

遺構からは複数の武器や道具、および人間や動物の骨が出土している。そのなかには子供や乳児の骨もあった<sup>10</sup>。それらの分析から、このなかで最古の構造物は、「柱穴 17 番」を含む四辺形のそのの痕跡であり、紀元前 4 世紀末に年代づけられる<sup>11</sup>。いっぽう、溝から出土する人骨の推定される年代は紀元前 1 世紀であり、もっとも新しい。これらの事実は、この「聖堂」のある領域がオッピドゥムの成立以前から 300 年の長きにわたって、同じ目的で使用された可能性を示唆するものである。

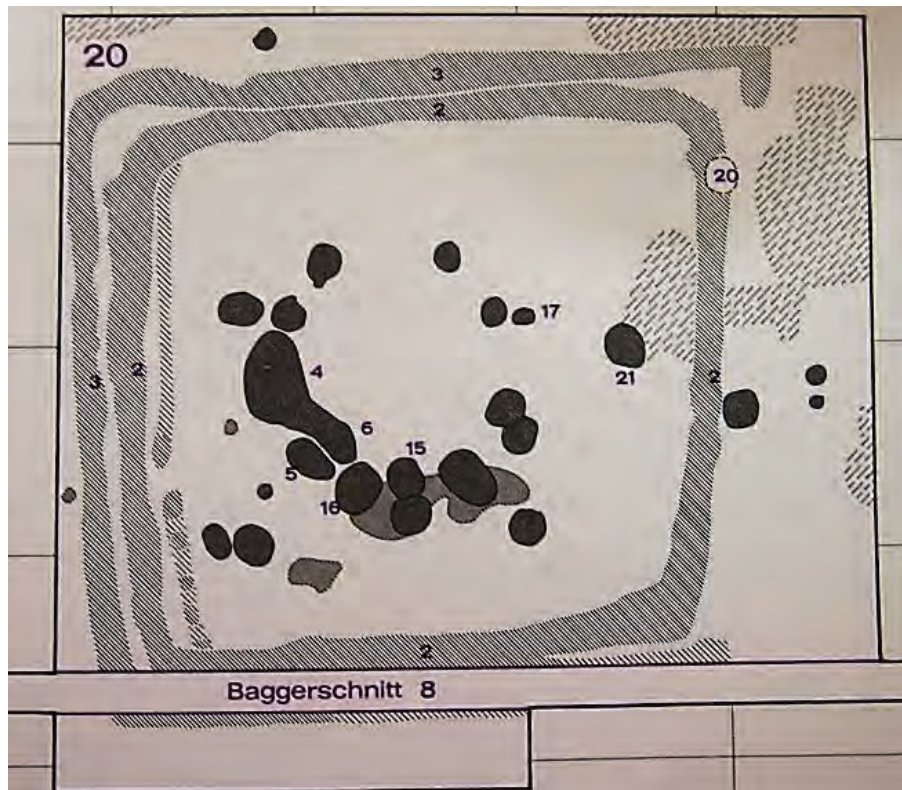


図 23 : 「聖堂」 Zentrales Tempelchen

[出典 : Krämer und Schubert, Manching, Bd.1., S.83, Beilage13 より抜粋。]

□出土物一覧□

溝 2…ローマ時代の貨幣、鉄、動物の骨、青銅、ガラス、陶片、精錬された粘土

溝 3…先史の鉄、陶片、動物の骨 柱穴 4…鉄 柱穴 5…陶片 柱穴 6…陶片

柱穴 15, 16…ガラス、陶片、人骨、動物の骨 柱穴 17…鉄、陶片

柱穴 21…先史の陶片、人骨、動物の骨 「柱穴 20」…ローマ時代の鉄

散乱した出土物…青銅、鉄、陶片

2-2) Einzelnes Brandgrab [Stslg. Inv. Nr. 1958/528-538; 図 22 の 103, 104]

「聖堂」から東に 100m ほどの、ラ・テーヌ後期（紀元前 2 世紀から紀元前 1 世紀）の複数の住居跡のすぐとなりにあるのが「火葬墓（Einzelnes Brandgrab）」である（図 24）。幅約 1m、長さ約 2m 以上の方形である。墓があったと思しき場所は少し変色しており、南側ではその境目がくっきりと浮き出ている。亡き骸はおそらく焼かれていない状態で木製の墓室、あるいは棺に納められた後、焼却されたと考えられている<sup>12</sup>。成立年代はライネッケの指標における「平坦な土葬墓のラ・テーヌ期」の中期段階（紀元前 4 世紀後半～紀元前 3 世紀）と推定され、副葬品として初期ラ・テーヌ様式のフィブラが納められていることから、紀元前 300 年以降にさら



に絞り込むことができる。

「火葬墓」には奇妙な副葬品が納められている（図 25）。それは、薄く延ばした青銅の板で作成された装飾的な破片であり、2 枚出土している [Stslg. Inv. Nr. 1955, 1,2]。これらは先端の尖った葉をかたどったものと考えられているが、何のために用いられたかはいまだはっきりしていない。しかし、葉の縁にロゼット文様がほどこされていること、また、このような出土例がドイツ南部地域ではほかに見られないことから、この青銅の「葉」が「ケルト」の外の世界に由来し、これを納められた被葬者が特別な地位にいる人物であったことが推測できる<sup>13</sup>。

マンヒングのオッピドゥムでは、北寄りの場所から 2 ヶ所の土葬の墓地が見つかっており、それぞれシュタインビーヒェル (Steinbichel)、フンツルッケン (Hundsrucken) と呼ばれる（図 26）。2 か所とも、紀元前 4 世紀から紀元前 2 世紀に年代づけられるものだ。つまり、マンヒングのオッピドゥムには、オッピドゥム成立前の墓（地）が 3 か所あるということになる。

スザンヌ・ジーヴァース (Susanne Sievers) は、これら 3 か所の墓（地）は、オッピドゥムができる以前の、それぞれ別の共同体のものであり、それらが徐々に一体となって「オッピドゥム」という大きな共同体になったのであると述べる<sup>14</sup>。囲壁内での位置、という点から見ると（図 26 参照）、シュタインビーヒェル、フンツルッケンが中心よりはずれた場所にあるいっぽうで、「火葬墓」は囲壁のほぼ中心にあり、そのすぐ近くに街道が通っている。これは、当時の周囲の地理的状況とも関連しているだろうが、マンヒングのオッピドゥム（とその共同体）が、「火葬墓」の共同体を中心的な存在として成立したことを示唆するものではないだろうか。先行研究において、「火葬墓」がマンヒングのオッピドゥム社会においてどのような役割を果たしたかについて述べられることはない。「火葬墓」は、その副葬品の奇異さか、あるいは 2 か所の土葬墓の分析において副次的に、簡潔に言及されるにとどまる。しかし、この「火葬墓」が、マンヒングのオッピドゥムやその社会において、何かしらの区別的な意味合いを有していたと考えることは、十分に可能だろう。

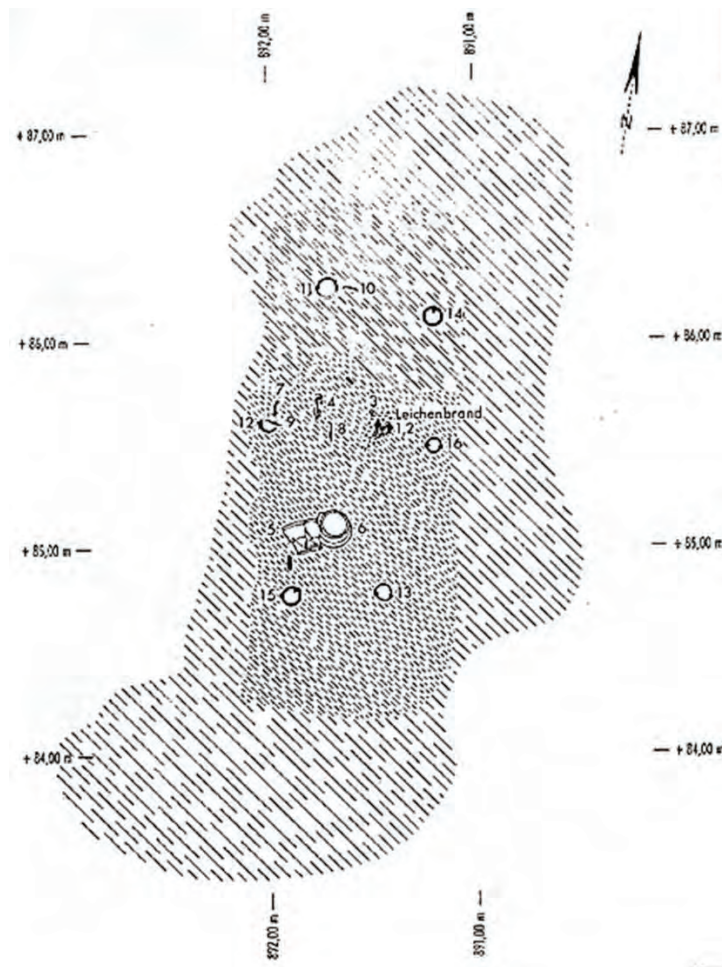


图 24 : 「火葬墓 (Einzelnes Brandgrab)」

[出典 : Werner Krämer, *Die Grabfunde von Manching und die latènezeitlichen Flachgräber in Südbayern*, S.98.]



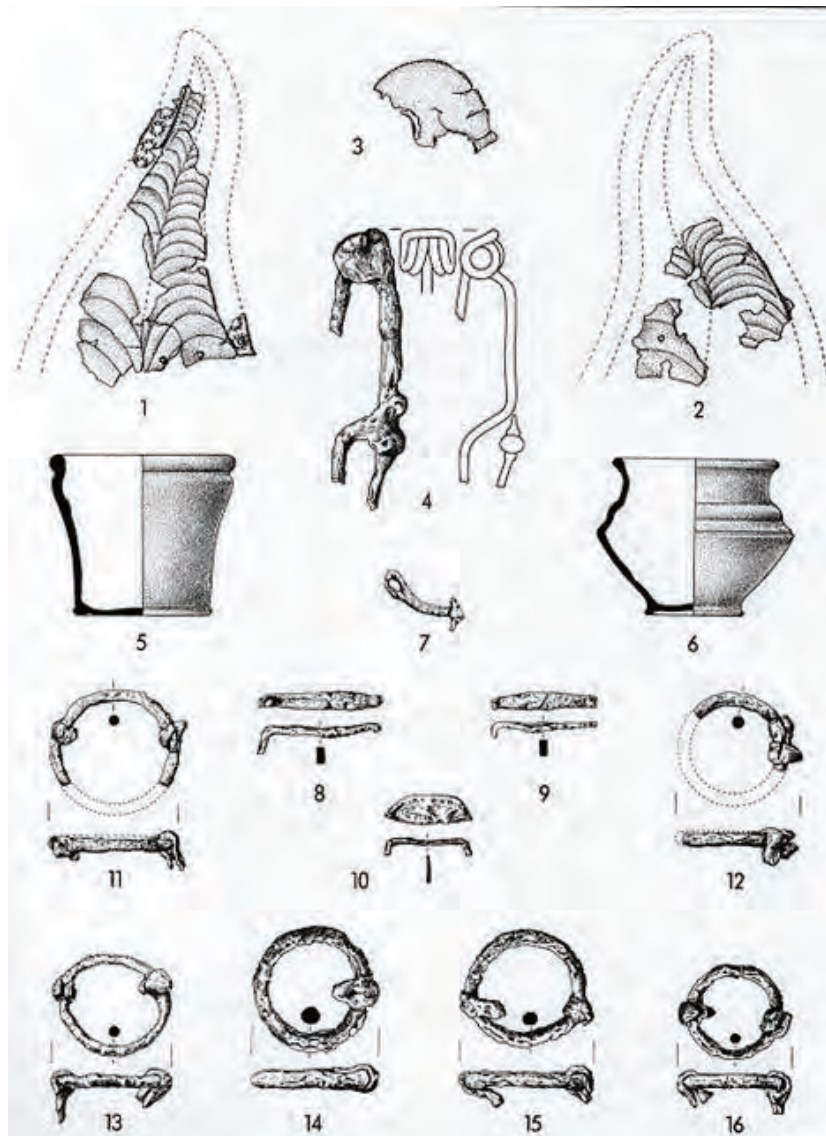


図 25 : 「火葬墓」の出土物 描き起こし図 [出典 : *Ebd.*, Tafel.37.]

□ 出土物一覧 □

- 1, 2…尖った葉のかたちの青銅の破片 3…薄い青銅の板  
 4…鉄製のフィブラ (長さ 11.4cm) 5…大きな杯 (高さ 13.1cm)  
 6…円錐型の深鍋 (高さ 12.8cm) 7…鉄製のピン (長さ 7.1cm)  
 8~10…鉄製のかすがい 11~16…鉄製のリング (直径 7.8-10.2cm)

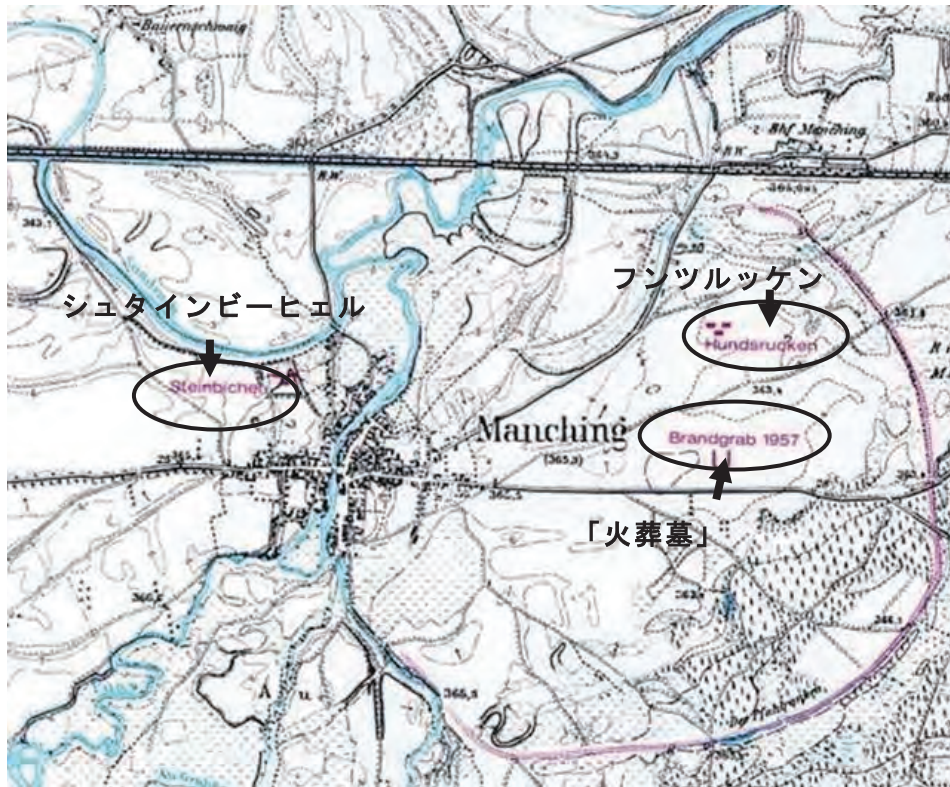


図 26 : 3 か所の墓（地）の位置関係

[出典 : Werner Krämer, Die Ausgrabungen in Manching Band.9 Die Grabfunde von Manching und die latènezeitlichen Flachgräber in Südbayern., Karte 1 より抜粋.]

これらの構造物については、マンヒングの発掘にたずさわった研究者による報告のほかには、ほとんど研究がないのが現状である。少ない資料からではあるが、これらの遺構がオッピドゥムにおいてどのように機能していたのかを推測したい。

### 2-3) 「聖堂」と「火葬墓」の役割

ジーヴァースは「聖堂」について、「祖先崇拜の儀式の場」である可能性を否定できない、としている<sup>15</sup>。「聖堂」周囲の溝に散乱した人骨が、その「儀式」における生贄の結果であるか否かは判然としない。けれどもこれらは、当時の人々にとっては「個々の人物」として認識されたものではなく、漠然とした共同体の「祖先」としてみなされるものであったと考えられる。

「火葬墓」はどうであろうか。先に述べたとおり、奇妙な装飾品を副葬したこの墓の被葬者は、特別な地位にあった人物であると推測されている。そしてこの「火葬墓」を「祖先崇拜」の脈絡に位置づけると、この特別な墓のマンヒングのオッピドゥムにおける意味合いと、「聖堂」との関連性が浮かび上がってくるのである。

#### 2-3-1) ケルト世界の祖先崇拜

ジャンルイ・ブリュノーは、ケルト世界の祖先崇拜に関して次のように述べる<sup>16</sup>。

すなわちそれは、土地の肥沃を祈願し、自然を敬う行為の延長として考えられていた。死者は、地中に埋められることでその土地を肥えさせるのだとされた。そしてその行為は、土の下にいる農耕の神に家畜や収穫物を献納するという、農民たちによる素朴なふるまいと同じ意味を持っていた。このような考え方があるゆえに、土葬墓は神聖視されていた。とりわけ、紀元前 8 世紀から紀元前 6 世紀においては、この観念が権力者によって人々の支配のために利用されていたことがうかがえる。

この時代、共同体の首長たる権力者は、その死後巨大な墳墓に土葬された。それらの墳墓は居住地から離れ、耕作に適さず森林に囲まれていない場所に、目立つような巨大さで造られ、しばしばその頂に石柱をとまなう<sup>17</sup>。どの文化でもそうであるように、巨大な墳墓は被葬者の権力の大きさをしめすものであった。そして、彼らは土に埋められることでその地の神と結びつき、土地に肥沃や豊穡、そして繁栄をもたらす「共同体全体の祖先」として崇拝の対象となったと考えられる。

ところが、紀元前 3 世紀ころに起こった「土葬から火葬への埋葬方法の転換」は、このような考え方にも変化をもたらした。その変化は、遺体の数や副葬品によって明らかとなる。

土葬墓では、死者はひとつの棺に 1 体だけ納められ、骸の周囲に装飾品や容器、武具といった副葬品が置かれる<sup>18</sup>。権力者の埋葬の場合それは顕著であり、たとえばエバーディンゲン・ホーホドルフやホイネブルク [Heuneburg, Lkr. Sigmaringen, Baden-Württemberg] の紀元前 7 世紀から紀元前 6 世紀ころの墳墓 (図 27) には、地中海世界からの輸入品を含む多くの品々が納められている<sup>19</sup>。ジェラルド・ウェイト (Gerald A. Wait) はこの慣行について、ハルシュタット期、神聖な権威によって人々を統べた権力者が、死後に神々と結びつく際、生前の地位を副葬品によって示す必要があると考えていたからではないかと指摘する<sup>20</sup>。土葬墓における「死者」は、死後も「いち個人」として認識され。それが高貴なる人物の場合は、より多くの人々の崇敬の対象となったと考えられる。



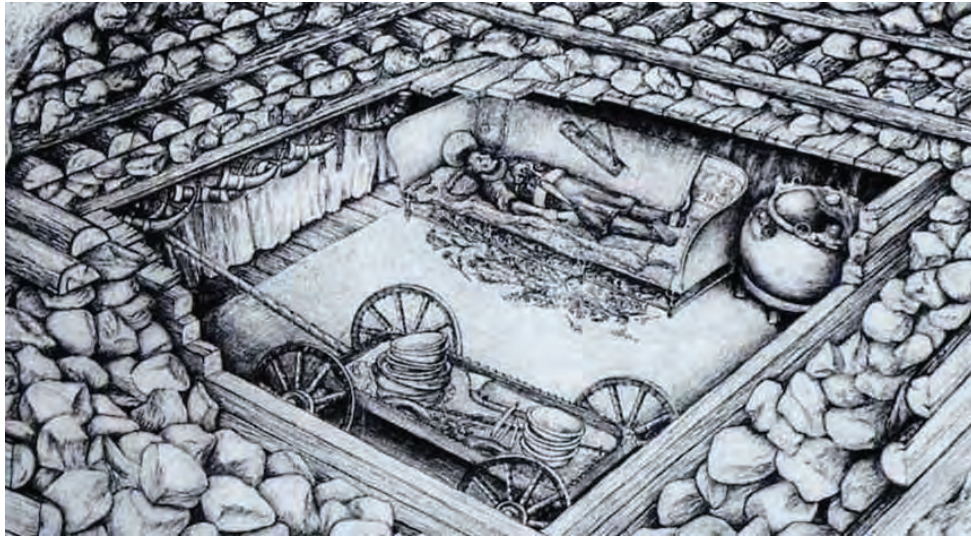


図 27：エバーディンゲン・ホーホドルフの首長墓

【出典：Gerald A. Wait, “Burial and the Otherworld,”p.502.】

いっぽう、火葬墓の場合は、一般的に、骨は複数の人物のものがひとつの骨壺にまとめて納められ、副葬品はほとんどない。火葬の慣習における「死者」は、個々の人物として思い起こされるのではなく、漠然と、その共同体で「かつて生きていた人」と考えられたことが推測できる。

ここで、ふたたびマンヒングの「火葬墓」を見てみよう。「火葬墓」の被葬者はその名のおり火葬されているが、多くの副葬品をたずさえており、そのなかには外の世界に影響を受けたと思われる品もある。故人は漠然とした存在でありつつ、生前の自らの地位を副葬品によって示している。この奇妙な墓は、土葬の際の観念と火葬の際のそれが融合した、あるいはその過渡期のものであり、かつて巨大な土葬墓が担った「祖先崇拜の対象」としての役割を、新しい形態で表わすものであったと考えることができる。

### 2-3-2) 「火葬墓」と「聖堂」の関わりと、オッピドゥムにおける意義

では、「火葬墓」が「祖先崇拜の対象」であったとして、「聖堂」とどのように関わっていたのだろうか。

先に述べたように、「火葬墓」はそのほか2か所の墓地とともに、オッピドゥムの礎となった共同体のうちのひとつのものであるとみられている。「火葬墓」の年代は紀元前300年ころであり、その100m西にある「聖堂」も、もっとも古い建造物の推定建造年代は紀元前4世紀末である。年代的な重なりからも地理的な近さからも、「火葬墓」と「聖堂」が同時代に、同じ共同体によって有されたものである可能性は高い。すなわち、「聖堂」はその共同体における、ひょっとしたら祖先信仰の儀式の場であり、その信仰の対象が「火葬墓」だったのではないだろうか。オッピドゥム社会形成以後も「聖堂」の空間がほぼ同じ目的で使用されつづけた痕跡がある

のは、別の共同体とひとつになったあとも、この場所で共同体の信仰に関わるような行為がなされつづけたことをほのめかす。

別々の共同体の出身者がひとところに共生していたなかでこれらは使用されつづけて、儀式が行われていた。あくまでも可能性ではあるが、「聖堂」は、オッピドゥムに住む出自の違う人々を、「オッピドゥム社会の構成員」として取りまとめるものとして機能していたのかもしれない。

### 3 節 「都市」における信仰の痕跡—紀元前 2~1 世紀の 2 事例をもとに—

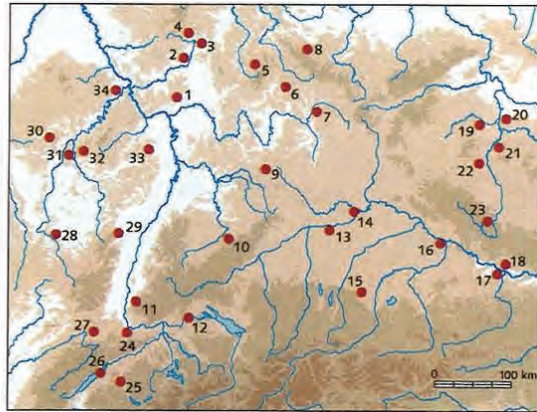
遺構から見たマンヒングのオッピドゥムにおける「信仰」は、前節のようなものであったと考えられる。では、かの地以外のオッピドゥムではどのような状況であったのだろうか。図 28 を見ても分かるように、ドイツ南部とその周辺地域（ドイツ南西部・ボヘミア）の主要なものだけでも、34 基のオッピドゥムを確認することができる。これらの他の都市では、どのような「信仰」と思われるような行為、「信仰」と結びつく行為が行なわれていたのであろうか。資料の制約上、本節ではそのうち

の 2 か所の「<sup>オッピドゥム</sup>都市」における「信仰」と結びつくと思われる考古学的な痕跡を見、マンヒングの事例との比較もまじえながら、ドイツ南部地域のケルト社会における「信仰」の肉づけをおこなっていくこととする。本節では、ケルハイムのミッヘルスベルク [Michelsberg bei Kelheim, Lkr. Kelheim, Niederbayern 以下ケルハイムと表記 図 28 の 14] と、ハイデングラーベン [Heidengraben bei Grabenstetten, Lkr. Reutlingen-Lkr. Esslingen, Baden-Württemberg 図 28 の 10] をとりあげる。



42 Verbreitungskarte der Oppida in Süddeutschland und angrenzenden Gebieten.

- 1 Heidetränk bei Oberursel (Hessen)
- 2 Dünsberg bei Gießen (Hessen)
- 3 Amöneburg bei Marburg (Hessen)
- 4 Altenburg bei Niedenstein (Hessen)
- 5 Milseburg bei Kleinsassen (Hessen)
- 6 Steinsburg bei Römhild (Thüringen)
- 7 Staffelberg bei Staffelstein (Bayern)
- 8 Alteburg bei Arnstadt (Thüringen)
- 9 Finsterlohr (Baden-Württemberg)
- 10 Heidengraben bei Grabenstetten (Baden-Württemberg)
- 11 Tarodunum bei Kirchzarten (Baden-Württemberg)
- 12 Altenburg/Rheinau am Rhein (Baden-Württemberg und Schweiz)
- 13 Manching bei Ingolstadt (Bayern)
- 14 Michelsberg bei Kelheim (Bayern)
- 15 Fentbach (Bayern)
- 16 Passau (Bayern)
- 17 Kürrnberg bei Linz (Österreich)
- 18 Gründberg bei Linz (Österreich)
- 19 Stradonice (Tschechische Republik)
- 20 Závist (Tschechische Republik)
- 21 Hrazany (Tschechische Republik)
- 22 Nevezice (Tschechische Republik)
- 23 Trísov (Tschechische Republik)



- 24 Basel-Münsterhügel (Schweiz)
- 25 Bern-Engehalbinsel (Schweiz)
- 26 Mont Vully (Schweiz)
- 27 Mandeure (Frankreich)
- 28 Essey-les-Nancy (Frankreich)
- 29 Fossé des Pandours (Frankreich)
- 30 Wallendorf (Rheinland-Pfalz)
- 31 Kastel-Staadt (Rheinland-Pfalz)
- 32 Otzenhausen (Rheinland-Pfalz)
- 33 Donnersberg bei Kirchheim-Bolanden (Rheinland-Pfalz)
- 34 Martberg bei Pommern an der Mosel (Rheinland-Pfalz)

図 28 : ドイツ南部およびその周辺のオッピドゥム

[出典 : Ade, Dorothee, et. al., *Der Heidengraben - ein keltisches Oppidum auf der Schwäbischen Alb*, S. 59, Abb. 42.]

### 3-1) ケルハイムとハイデングラーベンのオッピドゥム

#### 3-1-1) ケルハイムのオッピドゥム

ケルハイムのオッピドゥム (図 29) は、北側をドナウ川の支流アルトミュール川 (Altmühl) に、南と東側をドナウ川に囲まれている、いびつな形状のオッピドゥムであり、総面積は 650ha である。その囲壁は西側に状態良く残され、高さ 5m、総延長約 3.3km である。東側には肥沃な土地が広がっていた。紀元後 2 世紀の著作家クラウディウス・プトレマイオスの『地理学』には、ダヌッピオス川沿いの町のひとつに「アルキモエンニス (Alkimoennis)」という地名が記されている<sup>21</sup>。このアルキモエンニスにケルハイムのオッピドゥムのことを指していると考えられている<sup>22</sup>。

ケルハイムには、異なる地形学的特徴を持つ 2 種類のエリアがある。標高 60m の小高い丘の上の石灰岩の台地と、アルトミュール川流域に広がる、距離 3250m、幅 125m から 300m の低地帯であり、後者はミッターフェルト (Mitterfeld) と呼ばれる。台地の方では、厳重な防備や交易をおこなっていたであろう痕跡が出土するいっぽうで、ミッターフェルトでは一般的な居住が行われていたことを示す出土物が多い。

ケルハイム地域はドナウ川流域の重要地点として、ミッヒェルスベルク (図 30 の

11 番) およびフラウエンベルク (Frauenberg, 図 30 の 12 番) がとくに繁栄していた。フラウエンベルクでは、紀元前 1000 年ころより居住の痕跡があった<sup>23</sup>。ミッターフェルトは、紀元前 2 世紀から紀元前 1 世紀ころのケルハイムにおける主要な居住域であった。住居のほか、青銅工、ガラス工など手工業の作業場の痕跡があり、多様な出土物には、陶片、獣骨、青銅の装飾品、石臼、ガラス製品、鉄製品が含まれる<sup>24</sup>。ケルハイムのオッピドゥムは、ミッターフェルトという小さな領域に居住・農耕地・産業の場が混在する場所であった。



Abb. 1 Plan des Oppidums von Kelheim und der Wallanlage bei Weltenburg.

図 29 : ケルハイムのオッピドゥム 縮尺 25000 分の 1

[出典 : Herrmann, Fritz-Rudolf, „Grabungen in Oppidum von Kelheim 1964 bis 1972,“ S. 299, Abb.1.]





図 30 : ケルハイム全体地図 [出典 : Rind, Michael M. (Hrsg.), *Geschichte ans licht gebracht*, Abb. 1.]

### 3-1-2) ハイデングラーベンのオッピドウム

ハイデングラーベンのオッピドウム（図 31）は、シュトゥットガルトの南東約 30km、ベルクハルプインゼル（Berghalbinsel）に広がるシュヴァーベン・アルプ（Schwabischen Alb）にある。囲壁の総延長は 30km にもおよび、7つの門をかまえる。総面積は 1662ha で、ローマ以前の居住地ではもっとも大きいものだ。その居住の集中する領域は、オッピドウム南東部のエルザッハシュタット（Elsachstadt bei Grabenstetten, 図 31 の○部分）で、総面積は 153ha である。

ハイデングラーベンでは、3基のそれぞれ深さ 5cm の溝穴から地中海世界から輸入されたアンフォラの破片が出土しており、それらは紀元前 100 年ころに年代づけられる。これらの出土物は、ハイデングラーベンには高い地位を有する者が居住していたことをしめす証左となりえる。またこれらの輸入品の出土物が、居住の集中していたエルザッハシュタットの外側で発見されたものであることも、注目すべき点である。

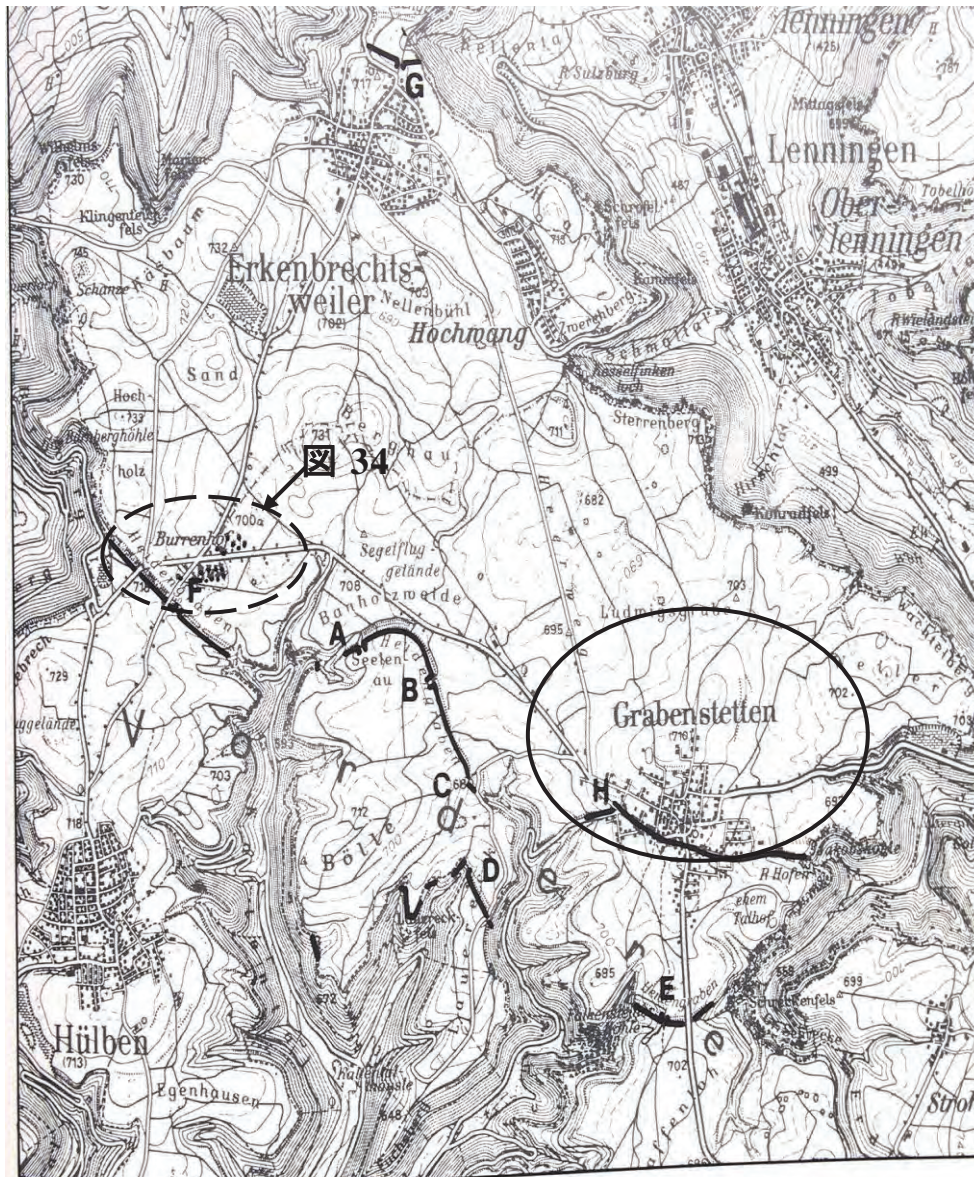


図 31 : ハイデングラーベンのオッピドゥム

[出典 : Bittel, Kurt, Kimmig, Wolfgang, Schiek, Siegwalt (Hrsg.), *Die Kelten in Baden-Wuerttemberg*, S.353, Abb. 244. 筆者加筆有。]

これらのオッピドゥムは、「囲壁によって守られる規模」という点では、マンヒングをはるかにしのぐ大きさである。しかし、それらの全体に居住区域が広がっていたというわけではなく、ごく限られた領域で人々の生活が営まれていたことがうかがえる。むろん、発掘場所は限られているため、確実なことは言えない。けれども、2 か所ともマンヒングと同程度の「都市的な社会」としての発展を遂げていたと考えられる。これら2 か所における「信仰」と結びつくような痕跡にはどのようなものがあり、それらはどのような役割を果たしていたのだろうか。先行研究に依拠し

ながら見ていこう。

### 3-2) ケルハイムにおける「信仰」の痕跡

ケルハイムについては、ピーター・ウェルズの研究<sup>25</sup>に則しながら、「縦穴」の事例について見ていこう。

1991年に発掘されたケルハイムの6号縦穴(図32)は、直径2.06m、深さ最大0.73mの椀型をしており、最上層に木炭、漆喰、そして陶片を多く含み、中下層部には陶片および動物の骨、鉄製の装飾品などが含まれる。縦穴には898枚の陶片が含まれ、それらは少なくとも64個の陶製容器がバラバラになったものと考えられている。そのほか、1255個の獣骨の破片、サケ科の魚の鱗がある。23個の鉄製品には、フィブラが3個とベルトの金具、いくつかの鉄製道具と、鉄板の破片が含まれる。そのほかには、小さな青銅製装飾品の破片と、ガラス製の腕輪とビーズの破片がある。それらはすべて紀元前100年から紀元前50年ころに年代づけられる。



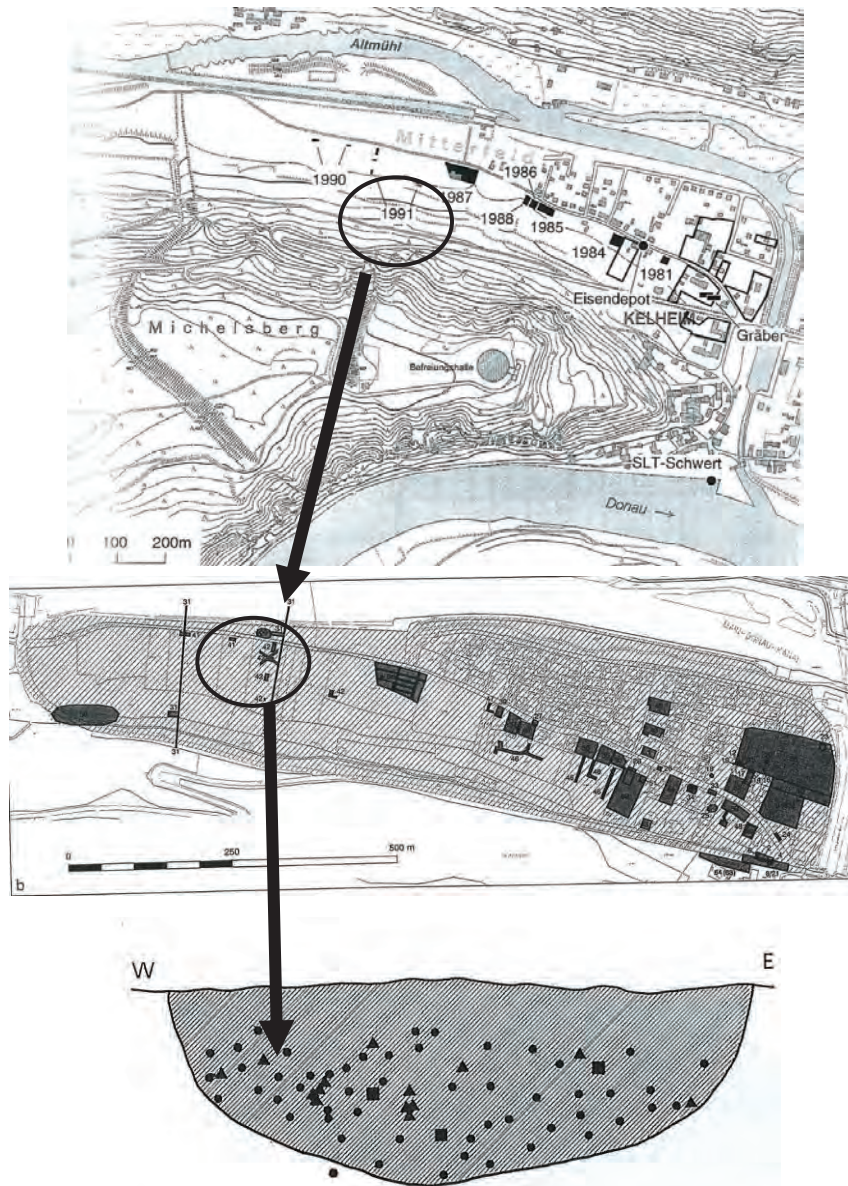


Fig. 3 Kelheim »Mitterfeld«. West-east profile of pit 1991/6, through the center of the pit. — ● charcoal; ▲ daub; ■ bone. — (Illustration P. S. Wells). — Pit diameter 2.06 m.

### 図 32 : ケルハイムの縦穴 Pit 1991/6

[出典 : Wells, "Special pit deposits on late La Tène Settlements", p. 91, Fig.2. 筆者加筆有。]

#### □ 出土物一覧 □

- ・ 陶片 898 枚 (少なくとも 64 個の容器のもの)
- ・ 動物の骨 1255 本 (うち 248 本のみ識別可) ・ サケ科の魚の鱗 漆喰 1.5kg
- ・ 鉄製品 23 個 (フィブラ、ベルトの金具、小さな道具、鉄板含む)
- ・ 小さな青銅製装飾品 4 個 ガラスの破片 2 枚 (腕輪、ビーズ)

この縦穴は、建造物の柱の跡のような一般的な穴、ないしゴミ捨て穴とも異なる性質を持つ、特殊なものだとされる。特殊なものとする理由として、ウェルズは 3 つの要因を挙げる。すなわち、①椀型の形状、②縦穴からの出土物がまったく同時に埋められ、そのあとすぐに穴が塞がれた可能性があるということ（縦穴を満たす土の質がすべて均一であるため）、③フィブラやガラスの装飾品などの、個人の所有物とみられる品の埋納、である<sup>26</sup>。また、それらの個人の所有物と思しきものには、地中海世界からの輸入品や貨幣、あるいは金や銀といった高級な品物が含まれていないことも注目に値する。

ところで、このケルハイムの縦穴にはいくつかの類例が確認されている。ここで、ふたたびマンヒングへとたちかえてみよう。

図 33 はマンヒングのオッピドゥムの西寄りの発掘現場の遺構である。1216 番の a 縦穴は紀元前 2 世紀から紀元前 1 世紀ころに年代づけられ、穴の大きさは約 300×260cm、深さ約 40cm の楕円の椀型である。縦穴は 8 層に分かれ、陶片、木炭、獣骨、粘土質の土、0.08kg の溶けた鉄のかたまり、青銅製フィブラの破片、青銅製品・鉄製品の破片など、ケルハイムの事例と共通する出土物を多く含む。これ以外にもマンヒングでは、西側や南西側で類似の縦穴が見つかった<sup>27</sup>。椀型の縦穴への埋納は、いくつかの共同体では一般的な行為であったと考えられるだろう。

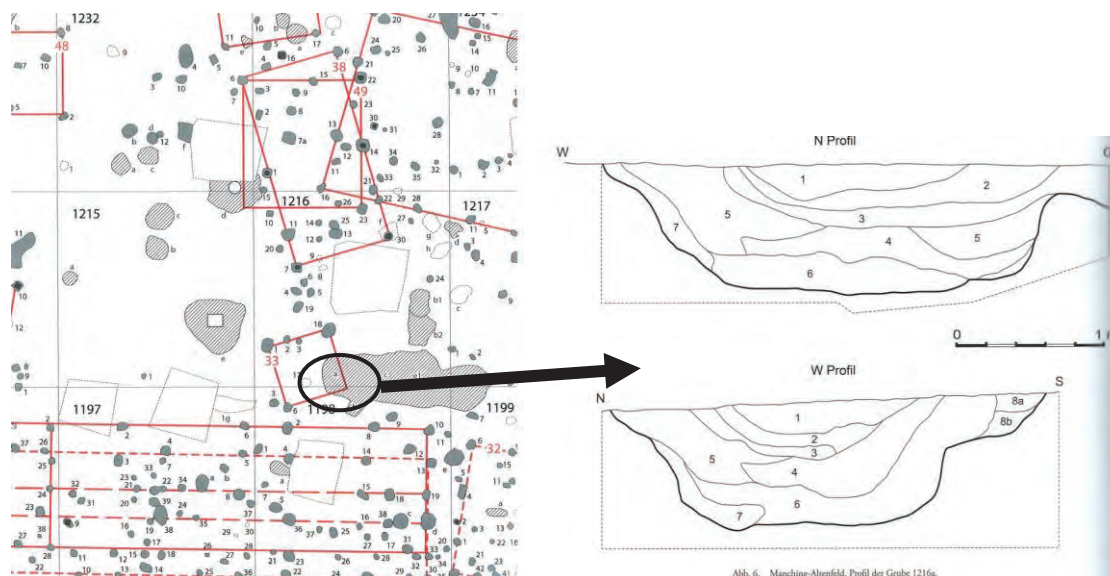


図 33 : マンヒングの「特殊な縦穴」 Grube 1216a

【出典 : Susanne, et. al., *Die Ausgrabungen in Manching Bd.18*, Beilage 3, S.644 より抜粋, 筆者加筆有。】

さて、これらはどのような目的で掘られ、埋納されたのだろうか。そして、この縦穴は「信仰」と結びつくものだったのだろうか。

古く農耕社会であったケルト社会において、人々が自ら掘った穴へ家畜や収穫物を投げ入れることが、土の下の神へ豊穰や肥沃を祈る儀式的行為であったとみられ

ることは、前節でも述べた。それは、ひと家族のような小規模な集団によっておこなわれた。ブリュノーはこの行為を、ケルト世界における「埋納の神聖性」によるものだとする<sup>28</sup>。ケルハイムやそのほかの縦穴の事例についても、穴へ埋納するという点では、ブリュノーの言うような「埋納の神聖性」が根底にあると考えられるが、装飾品が埋納されているという点では、純粋に農耕の繁栄を祈るものとは考えにくい。

そもそも、これらの特殊な縦穴への埋納は、「神々へ向けたもの」という純粋な信仰心をあらわす儀式の痕跡ととらえて良いのだろうか。ケルハイムの縦穴の埋納物は、そのすべてに使用された痕跡がある。すなわちそれらは「埋納」を目的として、儀式用に製作されたものではないということだ。また、陶片に風雨にさらされた形跡が見られない<sup>29</sup>ことから、それらは穴に入れられる直前まで割れていない、つまり、使用できる状態であったと考えられる。そして、それらが一度に埋納されたことと合わせて考えると、ケルハイムの縦穴の埋納物は、「一度の同じ行事」で用いられた可能性がある。では、その「一度の同じ行事」とは何か。ウェルズは、大勢で飲み食いをする「饗宴」を挙げる。

飲酒を含む饗宴の行為は、ケルト人の世界が地中海世界と交易のつながりを持った紀元前7世紀ころより見られる慣習である。ウィンデリキア地域においては、オッピドゥムの時代よりも前、ハルシュタットD期における権力者の葬礼の脈絡での饗宴を見ることができる。たとえば、エバーディンゲン＝ホーホドルフにおける紀元前6世紀半ば権力者の墳墓では、40歳くらいの男の被葬者が眠る玄室の南側の壁に、9本の角杯が掛けられている。1本は鉄製で金の装飾が施され、ほかの8本は骨製で、青銅の持ち手と金の装飾がある。これらの角杯と対になる青銅製の皿や鉄製の大きな鉢も3つある。そして北西側に置かれた青銅製の鍋には、埋葬当時は蜂蜜酒で満たされていたことが、内部の沈殿物の調査から明らかになっている<sup>30</sup>。これらは、死者を弔う宴—葬礼饗宴—の慣習がケルト世界にもたらされていたことを明らかにする。葬礼饗宴は死者の忠臣たちを集めておこなわれる宴のことであるが、この慣習が地中海世界に起源を持つことはあきらかであり、エトルリアの墳墓でも、故人を送る宴の様子を描いた壁画が多く見つかっている<sup>31</sup>。青銅製の鍋は、酒に水や香料を混ぜるためにもちいられたもので、宴の際に不可欠なものであった<sup>32</sup>。また宴に用いられた酒器や食器は地中海世界からの輸入品であるし、酒そのものも、権力者にしかめつたにいきわたらない嗜好品であった<sup>33</sup>。この時代の「饗宴」は、故人を偲び、また彼（ないし彼女）の生前の輝かしい権威を誇示する儀式的行為としての意味合いをはらんでいた。

「都市」ケルハイムのなかにおける縦穴の存在は、そのような先の時代において行われた儀式的慣習に対応するようなことが、オッピドゥムのなかでもおこなわれていたことをしめすものだと考えられる。ケルハイムの縦穴出土の陶片は、少なくとも64個の陶器のものであると推測される<sup>34</sup>。このことから、「饗宴」は、共同体



そのもののまとまりよりも小さく、かつひと家族よりも大きな単位によって催されたものであると考えられる。これは、マンヒングのオッピドゥムにおいて、特殊な縦穴が複数存在していることから説明できるだろう。このような儀式ばった行為が、オッピドゥムの共同体そのものよりも小さいレベルのまとまり—現代的な「地区」のような単位—における行為の可能性をしめしている。

以上のことから、ケルハイムの縦穴は、オッピドゥム内における小・中規模のまとまり（コミュニティ）による、饗宴と思しき催しの後の行事の遺構であると考えられる。それは、そのコミュニティの紐帯を確認するための、ひとつ格式ばった行為であり、リチャード・ブラッドリー（Richard Bradley）の言葉を借りれば、日常生活の「儀式化」と呼べるのかもしれない<sup>35</sup>。「神との結びつき」という観念的なものというよりも、むしろ、より現実的で社会的な結びつきを反映する儀式行為であったと考えられよう。

### 3-3) ハイデングラーベンにおける「信仰」の痕跡

ハイデングラーベンについては、縦穴ではないまた別の種類の事例を元に、その地での信仰について見ていきたい。

ハイデングラーベンのオッピドゥムの南西側、F号門の近くに、紀元前8世紀から紀元前5世紀半ばに年代づけられる墳丘群がある（図31破線円部分）。ブレンホーフ（Burrenhof）と呼ばれ、30基以上の墳墓が密集している（図34）。



図 34 : ハイデングラーベンの墳丘 [出典 : Gerd Stegmeier, „Hügelgrab und Totenkult, Abb. 89.]

墳丘群のなかで、ひとつの構造物が注目に値する（図 34 の A）。約 3.2m×3m、深さ 0.4m から 0.5m の四辺形の溝の中心に、0.7m 四方の火床がしつらえられているものだ。火床からは、人間の頭がい骨を含む多数の骨に、糸紡ぎ機の「はずみ車」、裏面に馬のモチーフのあるクイナリウス小銀貨、ろくろ製の陶器が出土している。陶器は紀元前 2 世紀から紀元前 1 世紀に年代づけられ、この遺構がオッピドゥムの時代に用いられたことを示唆する。また、出土物のなかに貨幣があることから、この遺構がオッピドゥムの時代に近いもの、それも、比較的終盤のものであることが推測できよう<sup>36</sup>。

発掘者のひとり、ゲルド・シュテッグマイヤー（Gerd Stegmeier）は、この遺構を祖先信仰、ないし死者信仰と関連する「儀式的行為の場」とであると述べている<sup>37</sup>が、ここにはひとつの疑問が残る。

ハイデングラーベンのオッピドゥムの主要な居住域であるエルザッハシュタットと、墳墓群ブレンホーフと生贄の場は、囲壁によって同じ空間にまとめられている。つまり、生ける者の場所エルザッハシュタットと、死者のための場所ブレンホーフが同じ空間に存在していたということになる。この、「都市」のなかにおける「死者と犠牲の場」の存在は、「都市化」の過程における観念の変化とも関連するのかもしれないが、伝統的なケルト世界における居住地と埋葬の関係性についての観念に照らし合わせると、いささか異質に見えるものだ。

### 3-3-1) ハルシュタット期の死と生の観念

とりわけ初期鉄器時代の埋葬、墳墓は、丘上要塞（Fürstensitze）と呼ばれる居住地から離れた目立つ場所に造られ、しばしばその頂上には石柱が建てられた。居住地から近いところに墳墓がある事例では、玄室が地中深くに掘り下げられて置かれることもあった。これは、生ける者と死せる者の空間を明確に隔てるためであって、ケルト世界の伝統的な観念を反映している。

ベッティナー・アーノルド（Bettina Arnold）は、居住地内に墳墓がある場合は、地形上の問題でやむを得ず内部に造らざるを得なかったか、被葬者がすでに「死した人間」とであるとみなされていなかったからであると述べる<sup>38</sup>。むろん、これは初期鉄器時代の観念であり、オッピドゥムの時代に適用するのは適切ではないかもしれない。しかし、彼女の意見に則するならば、ハイデングラーベンにおけるブレンホーフの被葬者たちも、オッピドゥムの人々に「人間」ないしは「現実に死んだ」存在とはみなされていなかったのではないだろうか。そのような場所での生贄儀式の痕跡は、ハイデングラーベンの居住者に、初期鉄器時代の墳墓とその被葬者が「敬われるべき観念的な存在」として見做されていた可能性を示唆し、この点において、シュテッグマイヤーの言うような祖先信仰、死者信仰との結びつきが出てくるのである。

昔の時代の墳墓が居住地のなかに取り込まれている事例は、ハイデングラーベン以外にもある。そのひとつがマンヒングの「火葬墓」だと言えよう。



「火葬墓」が「聖域」とともに、祖先信仰の対象ないし場所として、複数の小さな共同体の寄り集まりであるマンヒングの共同体の中での連帯を図るものとして機能していたのではないかと前節で述べた。これについて、オッピドゥムの時代に、古い時代の墳墓が神聖視されうるのかという疑問が浮上するが、ハイデングラーベンの事例からは、オッピドゥムの時代においても、先の時代の墳墓がある程度は神聖性を持つものとして見なされていたと考える余地があるように思われる。

以上の考察は推測に依拠するところが非常に大きい。また、過度に宗教や信仰と関連付けていることもいえない。ハイデングラーベンの事例についても、生贄儀式を行った場所が、偶然墳墓の近くになっただけにすぎないのかもしれない。しかし、あえてその領域を囲壁内に含めたということに、囲壁の建造指示者、おそらくはもっとも権力を持った者の意図があったのではないだろうか。その「意図」がどのようなものであるかは、もはや分かるものではないが、筆者は、そこに墳墓を「敬うべきもの」としてみなしていたという、信仰に類似した側面があったと考える。

#### 4 節 小括

マンヒング、ケルハイム、そしてハイデングラーベンのオッピドゥムにおける信仰の痕跡から見てきたのは、これらのなかでは、先の時代の遺物を有効に利用しており、そこでの儀式的行為には、祖先信仰や死者信仰といった、「神との結びつき」よりも現実的で社会的な根底があるということであった。

マンヒングにおいて特徴的な「聖堂」と「火葬墓」は、かつて紀元前 8 世紀から紀元前 6 世紀に巨大墳墓がなった「祖先崇拜の対象」としての役割を引き継ぎ、新しいかたちで表現するものであったと言えるだろう。居住地では、これらの建造物を中心に、その儀式を執りおこなう環境がかたちづくられた。そして、そのような信仰のかたちは、複数の共同体の集まりであるマンヒングのオッピドゥムにおいては、共同体の中での連帯をはかるものとして機能していたと考えられる。

ところで、マンヒングでは「聖堂」以外の場所でも、それと類似の役割をになっただろう建造物の痕跡がみられる（図 35）<sup>39</sup>。

囲壁内西側のアルテンフェルト（Altenfeld）区画からは、南側と東側に入口を持つ四辺形の建造物が 2 基（図 35 内緑）と、用途不明の大きな建造物の柱穴（図 35 内赤）が出土している。また中央区画にも、幅 22m の四辺形の建造物の跡が出土し、さらに南部側路区画には、「聖堂」と類似した円形もしくは多角形の建物の跡が残っている。中央区画の建造物は紀元前 3 世紀、アルテンフェルト区画と南部側路区画のものは紀元前 2 世紀に年代づけられ、後者はオッピドゥムがつけられてからも使用された痕跡がある<sup>40</sup>。これらと「聖堂」との関連性は不明であるけれど

も、これらの複数の「聖堂」の痕跡は、オッピドゥム社会以前からの信仰が、囲壁のなかでも連綿と受け継がれていたことをしめしている。

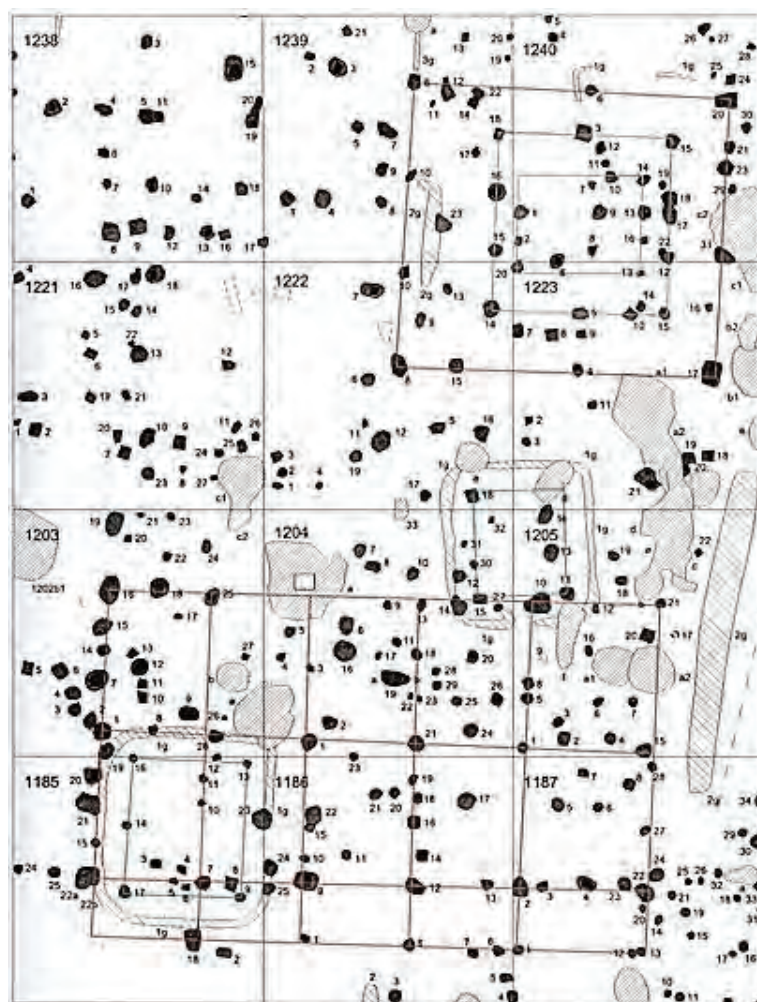


図 35 : アルテンフェルトの聖域 (図内赤・緑) [出典 : Sievers, *Manching: Die Keltenstadt*, S.33.]

マンヒングのオッピドゥムにおける信仰は、都市的な社会へと変化する以前の信仰が、社会的変化の影響を受け新しい形態で表現されたものだったといえるだろう。「祖先」を敬う儀式行為は、先の時代の巨大な墳墓の役割を引き継ぐ「火葬墓」や「聖堂」によって、居住地から遠く離れたところではなく、居住地のなか、つまり共同体の人々と近い空間でおこなわれるようになった。それは、マンヒングにおいては共同体の連帯のためのものとして機能し、複数の共同体が収斂して成立したマンヒングのオッピドゥムの状況を反映しているといえる。

ケルハイムとハイデングラーベンの、縦穴と墳墓近くの生贄儀式の場の事例からは、儀式的な行為がときには共同体よりも小さい規模の集団によっておこなわれ、

その集団の紐帯を確認するためのものとして機能していたことを想起させる。ケルハイムやマンヒングにみられる特殊な縦穴の事例は、その一環としての「饗宴」の最終の行程の可能性がある。そして、ハイデングラーベンの墳墓の利用の状況は、先の時代の墳墓が、オッピドゥムの時代においても敬われる対象であったことをしめしていると考えられる。

非常に大規模なオッピドゥムにおけるこれらの信仰の証拠は、紀元前2世紀以降の大規模なオッピドゥム成立の要因に、経済的な重要性以外に、地理的な要素と関連する「信仰の場」としての重要性の有無もあつたのではないかと考えることを可能にするだろう。

---

【註】

<sup>1</sup> Holger Wendling, “Manching Reconsidered: New Perspectives on Settlement Dynamics and Urbanization in Iron Age Central Europe,” in *European Journal of Archaeology*, 16, fasc. 3, 2013, pp. 459-490, S.459.

<sup>2</sup> 1802年、モンハイムの地方判事ライザッハのヨハン・アダム伯爵（Graf Johann Adam von Reisach）が地形図の研究においてマンHINGの囲壁について言及しており、以降アマチュアの考古学者や収集家たちが囲壁について述べている。1818年と1820年から1821年にかけてはレーゲンスブルクのヨーゼフ・アンドレアス・ブーフナー（Joseph Andreas Buchner）が自著で言及しているが、彼はオッピドゥムの囲壁をローマの建造物だと誤解していた。オッピドゥムがケルト人による建造物であると言及したのは、フーゴ・アルノルド（Hugo Arnord）による1888年の新聞記事が初めてである。それにおいてオッピドゥムは初めて、「ケルト部族の避難所を表している」とされた。発掘調査は1878年、フリードリッヒ・ブルマン（Friedrich Brumann）によって初めて行われ、1892年から1893年にかけてはヨーゼフ・フィンク（Joseph Fink）による発掘が実施されている。Werner Krämer und Franz Schubert, *1955-1961 Einführung und Fundstellenübersicht* [Die Ausgrabungen in Manching Band.1], Franz Steiner Verlag GmbH, Wiesbaden, 1970, S.4 参照。

<sup>3</sup> Susanne Sievers, *Manching: Die Keltenstadt*, S.18.

<sup>4</sup> Werner Krämer, “The Oppidum of Manching,” in *Antiquity*, vol.34, no.135, 1960, pp.191-199, p.192.

<sup>5</sup> R.D. Bott, et. al., “The oppidum of Manching,” in *Naturwissenschaften*, 81, 1994, pp.560-562, p.562; Rupert Gebhard et. al., “Ceramics from the Celtic Oppidum of Manching and its influence in Central Europe,” in *Hyperfine Interactions*, 154, 2004, pp.199-214, pp.202-204, p.212.

<sup>6</sup> Rupert Gebhard, op.cit., p.212.

<sup>7</sup> R. D. Bott, op. cit., p.562.

<sup>8</sup> ①中央区域（Zentralfläche）：1955～1973年ヴェルナー・クレイマー、フランツ・シューベルトによって発掘。囲壁の中心にある主要な居住地と特別な構造物がある。②北部側路区域（Nordumgebung）：1984～1987年フェルディナント・マイアーによって発掘。③南部側路区域（Südumgebung）：1965～1973年フランツ・シューベルトによって発掘。④アルテンフェルト区域（Altenfeld）：1996～1999年スザンヌ・ジーヴァースによって発掘。主として手工業の作業場がある囲壁西側。⑤東門区域（Osttor）：1962～63年ロルフ・ゲンゼンによって発掘。⑥南側 EADS 区域（EADS）：1999～2002年クラウス・ミヒャエル・ヒュッセンによって発掘。の6か所である。

<sup>9</sup> Werner Krämer und Franz Schubert, *1955-1961 Einführung und Fundstellenübersicht* [Die Ausgrabungen in Manching Band.1], Beilage. 5.

<sup>10</sup> Susanne Sievers, *Manching: Die Keltenstadt*, S.28; Werner Krämer und Franz Schubert, *1955-1961 Einführung und Fundstellenübersicht*, S.80.

<sup>11</sup> Susanne Sievers, op. cit., S.23.

<sup>12</sup> Werner Krämer, *Die Grabfunde von Manching und die latènezeitlichen Flachgräber in Südbayern* [Die Ausgrabungen in Manching Band.9], Steiner, Wiesbaden, 1985, S.99.

<sup>13</sup> Susanne Sievers, op. cit., S.23.

<sup>14</sup> *Ibid.*, S.26-27.

<sup>15</sup> *Ibid.*, S.30.

<sup>16</sup> Jean-Louis Brunaux (trans. Daphne Nash), *The Celtic Gauls: gods, rites, and sanctuaries*, pp.89-90.

<sup>17</sup> Bettina Arnold, “A Landscape of Ancestors: The Space and Place of Death in Iron Age



---

West-Central Europe,” in *Archeological Papers of the American Anthropological Association*, Volume 11, Issue 1, January 2002, pp.129-143, pp.131-132.

<sup>18</sup> 紀元前 3 世紀から紀元前 2 世紀に年代づけられる豊富な副葬品を伴う土葬墓には、シュタインビーヒェルやフンツルツェンのほか、バイエルンのオーバーメンツィング [Obermenzing] 近郊にある「医者墓 (Doctor's Grave)」などがある。J.M. de Navaro, “A doctor's Grave of the middle La Tène period from Bavaria,” in *The Prehistoric Society*, no.22, 1955, pp.231-248, pp.237-238.

<sup>19</sup> Jörg Biel, „Eberdingen-Hochdorf, Kr. Ludwigsburg, Baden-Württemberg,” in *Brathair*, 6 (1), 2006, pp.3-9; Otto Hermann Frey, “Celtic princes' in the six century B.C.,” in Venceslas Kruta et. al. (eds.), *The Celts*, pp.80-102, pp.83-97.

<sup>20</sup> Gerald A. Wait, “Burial and the Otherworld,” in Miranda J. Green (ed.), *The Celtic World*, pp.489-509, p.509.

<sup>21</sup> 第 2 巻 12 章；織田武雄監修，中務哲郎訳，『プロトマイオス地理学』，34～35 頁。

<sup>22</sup> Rudolf Reiser, *Die Kelten in Bayern und Österreich*, Rosenheimer Verlagshaus, Rosenheim, 1984, S. 25-28.

<sup>23</sup> Michael M. Rind, „Ausgrabungen auf dem Weltenburger Frauenburg 1999,” in Michael M. Rind (Hrsg.), *Geschichte ans Licht gebracht* (Archäologie im Landkreis Kelheim Band 3, 1997-1999), Verlag Dr. Faustus, Büchenbach, 2000, S. 83-85, S.83.

<sup>24</sup> Peter S. Wells, “Industry, commerce, and temperate Europe's first cities: Preliminary report on 1987 excavations at Kelheim, Bavaria,” in *Journal of Field Archaeology*, 14, 1987, pp.399-412, p. 401 ; Andreas Schäffer, „Eine keltische Bronzegießwerkstatt auf dem Mitterfeld im Oppidum von Kelheim,” in Rind, Michael M. (Hrsg.), *Geschichte ans Licht gebracht*, S. 106-111, .

<sup>25</sup> Peter S. Wells, “Special pit deposits on late La Tène Settlements: A case study at the Oppidum of Kelheim,” in *Archäologisches Korrespondenzblatt*, 46, Fasc. 1, 2016, pp. 89-100.

<sup>26</sup> Ibid., pp.91-92.

<sup>27</sup> Sievers, Susanne, et.al., *Ergebnisse der Ausgrabungen in Manching-Altenfeld 1996-1999* [Die Ausgrabungen in Manching Band 18, T.1, 2] , Reichert, Wiesbaden, 2013, S.639.

<sup>28</sup> Jean-Louis Brunaux, *The Celtic Gauls*, pp. 90-91.

<sup>29</sup> Peter S. Wells, “Special pit deposits on late La Tène Settlements: A case study at the Oppidum of Kelheim,” p. 91.

<sup>30</sup> Jörg Biel, “The Celtic princes of Hohenasperg (Baden-Württemberg),” in Venceslas Kruta et al. (eds.), *The Celts*, pp.123-131, pp.125-128.

<sup>31</sup> アネッテ・ラツェ (大森寿美子訳)，『エトルリア文明 700 年の歴史と文化』，遊タイム出版，2001 年，61 頁。

<sup>32</sup> Otto H. Frey, “Celtic princes" in the sixth century B.C.,” in Venceslas Kruta et al. (eds.), *op. cit.*, pp.80-102, pp.89-90.

<sup>33</sup> Bettina Arnold, “Drinking the feast' : Alcohol and the legitimation of power in Celtic Europe,” in *Cambridge Archaeological Journal*, 9,1, 1999, pp.71-93, pp.74-75.

<sup>34</sup> Peter S. Wells, “Special pit deposits on late La Tène Settlements: A case study at the Oppidum of Kelheim,” p. 90.

<sup>35</sup> Richard Bradley, “A Life Less Ordinary: the Ritualization of the domestic sphere in later prehistoric Europe,” in *Cambridge Archaeological Journal*, 2003, 13:1, pp.5-23, p.20.

<sup>36</sup> クイナリウス銀貨の流通は紀元前 2 世紀から紀元前 1 世紀ころである。貨幣については第 4 章を参照のこと。

<sup>37</sup> Gerd Stegmeier, „Spätkeltischer Totenkult im Oppidum,” in *Archäologie in Deutschland*, 2, 2016, S.72-73, S. 72-73 ; Gerd Stegmeier, „Ort der Lebenden, Ort der Toten – weitergehende Untersuchungen im Bereich des spätkeltischen Oppidums

---

Heidengraben,“ in *Archäologische Ausgrabungen in Baden-Württemberg 2010, 2011*, S. 131-135, S. 134.

<sup>38</sup> Bettina Arnold, “A Landscape of Ancestors: The Space and Place of Death in Iron Age West-Central Europe,” in *Archeological Papers of the American Anthropological Association*, Volume 11, Issue 1, January 2002, pp.129-143, p. 130.

<sup>39</sup> Susanne Sievers, *op.cit.*, S.31-34.

<sup>40</sup> *Ibid.*, S.114.

## 第2章

### 「都市」の外側と共同体—方形土塁 Viereckschanzen は何を意味するか—

前章では、「オッピドゥム」という共同体の内部における信仰の諸相について考えた。マンヒングを中心に、いくつかのオッピドゥムでは、先の時代の遺物を、ある種の「心の拠りどころ」として利用し、共同体の統制をはかろうとしていたことがうかがえる。

しかし、紀元前3世紀以降のケルト社会の景観は、オッピドゥムだけが点在しているわけではなかった。オッピドゥムが、非常時の避難場所としての役割も持ち合わせていたことから分かるように、オッピドゥムの周辺には、防壁を持たない共同体や小さな村落があった。そのような人々の寄り辺とは、どのようなものだったのだろうか。

本章では、この地域に残存する「聖域」とされるものに光を当て、ケルト人の精神世界の側面について新しい見方を提示することを目的とする。

#### 1節 ドイツ南部のケルトの「聖域」—方形土塁 Viereckschanzen—

ウィンドリキアにおけるケルト人共同体の「モニュメンタルな痕跡」のカテゴリは、3つに大別できる。ひとつは、丘上要塞やオッピドゥムといった「大きな居住地」である。ふたつめは「墳墓」であり、それらはしばしば丘上要塞と関連づけられる。丘上要塞において共同体をすべた権力者の死後に墳墓が造営され、畏敬の対象とされた。そしてもうひとつが、ドイツ南部の「ケルトの聖域」とされる「方形土塁 (Viereckschanzen)」 (図 36) である。

方形土塁は、現在のバイエルンおよびバーデン・ヴュルテンベルクを中心として点在する四辺形の構造物 (図 37) で、そのほとんどが紀元前2世紀半ばから紀元前1世紀に年代づけられる。ナタリー・ヴェンツロヴァ (Natalie Venclová) はこれらを、「軍事的防壁の欠落した、壁や柵で覆われた領域」と呼んだ<sup>1</sup>。

古くより、この奇妙な構造物は人々の耳目を集めてきた。中世から近代にかけては、“Schwedenschanze”あるいは“Reisenschanze”、“Heidenstädle”そして“Burg”などと呼ばれていた。19世紀はじめには測量などによって認識されていたが、オッピドゥムと同じく、19世紀前半まではその形状ゆえにローマ時代の遺物とみなされていた<sup>2</sup>。1870年代以降の考古学調査の進展が、方形土塁を前ローマ、すなわちケルトの遺物という正確な認識をもたらした。長い年月を経て土壌が均され、現在では航空写真によってのみ判別できる事例も多いが、いくつかは発掘調査がおこなわれている。近年はLiDaR [Light Detection & Ranging] による計測もあり、確認される方形土塁の数は年々増えている。ギュンター・ヴィーラントによると、1999年時点でのドイツ国内の方形土塁の数は、バーデン・ヴュルテンベルクで87基、バイエルンで176基、ラインラントで1基の計264基となる<sup>3</sup>。本節ではとくに1950年代以降に調査がおこなわれた事例をもとに、分析を進めていきたい。



図 36 : ヴェスターハイム [Westerheim, Alb-Donau-Kreis] の方形土塁 航空写真

[出典 : Günther Wieland (Hrsg.), *Keltische Viereckschanzen: einem Rätsel auf der Spur*, Taf.3.]

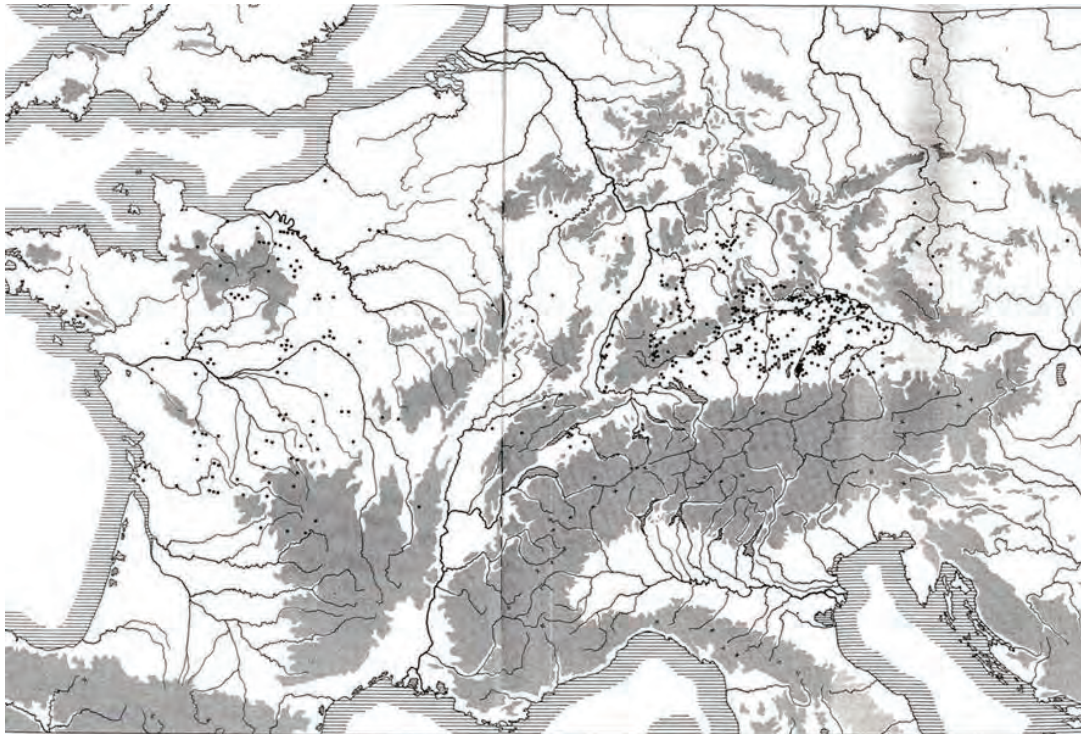


図 37 : 方形土塁の分布図

[出典 : Kurt Bittel, Siegwalt Schiek, Dieter Müller; mit einem Beitrag von Günther Wieland, *Die keltischen Viereckschanzen*, Abb.9.]



1-1) 方形土塁の概要

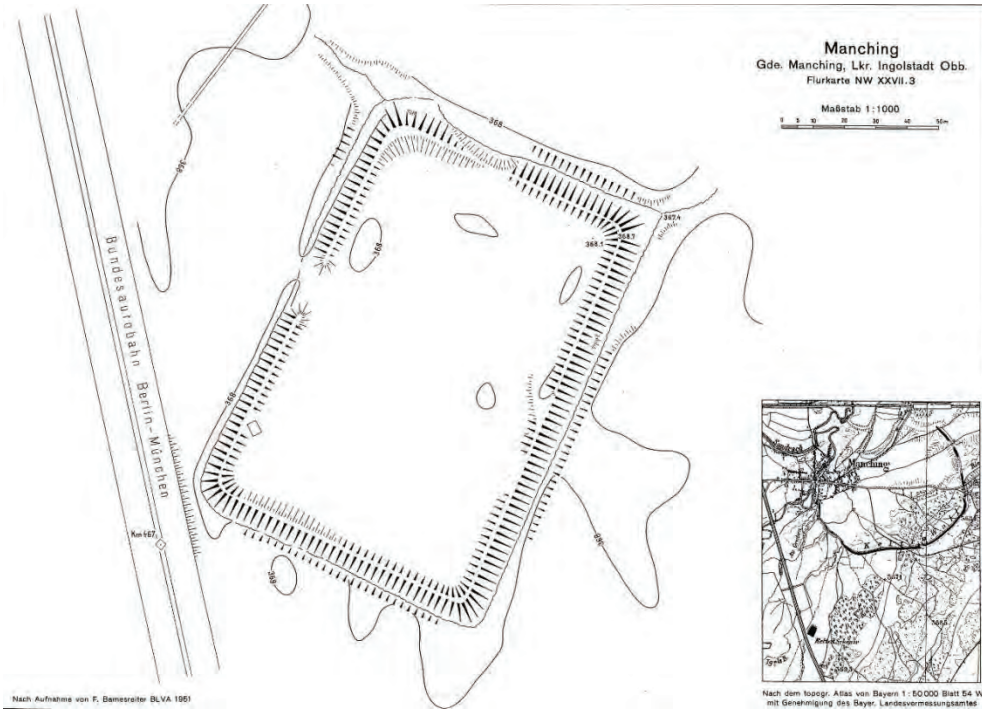


図 38 : マンヒングの方形土塁 測量図

[出典 : Klaus Schwarz, *Atlas der späteltischen Viereckschanzen Bayerns*, Blatt 17.]

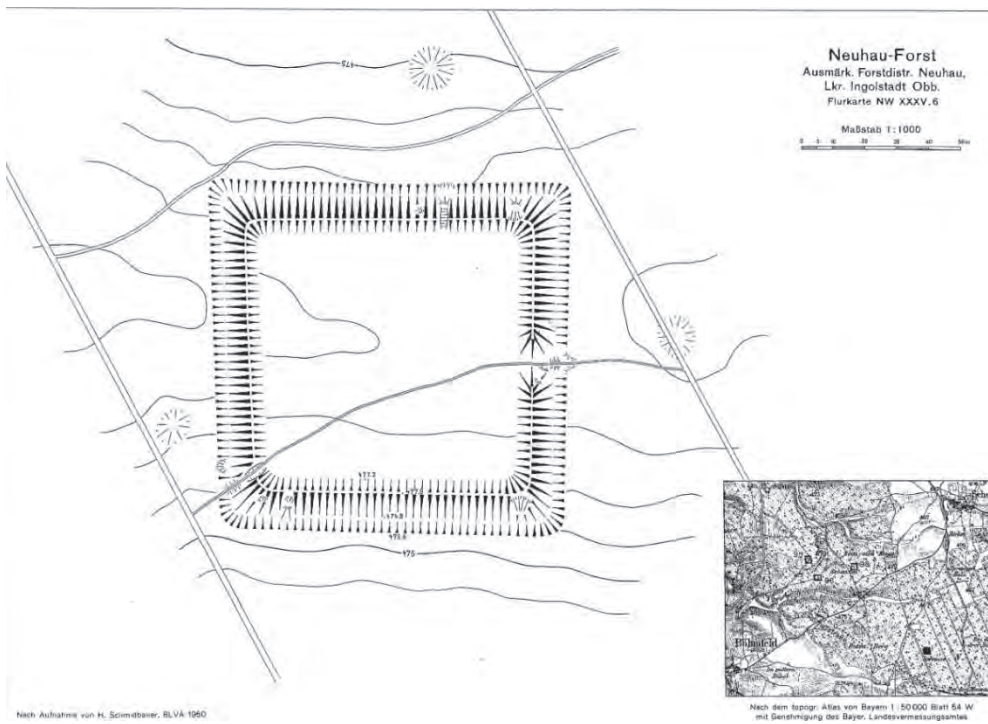


図 39 : ノイハウ・フォルスト [Neuhaus-Forst, Ausmärk. Forstdistr. Neuhaus, Ldkr. Ingolstadt, Oberbayern] の方形土塁 測量図 [出典 : *Ebd.*, Blatt 18.]

図 38 と図 39 は、マンヒングのオッピドゥムから南へ 8km の地点にある方形土塁、およびインゴルシュタット州のノイハウ・フォルストの方形土塁の各測量図である<sup>4</sup>。これらのように、方形土塁は盛り土によってほぼ四辺形に領域が隔てられ、出入口が最低 1 か所にしつらえられる。土塁は、まず外と内を分けるところに溝が掘られ、内側寄りに土が盛られる。面積は平均 0.8ha、すなわち約 90m 四方であるが、1.2ha を超える事例もわずかながら確認されている<sup>5</sup>。

外側に位置する溝は、幅は 2m、広い場合は 7m 近くにおよぶが、深さは総じて 1m と比較的浅い。壁となる盛り土の頂上は丸みを帯びた造りで、それらは溝を掘り起こして出た土を積み上げて造られた。盛り土の高さは 1m 程度である。つまり、人間の身長より低い土壁が、おおよそ 90m 四方の空間を囲んでいるのである。

このような空間のもうけられる地形は、おおむね 6 種類に分けることができる。ミュラー<sup>6</sup>に依れば、①山の斜面（バーデン・ヴュルテンベルクの方形土塁のうち 30%）、②尾根（同 40%）、③山の円頂（同 6%）、④台地（同 14%）、⑤くぼ地（同 4%）、⑥急斜面（同 6%）である。大半は斜面や尾根に造られ、とくに標高 400m から 700 メートルの地点に多い。河川より 100 メートルから 300 メートルほど離れた水辺や、あるいはニーダーバイエルンのホルツハーランデン [Holzharlanden, Stadt Abensberg, Ldkr. Kelheim] のように、ハルシュタット期の巨大墳墓の近郊に建造される事例もいくつかある<sup>7</sup>。ひとくちに「四辺形」と言っても、形状は多様であった。1950 年代のクラウス・シュヴァルトによるアトラスでは、バイエルンの方形土塁のうち、正方形が 14 基、四辺形が 14 基、長方形が 7 基、平行四辺形が 32 基、台形が 45 基、五角形が 7 基、それ以外の形状が 8 基となっている<sup>8</sup>。そして、出入口は必ず北以外の方角に造られる。

### 1-2) 方形土塁内部の構造 —3 基の事例をもとに—

出入口を抜けて土塁の領域内へ入ると、広い空間には様々な痕跡が残されている。ここでは 3 基の事例を見ていこう。

#### ①エーニンゲン [Ehningen, Kr. Böblingen] (図 40)

シュトゥットガルトから南西へ 25km の位置にあるこの地の方形土塁は、北辺 82m・東辺 81m・南辺 82m・西辺 77m の、正方形に近い台形のケースである。土塁内の面積は 0.48ha である。土塁の幅は約 4m、溝の深さは 1.7m であって、建造年代の異なる 2 か所の出入口が東側に位置している。土塁の領域内に多くの構造物を有していたと推測される点で、この方形土塁は注目に値する。

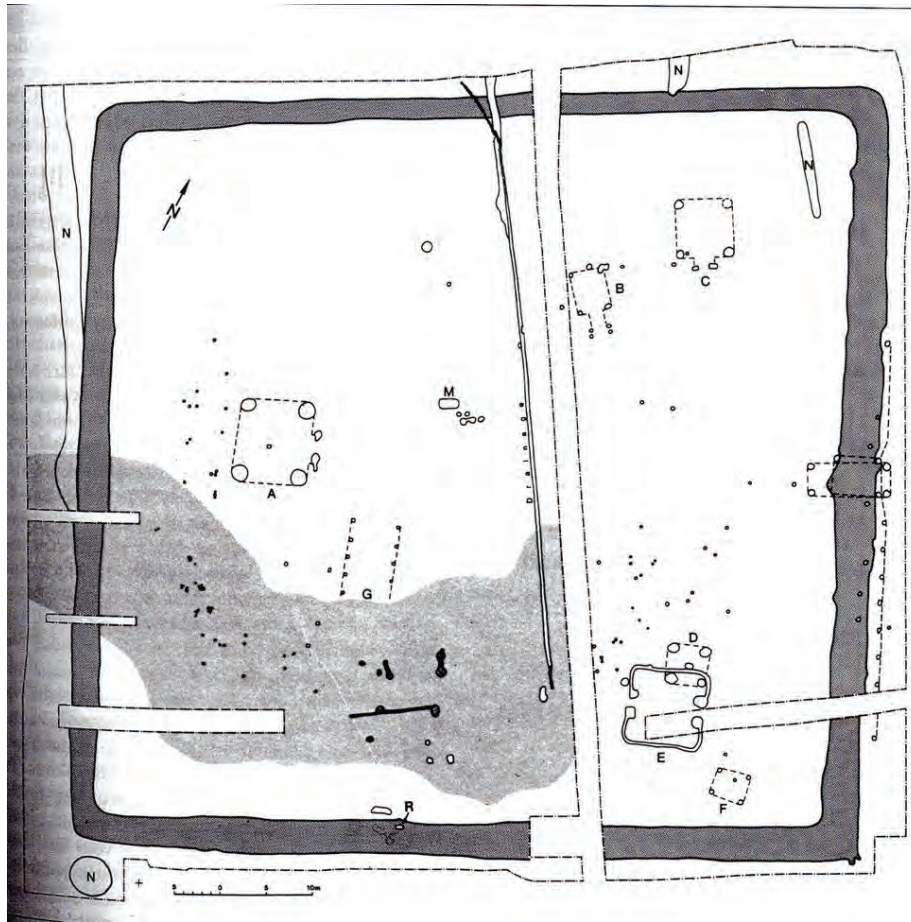


図 40 : エーニンゲンの方形土塁遺構 [出典 : Kurt Bittel, et. al., *Die keltischen Viereckschanzen*, Abb.185.]

□出土遺構一覧□

- ・ 2 か所の出入口…東側に古い門 (3.0×4.5m) と新しい門の柱の跡
- ・ 建物 A (直径 1.8m, 深さ 0.9m, 6.5×7m) …東側に入口
- ・ 建物 B…3.1×4m    建物 C (約 5.3×5.4m) …寄棟屋根
- ・ 建物 D (3.5m 四方) …建物 E の下に重なるように存在、四角錐の屋根
- ・ 建物 E…7.5×7.8m    建物 F (2.6/2.9×3.3m) …台形型の建物
- ・ 建物 G (長さ 8m、5m 間隔の柱の並び) …用途不明

エーニンゲンの方形土塁は、建造年代の異なる出入口が東側にある。古い出入口は3×4.5mである。出入口と向かい合って建物 A がある。また、土塁の北東側には建物 B、建物 C が、南東側に建物 D、建物 E、建物 F があるほか、ローマ時代や中世にまで比定される多くの遺構が残されている<sup>9</sup>。土塁のいたるところで紀元前 2 世紀から紀元前 1 世紀に年代づけられる陶器の破片が出土しており、これらの構造物は、2 基の出入口の古い門に建造年代が近いものと、新しい門にそれが近いものの 2 グループに分けられる。建物 D と建物 F が前者、そして建物 A ・建物 B ・建物 C ・建物 E ・建物 G が後者である<sup>10</sup>。また、これらのほかにも構造物があった可能性



が高い。これらのことは、出入口が複数回建造されていることとともに、この方形土塁が比較的長期間利用されたことを暗示する。

②エッスリンゲン・オーバーエッスリンゲン<sup>11</sup> [Esslingen-Oberesslingen, Kr. Esslingen] (図41)

標高 473m 地点にあるエッスリンゲン・オーバーエッスリンゲンの方形土塁は、北 123m・東辺 85m・南辺 125m・西辺 102m の四辺形で、面積は 1.15ha である。出入口は南側に存在する。この事例では、出入口部分に門の役割を果たす構造物の痕跡があり(図42)、土塁の外側からそこへと渡るために橋が架けられていたことが分かっている。

出入口の構造物は西側が 2.3×4m、東側が 1.8×3.8m で、12本の柱によって支えられている。このほか、土塁内の南西側には、18本の柱で構成された 15×17m の構造物があった。エニンゲンやエッスリンゲン・オーバーエッスリンゲンのように、出入口や土塁の内部に建造物のある事例は散見される。出入口に門のある事例としては、アルトハイム・ハイリヒクロイツタール [Altheim-Heiligkreuztal, Kr. Biberach]、プリーツハウゼン・リュープガルテン [Pliezhausen-Rübgarten, Kr. Reutlingen] やハルトキルヒェン [Hartkierchen] が<sup>12</sup>、土塁内に建造物のある事例としては、アルンシュトルフ・ヴィードマイス [Arnstorf-Wiedmais, Lkr. Rottal-Inn] やパンコーフェン [Pankofen, Stadt Plattling, Landkreis Deggendorf, Niederbayern]、ボイレーン [Beuren, Gemeinde Pfaffenhofen a. d. Roth, Landkreis Neu-Ulm, Schwaben] などがある<sup>13</sup>。

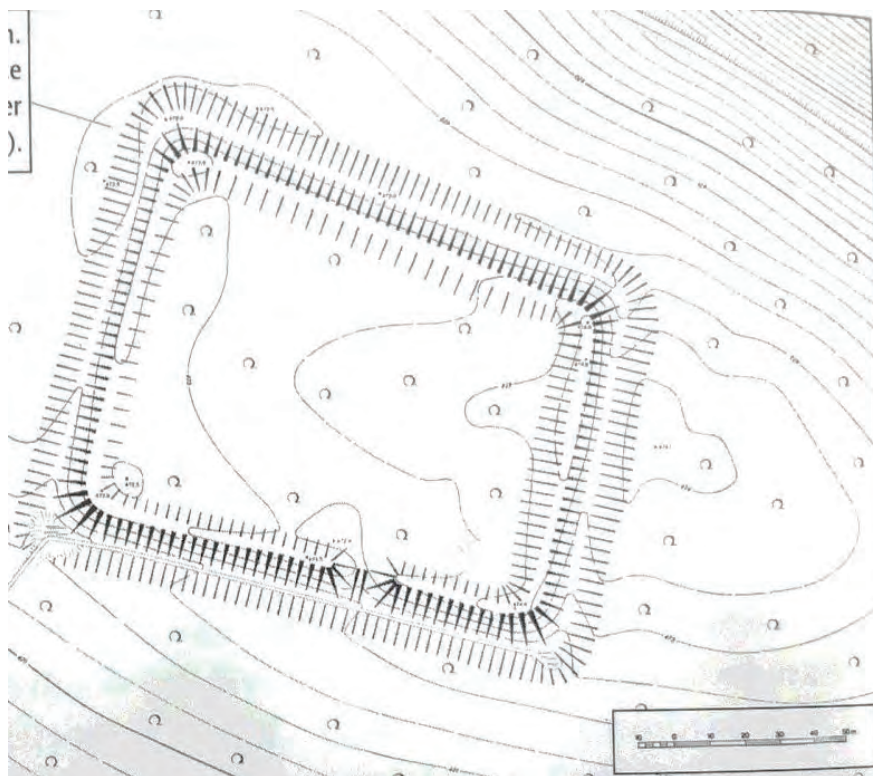


図41：エッスリンゲン・オーバーエッスリンゲンの方形土塁 測量図

[出典：Günther Wieland (Hrsg.), *Keltische Viereckschanzen: einem Rätsel auf der Spur*, Abb.41. ]



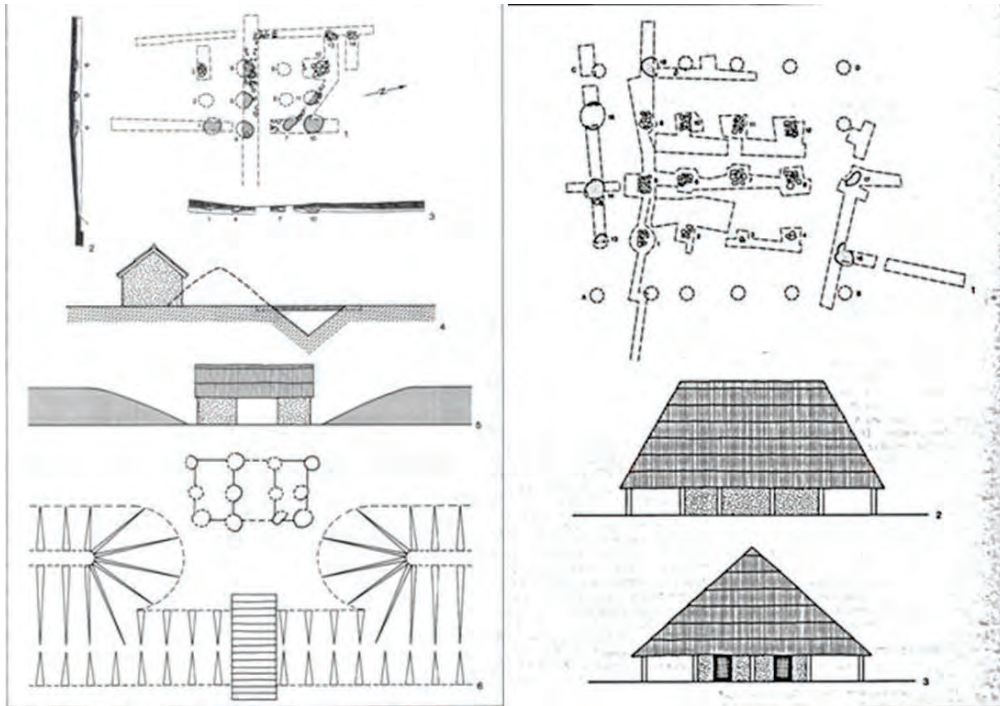


図 42 : エッスリンゲン・オーバーエッスリンゲン遺構および想像復元図

[出典 : Kurt Bittel, et. al., *Die keltischen Viereckschanzen*, Abb.17, Abb.23.]

③フェルバッハ・シュミーデン<sup>14</sup> [Fellbach-Schmidlen, Rems-Murr-Kreis] (図 43)

標高 296m の尾根にあるフェルバッハ・シュミーデンの方形土塁は大半が損壊している。北辺 105m・東辺 62m (一部損壊)・西辺推定 88m のこの事例 (南辺は損壊しており不明) には、先の 2 基の事例のように構造物は残されていない。しかし、この地の土塁には非常に重要な「縦穴 (Schacht)」がある。

北よりの地面に掘られたそれは直径 2m、深さ 20.5m である (図 44)。木炭などを含む腐植土層 (深さ 1~5m 地点) と黄土ローム層 (5~15m) の下に水に満ちた層があり、オーク材で板張りされている。出土物の大半は紀元前 2 世紀後半の陶片やあるいは装飾品であったが、そのなかには、手桶のような木片、木製の合わせ釘、八角形の木製のスピンドル、そして奇妙な木製の彫像があった。

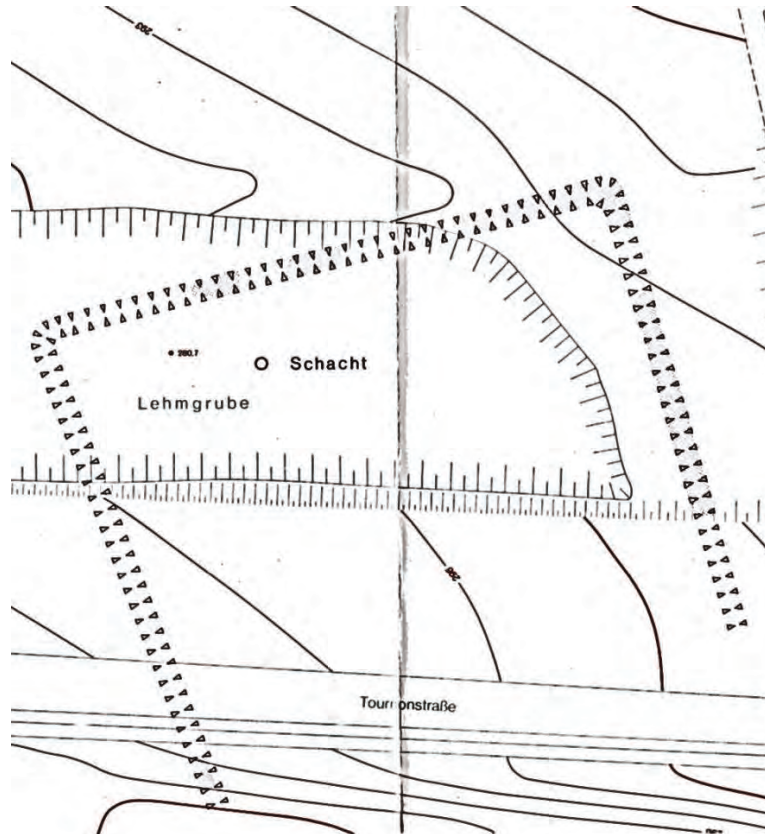


図 43：フェルバッハ・シュミーデンの方形土塁 測量図

[出典：Günther Wieland, mit Beiträgen von Konrad Dettner et. al., *Die Keltische Viereckschanzen von Fellbach-Schmiden und Ehningen*, Landesdenkmalamt Baden-Württemberg Konrad Theiss Verlag, Stuttgart, 1999, Beilage 1 より抜粋。]

縦穴はドルンシュタット・トーマーディングゲン [Dornstadt-Tomerdingen, Alb-Donau-Kreis] やヴァルテンベルク [Wartenberg, Ldkr. Erding]<sup>15</sup>、そして次節で詳述するホルツハウゼン [Holzhausen, Gem. Straßlach-Dingharting, Lkr. München] などにもある。縦穴の掘られる方角やその深さはそれぞれ異なるが、いっぽうで陶片や骨などが出土することですべて一致する。陶片や骨、あるいはフィブラなどの装飾品が出土することは、領域を区切る溝においても同じである。いずれにせよ、これらは、土塁内側の領域における何かしらの活動の痕跡を示すものといえるだろう。

すべての方形土塁における共通項は、「形状の差はあるが、領域が四辺形に囲われていること」と、「出入口が北側には造られないということ」である。内部構造については、構造物や縦穴のある事例、ない事例種々様々であり、統一されていない。しかし、この空間において人間の日常生活が営まれた可能性は低い<sup>16</sup>。ウィンデリキアのケルト人はこれらの土塁をどのようなものとみなして、もちいていたのだろうか。

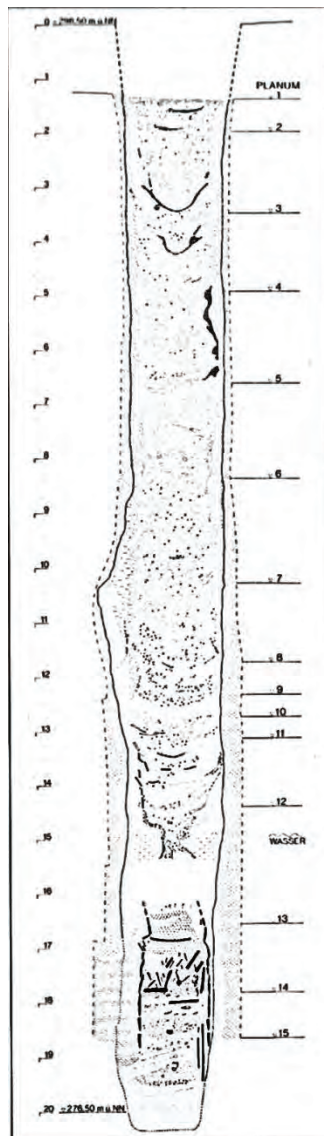


図 44 : フェルバッハ・シュミーデン方形土塁 縦穴図

[出典 : Günther Wieland (Hrsg.), *Keltische Viereckschanzen: einem Rätsel auf der Spur*, Abb.51.]

## 2 節 方形土塁の果たした役割

### 2-1) ケルトの「聖域」と方形土塁

ケルト世界における「聖域」の建造は、紀元前 3 世紀から紀元前 2 世紀以降に活発になった。それらの「型」は地域ごとで 3 種類に分けられ<sup>17</sup>、そのうちの 2 つは現在のフランスに分布する。

北部を中心とした地域にある「ベルギカ型」の聖域と、フランス南部の「リグリア型」の聖域は、地中海世界風の内陣付きの聖堂や供犠の痕跡、あるいは石や人骨を用いた独特の装飾などによって特徴づけられる。



「ベルギカ型」の聖域（図45）は、その領域を溝や柵で囲まれている。溝には大量の骨や武具が詰まっていたり、人骨を組み上げた山が築かれている例もある<sup>18</sup>。また、このタイプはガリアがローマ支配化に入ったあとも、その領域が神聖な場としてもちいられ続けているということも特徴である<sup>19</sup>。「リグリア型」は石造りの建物に、柱廊式の玄関や装飾のある鴨居をそなえる。数少ない<sup>20</sup>このタイプの聖域では、双頭の石像や人間の頭蓋骨を嵌め込んだ柱など、芸術的な遺物が出土している（図46）。



図45：グルネイ・シュル・アロンド [Gournay-sur-Aronde, Estrées-Saint-Denis, Oise]

[出典：Jean-Louis Brunaux, *The Celtic Gauls*, p.10.]



図46：ロックペルチューズ出土の双頭の彫像 [出典：ラング, 『ケルトの芸術と文明』, 78頁。]



これら3つのカテゴリの内のひとつが方形土塁である。この、方形土塁を「聖域」とみなす解釈は、1975年にクラウス・シュヴァルツ（Klaus Schwarz）によって提唱された。それは、ミュンヘンのホルツハウゼンの事例に依るものである<sup>21</sup>。

## 2-2) ホルツハウゼン [Holzhausen, Gem. Straßlach-Dingharting, Lkr. München] の方形土塁

ホルツハウゼンには2基の方形土塁の痕跡（図47）がある。1号基（図48左）は北辺100m・東辺130m・南辺111m・西辺143mであり、1号基から東へ90mのところには2号基がある。2号基は北辺87m・東辺97m・南辺92m・西辺96mで、面積は0.85haである<sup>22</sup>。1955年から1963年にかけて、この2号基の発掘がおこなわれた（図49）。その結果、ホルツハウゼンのこの土塁は、紀元前2世紀後半のあいだに計5回の増改築がおこなわれたこと、その各段階（Phase）で焼き場や縦穴、そして聖堂のような建造物が敷設されていたことがあきらかとなった。シュヴァルツは、土塁内に掘られた「縦穴」を、方形土塁が「聖域」である一番の証拠とするのだ。

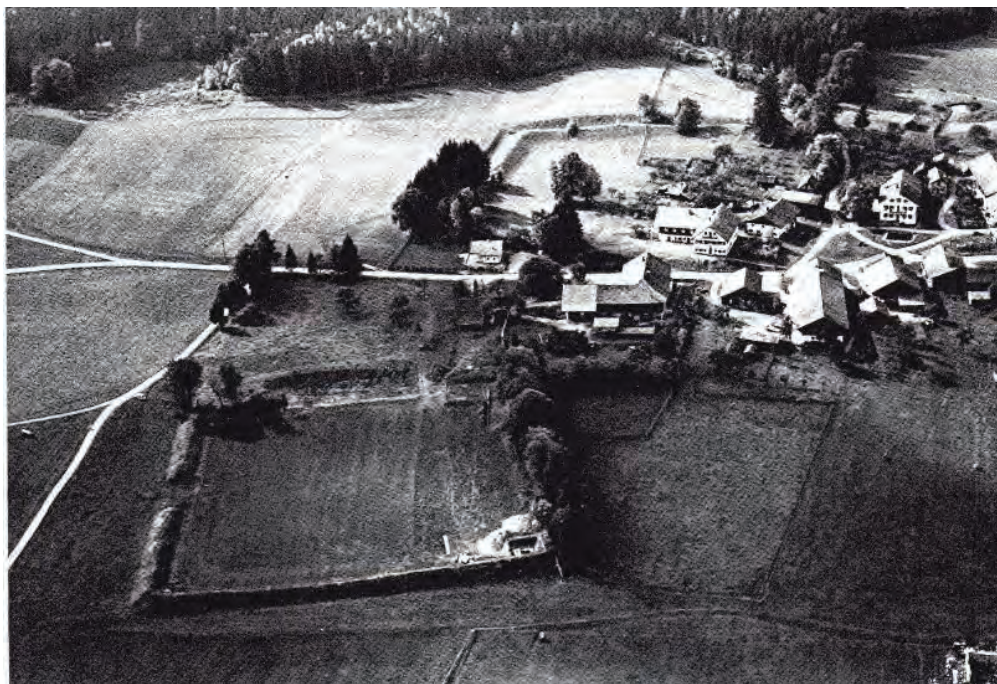


図47：ホルツハウゼンの方形土塁 航空写真

[出典：Klaus Schwarz „Die Geschichte eines keltischen Temenos im nördlichen Alpenvorland,“ S.325.]

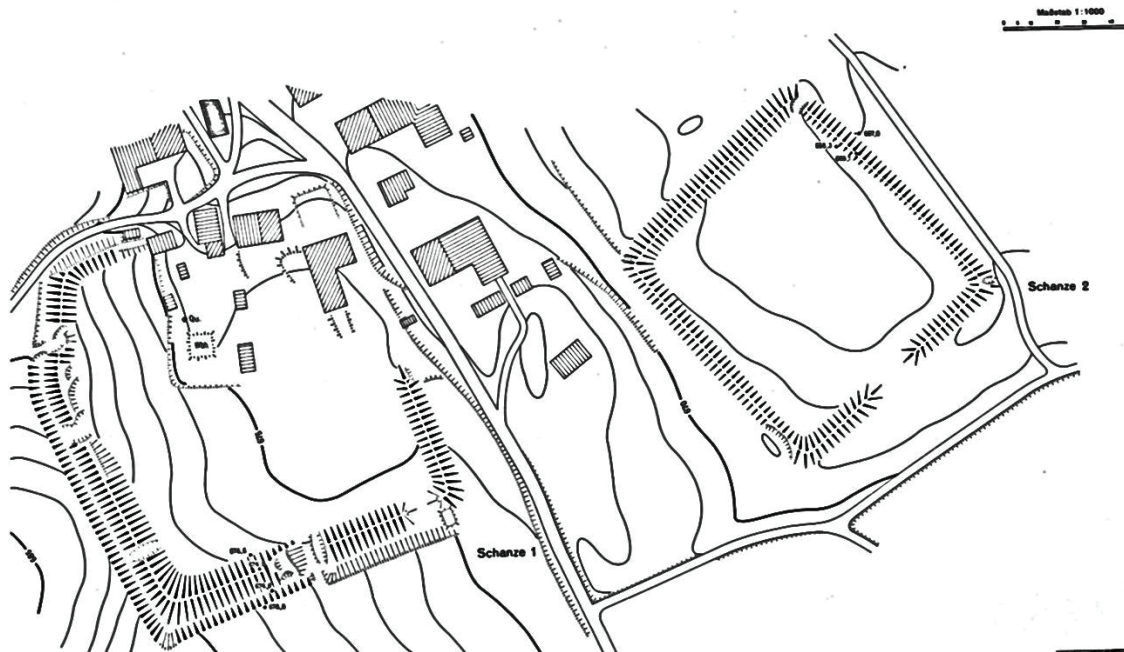


図 48 : ホルツハウゼンの方形土塁 測量図

[出典 : Klaus Schwarz, *Atlas der spätkeltischen Viereckschanzen Bayerns*, Blatt.40/41 より抜粋。]

縦穴は、北東側に深さ 35.3m・南西側に深さ 18.35m、そして北側に深さ 6.1m で、それぞれ穿たれている (図 50 内①, ②, ③)。このうちもっとも新しく、4 段階目で掘られた北側の縦穴には、内のに木柱がはまっていた。シュヴァルツは、この縦穴を、儀式を目的としたものと説明する。底から出土した動物の骨を根拠に、縦穴は土塁内における儀式において、冥府の神への生贄をささげるための場所であると主張した<sup>23</sup>。さらにシュヴァルツは、この 4 段階目において西側に造られた建造物について、ギリシアの神域における聖堂との類似をみとめている。これらによって、方形土塁が「聖域」である、という解釈が生み出され、醸成された。

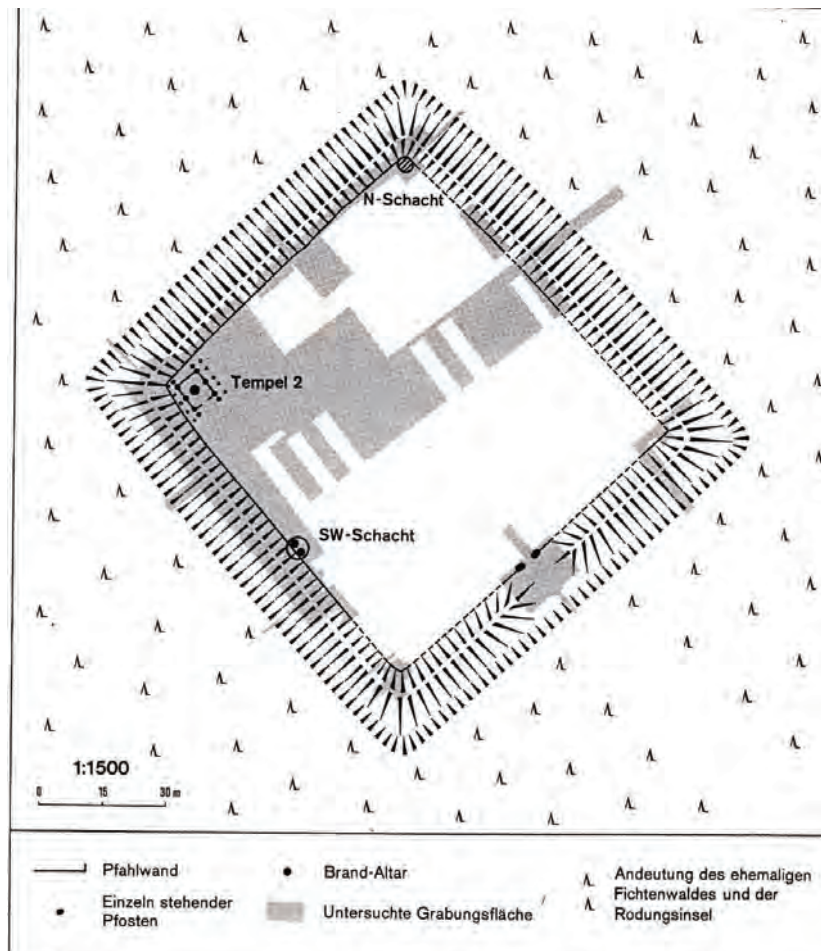


図 49 : ホルツハウゼンの方形土塁 2 号基 測量図

[出典 : Klaus Schwarz, „Die Geschichte eines keltischen Temenos im nördlichen Alpenvorland,“ S. 333.]



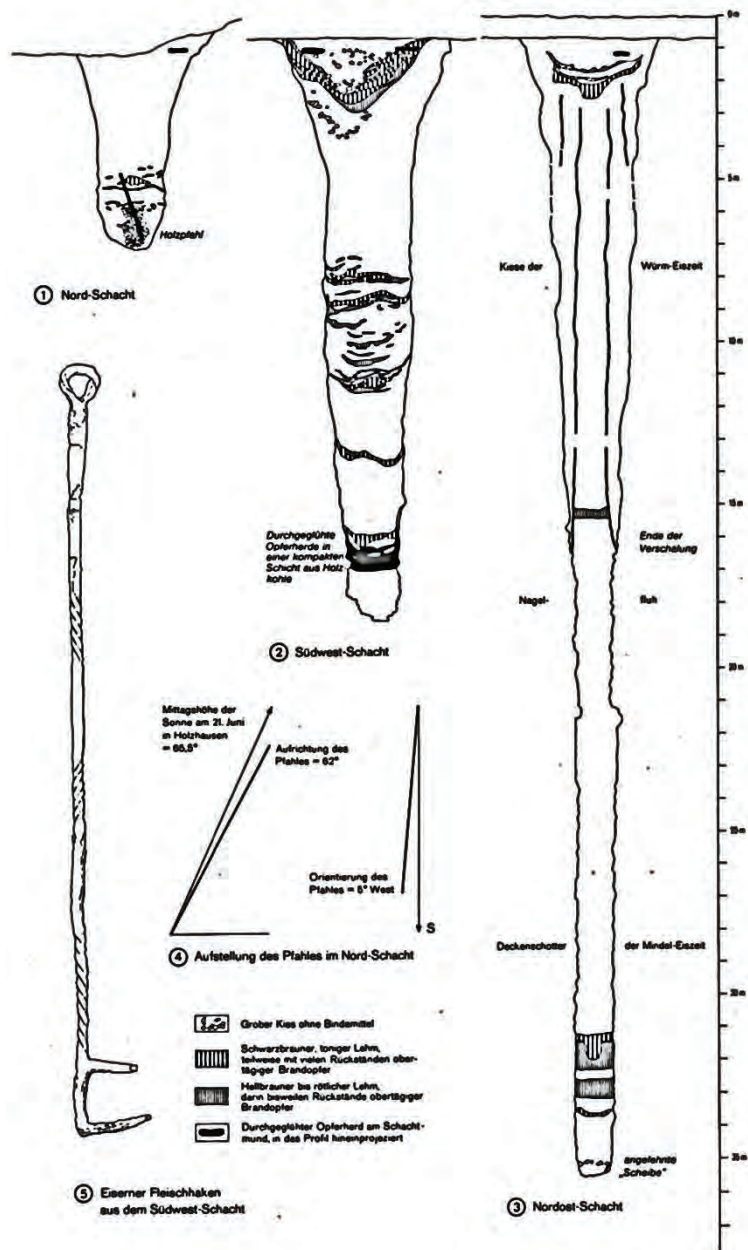


図 50 : ホルツハウゼンの方形土壘 2号基の縦穴

[出典 : Klaus Schwarz, „Die Geschichte eines Keltischen Temenos im nördlichen Alpenvorland,“ Abb.14.]

- ①北側縦穴...深さ 6.1m, 木柱の跡 ②南西側縦穴...深さ 18.35m ③北東側縦穴...深さ 35.3m  
 ④北側縦穴の柱の模式図 ⑤南西側縦穴出土の鉄製の肉吊り下げ鉤

### 2-3) 方形土壘＝聖域説への疑問

むろん、この見解には否定的な意見もある。たとえば、ヴェンツロヴァは「異民族の“聖域”の定義」として、①人目につきやすく、居住用の建物から離れていること、②居住地で発見され



た建造物と、構造や大きさの点で異なること、③奉納物と思しきものの出土がある一方で、居住地で見つかるような発見物がないことの3項目を挙げ、方形土塁のほとんどがこれに合致していないことを指摘する<sup>24</sup>。なお、ヴェンツロヴァの「定義」には、先に挙げたフランス北部や南部のケルト人の聖域は当てはまっている。また、ガリアのケルト宗教の研究者ジャン＝ルイ・ブリュノー (Jean-Louis Bruaux) は、方形土塁が「聖域」ならば、なぜベルギカ型の聖域のようにローマ時代の聖域に「再利用」されなかったのか、と疑問を述べる<sup>25</sup>。彼らの批判は言い換えれば、「フランスのケルトの聖域と比較した場合」において、方形土塁は「聖域」とは呼ぶことができない、という意味になる。

考古学の観点からは、方形土塁に別の役割を見出そうとする研究者もいる。その筆頭が、エーニンゲンなどの発掘に携わったギュンター・ヴィーラント (Günther Wieland) である。彼は、方形土塁は防壁のある「農園」との可能性をしめす。ホルツハウゼンやトーマーディンゲンの縦穴について、ヴィーラントは単純に井戸である可能性を示唆する<sup>26</sup>。また、エーニンゲンやボイレーンで見られる建造物には、シュヴァルツがホルツハウゼンのそれに見出したような、「聖堂」と解釈される要素はない。これらの点から、ヴィーラントは方形土塁を、ハルシュタット期のドイツ南部に存在した四辺形の農園「ヘレンホフ (Herrenhof)」と類似する役割をになう、世俗的なものであった可能性を指摘している<sup>27</sup>。

シュヴァルツが、方形土塁出土の動物の骨を「生贄」の痕跡としたことにも、ヴィーラントは異を唱える。フェルバッハ・シュミーデンのケースにおいてであるが、縦穴と周辺の溝から出土した動物の骨はほとんどが家畜のものであり、生贄かどうかは判別できない。そのうえ、各方形土塁で出土する動物の骨に、同時代の居住地におけるそれとの差はほとんどない。これらの家畜たちは土塁の内側において飼育された形跡はなく、外から持ち込まれたと考えられる。それらは宗教ごとよりも、むしろ経済的活動の痕跡を色濃く残すものである<sup>28</sup>。

#### 2-4) 方形土塁の役割

方形土塁は何を意味するか。発掘や測量が進み、複数の事例から見ることができるようになった方形土塁は、手放しに「聖域」とみなすことはできなくなった。しかし、シュヴァルツの主張に疑問を呈する研究者たちも、それが「聖域」である可能性を、完全には否定しているわけではない。

フェルバッハ・シュミーデンの縦穴が井戸である可能性について、発掘者のひとりディーター・プランク (Dieter Planck) は、仮に井戸であったとしても、それが土塁の「宗教的な目的での利用」を否定するものではないとする<sup>29</sup>。フェルバッハ・シュミーデンの方形土塁では、ドイツ南部の事例では唯一「偶像」が出土している (図 51)。



図 51：シカとヤギの彫像

[出典：Günther Wieland, mit Beiträgen von Konrad Dettner et. al., *Die Keltische Viereckschanzen von Fellbach-Schmidlen und Ehningen*, Abb.31-33 より抜粋。]

次章 2 節においてとりあげるこれらの「偶像」はすべて木彫像で、雄ヤギを模したものは 2 体、シカを模したものは 1 体である。プランクは、これらは女性の姿を間に挟むようにしてそびえる神像の一部であるとみなす (3 章図参照)<sup>30</sup>。彼の主張にのっとるならば、少なくともフェルバッハ・シュミーデンにおいては、方形土塁のなかで信仰にかかわるような行事が実施されていたと考えることができる。しかし、当然のことながら、すべての土塁においてそのような痕跡が見つかるわけではない。

儀式ではない目的の可能性として、マシュー・マレー (Matthew L. Murray) が出土品の陶片の分析をとおして興味深い指摘をおこなっている。彼は、バーデン・ヴュルテンベルクの 7 基の方形土塁 (フェルバッハ・シュミーデン、ドルンシュタット・トーマーディングゲン、ハルトハイム・ゲリヒトシュテッテン、アルトハイム・ハイリヒクロイツタール、アインズイーデル、エーニン

ゲン) と、これらと同時代にあったドイツ南部とスイスの5か所の居住地(バーゼル・ガスファブリック、バーゼル・ミュンスターヒューゲル、マンヒング、アルテンドルフ、ベルヒンク・ポランテン)でそれぞれ出土した陶片の材質や形状の比率を分析・比較した<sup>31</sup>。それによると、居住地で出土する陶片は黒鉛が混ざったものが多く、それらは食糧を備蓄するため使用されていた。その一方、方形土塁ではこのタイプの陶片が非常に少ない。方形土塁出土の陶片において多いものは粗雑なつくりのものであり、それらは主として調理道具や食器として用いられた。この結果、方形土塁では食べ物が備蓄されるような環境がなかったが、それにもかかわらず大勢の人間による飲食が実施されていた可能性が示唆されるのである<sup>32</sup>。

マレーは、その飲み食いの行事を、権力者によって主催された「饗宴」と表現する。

前章3節において述べたとおり、飲酒を含む「饗宴」は権力と密接に結びついていた。人々を集め、大規模な宴を開く行為は「支配権」と同義<sup>33</sup>であり、あるいは権力者の威信や気前の良さを示す浪費的ないし競争的な役割、すなわち「ポトラッチ<sup>34</sup>」をになったとされる。マレーが強調するのは、土塁の政治的、あるいは社会的な役割である。

マレーが言うように、方形土塁において権力者の威信を示す「饗宴」がおこなわれていたとするならば、それらはオッピドゥムの外の村落共同体に居住する人々に向けて催されたと考えるのが自然であろう。この点において、前章でとりあげたケルハイムとマンヒングの「縦穴」にまつわる行為と、方形土塁での行事との類似がほのめかされる。

ケルハイムの縦穴出土の陶片は、少なくとも64個の陶器のものであると推測される。このことから、都市のなかでの「饗宴」は、共同体そのもののまとまりよりも小さく、ひと家族よりも大きな単位によって催されたものであると考えられる。

「縦穴」の事例の可能性を、方形土塁における行事の都市のなかで行われたヴァージョンの名残であるにとらえることができよう。「都市」のなかの縦穴の出土は、方形土塁において行われた儀式的行為に対応するようなことが、オッピドゥムのなかでも行われていたことを示すのではないかと考えられる。また、マンヒングのオッピドゥムにおいて、特殊な縦穴が複数存在していることは、こういった行為が、オッピドゥムの共同体そのものよりも小さいレベルのまとまり、現代的に言えば地区のような単位における行為の可能性をしめしているといえよう。

方形土塁の役割の可能性の話に戻ろう。別の研究者は、方形土塁の立地、とくに墳墓と方形土塁の関係から、方形土塁の政治的・宗教的な役割を示唆する。先に述べたように、方形土塁のいくつかには紀元前8世紀から紀元前6世紀の巨大墳墓の近くに造られる事例がある。このことについて、ベッティナ・アーノルド(Bettina Arnold)は、墳墓と方形土塁の役割の類似を主張する<sup>35</sup>。古代の巨大な墳墓は、その存在だけでなく、人手が大量に必要なその建造の過程も、被葬者、すなわち権力者の権威の大きさをしめす装置であり、それは政治的な意味合いを強く有していた。方形土塁が墳墓の近くに造られていることは、墳墓の「貴族の権威を示す」という政治的な役割を引き継ぐ場所として、それらが機能したと考えることを可能にする。彼女はまた、方形土塁を墳墓と同じように、英雄信仰や先祖信仰のための場であったと述べる<sup>36</sup>。しかし、墳墓の近くに

ある例は極めて稀であることに注意する必要がある<sup>37</sup>。すべての方形土塁がそうであったわけではない。

### 3節 ポヘミアの方形土塁

最後に、ドイツ南部以外の事例から、方形土塁の役割の可能性について考えておきたい。現在のチェコ西部、ボヘミアにおける事例である。

ボヘミアでは9基<sup>38</sup>の方形土塁が確認されていて、それらはすべて紀元前2世紀初頭に年代づけられる。パヴェル・サンコットは、ボヘミアの事例を、ドイツ南部の方形土塁の「前身」と呼ぶ<sup>39</sup>。これらのなかでもっとも目を引くものが、ムジェツケー・ジェフロヴィツェ [Mšecké Žehrovice, okrese Rakovník, Česká republika] の事例 (図52) である。

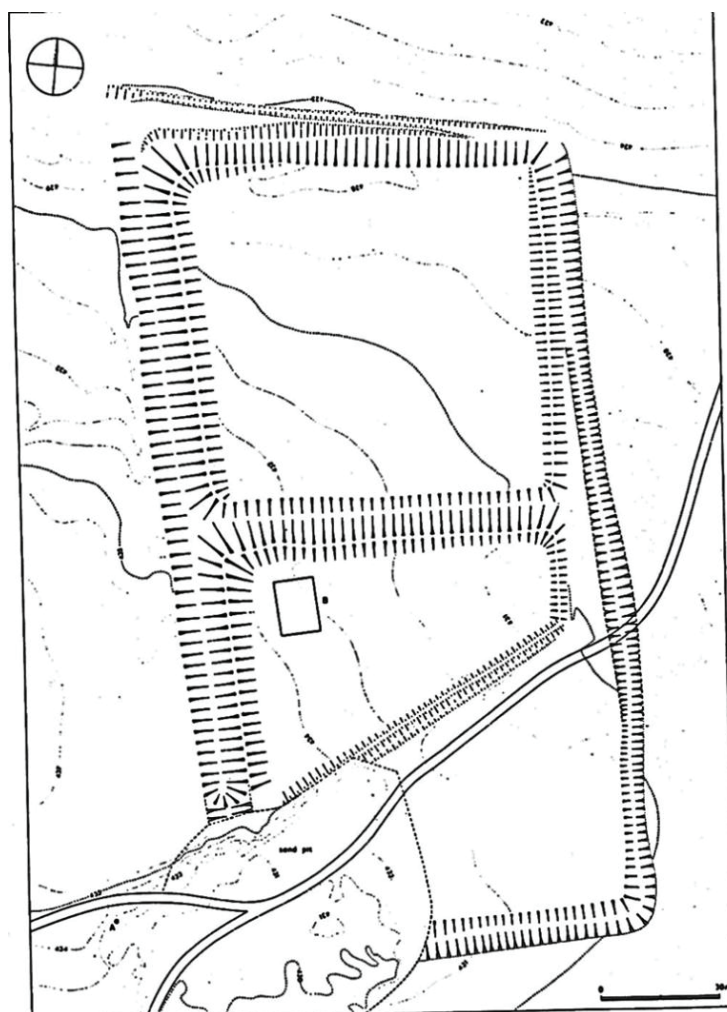


図52 : ムジェツケー・ジェフロヴィツェの方形土塁 測量図

[出典 : Natalie Venclová, "Mšecké Žehrovice, Bohemia: excavations 1979-88," Fig.1.]





図 53 : ムジェツケー・ジェフロヴィツェ出土の人頭の彫刻

〔出典：ラング、『ケルトの芸術と文明』,77頁。〕

ムジェツケー・ジェフロヴィツェの方形土塁はボヘミアで最大のものであり、北辺 90m・東辺 187.5m・南辺 93.5m・西辺 194m である。面積は 1.17ha で、紀元前 3 世紀から紀元前 2 世紀初頭に年代づけられる。その近郊からは、紀元前 250 年以降に作製された石造の人頭の像が出土している (図 53) <sup>40</sup>。人頭は高さ 23.5cm の楕円形で、巻き髪頭である。同じく楕円型の目と盛り上がった鼻、そして上方向へ優美な曲線をえがく口ひげが特徴的である。この人頭の彫像は、ボヘミアに方形土塁が「宗教的な役割」を有していたことをしめすものであると、複数の研究者が指摘している<sup>41</sup>。

また、マルクヴァルティツェ [Markvartice, okres Jičín, Česká republika] の事例 (図 54) は、居住地のすぐ近くにあるという点で、方形土塁の役割の別の側面を見せる。

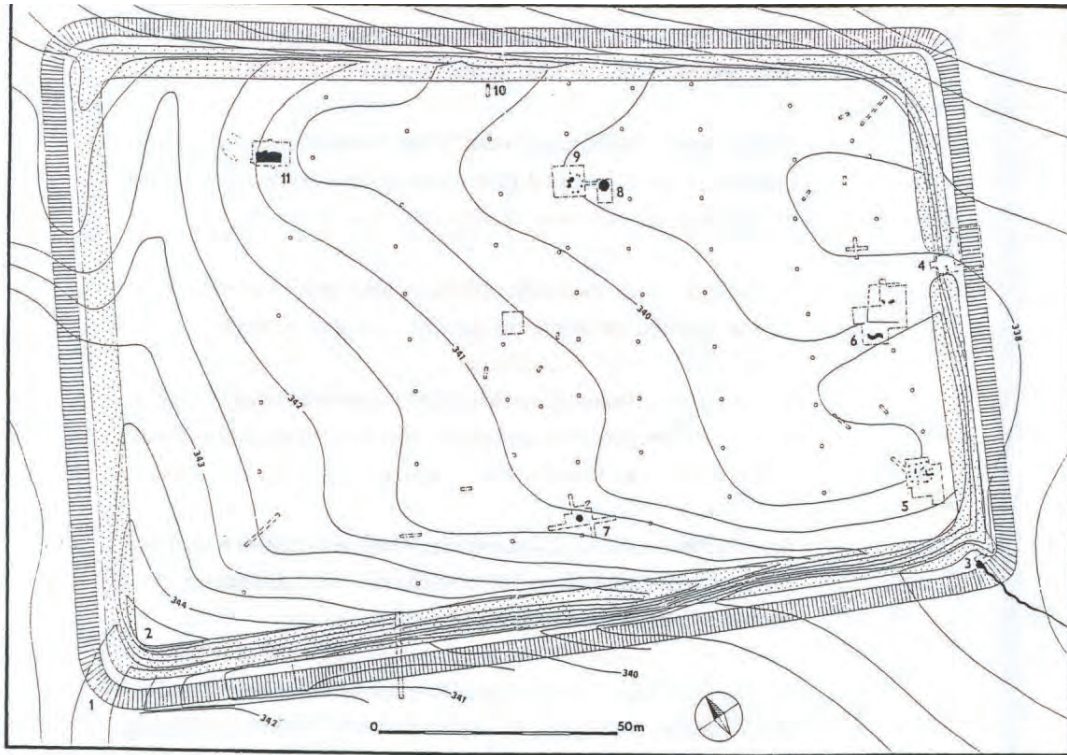


図 54：マルクヴァルティツェの方形土塁 測量図

[出典： Jiří Waldhauser, „Markvartice, okres Jičín, Böhmen, Tschechische Republik,“ S.206.]

マルクヴァルティツェの方形土塁は、北辺 137 メートル・東辺 95 メートル・南辺 190 メートル・西辺 120 メートルであり、東側に入口を持っていた。面積は壁を含めて 1.75 ヘクタールであり、南東側に構造物の痕跡がある。この方形土塁は、一部が居住地に入り込んでおり、生産活動の痕跡が溝のなかにみとめられたり、居住の痕跡も見られる<sup>42</sup>。ヴァルドハウザーは、ボヘミアの方形土塁の事例において、整地されているという環境の点から、それらがケルト人の居住地のすぐ近くにあつて、一部では内部での居住行為もいとなまれていたと推測している<sup>43</sup>。この地域では居住地のすぐ近くに方形土塁が確認される例が多く、一部では内部での居住の痕跡もあったとみられる<sup>44</sup>。

ボヘミアの方形土塁は、世俗の空間と近い場所にあつて、それらは宗教以外にも経済的・社会的な役割を担う構造物として存在し、最初から複合的な役割を有するものであったと考えることができよう。

#### 4 節 小括

本章での考察をまとめよう。

ドイツ南部の方形土塁は、おそらくはボヘミアで造られたものの影響を受け、紀元前2世紀半ばから紀元前1世紀にかけて数多く建造された。これらの建造者は、大きな部族の長であるのか、あるいは小さな農村の住民であるかは、もはやはっきりしない。けれども、そのほとんどが四辺形で、どれもが北以外に出入口を設けていることは、これらの構造物が、ある何かしらの「共通の観念」にもとづいて建造されたことをうかがわせる。

その土壁の内側での活動は、宗教的・社会的・政治的、すべての要素を包括するものであったと考えるべきであろう。宗教儀式のみならず、たとえばマレーの言うように、饗宴などのような「世俗的な儀式」の実施される場であった可能性もある。一部の事例における墳墓との関わりの点では、英雄信仰や祖先信仰とのつながりも示唆される。けれども、すべての事例がこれらの要素を持っていたわけではなく、その役割は多様で、複合的で、場所ごとに異なっていたと考えるのが妥当であろう。方形土塁とは、単純な「聖域」ではなく、宗教・社会・政治すべてを包括する役割を担い、どの要素が色濃く出るかは、立地や構造によって変容するものなのではないだろうか。シュヴァルツの取り上げたホルツハウゼンの事例は、その「宗教的な要素」が強く表出したに過ぎないのではないかと考えられる。

領域を隔てたなかにおいて、神聖なことと世俗的なこと、その両方が執りおこなわれたこれらの構造物は、「神聖な場と世俗的な場の中間の場」として認識されるべきものなのではないだろうか。ほかの地域の聖域とあらゆる点で異なり、異民族の「聖域」にふさわしくない様相を呈しているのは、ドイツ南部のケルト社会独特の宗教観を反映しているのだろう。その独特の観念とは、「“神聖”と“世俗”とが明確に区別されない」というものだったのではないかと考えられよう。

---

【註】

- <sup>1</sup> Natalie Venclová, “Celtic shrines in Central Europe: A sceptical approach,” in *Oxford Journal of Archaeology*, Volume 12, Issue 1, 1993, pp.55-66, p.55.
- <sup>2</sup> Kurt Bittel, Siegwalt Schiek, Dieter Müller, *Die Keltischen Viereckschanzen: Band. 1 Text*, Kommissionverlag Konrad Theiss, Stuttgart, 1990, S.9.
- <sup>3</sup> Günther Wieland (Hrsg.), *Keltische Viereckschanzen: einem Rätsel auf der Spur*, Theiss, Stuttgart, 1999, S.212-216 参照。
- <sup>4</sup> 方形土塁の構造については、Kurt Bittel et. al., *op. cit.*, S.22-54; Günther Wieland, „Bauten in Viereckschanzen,” in Günther Wieland (Hrsg.), *Keltische Viereckschanzen: einem Rätsel auf der Spur*, S.34-53 参照。
- <sup>5</sup> 面積が 1.2ha 以上の土塁の例として、バーデン・ヴュルテンベルクのハルドハイム・ゲリヒトシュテッテン [Hardheim-Gerichtstetten, Necker-Obenwald-Kreis] などが挙げられる。
- <sup>6</sup> Dieter Müller, „Topographische Lage der Viereckschanzen,” in Günther Wieland (Hrsg.), *op. cit.*, S.25-29.  
なおクルート・ビッテルらは方形土塁の立地について、①山の斜面、②尾根、③山の円頂、④窪地、⑤山の鞍部、⑥ 急斜面、⑦共同体の境界 の 7 種類に分けている。Kurt Bittel et. al., *op.cit.*, S.23 参照。
- <sup>7</sup> Matthew L. Murray, “Viereckschanzen and Feasting: Socio-Political Ritual in Iron-Age Central Europe,” in *Journal of European Archaeology*, Volume 3, Number 2, 1995, pp.125-151, p.136.
- <sup>8</sup> Klaus Schwarz, *Atlas der spätkeltischen Viereckschanzen Bayerns*, Blatt.152, 153.
- <sup>9</sup> 土塁のほぼ中央に中世の土葬墓 (1.9×0.9m) があり、身長 1.7m、足を北東側に向けた人骨が安置されていた。  
Günther Wieland, mit Beiträgen von Konrad Dettner et. al., *Die Keltische Viereckschanzen von Fellbach-Schmidlen und Ehningen*, Landesdenkmalamt Baden-Württemberg Konrad Theiss Verlag, Stuttgart, 1999, S.178-179 参照。
- <sup>10</sup> Günther Wieland, mit Beiträgen von Konrad Dettner et. al., *Die Keltische Viereckschanzen von Fellbach-Schmidlen und Ehningen*, S.163-179; Günther Wieland, „Ehningen (Kr. Böblingen),” Günther Wieland (Hrsg.), *Keltische Viereckschanzen: einem Rätsel auf der Spur*, S.147-149; Kurt Bittel et. al., *op. cit.*, S. 153-158.
- <sup>11</sup> Rüdiger Krause, „Esslingen-Oberesslingen (Kr. Esslingen, Baden-Württemberg),” in Günther Wieland (Hrsg.), *Keltische Viereckschanzen: einem Rätsel auf der Spur*, S.130-133; Kurt Bittel et. al., *op. cit.*, S.34-43.
- <sup>12</sup> Martin Schaich, „Die spätlatènezeitliche Viereckschanze von Hartkirchen,” in *AJB*, 1996, S.104-107.
- <sup>13</sup> Richard Ambs, „Erste Ergebnisse der Grabungen in der Viereckschanze von Beuren, Gemeinde Pfaffenhofen a.d. Roth, Landkreis Neu-Ulm, Schwaben,” in *AJB*, 1998, S.62-65 ; Alfred Reichenberger, „Ausgrabungen in der spätkeltischen Viereckschanze bei Pankofen. Stadt Plattling, Landkreis Deggendorf, Niederbayern,” in *AJB*, 1994, S.90-94.
- <sup>14</sup> Dieter Planck, „Die Viereckschanzen von Fellbach-Schmidlen (Rems-Murr-Kreis),” in Günther Wieland, *Die Keltische Viereckschanzen von Fellbach-Schmidlen und Ehningen*, S. 13-21; Günther Wieland, „Fellbach-Schmidlen (Rems-Murr-Kreis),” in Günther Wieland (Hrsg.), *Keltische Viereckschanzen: einem Rätsel auf der Spur*, S.150-152.
- <sup>15</sup> Harald Krause et. al., „Nur noch eine Ecke: Rettungsgrabungen in jünetènezeitlichen Viereckschanze von Wartenberg,” in *AJB 2016*, 2017, S.66-69.
- <sup>16</sup> Natalie Venclová, “Celtic shrines in Central Europe: A sceptical approach,” p.63; Karin Berghausen and Jorg W. E. Fassbinder, “Magnetometry and soil magnetism on Celtic square enclosures in Bavaria, Southern Germany,” in *ArchéoSciences*, 2009/1, no. 33, pp.27-29, p.27.



- 
- <sup>17</sup> Jean-Louis Brunaux, *op. cit.*, pp.12-40; Jane Webster, “Sanctuaries and sacred places,” in Miranda J. Green (ed.), *The Celtic world*, pp.445-464, pp.452-458 参照。  
なおブリュノーはここに「ローマ時代の水辺の聖域」を加え、4つにカテゴライズしている。
- <sup>18</sup> Jean-Louis Brunaux, *op. cit.*, pp.15-24.
- <sup>19</sup> Alfred Haffner, „Allgemeine Übersicht,“ in Alfred Haffner, Sibylle Bauer et. al. (Hrsg.), *Heiligtümer und Opferkulte der Kelten*, Theiss, Stuttgart, 1995, S.9-42, S.21-24.
- <sup>20</sup> 確認されているのはアントルモンとロックペルチューズの2例のみである。
- <sup>21</sup> Klaus Schwarz, „Die Geschichte eines keltischen Temenos im nördlichen Alpenvorland,“ in *Ausgrabungen in Deutschland: Teil I. Vorgeschichte, Römerzeit*, Römisch-Germanisches Zentralmuseum, Mainz, 1975, S. 324-358.
- <sup>22</sup> Günther Wieland, „Holzhausen, Gem. Straßlach-Dingharting, Lkr. München,“ in Günther Wieland (Hrsg.), *Keltische Viereckschanzen: einem Rätsel auf der Spur*, S.194-198, S.195.
- <sup>23</sup> Klaus Schwarz, „Die Geschichte eines keltischen Temenos im nördlichen Alpenvorland,“ S.348-349, S.353.
- <sup>24</sup> Natalie Venclová, “Celtic shrines in Central Europe: A sceptical approach,” p.60.
- <sup>25</sup> Jean-Louis Brunaux, *op. cit.*, pp.36-37.
- <sup>26</sup> Günther Wieland, „Bauten in Viereckschanzen,“ in Günther Wieland (Hrsg.), *Keltische Viereckschanzen: einem Rätsel auf der Spur*, S.34-53, S.49- 53.
- <sup>27</sup> Günther Wieland, “The rural contribution to urbanism: late La Tène Viereckschanzen in southwest Germany,” in Simon Stoddart (ed.), *Delicate urbanism in context: Settlement nucleation in pre-Roman Germany* (The DAAD Cambridge Symposium), McDonald Institute for Archaeological Research, University of Cambridge, 2017, pp. 51-59, pp.51-52.
- <sup>28</sup> Günther Wieland, Monika Doll, „Funde aus Viereckschanzen,“ in Günther Wieland (Hrsg.), *Keltische Viereckschanzen: einem Rätsel auf der Spur*, S.54-67, S.62-65.
- <sup>29</sup> Dieter Planck, *op. cit.*, S.41-44, S.82-84.
- <sup>30</sup> *Ibid.*, S.38-40.
- <sup>31</sup> Matthew Murray, “Viereckschanzen and Feasting: Socio-Political Ritual in Iron-Age Central Europe,“ pp.131-134.
- <sup>32</sup> *Ibid.*, pp.134-135.
- <sup>33</sup> *Ibid.*, p.135.
- <sup>34</sup> マルセル・モース (有地亨訳) , 『贈与論』勁草書房, 2008年, 26-30頁。
- <sup>35</sup> Bettina Arnold, “The Landscape of Ancestors,“ pp.132-133.
- <sup>36</sup> *Ibid.*, p.133.
- <sup>37</sup> たとえばヴィーラントは、紀元前2世紀のケルト人にとって、500年以上前の墳墓は「重要な意味を持たなかった」のではと推測し、アーノルドと正反対の意見を述べる。  
Günther Wieland, „Kultische und profane Funktionsaspekte,“ in Günther Wieland (Hrsg.), *Keltische Viereckschanzen: einem Rätsel auf der Spur*, S.73-80, S.77-78 参照。
- <sup>38</sup> Günther Wieland (Hrsg.), *Keltische Viereckschanzen: einem Rätsel auf der Spur*, S.216 参照。
- <sup>39</sup> Pavel Sankot, “The Celtic population of Bohemia in the fourth century B.C.,” in Venceslas Kruta et. al., *op. cit.*, p.296.
- <sup>40</sup> Megaw, “The stone head from Mšecké Žehrovice. A reappraisal,” in *Antiquity*, 62, 1988, pp. 631-641, pp. 630-631.
- <sup>41</sup> Jiří Waldhauser, „Die keltischen Viereckschanzen in Böhmen,“ in Fitz Jenő (ed.), *The Celts in central Europe*, Székesfehérvár, István Király Múzeum, 1975, S. 235-244, pp. 235-236; Natalie Venclová, “Mšecké Žehrovice, Bohemia: excavations 1979-88,” in *Antiquity*, Vol.63, Issue 238, 1989, pp.142- 146, pp.145-146.
- <sup>42</sup> Jiří Waldhauser, „Die keltischen Viereckschanzen in Böhmen,“ S.238.

---

<sup>43</sup> Jiří Waldhauser, „Die keltischen Viereckschanzen in Böhmen,“ S.241 ; Jiří Waldhauser, „Markvartice, okres Jičín, Böhmen, Tschechische Republik,“ in Günther Wieland (Hrsg.), *Keltische Viereckschanzen: einem Rätsel auf der Spur*, S.208.

## 第3章

### モノから見る信仰のかたち—植物・動物・ヒトをかたどって—

第1章および第2章では、「都市」オッピドゥムの内外の遺構からウィンデリキアのケルト人の信仰のありかたについて考えた。事例数はきわめて僅少であったが、それらには「祖先」や「死者」といった存在への畏敬の場としての役割が持たされていたことをうかがい知ることができた。本章および次章では「遺物」に目を向け、ウィンデリキアのケルト人のうちに渦巻いていた精神世界と、その表現法についてさぐることにする。

#### 1節 信仰における異文化の影響—マンヒングの《崇拝の木》を例にして—

第1章において述べたように、「マンヒングのオッピドゥム」という紀元前120年以降の大きな社会は、少なくとも3つの礎を持っていたと考えられる。ともに土葬墓の「シュタインビーヒェル」と「フンツルッケン」、そして「火葬墓」のそれぞれの墓を有した共同体である。しかし、「都市的な社会」の形成には、もうひとつの別の集団の寄与があった。それが、「移動からの帰還者」たちである。

異郷に押し入ったケルト人のいきさつについては序章のとおりである。パンノニアへ向かった集団は、紀元前279年にデルフォイの劫略を試みた。しかし彼らは地震や悪天候などによって大敗を喫し、敗残兵は散り散りになった。

紀元前3世紀以降のウィンデリキアは、移動に参加せず居住しつづけた者たちの共同体と、外の世界から帰ってきた集団の新しい共同体が共存していた。これら複数の居住地が次第に集約され、いくつかのオッピドゥムを形成するようになったのである。バイエルン地域の古代史研究者ハンス・ペーター・ウエンツ（Hans-Peter Uenze）は、バイエルン地域のケルト社会の都会化は「移動が終わったあとの経済統一の結果」と指摘する<sup>1</sup>。

「移動からの帰還者」の共同体と土着の共同体とが共存するという環境は、人々の精神的な面、とりわけ信仰生活にどのような影響を与えたのであろうか。この問いに対しての答えを与えてくれるかもしれない遺物が、マンヒングのオッピドゥムより出土している。それが《崇拝の木（Das Kultbäumchen）》と呼ばれる、金箔でメッキを施された青銅製品である。

本節では、この《崇拝の木》が紀元前3世紀のウィンデリキアのケルト社会に存在することの意味を、とくに「ギリシアからの影響」という視点から考察する。「帰還者」の存在する状況が、この地域の信仰のかたちにどのような影響を与えたのかを、ひとつの遺物の分析をとおしてあきらかにし、ケルト世界の超自然的な観念が、

社会の仕組みや環境の影響を受けて地域ごとに差異を生み出すものであった可能性を見出したい。

### 1-1) 《崇拜の木》

1984年のマンヒング発掘において、囲壁の中央北寄りの区画（Schnitt 859, Grube 1：縦108cm×横95cm、図55参照）の深さ3.5m地点より、金箔の貼られた複数の金属製品が出土した（図56）。そのうちのひとつは小さな樹木のかたちをしており、発掘者フェルディナント・マイアー（Ferdinand Maier）によって、《崇拜の木（Das Kultbäumchen）》と名づけられている。

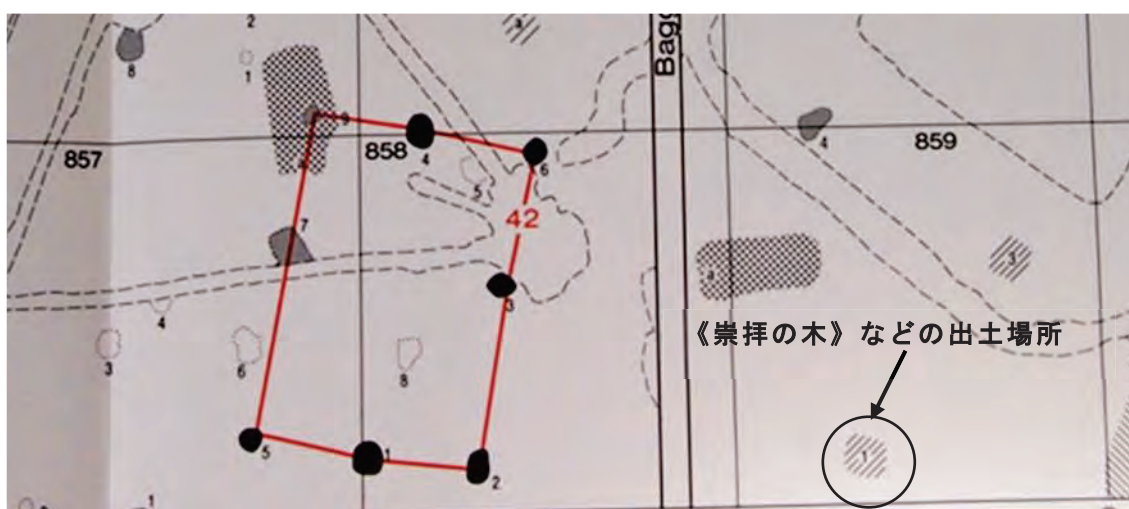


図55：《崇拜の木》の出土場所とその周辺

[出典：Ferdinand Maier, Udo Geilenbruegge, Erwin Hahn, Heinz-Jürgen Köhler, Susanne Sievers, *Ergebnisse der Ausgrabungen 1984-1987 in Manching* (Die Ausgrabungen in Manching Band 15), Franz Steiner Verlag GMBH Wiesbaden, 1992, Beilage 3 より抜粋。]



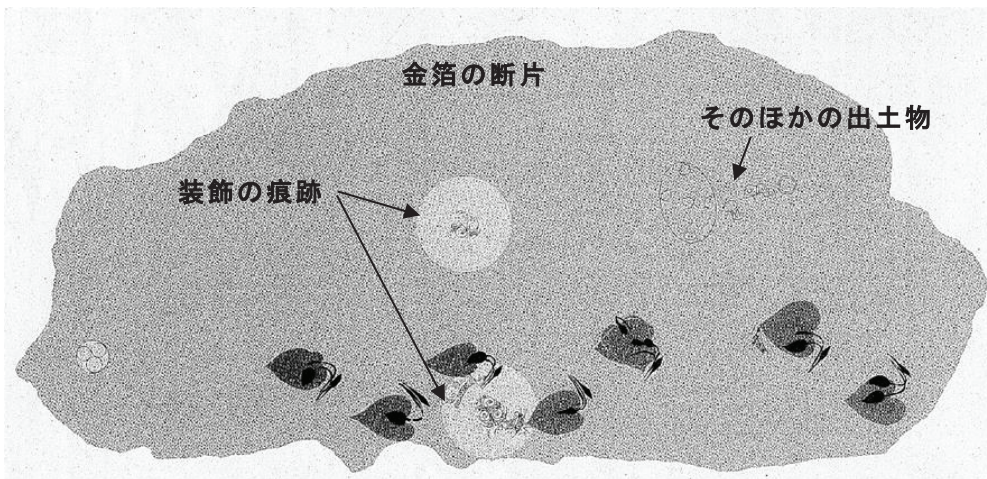
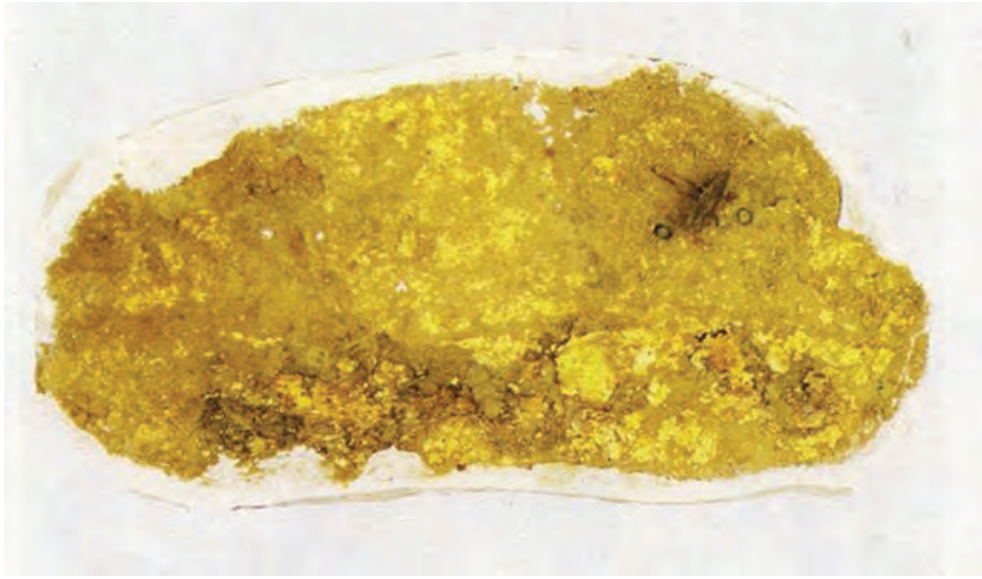


図 56：金箔の断片（上図）と《崇拝の木》などの出土状況（下図）

[出典上：Ferdinand Maier, „Das Kultbäumchen von Manching: Ein Zeugnis hellenistischer und keltischer Goldschmiedekunst aus dem 3. Jahrhundert v. Chr.“ in *Germania*, Bd.68, Nr.1, 1990, S.129-165, S.134, Abb.4.；出典下：*Ibid.*, S.133, Abb.3.]

《崇拝の木》とそのほかの出土物の概要は以下のとおりである<sup>2</sup>。

① 《崇拝の木》（図 57）

《崇拝の木》は高さ 70cm の幹を持つ。幹の中央あたりから、長さ 16.5cm の枝が 1 本伸びている。そして、葉・つぼみ・果実が 3 つひと組となったものが 9 つ、6.5cm 間隔で生え、そのうちひとつは枝についている。

幹は直径 1.6cm の青銅の芯に、厚さ 0.01～0.06mm の金箔が貼られ、そこに環状の装飾が型押しされる。9 枚の葉はハートのかたちをし、厚さ 0.2～0.3mm の青銅製である。長さ 4.8cm、幅最大 4.4cm で、葉を覆う金箔は厚さ 0.01～0.03mm である。

垂れ下がった葉の陰から、金メッキされたつぼみが生えている。果実は平たく長い楕円形で、木製の核を有し、もっとも大きいもので長さ 21.5mm、幅 14.5mm である。



図 57 : 《崇拜の木》(左は復元)

[出典 : Ferdinand Maier, „Eiche und Efeu: Zu einer Rekonstruktion des Kultbäumchens von Manching,“ in *Germania*, Bd.79, Nr.2, S.297-307, S.299, Abb.1.]

### ②金箔の破片 (図 58)

幅 40cm、厚さ 0.01~0.06mm の大きな金箔の破片は、《崇拜の木》を納めた小箱のものだったようだ。それには、幹に貼られた金箔と同じように、直径約 3.5mm の環の装飾が型押しされている。一部には、環が 3 つ絡み合った「トリスケル」という、ケルト美術において特徴的な文様をかたちづくる箇所もある。

### ③その他の出土品 (図 59)

そのほか細かな出土品として、鉄製のリベット (留め針)、青銅製のリング、青銅

製のかぎ金具、布の断片、木製の核が出土している。



**図 59：そのほかの出土品** [出典：Maier, „Das Kultbäumchen von Manching,“ S.150, Abb.15.]

リベット（図 59 の 1）は画びょうに似た形状である。全体の長さは 7.1cm、針の先は折れ曲がっている。上部の円盤は直径 7.5cm、厚さ 1mm で、直径 6～8mm の小さな球形の金属が 5 つ、ボタンのようについている。これは各部品を結合させるネジのような役割をしたと考えられる。リングは 2 個出土しており、太さ 6.8 mm の青銅の針金を直径 18mm の大きさに丸くしたものである。青銅製のかぎ金具は、金具部分の幅が 2.5mm である。

これらの鉄のリベットと青銅のリング、そして青銅のかぎ金具は、もともとひとつの部品だったようである（図 60）。《崇拝の木》を用いる際に何か補助的な役割をする道具であったと考えられている。



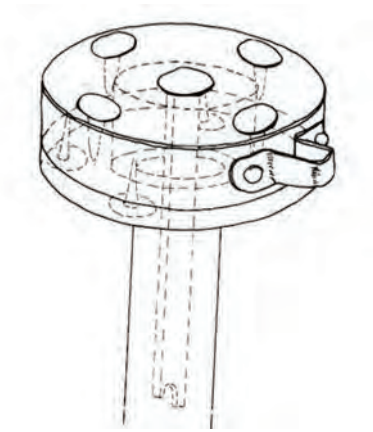


図 60 : 《崇拝の木》の補助金具（想像図）

[出典 : Maier, „Das Kultbäumchen von Manching,“ S.152, Abb.17.]

布の断片（図 59 の 2）は長さ 1.9mm、幅 1.1cm で、《崇拝の木》を納めた小箱を縛るひも的一部分であると推測される。木製の核（図 59 の 3）は《崇拝の木》の果実の芯にあたり、長さ 1.2cm、最大幅 0.7cm である。

以上が《崇拝の木》、およびそれに付随する出土品の概要である。樹木をかたどり、収納用の小箱にまで金箔を貼られたこの豪華絢爛な遺物—芸術的作品—の役割とは、いったい何だったのだろうか。

### 1-2) マイアーの注目点

《崇拝の木》は、その奇異さにも関わらず詳細な研究は少ない。現在ある 4 編の主要な論考は、すべてこの遺物の発掘に携わったフェルディナント・マイアーによるものである。本項ではマイアーの 4 編の論文での考察を取り上げ、《崇拝の木》について彼が注目する 3 つの点を紹介したい。

#### ① 「技術的な源泉」としてのギリシア植民市

マイアーは《崇拝の木》の技術的な起源をイタリア半島南部に求める。

古代、イタリア半島南部はマグナ・グラエキア [Magna Graecia] と呼ばれるギリシア人の植民市であった（図 61）。マイアーは、《崇拝の木》にもちいられた金メッキの技術は、このマグナ・グラエキアの金細工技術に影響を受けたものだと主張する<sup>3</sup>。その根拠として彼が注目したのが、マグナ・グラエキアのタレントウム [Tarent] で生み出された金細工品である。彼によれば、タレントウムの墓地で副葬品として出土した金メッキの花冠に、《崇拝の木》との類似性が見られるという。





図 61：タレントウム（図内○印）

[出典：リチャード・J. A. タルバート編（野中夏実，小田謙爾訳），『ギリシア・ローマ歴史地図』，原書房，1996年，84頁。]



図 62 : タレントウムの花冠

[出典 : Ferdinand Maier et. al., „Manching und Tarent: Zur Vergoldungstechnik des keltischen Kultbäumchens und hellenistischer Blattkränze,“ in *Germania*, Bd. 76, Nr. 1, 1998, S. 177-216., S. 181, Abb.2.]

タレントウムの花冠（図 62）は、青銅に金箔を貼ってつくられている。透かし彫りのされた長さ 31.5cm のカチューシャのような頭飾りに、ハート型のキツタの葉と、丸い果実がとりつけられたデザインである。

青銅や赤銅に金箔を貼る技法は、紀元前 4 世紀後半から紀元前 2 世紀前半にかけてタレントウムで主流であった。紀元前 3 世紀後半からはメッキではなく、純金に装飾を施した花冠も作られたが、金箔でメッキされた花冠はそれと遜色ない見目で製作されつづけた<sup>4</sup>。芸術的な「ギリシア、マケドニア、アレクサンドリア、ステップ地帯の領域との関係の出発点<sup>5</sup>」、すなわち金細工の技術や様式の源としてのタレントウムの花冠は、一方ではアレクサンドリアの装飾品の冠に、そしてもう一方ではアルプスの北の《崇拜の木》に影響を与えたのだとマイヤーは述べる。

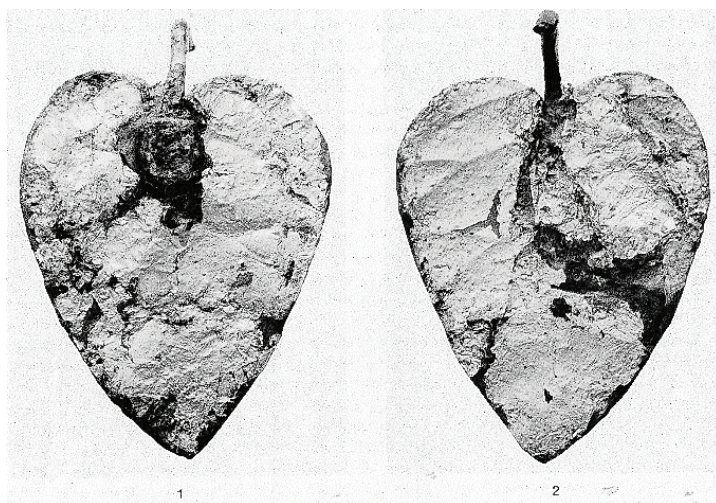


図 63 : 《崇拝の木》の葉 (右は裏面)

〔出典 : „Das Kultbäumchen von Manching: Ein Zeugnis hellenistischer und keltischer Goldschmiedekunst aus dem 3. Jahrhundert v. Chr.“ S.142, Abb.8.〕

ただし、《崇拝の木》にはタレントゥムの技術がそのまま適用されたわけではなかった。本来のタレントゥムの花冠では、葉、つぼみ、そして果実は冠のカチューシャ部分にゆるく取り付けられているだけだが、《崇拝の木》においては、それらは幹に「土着の鋳留め技術で」しっかりと留められており<sup>6</sup>、さらに幹の部分にはケルト世界独特のトリスケルが型押しされている。つまり、マイアーの言い方を借りるならば、金細工の技法という「ギリシア・地中海的要素」と、環状の装飾という「土着・ケルト的要素」とがこの樹木のオブジェのなかで組み合わせられているのである。したがって、この芸術品がイタリアの技術やギリシアの装飾の概念に精通した人物—それがギリシア人かケルト人かは、もはや分からない—の手によって作られたものであると、マイアーは指摘する<sup>7</sup>。

## ②マンヒングのオッピドゥムにおける《崇拝の木》の重要性

技術面における《崇拝の木》とタレントゥムの花冠とのつながりは濃厚であるが、タレントゥムの花冠の製造年代が《崇拝の木》よりも半世紀ほど遅いものであるにもかかわらず、そのモデルとされている<sup>8</sup>ことには注意をはらわねばならない。

マイアーは《崇拝の木》の製造年代を、幹に型押しされた環状装飾の様式から、紀元前3世紀初期としている<sup>9</sup>。《崇拝の木》とその他の遺物の出土場所付近(図55参照)は、それが埋められていた縦穴を除いて、紀元前2世紀後半に用いられた。マイアーは、《崇拝の木》は紀元前3世紀半ばから紀元前2世紀後半まで使用され、何らかのきっかけで使用されなくなったときに、縦穴に「意図的に」埋められたのではないかと推測している<sup>10</sup>。

ともかく、《崇拝の木》が製作され、使用された年代が、ケルト人が「帰還」した時期とほぼ重なっていることは注目してよいだろう。



また彼の主張では、《崇拝の木》はケルトの樹木信仰に関係するものであり、一緒に出土したリベット、リング、かぎ金具を取りつけることで、儀式の際にその場の地面に突き立てられるか、あるいは持って歩かれる道具であった、とされている<sup>11</sup>。

### ③装飾の様式におけるギリシアの影響：「キヅタ」のモチーフ

2001年の修復と復元<sup>12</sup>（図57参照）によって、《崇拝の木》にあらわされたモチーフは、オークの木とその幹に絡みつくキヅタの葉であることが明らかになった。

「キヅタ」は元来、ギリシアの信仰において重要な意味を持っていた。ハート型や三又の形のキヅタの葉は「ディオニュソスに関連すると解釈される」もの、ないしは紀元後1世紀のローマ人作家マルクス・アンナエウス・ルカヌスの記述においてエロス神のアトリブトとされるものであり、それ自体が神聖なのではなく、「神の付属物」であるがゆえに重要視されていたという<sup>13</sup>。

タレントゥムの花冠は、埋葬の副葬品として製作されたものであり、そこにもキヅタのモチーフがあしらわれている。《崇拝の木》にあしらわれたキヅタの葉のモチーフは、技法的なモデルであるタレントゥムの埋葬の花冠に表現されたキヅタのモチーフを拝借した可能性が高い<sup>14</sup>。そして、キヅタはギリシア世界においてはディオニュソス神と結びつくものであり、とくにイタリア半島においては埋葬と関連づけられるものであった。

《崇拝の木》には、技法や様式の面でイタリア半島に展開したギリシア世界からの強い影響の痕跡が看守できるというのが、マイアーの主張である。また彼は、この作品の制作者がタレントゥムの様式において「キヅタ」に込められる意味を理解していたかもしれないとも述べる<sup>15</sup>。

しかし、①《崇拝の木》そのものにどのような「信仰上の意味」が持たされていたのか、②その「意味」のうちまでギリシア文化の影響はおよんでいたのか、そして、③影響がおよんでいたとするならばそれはどのようなものなのか、という点については、マイアーはほとんど触れていない。外見上にこれだけギリシア文化の影響が確認されるのであれば、《崇拝の木》が利用される状況、すなわち「信仰」のコンテクストにおいてもギリシアからの影響が少なからずあったと考えることは、自然なことではないだろうか。

次項では《崇拝の木》にあしらわれたモチーフ、「オーク」と「キヅタ」の宗教的な意味の分析を行ない、この時代、紀元前3世紀のウィンデリキアにおけるケルト人の宗教的観念について、さらなる考察をくわえたい。

#### 1-3) 《崇拝の木》の神聖性——そのケルト的側面とギリシア的側面——

《崇拝の木》のモチーフである、キヅタの巻きついたオークの木。この「オーク」と「キヅタ」という2種類の植物が持つ宗教上の意味は何だろうか。以下では古典文献や図像史料の考察から、その意味をひもといていきたい。

本題に入る前に、《崇拝の木》の役割についての確認をおこなう必要がある。マイアーは、《崇拝の木》をケルトの「樹木信仰」に関係する道具であるとしており、筆



者もその見解にある程度則ったうえで、本項での議論を進める。けれども、《崇拝の木》が本当に「樹木信仰のための道具」であったのかを証明することはできない。ケルトの宗教的観念において、「樹木」がどれほどの位置を占めていたか、考古学的に明確にすることは難しい。

古典においては、樹木はケルトの宗教において重要な位置を占めるものだとみなされた。ケルトの聖職者「ドルイド」やその信奉者は木立や森を好み、そのような暗く、鬱蒼とした場所に籠り、残酷な神に対して生贄を捧げるのだと、ルカヌスは『内乱記』のなかで述べる<sup>16</sup>。しかしながら、木立や森林とドルイドとの関連づけは、すべて紀元後1世紀以降のローマ人作家による過剰な強調が原因であるとして、近年ではあまり重要視されることはない。ケルトと森林の関連づけに否定的な見解を示す研究者のひとりジェーン・ウェブスター（Jane Webster）は、紀元後1世紀に「ドルイド」と「森」とが強くむすびつけられたのは、ローマによる征服後に、皇帝によって迫害されたドルイドやドルイディズムの信奉者が都市部から追いやられ、森の奥深くなど人目のつかない場所へ移動し、儀式のありかたが変化した結果にすぎないと指摘している<sup>17</sup>。

ケルトの信仰における樹木の重要性は、古典文献で述べられているほどのものではなかったと考えるのが妥当であろう。そのことを念頭に置いたうえで、《崇拝の木》のモチーフである「オーク」と「キヅタ」の象徴的な意味を考えていきたい。

#### ① オーク<sup>18</sup>

オークはケルト世界全体で一般的に自生する樹木であり（図 64）、ケルト人の生活に密着したものであった。木そのものは丈夫なために建材としてもちいられたほか、果実であるドングリは冬の間食糧や家畜の餌となり、樹皮は染料や薬になった。

このようにケルト人にとって身近であり、汎用性の高かったオークは、「神聖な樹木」ともみなされたようである。プリニウスの『博物誌』においてオークと関連付けられたのが、ケルトの聖職者「ドルイド」とその儀式である。プリニウスによると、ドルイドはヤドリギに寄生されたオーク（カシ）の木をことのほかうやまい、うやうやしくそのヤドリギを切り落とし、そしてオークの木の前で牡牛を屠ったという<sup>19</sup>。「カシの木に宿っているものはすべて天から送られたもの」であり<sup>20</sup>、神から与えられた霊力が宿っていると考えられたからである。オークに宿っていた霊力とは、その樹皮が実際に薬として使われたことから分かるように、「癒し」の力であった。

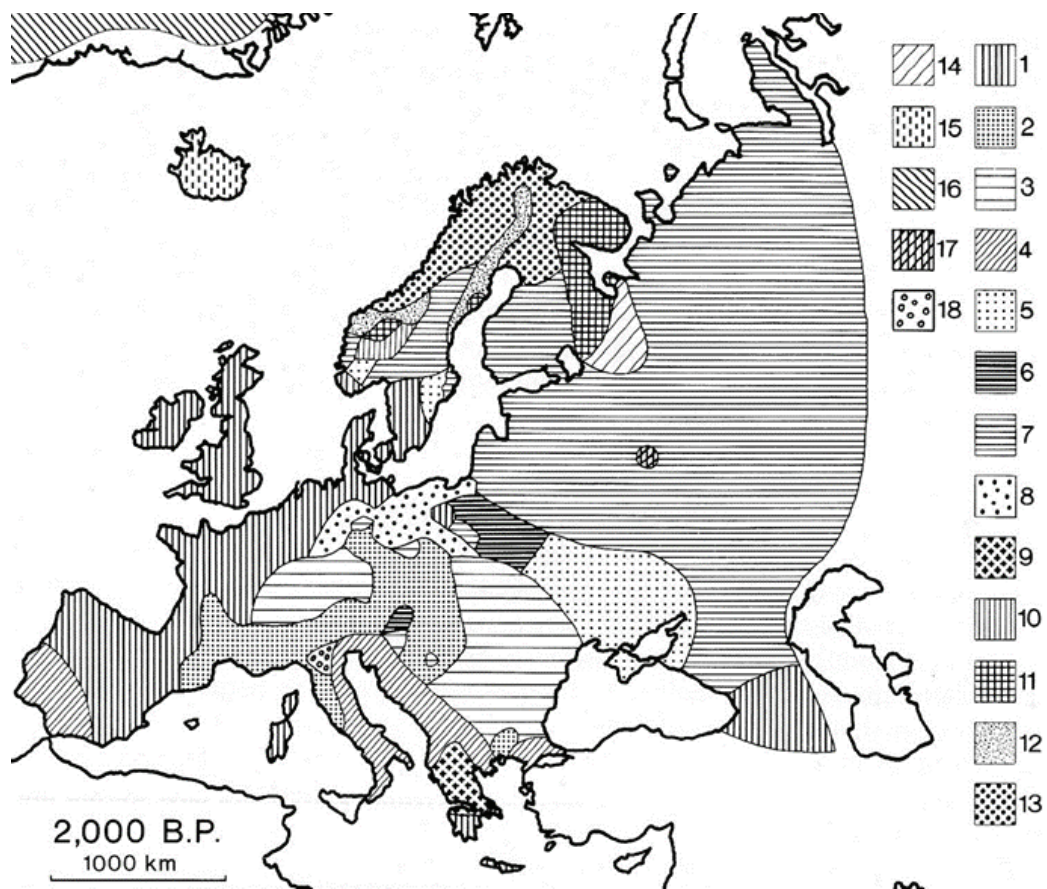


図 64 : 古代ヨーロッパの植生

[出典 : Martin Bell, "People and nature in the Celtic world," in Miranda J. Green (ed.), *The Celtic world*, pp.145-158. p.148, Fig.9.1.]

- |                               |                      |                   |
|-------------------------------|----------------------|-------------------|
| 1...ハシバミ、オーク、ハンノキ             | 2...オーク、ブナ、アカザ       | 3...ブナ、トウヒ、シデ     |
| 4...オーク、マツ、ブナ                 | 5...ハシバミ、オーク、ニレ      | 6...マツ、アカザ        |
| 7...トウヒ、マツ、カバノキ、ハンノキ          | 8...オーク、ハシバミ、牧草      |                   |
| 9...オーク、アカザ、Ostrya (カバノキ科の植物) | 10...マツ、カバノキ、アカザ、オーク |                   |
| 11...トウヒ、マツ、カバノキ              | 12...マツ、カバノキ、ハンノキ    | 13...カバノキ、マツ、ハンノキ |
| 14...マツ、カバノキ                  | 15...カバノキ、ヤナギ、ネズ、ヒース | 16...大氷原          |
| 17...トウヒ、セイヨウボダイジュ、ニレ、カバノキ    | 18...マツ、ブナ、硬葉植物群     |                   |

また、ケルト語の研究者ザビーネ・ハインツ (Sabine Heinz) は、ケルトの装飾という視点から、オークの持つ意味を次のように指摘する。すなわち、オークの果実であるドングリは生で食されるときには、食した者に意識の変調をもたらした。そのようなオークは「知識を獲得し、情報を得、鼓舞させ、現実逃避させ、勇気と自己認識を得ることを助ける<sup>21</sup>」意味を持った。ハインツの指摘によるならば、オークの木は「癒し」のほかに、「陶酔」の力も有していたと考えられる。ケルト人にとっ

てオークは、浮世離れの感覚や、癒しの力を与えるものと信じられていた。以上のことから、《崇拜の木》にあらわされたオークが、ケルトの信仰において重要な樹木であり、その意味は「陶醉」や「癒し」などであった可能性があることが分かる。

しかしながら、オークにそのような「癒し」や「陶醉」の霊力を与えた存在、つまり、オークとむすびついた神性が何であったかについてはあきらかではない。ケルト世界において、オークの木と神性との関連づけが確認されるようになるのは、ローマ支配以降の紀元後 1 世紀である。その役割をになったもののひとつは、ローマの雷神で、オークを聖木とする「ユピテル」であった。

紀元後 1 世紀以降、ガリアの一部やライン川周辺、属州ラエティア西部において、《ユピテルの巨大柱 (Jupitergigantensäulen)》と呼ばれるものが多く造られるようになった。《ユピテルの巨大柱》は、その頂に、外套をたなびかせ、雷霆を振り上げるユピテル神の騎馬像を載せている。柱本体には、鱗模様やブドウの蔓の模様、そしてオークの葉の模様が刻まれる。また、その台座の 4 面にはユノ神、メルクリウス神、ヘラクレス神、ミネルウァ神がそれぞれえがかれた (図 65)。



図 65 : ユピテルの巨大柱

[出典 : Roland Gschlöbl, *Im Schmelztiegel der Religionen: Göttertausch bei Kelten, Römern und Germanen*, Verlag Philipp von Zabern, Mainz am Rhein, 2006, S.41.]

この巨大な柱の芸術は、イタリア半島ではほとんど知られていない。ローランド・グシュリュースル（Roland Gschlöbl）によれば、これらの巨大柱は現地の土着の信仰の伝統、つまりケルトやゲルマンのそれらがローマの宗教に融合してできたこの土地独自のものであった<sup>22</sup>。

さらに、グシュリュースルによれば、この柱の主役「ユピテル」には、ケルト土着の神、「タラニス」も糾合されているという。「タラニス」はケルトの雷神、ないし戦争の神である。ルカヌスの『内乱記』においては「スキュティアのディアナと同じくらい慈悲のない」神とされる<sup>23</sup>。この神性は馬の頭などが象徴とされ、ケルト人部族の金貨にもその姿が描かれているのが確認される<sup>24</sup>ものの、本来オークとは



関係がなかったようである。けれども、ガロ・ローマ文化の形成されたなかで、「雷神」という共通の要素がタラニス神とユピテル神とをむすびつけた。そして、ユピテル神を仲立ちとして、その延長としてタラニス神と「オーク」がむすびついた。つまり、それまで明確な神性を有さなかったケルトの「オーク」が、ユピテル神とのむすびつきによって、初めてひとつの神性と結びついたのである。

したがって、《崇拜の木》が製作された当時においては、オークの木は特定の神性と結びつくものではなかった可能性が高い。とはいえ、その後オークに払われた敬意からは、すでにケルト人たちにとって、木そのものとして神聖な存在とみなされていたことは、十分に考えられる。

## ②キヅタ

キヅタはもともと、ケルト世界において神聖性を強調される植物ではなかった<sup>25</sup>。けれども、《タレントゥムの花冠》との結びつきから、この植物が描かれたと考えられる。《タレントゥムの花冠》にはキヅタの葉があしらわれ、それがギリシア世界においてディオニュソス信仰と関連づけられるものであったことは先に述べたとおりある。ゆえに《崇拜の木》のキヅタも、同じようにディオニュソス信仰と関連する可能性が出てくる。そこで、以下ではこのディオニュソス信仰の意義に重点を置いて議論を進めていく。

バッコスとも呼ばれるディオニュソスは、ギリシアの葡萄酒、植物、豊饒、演劇の守護神などとされ、その信仰においてキヅタやブドウがアトリブートとされる。ディオニュソス信仰とその信者については、紀元前5世紀のギリシアの作家エウリピデースの悲劇『バツカイ』に記述がある。彼はそのなかでバツカイ（ディオニュソス信者）たちの姿を次のように描いている。

セメレーを育んだテーバイよ、木ヅタの蔓で 頭を飾れ。  
はじけんばかりに 精気をみなぎらしめよ、  
美しい実をつける 常緑のミーラックス [サルトリイバラ] で。櫛の枝や 櫛の枝  
をかざして  
バッコスの力に支配されよ。 斑の子鹿の皮を身にまとい、  
白い羊毛を縫り、房で飾った帯を締めろ。しかし  
暴力を宿すウイキョウの杖を扱うにあたっては 謙虚であれ。・・・

(第2ストロフェー 105~113)<sup>26</sup>

ディオニュソス崇拝に関する記述としてアテナイオスの『食卓の賢人たち』のなかにも、プトレマイオス王朝でのディオニュソス崇拝の儀式に関する一節がある。

ディオニュソスの祭りの行列では、行列の先頭を行って、群衆が飛び出してこないように制止するのはシレノスたちで、紫あるいは赤紫の短外套(クラミュス)を

羽織っている。この次に続くのはサテュロスたち。競技場の各隅に二〇人ずつで、金のきづたの葉で飾った松明を持っている。そのあとが金の翼をつけた勝利の女神たち。この女神たちは、金でこしらえたきづたの葉で飾られた、長さ六ペキュス〔約二・六メートル〕に及ぶ香炉を持っている。・・・

(第5巻 197) <sup>27</sup>

エウリピデースがえがくのは一部のディオニュソス信者のすがたであり、彼ら全員がこのような状況であったわけではない。けれども、この描写からは、ディオニュソスに幻惑された人々が、さまざまな植物を身にまとわせて、その力に支配されたことがうかがえる。また、アテナイオスの記述においても、ディオニュソスの祭典行列において金のキヅタが重要な装飾品となっていたことが分かる。キヅタの蔓で編んだ冠などを身に着けることは、ディオニュソス信者のあかしのひとつであったと考えられる。ディオニュソスとキヅタは強く結びついていたのである。キヅタを頭に巻きつけたディオニュソスの信者たちは、憑依状態におちいって、常軌を逸した行動にふけたという。『バツカイ』においては、ディオニュソスにまどわされた女・アガウエー（ディオニュソスの母セメレーの姉）とその仲間が、彼女の実の息子ペンテウスを、獅子と見紛って生きたまま八つ裂きにする描写がある<sup>28</sup>。これは事実ではないにしても、信者たちは大酒を飲み、性的な行為を含む乱痴気騒ぎを繰り広げたと考えられる。ディオニュソス研究の大家アンリ・ジャンメール（Henri Jeanmaire）は、この神への信仰を「肉体の興奮状態の中に喜びを求めることを目指す」宗教と表現する<sup>29</sup>。

奔放で活力にあふれ、そしてしばしば気狂いを引き起こす神の象徴として、キヅタのツルとその葉が選ばれた。キヅタの葉はつねに青く、上へ上へと延びて生い茂る。その姿は「強い生命力」や「活力の漲り」を象徴するものであった<sup>30</sup>。

ところが、イタリア半島では事情が少し変化する。ギリシア本土では精力漲る存在のディオニュソスであったが、マグナ・グレキアでは墓地でその象徴がみられるようになった<sup>31</sup>。《崇拝の木》のモデルとなった「タレントゥムの花冠」も、埋葬と関係する。もし、《崇拝の木》のキヅタがマグナ・グレキアのディオニュソス信仰との関連性を有するのであれば、そのキヅタは埋葬における意味を有していたはずである。「死」の脈絡において「キヅタ」と「ディオニュソス」が意味することとは、いったい何だろうか。

キヅタ以外のディオニュソスの象徴に目を向けると、その意味が明確になってくる。ここでは、ヨハン・ヤーコプ・バハーフエン（Johan Jacob Bachofen）の研究にしたがって、イタリアにあるヴィツラ・パンフィーリの墳墓絵画（図 66）におけるディオニュソスにまつわる図案の意味を見ていきたい。

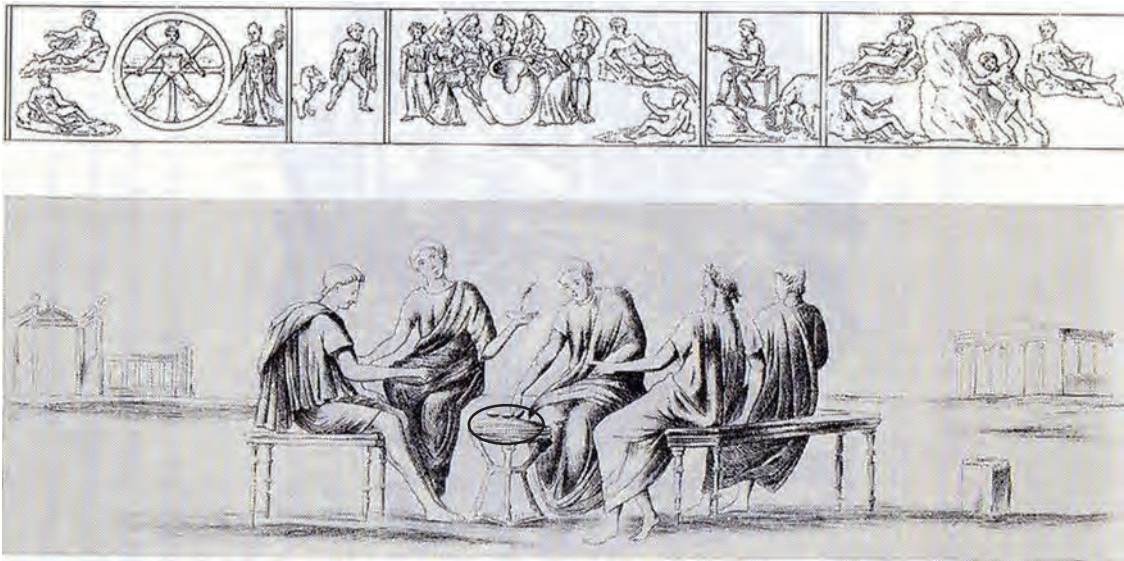


図 66：ヴィッラ・パンフィーリの墳墓絵画

〔出典：ヨハン・ヤーコプ・バハオーフェン（平田公夫、吉原達也訳）、『古代墳墓象徴試論』、作品社、2004年、611頁。〕

ヴィッラ・パンフィーリの墳墓絵画（図）は紀元前1世紀後半に描かれたとされる。この絵画では、若者5人が座る中央にあるテーブルの上（図13〇印）に、3個の卵が置かれている。この「卵」は、バハオーフェンによれば、埋葬と結びつくディオニュソス信仰の象徴であった。

「卵」は、1個のなかで白と黒の2色に塗り分けられている。この色分けは単純に、白は「生」、黒は「死」をあらわすものとされる。あるいは、白は「靈魂がより高次の状態へ移行するため」の肉体の消滅の際に身につけられる色ともされ、「清祓」としての意味も持つ<sup>32</sup>。ひとつでふたつの相反する色を有するディオニュソスの「卵」は、「生」と「死」の両方を兼ねそなえ、「死から生への永遠の転変」を象徴し、「生と死をその内に含み、両者を分ちがたく統一」するものであった<sup>33</sup>。「死から生への永遠の転変」とは、すなわち「転生」である。

さらに、「卵」に関してはもうひとつの意味が挙げられている。オルペウス・バッコス教において、「卵」は「すべての生命を自ら光のもとへ生み出す事物の物質的な始源」であり、一心同体のものである「生」と「死」をあらわすものでもあった<sup>34</sup>。つまり、「死」や「埋葬」と関連づけられるディオニュソスは、すべてを生み、生み落としたそのすべてを再び自らのなかに取り込む「万物の母」のようなものとして、その女性的な側面が強調されるのである。

「卵」以外のディオニュソスと関連する象徴も、同じような意味を有した。ヴィッラ・パンフィーリの墳墓にえがかれたものとして、「ミュルテ（ギンバイカ）の冠」がある。「ミュルテの冠」も、ディオニュソス信仰の秘儀参入のしるしのひとつであると同時に、「すべての大地の被造物の原母たるアプロディテ・ウェヌス」への捧げ

ものであると、バハオーフェンは主張する<sup>35</sup>。

「アプロディテ・ウェヌス」、すなわち「すべての母」への捧げものを秘儀参入のあかしとしていることは、その信仰が、結果的に男性的＝授精的なディオニュソスの、そのうちに秘めている「母なるもの」への礼讃を目的としていることをしめす。そして「母なるもの」は、生むことと死を永遠に繰り返すのである。

バハオーフェンの主張を考慮すると、以上のような背景を持つがゆえに、埋葬や死者崇拝のコンテクストにおいては、ディオニュソスそのものや彼への信仰、そして象徴は、女性的な側面が強調されており、そのなかでは女性的な生産や受胎、再生の意味が持たされていたといえる。時代は異なるが、同様に埋葬の脈絡で製作された《タレントゥムの花冠》にえがかれたキヅタも、ディオニュソスが有した女性的な「再生」、あるいは「転生」という意味合いを有していた可能性が高い。

以上のことを踏まえると、《タレントゥムの花冠》をモデルとしたと思われる《崇拝の木》のキヅタは、ディオニュソス信仰における本来の意味である「活力」や「繁栄」のほかに、死者崇拝の脈絡でそれが強調する「再生」の意味も有していた可能性がある。

#### 1-4) 小括

イタリア半島のギリシア世界に影響を受けたマンヒングの《崇拝の木》は、金メッキの技術面だけでなく、その象徴上の意味においても「ケルト」と「ギリシア」という2つの世界の思想の混交が見られる存在であった可能性がある。それはすなわち、芯であるオークの持つケルト的な「癒し」、あるいは「陶醉」の力と、それに絡みついたキヅタの持つディオニュソス信仰の脈絡での「活力」あるいは「繁栄」、そしてタレントゥムなどにおいて強調される「再生」の意味合いの融合が起こっていたということである。

ところで、プリニウスが記しているように、ケルト世界においてオークに宿るものとしてことのほか崇められるのが、「ヤドリギ」である。ケルト的ではない「キヅタ」が「オーク」に絡みつくことは、ケルト的であると考えられる「ヤドリギ」がそれに寄生することと、どのような違いを生むのであろうか。

「ヤドリギ」は、寄生した木が葉を落としたあとも、つねにその緑色をたもつ。そして、その樹液が持つと信じられていた薬用効果から、多産のための万能薬であるとも考えられていた<sup>36</sup>。「繁殖」や「多産」をもたらすための「ヤドリギ」と、「再生」あるいは「復活」を意味する「キヅタ」。この2つの意味合いは、一見して似ているようだが、キヅタを絡みつかせることによって、棺桶として使用されることもあった「オーク」の「死者崇拝的な側面」を、よりいっそう際立たせていると考えることができる。



## 2 節 図像表現に見るウィンデリキアの象徴的観念—ケルトの動物の神聖性—

《崇拝の木》の存在は、ウィンデリキアのケルト社会において、移動によってもたらされた異文化が根つき、オッピドゥム社会の産業—とくに、手工業—をより洗練させていたことをうかがわせる証左であるといえよう。

しかし、そのように手工業の技術が洗練されていった一方で、いまだオッピドゥムは農耕と牧畜を主体とした社会であった。ケルト社会の牧畜は、「原始的な牧畜のあり方の最終段階<sup>37)</sup>」だった。同時代のギリシアやローマとは異なり、種の複雑な掛け合わせのおこなわれていない、小規模で素朴なものであった。家畜にされた動物はブタやウシ、ヒツジやヤギ、そしてウマとイヌで、それに少々の家禽がいたことが分かっている<sup>38)</sup>。飼われていた動物からは、紀元前 2 世紀ころのケルト人が、定住・農耕社会に適するかたちの牧畜を形成していたことがうかがえる。彼らの主食はブタであり、耕作の動力や乳を得るためにウシを飼育し、まれにおこなわれる狩猟の相棒や、愛玩動物としてイヌが彼らのそばにいた。このような、動物のケルト社会における重要性や、人々と動物の親密性によって、さまざまな動物の像が生み出された。むろん、それらのなかには、神聖な意味合いを持つものも数多く存在している。

本節では、2 種類の「動物を模した出土物」を手掛かりとして、実社会での状況と照らし合わせながら、ウィンデリキアのオッピドゥム社会における動物にあてられた神聖性や役割についての検討を試みる。

### 2-1) 美術装飾と神話文学に見る「ケルト世界と動物」

本題に入る前に、考古学以外の視点、とくに美術装飾と神話文学において表れる「動物」について概観してみよう。

#### 2-1-1) 美術

動物をかたどった小像の制作は、初期青銅器時代よりおこなわれた。それらは副葬品として作られ、「ブタ」ないし「イノシシ」や「ウシ」、「イヌ」などがモチーフとなった。なかでも「アヒル」のような「水鳥」のモチーフは、水源信仰や太陽信仰と関わりを持つ、ケルト人以前の時代からの図像として、あらゆる品にほどこされている<sup>39)</sup>。そのほか、ギリシアやオリエントに由来する品や、あるいはそれを模倣したものに見られる、ペガサス、ドラゴン、グリフィンなどの「空想上の動物」のモチーフもある。

このような動物の描写は、時代をくだるにつれて様式化されていく。オーストリアのハルシュタット出土の鉢における「牛の親子」のモチーフは、母牛と、その後ろを追って把手をのぼってくる子牛が、きわめてシンプルに描出されて配置される。動物のモチーフは、紀元前 5 世紀以降、人間の顔と動物の顔や姿の混ざり合ったような、奇怪で不思議な様式に吸収されていく。この様式は「ヴァルトアルゲスハイム様式」などと呼ばれ、ライン河中流地域を中心に発展する<sup>40)</sup>。

ローマ文化とのかかわりがより密接になった紀元前1世紀後半以降も、元「ケルト」であった地域では、土着の文化を遺した動物像が作製された。それらの主題はあいかわらず「イノシシ」や「クマ」、「ウシ」、そして「イヌ」などである<sup>41</sup>。そのいっぽうで、それまでには存在しなかった—あきらかにローマの影響を受けたものとしての—半身半獣の像も登場しはじめた<sup>42</sup>。

## 2-2-2) 文学

ケルト人と動物の関わりについては、島嶼に伝わる神話文学にも遺されている。ここにおける「神話」とは、アイルランド語およびウェールズ語による口伝えの物語が、紀元後12世紀以降、つまりこれらの地域がキリスト教化してから、修道士たちによって文字化されたもののことを指す<sup>43</sup>。そのため、純粋に「ケルト」のものとして認めることはできない部分があることは考慮せねばならないが、これらのなかにおいても、動物が象徴的にもちいられる。

例として、下記の3種類の動物がある。

### ①ウシ

アイルランド神話のグループのひとつであるアルスター物語群の、もっとも重要な話である『トーイン・ボー・クーリング』、すなわち『クーリーの牛捕り』物語では、古代アイルランドの強大なふたつの都市の比喩表現として「牡牛（ウシ）」がもちいられる<sup>44</sup>。コナハトの女王「メイヴ」が、隣の都市アルスターにいる巨大な赤牛「クーリングのドン」をわがものとするためアルスターへと侵攻し、強引に手中におさめる。その後、赤牛の「ドン」は、メイヴの夫「アシル」の所有する白角の牡牛「フィンヴェナハ」と激しい闘いをくりひろげる。

メイヴによりコナハトに捕らわれていたドン・クアルング[筆者註：赤牛のドン]は三度大きなうなり声をあげた。それを聞いて外に出てきたフィンバナッハ[筆者註：白牛のフィンヴェナハ]と互いに角で戦った。……ついにフィンバナッハが恐ろしい叫び声を放ち、崩れ落ち、息絶えた。……ドンは故郷アルスターへと急いだ。しかし故郷に着くや否や、その気高い心臓は破裂し、たちまち絶命した。<sup>45</sup>

ミランダ・グリーンは、2頭の牡牛の死は、壮絶な戦争のあとの平和の暗示であると述べる<sup>46</sup>。

### ②ハクチョウ

悲劇『リルの子どもたち』物語では、魔法や呪いにかけてられた姿としての「ハクチョウ」があらわれる<sup>47</sup>。

アイルランドの神なる一族ドゥアハ・デ・ダナーンのひとりで、フィネイの丘の主であり海を総べる王・リルの4人の子どもたち（フィンローラ、コン、フィアフラ、エイ）が、まま母に妬まれ、ハクチョウの姿で900年の時を過ごさねばならない呪いをかけられる。ハクチョウとなった彼らの鳴き声は悲しい調べを奏で、耳を傾け

る者の心を癒す。

アイルランド神話の基盤をなすものは「三角関係」や「嫉妬」や「悲恋」であり、その結果として神々やそれに準ずる英雄たちが変身することが重要となる<sup>48</sup>。その変身の結果として「ハクチョウ」や「オオガラス」という鳥類がしばしば登場する。

### ③魚

最後の特徴的な動物は「魚」であり、「フィン物語群」の「フィン・マックール英雄譚」においてえがかれる<sup>49</sup>。

女神「ボアン」の宿る河に棲む「知恵の鮭」を求める僧侶「フィネガス」のもとで、のちに超人的な英雄となる「フィン・マックール」が修行を積んでいた。彼が師匠のために「知恵の鮭」を捕り調理していると、焼けたウロコが跳ねてフィンの親指に当たり、彼は親指を舐めてしまう。このようにして偶然に「知恵の鮭」を“初めて”口にしたフィンは叡智を授かり、彼は以後親指を口に含むことで未来を知ることができるようになる。この叡智を与えてくれる「鮭」は、海の底の木の実を食べたことでそれを手にしたとされ、この点から、他界より知識がもたされたことを暗示するシンボルであると考えられている<sup>50</sup>。

美術や文学の面では、土着の観念や他の文化の影響のもと、さまざまな動物が神聖な意味合いをはらんで描写されたことが分かる。考古学的な視点から「動物の神聖性」について見ると、どのようなことが分かるだろうか。2種類の出土物をもとに考えていきたい。

## 2-2) シカとヤギ フェルバッハ・シュミーデンの出土物

フェルバッハ・シュミーデンの縦穴は土塁内の北西寄りに位置する(2章図参照)。深さ 20.5m、直径 2m の穴のなかから、さまざまな出土物があったことは、前章でしめしたとおりだ(図 67)。シカの木彫像(図 68)は、深さ 18.1~18.2m 地点において、オークの木枠の間にはさまった状態で発見された。

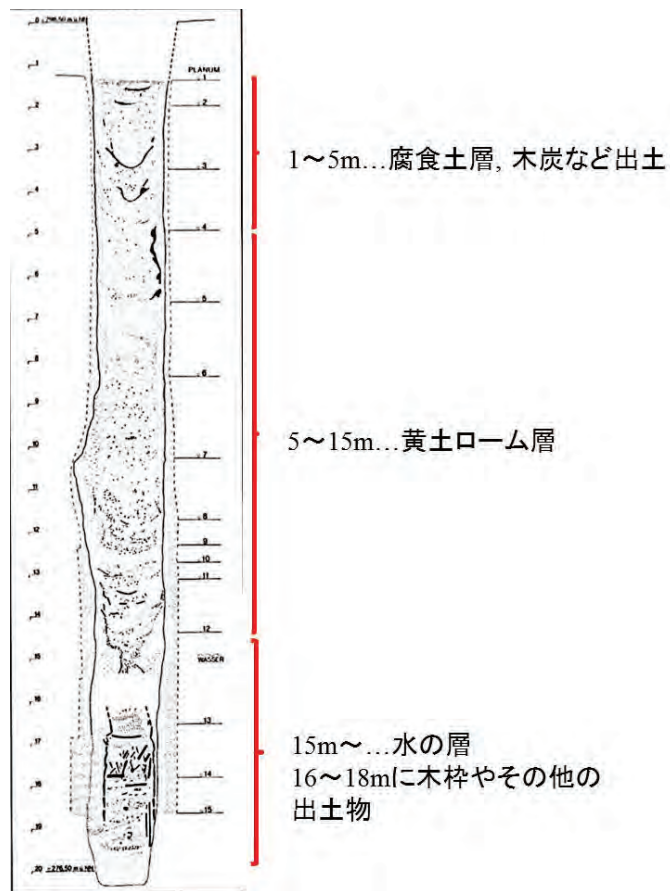


図 67：フェルバッハ・シュミーデンの縦穴

[出典：Planck, Dieter, *Die Keltische Viereckschanzen von Fellbach-Schmiden und Ehningen*, Abb.51.]

□主要な出土物□

- ・ 前 2 世紀後半の装飾品
- ・ 前 2 世紀後半の彩色陶器の破片
- ・ 手桶のような木片
- ・ 木製の合わせ釘
- ・ 八角形の木製のスピンドル
- ・ 木製の彫像





図 68 : シカの像

[出典 : Planck, Dieter, Die Keltische Viereckschanzen von Fellbach-Schmiden und Ehningen, Abb.31-33 より  
抜粋。]

現存している部分の高さは 77cm である。しなった長い角は、もっとも太い部分から 3 本に枝分かれし、植物の葉脈のようなカーブを描く。丸く大きな目と、ピンと立った耳は完全に残っており、少し欠けている鼻には、ツタもしくはランセット形の装飾が見える。そして、全体に黄色く彩色された痕が残っている。

ひとつめのヤギの像(図 69 右)は深さ 17.5m 地点で出土し、高さ 87cm、厚み 7.6cm のオークの板でできている。全体的に腐食し、とくに頭部と前足は激しく傷んでいる。しかし、前足を折るようなポーズに曲げて、後ろ脚をすくと伸ばしている全体像が理解できる。また、耳から前脚にかけて、長い角がしなやかに垂れているのも分かる。

もうひとつのヤギの像（図 69 左）は深さ 18.1m 地点から出土した。後ろ脚の先が欠けているが、高さは 76cm で、ひとつめのヤギの像と同じく、厚み 7.6cm のオーク製である。こちらは前脚が残っていない。おそらく、もうひとつと同じように曲がっていたのだろう。こちらについてはヤギの顔の造形がよく分かり、アーモンド形の目と垂れた耳、そして優美なカーブを描く、立派な長い角が生えている。

発掘者のひとりディーター・プランクは、これらの 3 体の像はひとかたまりの偶像の残骸であるとする<sup>51</sup>。製作年代は紀元前 2 世紀ころと推定され、それは方形土塁が使われていた時期と重なる。またヤギの像 2 体について、プランクは、ヤギの背の中央あたりに人の手が見えることから、2 体の間に人間の像が挟まれていたと推定する（図 70）。この、人間の像が動物の像に挟まれる図式はギリシアやイタリア半島に由来する構図である<sup>52</sup>。また、これらの像が高さ 90cm 弱と決して小さくないものであったことも考慮される必要がある。これらの像が単なる奉納物ではなく、聖像として建立されていた可能性が浮上する。



図 69：ヤギの木彫像

[出典：Planck, Dieter, *Die Keltische Viereckschanzen von Fellbach-Schmidlen und Ehningen*, Abb.31-33 より抜粋。]

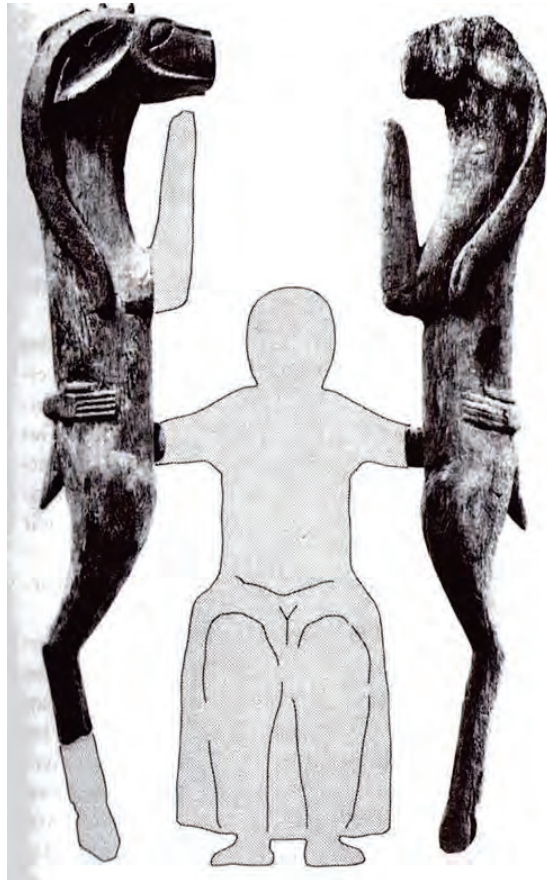


図 70 : シカの像の全体像 想像図 [出典 : *Ibid.*, Abb.35.]

方形土罌でこのような彫像が出土する例はほかになく、これらの像の意味を理解することは、フェルバッハ・シュミーデンの方形土罌の機能についての手掛かりともなるだろう。どのような意味がこの2種類の動物像に込められていたのだろうか。

#### 2-2-1) シカとヤギ

##### ①動物としてのシカとヤギ

ケルト社会において、シカとヤギは動物としてどのように扱われていたのか。動物相の資料から見てみよう。

種類	溝出土	出土率	縦穴出土	出土率	合計	出土率合計
ヒト	8	0.20%	0	0.00%	8	0.20%
ウマ	286	7.06%	9	1.64%	295	8.70%
ウシ	1229	30.35%	92	16.73%	1321	47.07%
ヒツジ	124	3.06%	14	2.55%	138	5.61%
ヒツジ・ヤギ	585	14.44%	78	14.18%	663	28.63%

ヤギ	16	0.40%	2	0.36%	18	0.76%
ブタ	775	19.14%	61	11.09%	836	30.23%
イヌ	101	2.49%	2	0.36%	103	2.86%
アカシカ	7	0.17%	1	0.18%	8	0.35%
ノロジカ	1	0.02%	0	0.00%	1	0.02%
イノシシ	3	0.07%	1	0.18%	4	0.26%
ヤマネコ	3	0.07%	0	0.00%	3	0.07%
マツテン	0	0.00%	1	0.18%	1	0.18%
オコジョ	0	0.00%	55	10.00%	55	10.00%
イタチ	0	0.00%	4	0.73%	4	0.73%
モグラ	0	0.00%	1	0.18%	1	0.18%
モグラ	0	0.00%	1	0.18%	1	0.18%
トガリネズミ	0	0.00%	1	0.18%	1	0.18%
ノウサギ	2	0.05%	17	3.09%	19	3.14%
ミズハタ ネズミ	0	0.00%	1	0.18%	1	0.18%
ノネズミ	6	0.15%	22	4.00%	28	4.15%
モリネズミ	0	0.00%	36	6.55%	36	6.55%
ニワトリ	4	0.10%	5	0.91%	9	1.01%
オオタカ	1	0.02%	0	0.00%	1	0.02%
クマゲラ	1	0.02%	1	0.18%	2	0.21%
カササギ	1	0.02%	0	0.00%	1	0.02%
ワタリガラス	2	0.05%	0	0.00%	2	0.05%
鳥（種類不明）	1	0.02%	1	0.18%	2	0.21%
カエル	0	0.00%	4	0.73%	4	0.73%
ヒキガエル	1（骨格）	0.02%	3（うち骨格1）	0.55%	4	0.57%
コイ科の魚	0	0.00%	2	0.36%	2	0.36%
不明	882	21.78%	126	22.91%	1008	44.69%
合計（概算）	4050	99.73%	550	98.36%	4600	

表3：フェルバッハ・シュミーデンの骨の出土状況

[Driesch, Angela v. d., "Die Tierknochenfunde aus der keltischen Viereckschanze in Fellbach-Schmidlen," Tab.1 を



もとに作成。]

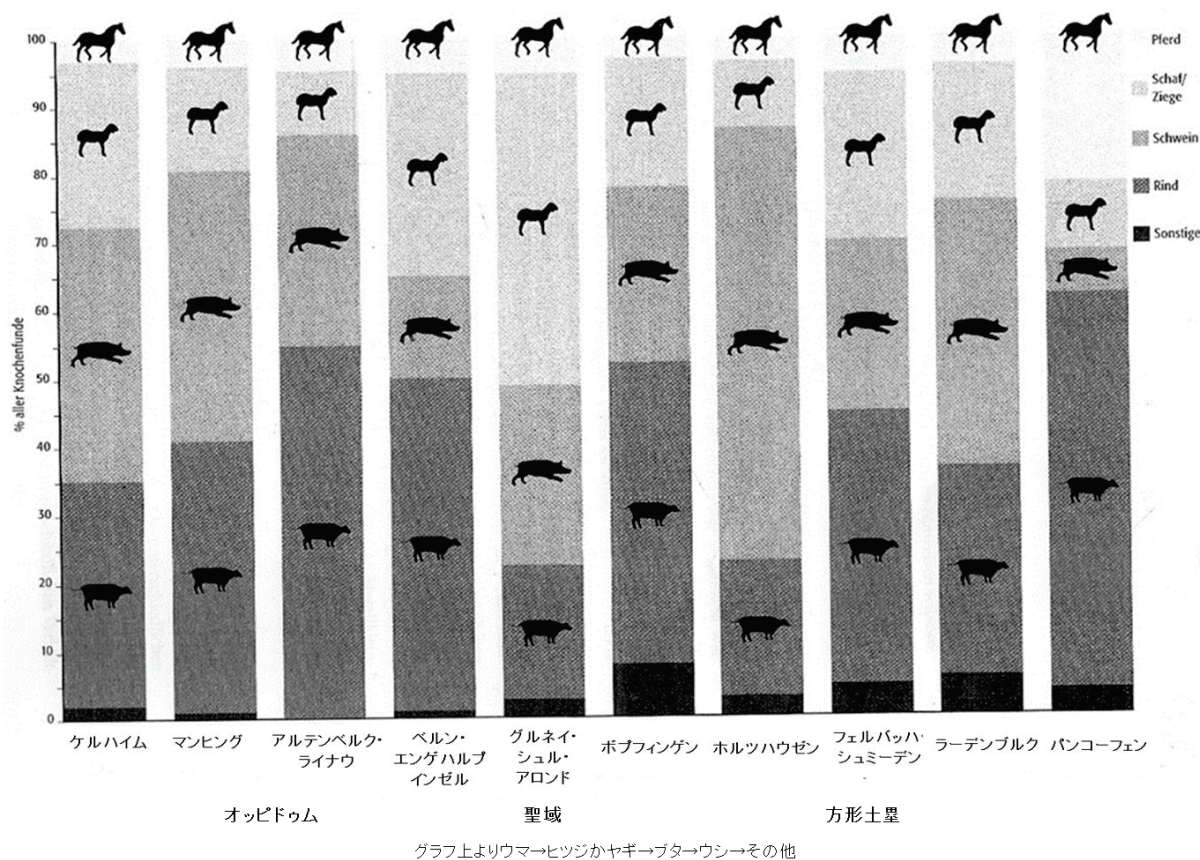


表 4：ケルト社会各地の動物の骨の出土比率

[出典：Wieland, Günther, Keltischen Viereckschanzen, Abb. 24. 筆者加筆有]

フェルバッハ・シュミーデンの骨の出土状況（表 3）を見ると、ウシ（47.07%）やブタ（30.23%）など、おもに家畜化された動物の骨が多く出土しているのが分かる。シカは飼い馴らされない動物だった。そのためフェルバッハ・シュミーデンでも、シカの骨は野生のアカシカのもものが 8 本（0.35%）と、おなじく野生のノロジカのもの 1 本（0.02%）だけが出土するにとどまる。

ヤギは、ウシやブタよりは優先度は低いけれども、皮や乳の利用、および耕作前の雑草処理に利用する目的で家畜化はされていた。しかし、ヒツジのものも含めた骨の出土は全体の 3 割程度にとどまる。フェルバッハ・シュミーデンや、そのほかのケルト人の遺構での骨の出土比率（表 4）を見ても、各地で似たような状況であった。シカもヤギも、実生活においては、それほど重要度の高い動物ではなかったのである。

しかし、これらの 2 種の動物は、精神世界においては非常に重要な意味合いを持っていた。それぞれがケルト世界の大神と結びついたのである。

## ②シカの神とヤギの神 枝角持てる大神たち

プランクは、シカの像はケルトの大神ケルヌンノスを表すものだと述べる<sup>53</sup>。



図 71 : ケルヌンノス

[出典 : Hatt, Jean-Jaques, “Eine Interpretation der Bilder und Szenen auf dem Silberkessel von Gundestrup,”  
Platte 2.]

ケルヌンノスは、シカの角を生やし、シカをともない、首輪などを掲げ胡坐をかき男神として描写される。彼は「自然」、「多産」、そして「豊穰」をつかさどる神性であった。それは、シカが太くたくましい角を生やし、それが年ごとに生え変わる特徴に由来するものだった<sup>54</sup>。ケルト世界や、それ以外の文化圏でも見られる「角」の重要性は、男の大神たちが枝角を生やす姿で表わされることによってしめされている。

大きな角を持つ一対のヤギの像も、同様の脈絡で考えることができるだろう。ヤギは、ヤギかそれと似たヒツジの角を生やす姿で表わされる主権・戦争の神の「テウタテス」や、同じように角を生やし、ケルヌンノスと同一視されることもある、戦争による富や死などの神「エスス」とのつながりも想起される。これらの、「角を持つ動物」の像は、そのような力ある雄々しい神への信仰が、この場に存在していたことを示すものなのではないだろうか。

シカとヤギは、社会的な重要度は高くないけれども、「角が生える」という身体的特色により、権威ある大神たちのシンボルとして描写された。フェルバツハ・シュミーデンの像も、このような意味合いを持っていたと考えられよう。また、前章において方形土塁の役割について述べたように、この四辺形の構造物は、政治や宗教など複合的な役割を持つ空間であり、ドイツに 200 か所近くあるそれらは、個々に役割が違っているけれども、自然崇拝的側面を少なからず有するのではないかと述



べたように、フェルバッハ・シュミーデンでは、これらを司る神の表現としてシカとヤギの像が建立され、それが示す神々に祈りをささげる儀式的な行為がなされていたと考えることができる。

### 2-3) 《鉄の馬》<sup>55</sup>

マンヒングの《鉄の馬 (Das eiserne Ross)》は、1960年に頭部と後脚が、1972年に前脚と断片が発見された。出土場所はほとんど同じところに固まっている(図72)。この《鉄の馬》は紀元前2世紀よりも前に制作され、ほどなくして破壊され遺棄されたと考えられている<sup>56</sup>。



図72：《鉄の馬》の頭部 [出典：Krämer, Werner, „Die eiserne Roß von Manching,“ Abb.1.]

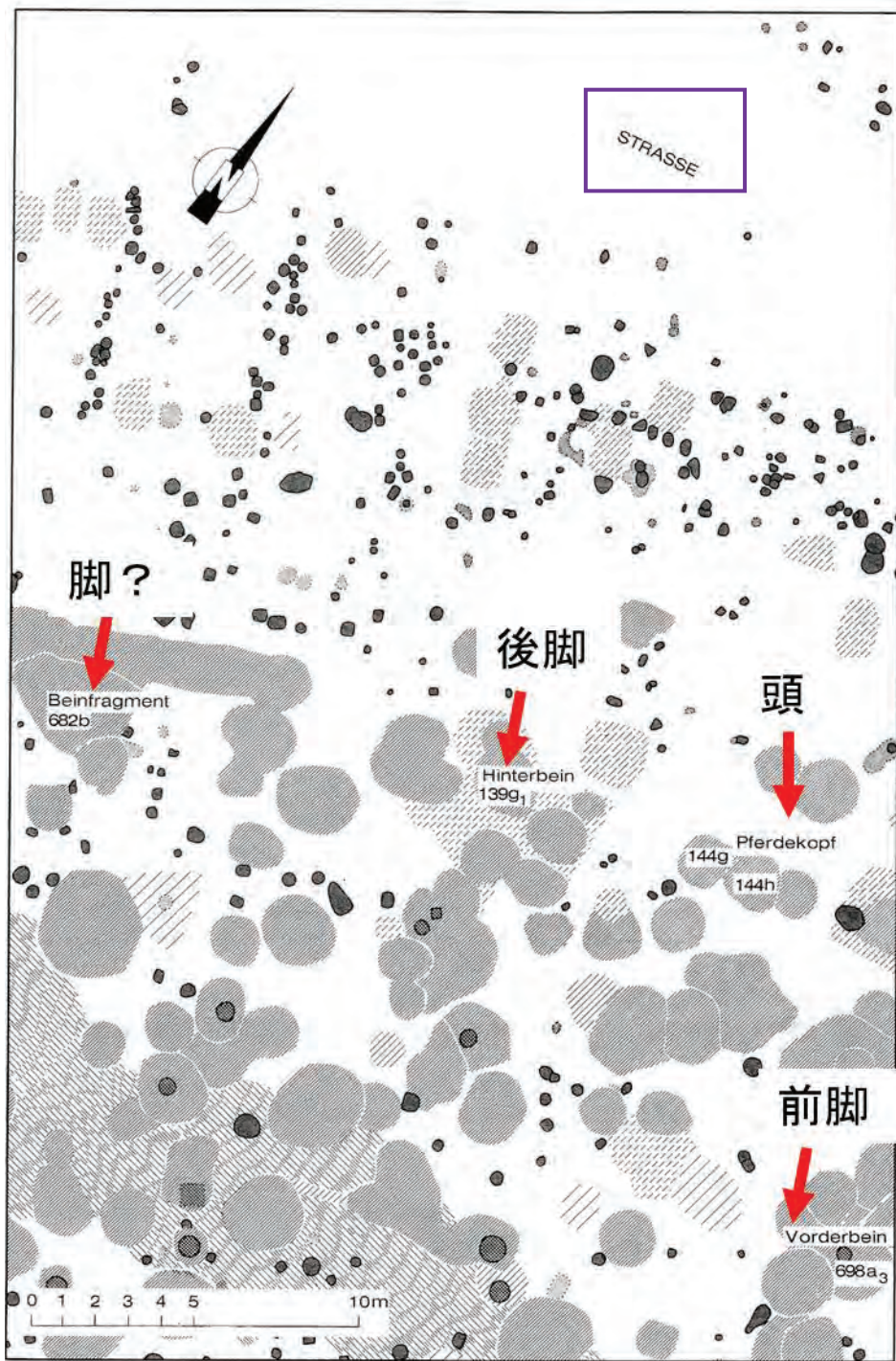


図 73 : 出土場所 [出典 : Krämer, Werner, „Die eiserne Roß von Manching,“ Abb.9.]

①頭部 [Inv. -Nr. 1961, 288] (図 72)

頭部は長さ約 19cm で、幅 2~2.4cm の 2 枚の鉄板が、長さ 1.5mm の鉄製リベットで留められている。きわめて様式化されたつくりで、眼窩部分にはガラス玉か琥珀玉が嵌め込まれたとみられている。鼻と口は単純な切れ込みで表現されており、本



来馬にあるべきたてがみと耳がないのが特徴である。

②前脚 [Inv. -Nr. 1974, 1377]・ひづめ [Inv. -Nr. 1974, 1379]

前脚は縦に細長い管状で、脚の付け根から爪先のほうへかけて次第に細くなるように鉄板が丸められている。もっとも太い部分は直径 2.9 から 3.8cm で、細いところは 2.5～3cm。底部にはひづめがついていた。ひづめは最大直径が 3.9cm で、前脚の内側についた青銅か赤銅の板によって接合される。ひづめを入れた全体の長さは 35cm である。

③後脚 [Inv. -Nr. 1961, 262] (図 74)

後脚(図 74 版右側 図は 1 本をそれぞれ別の角度から見たもの)は損傷が激しく、ひょっとしたら関節が反対に曲がっていた部分がなくなっているのかもしれない。現存する部分の長さは 34.5cm で、前脚と同じように、管状の鉄板が足先にかけて細くなる。管の内側にははんだづけの痕がある。

このほかに、脚と思われる、それぞれ長さ 8.3cm と 11.7cm の 2 枚の鉄片 [Inv. -Nr. 1974, 1132/1313] も出土している。

これらの破片について、発掘者のひとりであるヴェルナー・クレイマーは、これらの出土状況から、この馬の像が神聖な意味を有しているとする<sup>57</sup>。図の上部(囲み部分)の“STRASSE”はオッピドゥムの中心部を通る主要な街道のひとつを指しており、この近郊に第 1 章における「聖堂」があるためである。

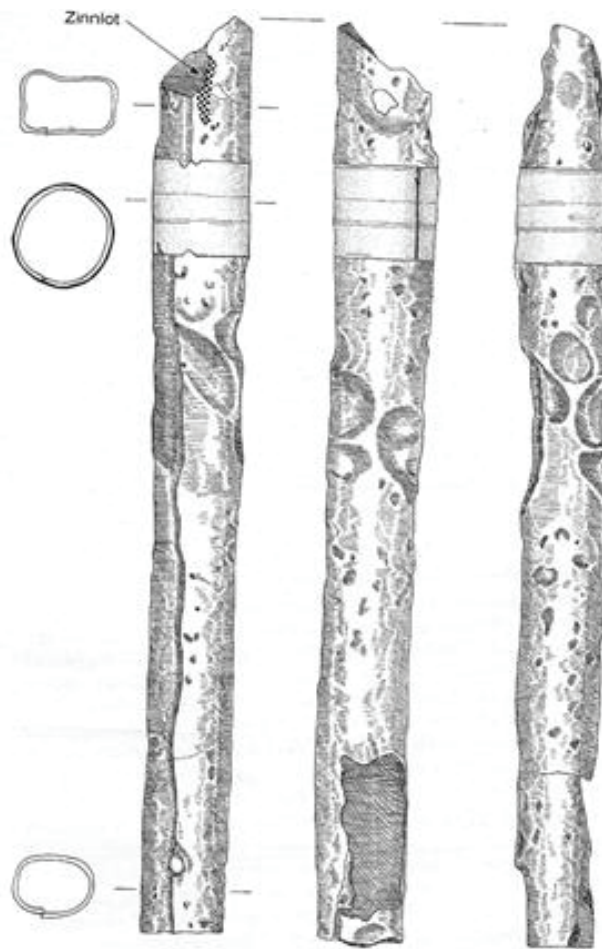


Abb. 6. Manching, Hinterbein des eisernen Pferdes mit Bronzemanschette. - M. 1:2.

図 74 : 《鉄の馬》の後脚 [出典 : Krämer, Werner, „Die eiserne Roß von Manching,“ Abb.6.]

### 2-3-1) ウマの神聖性

ケルト世界におけるウマは、社会的に重要な役割を持っていた。紀元前 8 世紀から使用されたウマは、同時代のスキタイ人のそれよりも体高が小さく、ちょうど現代のポニーのようで、本来騎乗には適さない種だった<sup>58</sup>。しかし、それらは荷運びに駆り出され、のちに 2 頭立て戦車の牽引のために重用された。ウマの使用のたまものとして、長距離輸送が活発となり、地中海世界やそのほかの地域とのかかわり— 交易、移動、そして戦争など— に大きな影響を与えた。このような背景によって、ケルトのウマは重要視され、そして神聖視へとつながるのである。

この裏づけは、動物相の資料 (表 5) からもとることができる。

1955 年から 1963 年にマンヒングで出土した動物の骨の出土状況では、あきらかに家畜である動物の骨のなかで、ウマの骨は全体の 5% 弱にとどまる。表 2 から、ウマの骨の出土が非常に少ないことがわかる。また、ウマの骨はウシやブタのそれらと違って、骸がそのままか、あるいはほとんど傷のついていない状態で出土する。これは、ウマが食用とされたり、あるいは屠殺や犠牲にされることがほとんどなか

ったことをしめしている。

家畜	種類	出土数	出土率	全体の出土率
	ウマ	18438	4.75%	4.74%
	ウシ	162596	41.89%	41.80%
	ヒツジとヤギ	77887	20.07%	20.02%
	ブタ	125960	32.45%	32.38%
	イヌ	3088	0.80%	0.79%
	ニワトリ	175	0.05%	0.04%
	合計	388144	100.00%	
野生種 ないし 家畜	種類	出土数	出土率	全体の出土率
	ネコ	1	2.27%	0.00%
	ガチョウ	33	75.00%	0.01%
	カモ（アヒル）	10	22.73%	0.00%
合計	44	100.00%		
野生種	種類	出土数	出土率	
	オーロクス	3	0.39%	0.00%
	アカシカ	337	44.11%	0.09%
	ヘラジカ	1	0.13%	0.00%
	ノロジカ	83	10.86%	0.02%
	イノシシ	64	8.38%	0.02%
	ヒグマ	5	0.65%	0.00%
	アナグマ	2	0.26%	0.00%
	オコジョ	1	0.13%	0.00%
	オオカミ	1	0.13%	0.00%
	アカギツネ	18	2.36%	0.00%
	ノウサギ	68	8.90%	0.02%
	ビーバー	28	3.66%	0.01%
	ハムスター	1	0.13%	0.00%
	アオサギ	1	0.13%	0.00%
	ワシ	1	0.13%	0.00%
ウミワシ	62	8.12%	0.02%	
モリフクロウ	3	0.39%	0.00%	

シャクシギ	1	0.13%	0.00%
アジサシ	1	0.13%	0.00%
ワタリガラス	39	5.10%	0.01%
カラス	8	1.05%	0.00%
鳥（種類不明）	7	0.92%	0.00%
カワカマス	3	0.39%	0.00%
ナマズ	9	1.18%	0.00%
コイ	11	1.44%	0.00%
ウグイ	1	0.13%	0.00%
魚（種類不明）	5	0.65%	0.00%
合計	764	100.00%	
総計	388952		

表 5：マンヒングの骨の出土状況（単位：本）

[Boessbeck, Joachim, et. al., Die Tierknochenfunde aus dem Oppidum von Manching, Tab. 1 をもとに報告者作成。]

### 2-3-2) 聖像としてのウマ

では、聖像としてのこの《鉄の馬》は何を表象するのか。ウマそのものの像なのか、あるいは、神の化身としてウマを表現したのか、それとも神の従者としてのウマの描写なのか。その明確な意図をさぐることは難しい。あらゆるコンテキストで、ウマは登場するからである。

ウマそのものの神話的表現として、「太陽」とのむすびつきは看過されるべきではない。ウマは「太陽の馬車」の牽き手としてもえがかれるほか、神がその背に乗るものとしてもしばしば表現される。前節にも述べた《ユピテルの巨大柱》においても、ウマはその背に、雷霆を高々とかかげるユピテル神を乗せている。グリーンはこのような表現にもちいられるウマを「特権的な動物、獣の王」と表現する<sup>59</sup>が、大神の乗り物としてのウマは、戦争や主権の性格との結びつきをもち、兵士や騎士のシンボルとみなされる存在だったと考えて良いだろう。

なかでも、神性とのつながりでウマをとらえるとき、「エポナ」は想起されるべきもっとも重要な存在であろう。





図 75：エポナ像 [出典：Green, Miranda J., Celtic Art, Fig.50.]

エポナ (Epona) はケルト文化に由来する女神で、紀元後 1 世紀から 4 世紀のローマ兵にあつく信奉された。その信仰の痕跡は、ノーリウムやダキア、そしてモエシアなどの属州で確認される<sup>60</sup>。エポナの像は、つねにウマをともなつてえがかれる。あるときはウマの背に横向きに座り、あるときは足元の仔ウマにエサを与え、そしてあるときは 2 頭のウマに挟まれているすがたで。ウマやその乗り手の庇護者、肥沃・豊穰の神、戦争の傷病の保護に端を発する医学の神としての信奉を集めたエポナは、もともとウマそのものへの信仰心が、ローマ支配下において「ウマと女神」の姿に具現化されたものであると考えられている<sup>61</sup>。マンヒングの《鉄の馬》も、このような「エポナ信仰」の前身のようなものとしてとらえるべきものであろう。

社会的にとりわけ重要な地位にあったウマは、信仰の世界においては、神の従者や乗り物や、神の化身としてもウマや乗り手の庇護など、共同体全体を統べるというよりは、むしろ副次的な役割を担う存在だったと考えられる。この《鉄の馬》も、そのようないわば脇役の機能を持たされており、「聖堂」に建立される聖像ではなく、単純に奉納物や生贄の代わりであった可能性がある。これは推測であるが、出土場所近くの街道を通る交易者たちが、みずからや彼らのウマの庇護を祈って納めたも

のなのかもしれない。

### 3 節 図像表現に見るウィンデリキアの象徴的観念

#### —マンヒングの《分銅》にみる「神のすがた」の描かれ方—

##### 3-1)ケルトの《分銅》

さて、本章の最後では、図像にえがかれた「人物」の表現に注目したい。

シカとヤギの木彫像や、《鉄の馬》でも同様であるが、ケルトに関する出土物の装飾や図像表現は、神聖・超自然的な意味合いを有し、神々への信仰を表わすものとされている<sup>62</sup>。それらにおいて「人物」は、ケルト世界の3柱の大神「テウタテス」、「エスス」、「タラニス」や、しばしば彼らにともなう地母神が、抽象的なモチーフで描かれた。

本節では、ウィンデリキアにおける「神のすがた」の描写について、マンヒング出土の《分銅》をもとに考える。

2個の《分銅》は鉛製で、紀元前1世紀後半の制作である(図76)。

左図 [Inv. Nr. 1961, 150] は43mm×48mm、厚さは5mmで、重さは125.25gである。首輪を装着した人物がえがかれている。右図 [Inv. Nr. 1974, 1283] は49mm四方であり、50.6gの重さがある。表面にはサイコロの「5」の目のかたちに配された円、そして中央の円から上下左右に、面を4等分するように線が延びている。裏面には直径22mmの円があり、その中心から15本の線が放射状に引かれている。



図 76 : マンヒング出土の《分銅》 [出典 : Sievers, 2003, S.84.]

### 3-2) 《分銅》のモチーフとその意味

まず、図 76 左の《分銅》の図像について見てみよう。分銅の表面にえがかれた人物は首輪を着けている。首輪の両端が太くなっているため、「トルク」であると考えられる。「トルク」は、ケルト世界において装着者の社会的な地位を示すものとして機能していた<sup>63</sup>。なおかつ、ケルトの信仰の世界においては、神々がしばしば首輪を装着した状態でえがかれる。そのような描写はほかのケルト人の地域でも見られる。このため、《分銅》に描かれた人物は「神」であり、とくにその都市で祀られる神性が描かれたものだと理解されている<sup>64</sup>。しかしこの「神のすがた」からは、首輪<sup>トルク</sup>以外の点からその神性の何であるかを特定する特徴は見取れない。

右側の分銅の裏面に描かれた、内側に引かれた放射状の線のある円の描写は、「車輪」のモチーフであると推測される。この「車輪」のモチーフというのは、先行研究において「太陽崇拝」の象徴とされる<sup>65</sup>。太陽はケルト人の初期の時代、ないしケルト人以前の時代から重要な崇拝の対象であり、「肥沃」、「戦争」、「死」などあらゆる要素との結びつきを持つ。他方で、太陽はケルト土着の神性「タラニス」との結びつきも示唆されるものである。タラニス神は主に「主権」、「戦争」、「他界での生」

をつかさどるものであり、分銅に描かれた「車輪」も、このタラニス神との結びつきを持つと考えられる。

マンヒングの分銅に描かれた車輪の描写や人物の描写は、前述したケルトの宗教的な観念を反映し、マンヒングの都市の守護神性や太陽信仰と関わる神性、おそらくタラニス神と結びついた。それらの描写は、庇護を求める意味合いで描かれたと考えられる。

#### 4 節 小括

本章では、植物、動物、そしてヒトのモチーフを持った出土物から、それらの意味を読み解くことを試みた。いずれにおいても、資料の制約などもあり、現状ではこれ以上の説得力ある議論を展開することはあまり望めない。そのことを踏まえつつ、本章での考察をまとめよう。

まず《崇拝の木》からは、技術・思想の両方の面において、「ケルト」と「ギリシア」の2つの文化の混交の可能性を看取することができた。むろん、表現上のモチーフだけで、ウィンデリキアのケルトの宗教観が、ギリシアのそれと結びつきを持っていたと結論づけるには無理がある。けれども、《崇拝の木》がこの時代のウィンデリキア地域の信仰生活において重要な意味を持っていたこと、そして、それを唯一所有していたマンヒングという場所が、その信仰生活においても重要な地であったことは疑い得ないであろう。

また、2種類の動物を模した像の考察をおこなった2節では、神聖視される動物は、シカやヤギのように、たとえば「角が生える」というような身体的特色や、あるいはウマのように社会的重要性が反映された結果としてあがめられ、神々とむすびついたことがあきらかとなった。その根底には、はるか古い時代、ケルト人以前の「動物そのものへの畏敬の念」があったのかもしれない。「動物を模した像」たちは、この手の像が数多く生まれるローマ時代より、わずかに前の品である。これらはローマ時代初期、すなわちガロ・ローマ期の「動物と人間の像」につながる、もっとも初期のかたちだと考えられる。このような複雑な像の建立や奉納は、発展したオッピドゥム社会において洗練された技術の繁栄を示す一方で、敬われたものは「動物そのものへの畏敬」という、原始的な信仰の名残を有している。このことは、都市でありながら農耕・牧畜社会であったケルト社会において根付いた信仰のかたち的一端をしめしているのではないだろうか。

そして3節で検討した《分銅》の描写からは、動物の描写に対し、人物の描写が極めて簡素であり、それが何かしらの神聖と判断できる要素は、「首輪」や「車輪」といった小物でしかない。このことは、もとより神の姿を表現することがなかった「ケルト」世界の「神への視点」を投影しているといえるだろう。



---

【註】

- <sup>1</sup> Hans-Peter Uenze, “Bavaria,” p.291.
- <sup>2</sup> 《崇拜の木》とそのほかの出土物の概要はすべて Ferdinand Maier, „Das Kultbäumchen von Manching: Ein Zeugnis hellenistischer und keltischer Goldschmiedekunst aus dem 3. Jahrhundert v. Chr.,” in *Germania*, Bd.68, Nr.1, 1990, S.129-165, S.139-152 に準拠した。
- <sup>3</sup> Ebd., S.154-155.
- <sup>4</sup> Ebd., S.186.
- <sup>5</sup> Ebd., S.187.
- <sup>6</sup> Ebd., S.188.
- <sup>7</sup> Ferdinand Maier, „Der Goldfund von 1984,” in Ferdinand Maier, Udo Geilenbruegge, Erwin Hahn, Heinz-Jürgen Köhler, Susanne Sievers, : *Ergebnisse der Ausgrabungen 1984-1987 in Manching* (Die Ausgrabungen in Manching Band 15), Franz Steiner Verlag GMBH Wiesbaden, 1992, S.336-339, S.336-337.
- <sup>8</sup> Ferdinand Maier, mit Beiträgen von Christoph J. Raub, Rupert Gebhard, Johann Koller und Ursula Baumer, „Manching und Tarent: Zur Vergoldungstechnik des keltischen Kultbäumchens und hellenistischer Blattkränze,” in *Germania*, Bd.76, Nr.1, 1998, S.177-216, S.181-182.
- <sup>9</sup> Ferdinand Maier, „Das Kultbäumchen von Manching: Ein Zeugnis hellenistischer und keltischer Goldschmiedekunst aus dem 3. Jahrhundert v. Chr.,” S.161-162.
- <sup>10</sup> Ferdinand Maier, „Der Goldfund von 1984,” S.356.
- <sup>11</sup> Ferdinand Maier et. al., „Manching und Tarent: Zur Vergoldungstechnik des keltischen Kultbäumchens und hellenistischer Blattkränze,” S.188.
- <sup>12</sup> 《崇拜の木》の修復と復元については、Constanze Thomas, „Kultbäumchen des keltischen Oppidum von Manching: Neurestaurierung und Rekonstruktion,” in *Restaura: Zeitschrift für Kunsttechniken, Restaurierung und Museumsfragen*, Bd.107, Nr.6, 2001, S.460-463 も参照。
- <sup>13</sup> Ferdinand Maier, „Eiche und Efeu: Zu einer Rekonstruktion des Kultbäumchens von Manching,” in *Germania*, Bd.79, Nr.2, S.297-307, S.300-301.
- <sup>14</sup> Ferdinand Maier et. al., „Manching und Tarent: Zur Vergoldungstechnik des keltischen Kultbäumchens und hellenistischer Blattkränze,” S.186-188.
- <sup>15</sup> Ebd., S.189.
- <sup>16</sup> ルカヌス, 『内乱記』, 445-446 ; trans. James Duff Duff, pp.34-37.
- <sup>17</sup> Jane Webster, “Sanctuaries and sacred places,” p.448.
- <sup>18</sup> 本稿での「オーク」とは、ドイツ語の„Eiche” や英語の“Oak”の訳であり、「ブナ科ナラ属の木の総称」を意味する。それは本来ならばカシワの木やナラの木を指すものであり、厳密にはカシの木のことではない。しかしケルトに関する文献では Oak=カシと訳されていることが多いため、本節でもそれに則り「カシ」も含んだ意味として「オーク」と表す。
- <sup>19</sup> プリニウス, 『博物誌』 16 卷 95:249 ; 中野定雄他訳, 『プリニウスの博物誌 第Ⅱ巻』, 704 頁。
- <sup>20</sup> 同上。
- <sup>21</sup> Sabine Heinz, *Celtic Symbols*, Sterling, New York, 2008, pp.146-147.
- <sup>22</sup> Roland Gschlöbl, *Im Schmelztiegel der Religionen: Göttertausch bei Kelten, Römern und Germanen*, Verlag Philipp von Zabern, Mainz am Rhein, 2006, S.41-46.
- <sup>23</sup> Lucan (trans. James Duff Duff), *The civil war*, pp.34-37.
- <sup>24</sup> ケルトの神は多種多様な役割を担っていたため、ローマのひとつの神性と同定することはできない。Jean-Jacques Hatt, „Die keltische Götterwelt und ihre bildliche Darstellung in vorrömischer Zeit,” in Pauli, Ludwig, Bonnamour, Louis et. al., *Die Kelten in Mitteleuropa: Kultur, Kunst, Wirtschaft: Salzburger Landesausstellung 1. Mai-30. Sept. 1980 im Keltenmuseum Hallein Österreich*, Amt der Salzburger Landesregierung, Kulturabteilung,

---

Salzburg, 1980, S.52-67, S.55 参照。

<sup>25</sup> ケルトに関係するもので「キヅタ」の神聖性が描かれているのは、《崇拝の木》のほかには《ゴネストルップの大釜 (Gundestrup Cauldron)》のみである。《ゴネストルップの大釜》は 1891 年にデンマークで発見された器。ケルト的な兵士や鹿の角を持つ神ケルヌンノスなどの図像と、オリエント的なグリフォンなどの図像が打ち出し技法で施されている。

<sup>26</sup> 逸身喜一郎訳, 『バックアイ: バッコスに憑かれた女たち』, 岩波書店, 2013 年, 32-33 頁 ([ ] 内は筆者)。

<sup>27</sup> 柳沼重剛訳, 『食卓の賢人たち 2』, 京都大学学術出版会, 1998 年, 224 頁。

<sup>28</sup> 第 5 エペイソディオオン, 1114~1150 ; 逸身喜一郎訳, 106~109 頁。

<sup>29</sup> アンリ・ジャンメール (小林真紀子, 福田素子, 松村一男, 前田寿彦訳), 『ディオニュソース バッコス崇拝の歴史』, 言叢社, 1991 年, 588 頁。

<sup>30</sup> エウリピデース (逸身喜一郎訳), 『バックアイ: バッコスに憑かれた女たち』, 183 頁。

<sup>31</sup> アンリ・ジャンメール, 『ディオニュソース バッコス崇拝の歴史』, 597 頁。

<sup>32</sup> ヨハン・ヤーコプ・バハオーフェン (平田公夫, 吉原達也訳), 『古代墳墓象徴試論』, 作品社, 2004 年, 23 頁。

<sup>33</sup> 同 24 頁。

<sup>34</sup> 同 29 頁。

<sup>35</sup> 同 46 頁。

<sup>36</sup> 木村正俊, 『ケルト人の歴史と文化』, 原書房, 2012 年, 143-144, 158-159 頁。

<sup>37</sup> Sandor Bökönyi, “Agriculture: Animal husbandry,” in Venceslas Kruta et. al. (eds.), *op. cit.*, 444-459, pp. 458-459.

<sup>38</sup> *Ibid.*, p. 444.

<sup>39</sup> ロイド&ジュニファー・ラング, 『ケルトの芸術と文明』, 26 頁。

<sup>40</sup> 同上, 58-66 頁。

<sup>41</sup> 同上, 91 頁; Miranda J. Green, *Celtic Art*, pp.128-137.

<sup>42</sup> 疋田隆康, 「古代ガリア社会におけるケルトの伝統-ガロ=ローマ文化の形成」, 535-566 頁, 560~561 頁。

<sup>43</sup> ミランダ・グリーン (市川裕見子訳), 『ケルトの神話』, 丸善ブックス, 1997 年, 7 頁。

<sup>44</sup> 「牛捕り」物語については、キアラン・カーソン (榎木伸明訳), 『トーイン クアリングの牛捕り』, 東京創元社, 2011 年; コルマーン・オラハリー (フューシャ訳), 『トーイン クアリングの牛捕りとクープリンの物語』, 奈良書店, 2014 年を参照。

<sup>45</sup> コルマーン・オラハリー (フューシャ訳), 『トーイン クアリングの牛捕りとクープリンの物語』, 40 頁。

<sup>46</sup> ミランダ・グリーン (市川裕見子訳), 『ケルトの神話』, 40 頁。

<sup>47</sup> フランク・ディレイニー (森野聡子訳), 『ケルト: 生きている神話』, 創元社, 1993 年, 171~180 頁。

<sup>48</sup> ミランダ・グリーン (市川裕見子訳), 『ケルトの神話』, 80 頁, 134-135 頁。

<sup>49</sup> T. W. Rolleston (ed.), *The High Deeds of Finn and other Bardic Romances of Ancient Ireland*, G. G. Harrap & Co., London, 1910. pp. 106-115.

本稿は <http://www.luminarium.org/mythology/ireland/finnboyhood.htm> をもとに拙訳。

<sup>50</sup> Miranda J. Green, *Animals in Celtic life and myth*, Routledge, London, 1993, p.191.

<sup>51</sup> Dieter Planck, „Die Viereckschanzen von Fellbach-Schmidlen (Rems-Murr-Kreis),“ in Günther Wieland, *Die Keltische Viereckschanzen von Fellbach-Schmidlen und Ehningen*, S.36.

<sup>52</sup> *Ebd.*, S.39-40.

<sup>53</sup> *Ebd.*, S.39-44.

<sup>54</sup> Miranda J. Green, *The Gods of the Celts*, A. Sutton, Gloucester, 1986, pp.195-199 ; Miranda

---

J. Green, *Animals in Celtic life and myth*, pp. 230-234 ; Sabine Heinz, *op. cit.*, pp. 47-51.

<sup>55</sup> 《鉄の馬》については Werner Krämer, „Das eiserne Ross von Manching : Fragmente einer mittellatènezeitlichen Pferdeplastik,” in *Germania*, 67, 1989, S.519-539 を参照。

<sup>56</sup> Werner Krämer, *ibid.*, S.530, 532 ; Susanne Sievers, *Manching: Die Keltenstadt*, S.96-97.

<sup>57</sup> Werner Krämer, *ibid.*, S. 538-539.

<sup>58</sup> 当時のケルトの馬の平均体高は 1.25m ほどであった。Sandor Bökönyi, *op. cit.*, pp.445-446.

<sup>59</sup> Miranda, J. Green, *The Sun-Gods of ancient Europe*, B.T. Batsford, London, 1991, p.100.

<sup>60</sup> Nadežda Gavrilović, “Relief of Epona from Viminacium - Certain Considerations about the Cult of Epona in Central Balkans,” in Leif Scheuermann, Wolfgang Spickermann (Hrsg.), *Keltische Götternamen als individuelle Option? : Akten des 11. Internationalen Workshops “Fontes Epigraphici Religionum Celticarum Antiquarum” vom 19. - 21. Mai 2011 an der Universität Erfurt*, Leidorf, 2013, pp. 253-263, pp.254-255.

<sup>61</sup> 疋田隆康, 「古代ガリア社会におけるケルトの伝統-ガロ=ローマ文化の形成」, 560 頁。

<sup>62</sup> Venceslas Kruta, “Celtic religion,” in Venceslas Kruta, et. al. (eds.), *op. cit.*, p.533 ; Ruth and Vincent Megaw, “The nature and function of Celtic world,” in Miranda J. Green (ed.), *The Celtic World*, p.345.

<sup>63</sup> トーマス・パウエル (笹田公明訳), 『ケルト人の世界』, 91-96 頁。

<sup>64</sup> Werner Krämer, „Keltische Gewichte aus Manching,” in *Archäologischer Anzeiger: Beiblatt zum Jahrbuch der Deutschen Archäologischen Instituts*, no.1, 1997, S.73-78, S.77-78.

<sup>65</sup> Miranda J. Green, *The gods of the Celts*, pp.40-45; Miranda, J. Green, *The Sun-Gods of ancient Europe*, pp.86-106.

## 第4章

### ケルト社会における貨幣の機能—貨幣の図像モチーフを手掛かりに—

前章では、さまざまな出土物に反映された宗教観を読みとった。多様な出土物にえがかれたモチーフは、ケルト人の社会や、文化的影響を受けて醸成された信条だけでなく、彼らの技術の高さもうかがわせるものであった。

ところで、前章3節においてしめした《分銅》のような計量器具の存在は、「都市」となったマンヒングにおける経済の隆盛をものがたっている。それを裏づけるもうひとつの証拠が「貨幣」である。

本章では、ウィンデリキアにおいて、外来の文化としての「貨幣」がどのように機能したかを、信仰や精神世界とのむすびつきの点から検討する。

#### 1節 ケルト世界の貨幣製造

・・・リュディア人はわれわれの知る限りでは、金銀の貨幣を鑄造して使用した最初の民族であり、また小売り制度を創めたのも彼らであった。

(『歴史』1巻94)<sup>1</sup>

ヘロドトスのこの記述は、古代ヨーロッパ世界における貨幣製造のはじまりをしめしている。これは紀元前7世紀から紀元前6世紀のことだ。リュディアの貨幣製造の技術はギリシア世界へ伝わり、そしてさらに、ギリシア世界を通じてアルプス山脈以北の世界—ケルト世界—へと伝わった。

ケルト人によるはじめての貨幣製造は紀元前3世紀で、マケドニア王フィリッポス2世によるスタテル金貨を真似たものが最初である<sup>2</sup>。その後、すでに紀元前2世紀には、ケルト世界独自の様式の貨幣が製造されるようになっていた。ヨーロッパ東部からブリテン島にいたる広い範囲で出土する多種多様なケルトの貨幣は、ケルト人が「貨幣製造」という外来の文化を好意的に受容し、発展させたことをしめすものである。ケルト人がみずからこしらえた貨幣は、ケルトの部族どうしや地中海世界の民との交易に使用され、とくに紀元前1世紀以降、彼らの社会に貨幣経済が浸透した。

ケルト世界に貨幣のもたらされたきっかけのひとつは、紀元前4世紀からのケルト人の東方、つまりバルカン半島や小アジアへの進出である。東方地域を蹂躪した彼らは、紀元前279年のデルフォイでの敗北によって散り散りとなった。彼らはその後、あらゆるいきさつをたどった。ある集団はマケドニアに傭兵として徴募され、



またある集団はドナウ川流域でスコルディスコイ族と合流して同化し、そしてまたある集団はトラキアでテュリス王国を建国、ふたたびギリシア諸都市を襲撃するなどした。そのようにして、彼らは報酬や略奪品としてマケドニアの貨幣を入手したのである。

紀元前3世紀後半に、傭兵であった彼らがふるさとへ帰ってきたことで、ケルト世界へのマケドニアの貨幣、とりわけ、フィリッポス2世のスタテル金貨がもたらされた。それは、表面にアポロンの頭部を、裏面に二頭立ての戦車をあしらったものであった。紀元前2世紀初頭まで、これらを模倣した貨幣が造られた。そのほか、ヘレニズム世界のいくつかの貨幣がモデルとなって、スイスやラインラント、ガリア中部やドナウ流域へと伝来・模倣された<sup>3</sup>（表6）。

年代	モデル	模倣された地域・種類
紀元前 3世紀～ 紀元前 2世紀 初期	マケドニア フィリッポス2世のスタテル金貨（紀元前359年～紀元前336年）と紀元前3世紀までの死後の貨幣	スイス 金貨 ラインラント 金貨 ガリア中部 金貨
	フィリッポス2世治世および死後のテトラドラクマ銀貨	ルーマニア／ドナウ流域 銀貨
	アレクサンダー3世のスタテル金貨（紀元前356年～紀元前332年）	中央ヨーロッパの金貨
	アレクサンダー3世のスタテル金貨とテトラドラクマ金貨	ドナウ流域 銀貨
	マッサリア 紀元前4世紀のドラクマ銀貨	イタリア北部 銀貨 ラングドック／アキタニア 銀貨
	マッサリア 紀元前4世紀のオボール銀貨	ローヌ流域／アルプス地域 銀貨
	フィリッポス3世のテトラドラクマ銀貨（紀元前323年～紀元前316年）	ブルガリア 銀貨
	タレントウム 金・銀貨（紀元前334年～紀元前272年ころ）	ピカルディ 金貨
	シラクサ 金貨（紀元前317年～紀元前289年ころ）	ノルマンディ 金貨
	ロードス島 紀元前3世紀のドラクマ銀貨	ラングドック 銀貨

	エンポリオン ドラクマ銀貨 (紀元前246年～紀元前218年ころ)	ラングドック／アキタニア 銀貨
紀元前2 世紀 中期～ 後期	ローマ デナリウス (紀元前150年ころ以降)	ノリクム 銀貨
		ローヌ流域 銀貨
紀元前1 世紀	ローマ 銀貨	ブリタニア すべての種類の貨幣 (紀元前20年ころ以降)

表6：ケルト貨幣のモデルと模倣された時代・地域

[出典：Daphne Nash Briggs, “Coinage,” p.247をもとに作成。]

ハンス・ヨルク・ケルナー (Hans-Jörg Kellner) は、ケルトの貨幣のもうひとつの起源として、ギリシア植民市マッサリアの貨幣を挙げる<sup>4</sup>。紀元前7世紀以来ローヌ川を經由する南北間の交易がはじまり、紀元前5世紀にはタレントゥムなどのイタリア半島のギリシア植民市との交易に軸足が移っていく。マッサリアのドラクマ貨幣や諸ギリシア植民市の貨幣は、紀元前5世紀ころより同市と交流のあったリグリア (現在のフランス南部) を經由してイタリア北部のケルト人に伝わったものであり、マケドニアの貨幣の場合と同じように、紀元前2世紀初頭までに、フランス地域や中欧ヨーロッパの一部のケルト人に模倣された。ケルト人はマケドニアやマッサリアを通してギリシアの貨幣に触れ、その製法や図像を会得した。

コリン・ヘイゼルグロブ (Colin Haselgrove) は、ケルトの貨幣製造の5つの段階について述べる<sup>5</sup>。すなわち、①金貨のみが製造された段階 (紀元前4世紀後半から紀元前3世紀)、②初めて銀と銅の合金貨幣 (Potin) が出現した段階 (紀元前3世紀末から紀元前2世紀後半)、③銀銅の合金貨幣の一般化と、銀貨と青銅貨が出現する段階 (紀元前2世紀後半から紀元前1世紀前半)、④青銅貨が流通し、金貨と銀貨が減少する段階 (紀元前1世紀前半から紀元前50年ころ)、⑤ローマ貨幣の流通する段階 (紀元前50年以降) である。時代を下るにつれて、だんだんと価値の高くない貨幣が造られるようになり、反対に価値の高い金貨が造られなくなるという流れがあったことが分かる。銀貨や貨幣用銀銅の合金貨幣、青銅貨などの価値の高くない貨幣の出現と流布は、貨幣が、たとえば貴族の威信を示すような奢侈品から、実用されるものになったことをしめしている。

オッピドゥム社会の成立は、貨幣の流布に拍車をかけた。「開かれた部族の中心地」、そして「都市」として発展を遂げることとなったオッピドゥムでは、物資と人間が集まることによって経済活動が活発化し、それにともない貨幣も多く作られるようになった。オッピドゥムの多く造られた紀元前2世紀後半ころに年代づけられうる貨幣の種類が、それ以前の時代よりも多くなっている<sup>6</sup>。貨幣の鋳型 (図77)

もいくつかの大きなオッピドゥムで出土しており、その摩耗の度合いから、貨幣製造が活発におこなわれていたことが分かる<sup>7</sup>。この時代にはすでにギリシアの貨幣の模倣を脱し、抽象化された動物や幾何学模様など、いわゆる「ケルト的」な図像が刻印されるようになっていた。

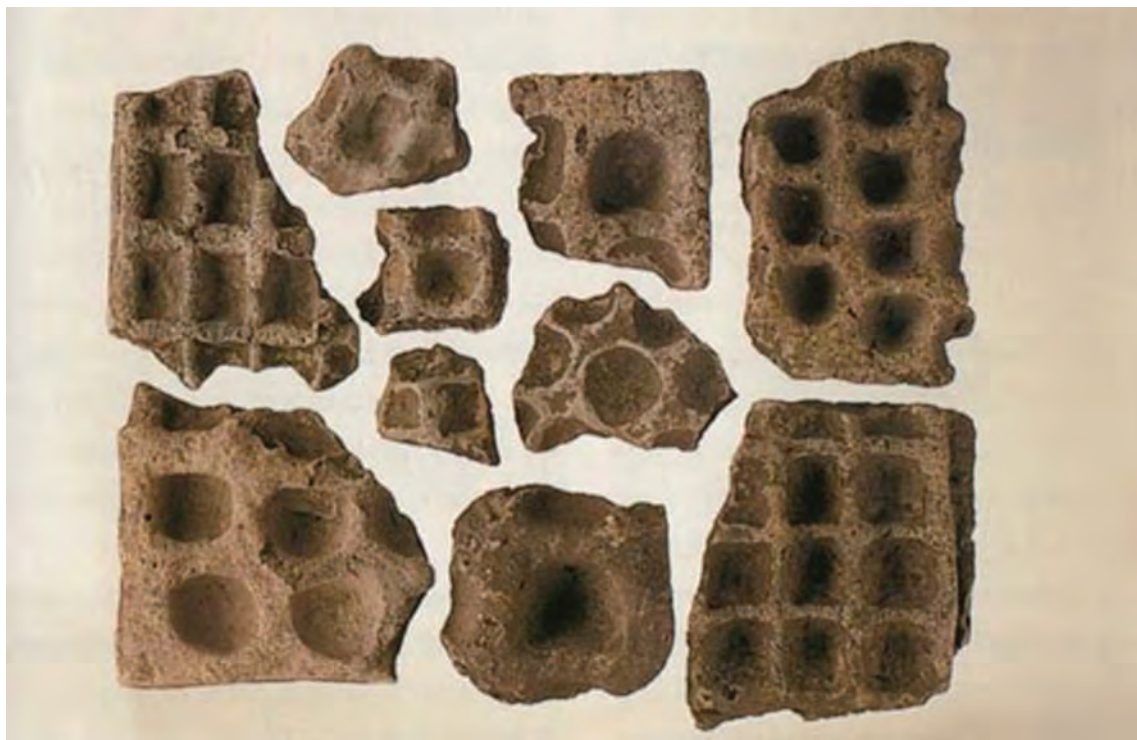


図77：マンヒング出土の貨幣の鋳型

[出典：Susanne Sievers, *Manching: Die Keltenstadt*, S.81, Abb.86.]

貨幣は、その造られた周辺でとどまるだけでなく、少し遠い場所にもわたった。後述するバイエルンの2か所の居住地跡で出土した貨幣のなかには、フランス中東部のガリア人部族セークァニー族や、スイスのヘルウェティイー族で造られた貨幣がふくまれている。これらがどういった経緯でその場所にやってきたのか、正しいことを明らかにすることはできないが、これらの地域間において貨幣の移動を伴うような交流があったことがうかがえる<sup>8</sup>。それは、部族間の交易と呼ぶべきものだったのかもしれない。前章3節における《分銅》のような計量器具の出土も、貨幣を伴う交流か、交易のおこなわれていた可能性を示唆する。

これらの「貨幣の移動」が起こるような行為が、すなわちケルト社会に「貨幣経済」が根づいていた証左、ということとはできない。しかし、少なくともオッピドゥムのような大きな共同体においては、貨幣を用いた交換があるていどは浸透していたのではないかと考えられよう<sup>9</sup>。ヘレニズム世界のものの模倣としてはじまったケ

ルトの貨幣は、時代を下るにつれ盛んに造られ、価値が下がり広く流布するようになった。紀元前の最後の、100年と少しの間には、「貨幣」というものがケルトの部族社会のシステムにある程度組み込まれていたと推測される。

しかし、貨幣の利用が定着していた紀元前2世紀のケルト社会において、そのような「貨幣流通のサイクル」から切り離された貨幣が、数多く遺されていることは、注目に値するだろう。

## 2節 貨幣の神聖性の検討—「埋蔵貨」の事例から—

本稿では、英語の“Coin Hoards”、ドイツ語の„Schatzfund”の訳語として「埋蔵貨」という言葉を用いているが、これらに正確に対応するものはなく、「退蔵貨」や「一括出土銭」と呼ばれることもある<sup>10</sup>。大量の貨幣が壺などに入れられて出土する埋蔵貨は、ケルト世界においては紀元前2世紀からガロ・ローマ期にかけて、ブリテンからボヘミアにかけて遺されている。埋蔵貨の推定される埋蔵年代には地域ごとの傾向があり、紀元前3世紀から紀元前2世紀にはドイツとボヘミアで、紀元前2世紀後半から紀元前1世紀にはガリアで、そして紀元後1世紀にはブリテン島で、となっている<sup>11</sup>。「埋蔵貨」は、オッピドゥム近郊の平地や丘陵の上、部族の中心から離れた村落、自然のただなかで出土する。ヘイゼルグローブの統計では、フランス北部の出土事例のうちの24.7%が、部族の中心から離れた辺境の居住地にあるとされる<sup>12</sup>。また辺境の村落や水域、聖域のなかの事例もある。先のヘイゼルグローブの統計では、水中の事例は12%、聖域の事例は13%である<sup>13</sup>。

### 2-1) ウィンデリキアの「埋蔵貨」

バイエルンは「埋蔵貨」の出土が多い(図78)。後述する2例を含め、バイエルンの「埋蔵貨」において出土する貨幣はほとんどが金貨であり、ドイツ南部発祥とされる「虹の小鉢(レインボーカップ)」型<sup>14</sup>である。これらの「虹の小鉢」型貨幣は、ほとんどが紀元前2世紀終期から紀元前1世紀に年代づけられる。



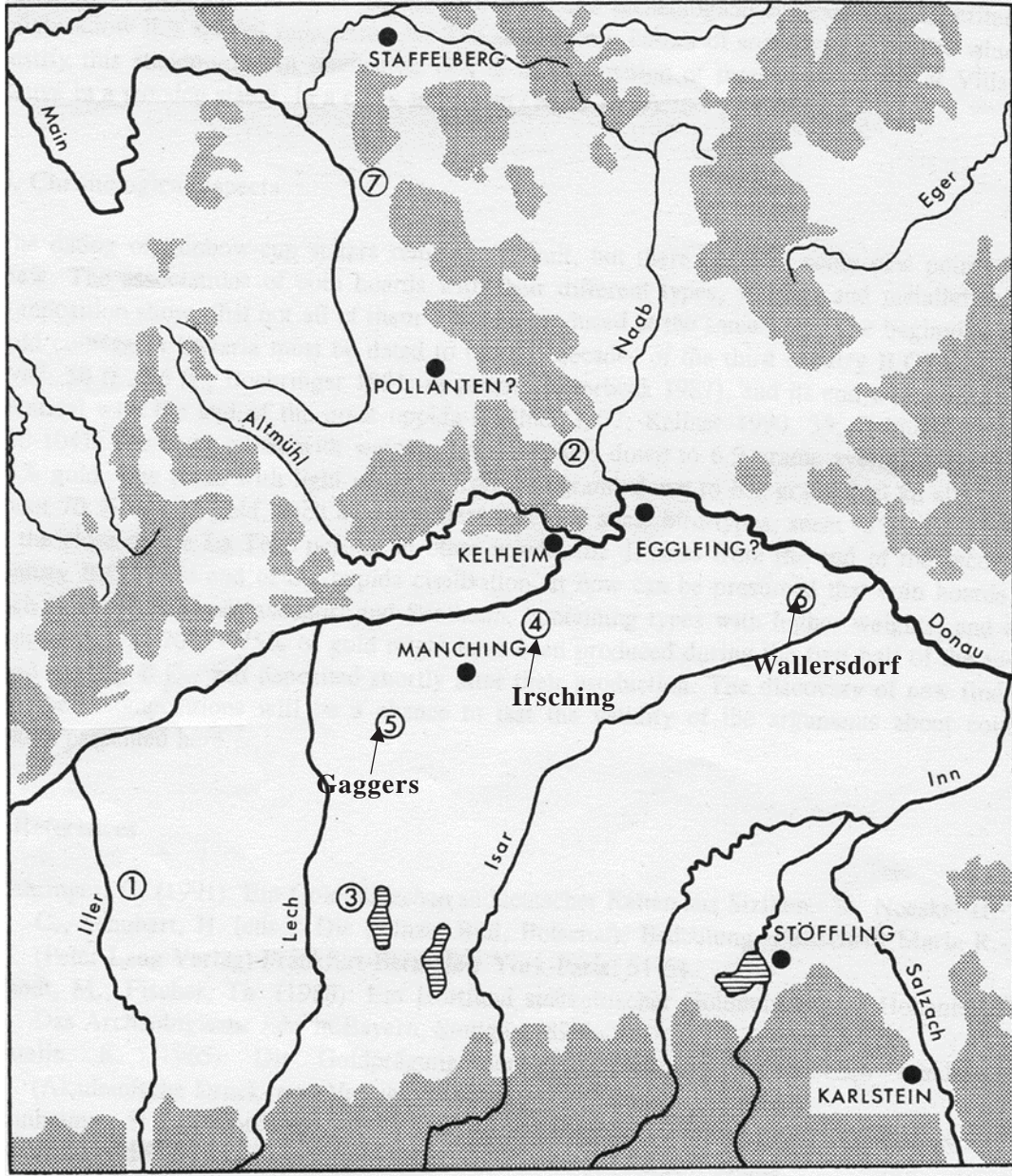


図78：バイエルの埋蔵貨と居住地（貨幣の製造場所）

[出典：Bernward Ziegeus, "New aspects on Celtic coin hoards in southern Germany," p.604.]

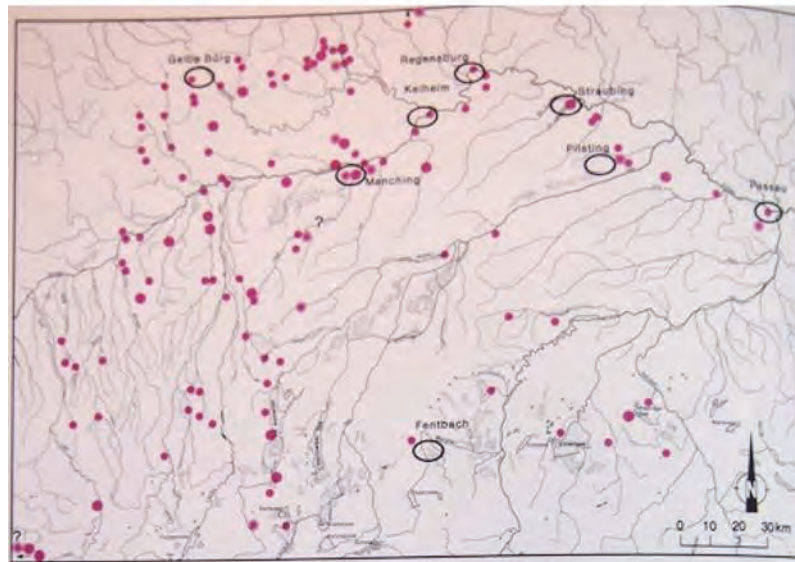


図79：バイエルン南部の銀貨・青銅貨（図上）と金貨（図下）の出土地（楕円はオッピドゥムの所在をしめす）

[出典：Hans-Jörg Kellner, *Die Ausgrabungen in Manching* Bd. 12, S.19-20.]

簡単に、いくつかの事例を見てみよう。

①グロスビッセンドルフ [Grossbissendorf, Hohenfels, Ldkr. Neumarkt i. d. Oberpfalz]

バイエルン北部の小村グロスビッセンドルフでは、計386枚の「レインボーカップ型」の貨幣とボヘミアの金貨1枚が出土している<sup>15</sup>。ほとんどはスタテル金貨と4分の1スタテル金貨であり、ボヘミアの金貨については二枚貝（Muschel）の装飾のあるものが顕著である。

②ヴァラースドルフ [Wallersdorf Lkr. Dingolfing-Landau] <sup>16</sup>

ニーダーバイエルンのヴァラースドルフでは、1987年と1988年に「埋蔵貨」が出



土した。それらは、368枚の「虹の小鉢」型スタテル金貨と、ボヘミア製の4分の1スタテル金貨1枚で構成される。「虹の小鉢」型スタテル金貨は、裏表ともに図像や刻印のない、いわゆる「なめらかな虹の小鉢」であるが、これらの金貨は最大で5種類の鑄型により製造されている。エッガーらは、これらを埋めた主体である居住地（オッピドゥム）が、ヴァラースドルフの近郊にあった可能性を示唆している<sup>17</sup>。

### ③ノイゼス [Neuses, Gde. Eggolsheim, Ldkr. Forchheim]

オーバーフランケンのノイゼスの「埋蔵貨」は、「虹の小鉢」型の金貨4枚と、「羽根飾り（Büschel）」型のクイナリウス銀貨359枚で構成される。「羽根飾り」型クイナリウスは、表面に「人頭」を、裏面に「馬」を打刻したものが大半である。ビョーン・ウーヴェ・アベルス（Björn-Uwe Abels）とベルンハルト・オーバーベック（Bernhard Overbeck）は、これらの貨幣の製造地を、アルテンドルフ [Altendorf, Ldkr. Bamberg] にあった居住地か、もしくはシュタッフエルベルク [Staffelberg, Gde. Staffelstein, Ldkr. Lichtenfels] のオッピドゥムと推定する<sup>18</sup>。

### ④ホーヘンフェルス [Hohenfels, Landkreis Neumarkt i. d. Oberpfaltz, Oberpfaltz] <sup>19</sup>

ホーヘンフェルスでは、1987年に336枚の金貨が、地下20cmの浅い地点から出土している。その大部分は「虹の小鉢」型のスタテル金貨であり、残りの1割が同じく「虹の小鉢」型の4分の1スタテル金貨と、ボヘミアの「二枚貝の装飾のあるスタテル金貨（Muschelstatere）」である。

これらの「埋蔵貨」は、ほとんどがスタテル金貨によって構成されており、紀元前2世紀終期から紀元前1世紀に年代づけられる<sup>20</sup>。

これらの「埋蔵貨」の役割について、ベルンヴァルト・ツィーガウス（Bernward Ziegau）は2通りの解釈をおこなう<sup>21</sup>。すなわち、①他民族の移動に関連した、秘匿された財宝であるとする解釈、そして②神への奉納物とする解釈である。

#### ①「秘匿された財宝」としての「埋蔵貨」

これは、出土貨幣の推定される製造年代を根拠としている。バイエルンの「埋蔵貨」は、先述のように紀元前2世紀終期から紀元前1世紀に年代づけられる。ちょうどこの時代は、ケルトの部族が異民族の侵入に悩まされていたころであった。バイエルンの場合、紀元前2世紀後半におけるキンブリー族やテウトネース族といったゲルマン人部族の南進が該当する。彼らがウィンデリキアを經由してやってきたために、現地の住民が貨幣を地中に隠したとするのが前者の解釈である<sup>22</sup>。

この解釈に則する場合、ガリアにおける「埋蔵貨」の年代についても、説明がつくであろう。ガリアのそれは紀元前140年以降と考えられている<sup>23</sup>。ガリアの場合は、河川や聖域での「埋蔵貨」の年代が、カエサルのガリア遠征のはじまった紀元前1世紀に増加していることから、ツィーガウスのこの解釈を裏づけるものとなるかもしれない。

しかし、この解釈は、陶片や装飾品といった出土する年代を特定できる遺物がほ

とんど残存しないために実証ができない<sup>24</sup>。貨幣の製造年代が、すなわち埋納の年代であるとは一概に言うことはできないのである。

## ②「神への奉納物」としての「埋蔵貨」

こちらは古典史料の記述に基づいた解釈である。ストラボンは『地誌』において、ガリア・ナルボネンシス（現在のフランス南部）に居住したテクトサゲース族の風習について、次のように記している。

この地方〔筆者注：テクトサゲース族の領域〕は金を多量に産する土地である上に、住民も神を恐れ暮らしはけっしてぜいたくではなかったから、ケルト地方の数多くの地に宝庫があった。とりわけ、湖水は盗みを犯してはならない場所を住民に提供してくれていたから、人びとは金銀の重い塊を湖底へ投げ込んだ。・・・かつて市には尊い神域もあって周辺の住民がひじょうに大事に祀っていたし、そのため財貨が溢れるほどになっていた。なにしろ奉納物が多いのにそれらに手をかけようという気を起すものは誰ひとりいなかった。

（4 卷 1 章 7 節）<sup>25</sup>

この記述からは、ケルト人が神への奉納物として大量の価値の高いものを安置していたことがうかがえる。

また、カエサルの『ガリア戦記』にも下記の記述がある。

マールスには、戦いで決着をつけようとする場合に、戦利品を捧げると願掛けするのが通例である。勝利を収めた場合、捕獲した生き物を犠牲に捧げ、その他の品物は一個所に納める。多くの部族において、これらの品物が神聖な場所にうずたかく積み上げられているのが見かけられる。まれにしか起きないことだが、戒律を無視して戦利品を手元に隠したり、奉納物を持ち去ったりする挙に出る者があれば、その罪行に対して拷問をとまなうもっとも重い刑罰が定められている。

（6 卷 17）<sup>26</sup>

これらの記述からは、価値あるものに手をつけず奉納物として置いておくことは、ケルト世界で一般的な風習であったと考えることができよう。むろん、このような埋納が、戦時下や非常事態のなかでの「特殊な行為」であった可能性は排除されるべきではない。

また、このように「埋納」そのものに神聖性を見出す観念<sup>27</sup>も、「埋蔵貨」を宗教的なものとみなしうる論拠となるかもしれない。第1章、第2章でも触れたが、奉納物を埋める、あるいは沈めることによって神への信仰を表現する慣習は、ケルト社会が「都市」と化す以前、素朴な農業経済社会をいとなんだ時代から存在した。ケ



ルト社会では自然を具現化した神々が崇められ、ユルゲン・ツァイドラー (Jürgen Zeidler) によると、それらの神々はとくに丘や水に住んでいると考えられた<sup>28</sup>。この観点から考えると、貨幣を「埋める」ことにも、自然の神を敬う行為との結びつきを見出すことができるのではないだろうか。「埋蔵貨」は、神の存在する場とされた川や泉などの水辺や、オッピドゥムから外れた場所に存在するケースを多く持つ。聖域以外の箇所での事例では、貨幣を埋め（あるいは沈め）るという行為そのものに、埋納者たちは何か特別な意図を込めていたと考えることもできよう。

しかし、こちらの解釈についても問題がある。それは、これら史料の性質に依るものだ。

ケルト人の社会や精神世界については、文字としては少なくとも紀元前1世紀以降のギリシア人やローマ人、すなわちケルトの「外の」人間の著述によってしか知ることにはできない。それらの著述には、異郷の者、あるいは敵である者やその者たちの慣習を、過剰に「野蛮に」見せるような誇張がおこりえることを念頭に置かねばならない<sup>29</sup>。

ケルト貨幣の「埋蔵貨」は、紀元前2世紀以降、ところによっては初期ローマ時代にいたるまで、辺境の地中や川の流域、あるいは聖域など、特定の環境にかたよって埋納された。「埋蔵貨」は、「価値の高い財宝」としての貨幣を略奪から守るためだけでなく、自然の神へと祈念する「奉納物」としての役割もはらんでいた可能性がある。しかし、結局のところ、ツィーガウスの挙げる「埋蔵貨」に関する2つの解釈は、双方とも「埋蔵貨」の存在意義としての決定打には欠けてしまうのが現状であり、どちらかに断定することは難しいといえるだろう。地中や水中、そして聖域といった「神聖視される場所」への埋納は、裏を返せば「手出しのしづらい場所」に置くことで、自分たちの財宝を略奪から守る目的があったと考えることもできるからである。

けれども、「埋蔵貨」に納められた「金貨」には、貨幣本来の用途での使用の形跡のあるものがほとんどなく、それぞれ埋められた場所が違ってもかかわらず、同じ鋳型と印を用いて鋳造されている<sup>30</sup>。これらの貨幣があくまでも「埋納」を目的として造られた可能性のあることを考慮すると、少なくとも「金貨」については、その財宝として以上の意味合いがあった可能性が高い。

### 3節 図像のモチーフに見る貨幣の神聖性

「埋蔵貨」そのものの役割について、現段階でははっきりとした結論を述べることはできない。今一度、先行研究とは異なるアプローチから、ケルトの貨幣と向き合い、そこから敷衍して「埋蔵貨」の意味を考える必要があるだろう。本節では貨

幣の図像から、その差について考えていきたい。

ギリシアやローマの貨幣にも多様なデザインがあるように、貨幣の図像は発行者の権威をしめしたり、あるいは政治的なスローガンを喧伝したりするようにえがかれた<sup>31</sup>。またデザインの変遷は、権力のうつり変わりすらも後代の我々にしめす。貨幣の図像は、製造当時のその社会が強調したかったもの、いわば「世相」を反映し、当時の貨幣がになわされた役割を推測する手掛かりとなりうる。

ケルトの貨幣にも、同じようなことが言えるのではないだろうか。貨幣の図像の分析をおこなうことで、貨幣に込められた意味を読み解くことができ、さらにはそれらを大量に詰め込んだ「埋蔵貨」の意義を類推することができるのではないだろうか。また、「埋蔵貨」に納められた金貨については、その製造の状況から、財宝であり、そして神聖な役割をはらむものであったと考えられる。また、金貨が神聖性を有していた場合、「埋蔵貨」として埋納されることの少ない銀貨や青銅貨幣との間に、材質以外での差がもうけられていたのだろうか。この点についても、図像の比較から答えを導くことができるだろう。

ここでは、バイエルンの2か所の「埋蔵貨」と2基の居住地での出土事例をとりあげる。これらの場所は地理的に互いに近く（図78参照）、また、出土貨幣の一部を除き、ほとんどの貨幣の推定される製造場所が同じと考えられているからである。

### 3-1) 居住地の貨幣—マンヒングとベルヒンク・ポランテンを例に—

マンヒングでは1990年までに計133枚の貨幣が出土しているが、本稿ではそのうちの121枚、ケルナーの発掘報告における「ケルト貨幣 (Keltische Münzen)」に分類されたものに限定して論を進めたい（表10）。

121枚の貨幣の内訳は、マッサリアの貨幣が1枚、ドラクマ銀貨が3枚、4分の1スタテル金貨が3枚、貨幣用銀銅貨幣が31枚、クイナリウス銀貨が42枚、スタテル金貨が11枚、24分の1スタテル金貨が8枚、小さな銀貨が12枚、エレクトロン製のスタテル貨幣が1枚、断片や鋳貨板などその他のものが14枚となっている。

ベルヒンク・ポランテン [Pollanten, Stadt Berching, Ldkr. Neumarkt i. d. Oberpfalz] は防壁を持たない大きな居住地であり、1981年から1987年にかけて114枚が出土している。その内訳は、貨幣用銀銅貨幣が6枚、クイナリウス銀貨が17枚、スタテル金貨が1枚、4分の1スタテル金貨が3枚、小銀貨が86枚、そしてローマのフォリス銅貨が1枚である（表11）。

居住地での出土貨幣には、金貨のたぐいがほとんどない。マンヒングでは「ケルト貨幣」121枚のうち、金貨25枚（約20.7%）、銀貨60枚（約49.6%）、銅貨33枚（約27.2%）であり、ポランテンでは79枚のうち金貨4枚（約5%）、銀貨70枚（約88.6%）、そして銅貨が5枚（約6.3%）である。このようなことから、金貨が居住地における「実用的な貨幣」とは一線を画すものであったことがうかがえる。

では、これらの貨幣の図像について見ていこう。

マンヒングとポランテンの貨幣のモチーフは、貨幣の種類ごとに表のとおりである。とりわけ、表面に「人頭」を、裏面に「馬」を打刻する組み合わせが多いことが分かる。

①スタテル（金貨）
表：鳥の頭・装飾突起・図像なし
裏：トルク・小球（Kugel）・十字・二枚貝（Muschel）・図像なし
②4分の1スタテル（金貨）
表：巻き髪の人頭・図像なし
裏：ペガサス・図像なし
③24分の1スタテル（金貨）
表：双頭・王冠をかぶる人頭・右向きの人頭・点（Punkt）
裏：右向きの馬・左向きの馬・人頭・点（Punkt）
④クイナリウス（銀貨）
表：兜をかぶる左向きの人頭・右向きの人頭・装飾突起・左向きの人頭・羽根飾り（Büschel）
裏：左向きの馬・右向きの馬・三角形、V字などの幾何学模様・十字・点
⑤合金貨幣※ガリアの部族のもの
表：鉢巻をした左向きの人頭・左向きの人頭・錨の装飾・装飾突起
裏：突進する牛・山羊・動物・猪
⑥小銀貨
表：左向きの人頭・右向きの人頭・装飾突起
裏：左向きの馬・幾何学模様・点（Punkt）・右向きの馬

表7：マンヒングとポランテンの貨幣のモチーフ

人頭のモチーフには様々なバリエーションがあり、兜をかぶっているもの、鉢巻を巻いているものなどさまざまであるが、本稿ではひとまとめに「人頭」と解釈することにする。また、裏面の「馬」に関しても、馬単体が描かれているものだけでなく、周囲に十字やV字や点などといった幾何学模様が配されているものも数多い。

図80はマンヒング出土のクイナリウス銀貨である。この十字模様の貨幣（Kreuzmünze）には、表面に右を向いた人頭が、裏面には十字模様がえがかれている。人頭は目鼻と口の位置に点があることでそれらを描写されている。またその頭髪は、両端が大きな丸をかたちづくる曲線が6本からなっており、巻き髪を表現している。裏面は、大きな十字によって円のなかが4面に区切られており、2つ

の点（左上）・頂点が丸くふくらんだV字型の装飾（右上と右下）・1つの点（左下）がそれぞれほどこされている。



**図80**：Inv. Nr. 1984, 4749, クイナリウス, 銀, 1.835g, Schönaich I 型の十字模様の貨幣（表：右向きの人頭 裏：十字）

[出典：Hans-Jörg Kellner, *Die Ausgrabungen in Manching Bd. 12, Taf. 1*より抜粋。]

また、図81はベルヒンク・ポランテン出土のクイナリウス銀貨である。こちらの「羽根飾り型」のプロトタイプとされる貨幣では、表面に左を向いた巻き髪頭の人間の顔を、裏面に左を向いた馬を配する。人頭は点によって目・鼻・分厚い唇を表現される。こちらの巻き髪は、分厚い点描がいくつも連なることで描写される。馬もまた、点と線によって、きわめて抽象化されたかたちで、地面を駆けているように描写されている。

銀貨などのモチーフは、マケドニア、ギリシアの貨幣との類似性が看取できる。すなわち、ケルト貨幣のモデルになったマケドニアや植民市の貨幣と、モチーフにおいてはそれほど変化がなかったということになる。それらは、ケルト独特の意匠をほどこしているとは一概には言えない。時代をくだるにつれ、抽象化や表現上の様々なバリエーションの誕生というプロセスをたどりながらも、模倣の時代においてもちいられたモチーフの打刻が連綿と続けられていたことがうかがえる。銀貨以外の貨幣でもこの「人頭」と「馬」の取り合わせが見られることを鑑みると、価値の不高くない、実用される貨幣全体にこの傾向があったと考えられる。また、裏面に多用される「馬」のモチーフについては、前章2節で述べたような「馬の社会的・宗教的重要性」という事実が、貨幣の図像としての頻繁な登場に反映されていると考えられよう。





図81 : Inv. Nr. Regensburg MK 3441, クイナリウス, 銀, 1.944g, 「羽根飾り型 (Büschelquinar)」のプロトタイプ? (表: 左向きの人頭 裏: 左向きの馬)

[出典: *Ebd.*, Taf. 41より抜粋。]

### 3-2) 「埋蔵貨」の貨幣—イルシングとガガースを例に—

イルシング [Irsching, Gde. Vohburg a.d. Donau, Ldkr. Pfaffenhofen] は、マンヒングの近郊にある小村である。1858年、イルシングの排水工事の現場の深さ50~60cmの地層から、900枚以上のケルトの貨幣と、それを納めていたと思われる黒い陶器の破片が出土した。埋納されていたのは、すべてマンヒングで製造された「虹の小鉢」型のスタテル金貨である (表8、表12)。

他方、ガガース [Gaggers, Gde. Odelzhausen, Ldkr. Dachau] は1751年に、近郊の森林地帯で1300枚から1500枚のケルト貨幣が出土している。それらは「虹の小鉢」型のスタテル金貨と、近隣のポイイ族の金貨で構成されている (表9、表13)。

イルシングとガガースの「埋蔵貨」は、ともに最大級の「虹の小鉢」型のスタテル金貨の一括出土物である。これらの金貨のモチーフから、どのようなことが読み取れるだろうか。

タイプ	表面	裏面	出土数
I A	長いくちばしと「牡羊の角」のある円状の蛇 背部に点か線の髭 しっぽが渦巻いている (“Rolltier”)	6つの点のあるトルク	181
I B	I Aの“Rolltier”に同じ	3つのリラの形のオーナメント 外側に点 球体	11

II A	鳥の頭（左） 鉤状の嘴 その前に 葉冠 半分の冠 冠の頂に点	3つの点のあるトルク	249
II C	鳥の頭（左） 葉冠の縁取り 嘴は 2つの円に挟まれる	5つないし6つの点のあるトルク	196
II D	鳥の頭（左） 嘴は2つの小球に挟 まれる 両端に円のついた葉冠	5つの点のあるトルク、線刻	2
II E	鳥の頭 端に円のついた葉冠	十字、3つの小球、リラの装飾とS 字型の線刻	3
II F	鳥の頭と冠 「コンマ」の形のシン ボル 環状の装飾	6つの点のあるトルク 花の蕾	2
III A	鳥の頭と両端に小球のついた冠	6つの点のあるトルク	12
III B	鳥の頭とタイプIII Aのような冠、 頭の下に環状の装飾	III Aと同じ	1
不明	鳥の頭	4つの点のあるトルク	4
IV	ふさふさとした葉冠 両端に小球	トルクと小球	230
V	図像なし	図像なし	9
XI	不規則な装飾突起 中央に点刻	プロペラ型の3枚の葉と小球	3
VII A	植物の「がく」の形の渦巻き装飾 中央に小球	線対称の曲線装飾とトゲ	4
VIII	巻き髪の人頭（右）	向き合うリラの装飾とS字の曲 線、麦粒のような装飾	6

表 8：イルシングの出土貨幣 タイプ別 [出典：Ebd., S.159-169 を基に筆者作成。]

タイプ	表面	裏面	現存数
I A	円形にくねった嘴を持つ蛇と雄羊の 角を持つ頭（Rolltier）	6つの点のあるトルク	6
II A	冠と曲がった嘴の鳥の頭（左）	3~4つの点のあるトルク	4
II C	鳥の頭（左） 葉冠の縁取り 嘴は2 つの円に挟まれる	5つないし6つの点のあるトル ク	4
II D	鳥の頭（左） 嘴は2つの小球に挟 まれる 両端に円のついた葉冠	5つの点のあるトルク 線刻	3
II G	幅広の首を持つ鳥の頭（左） その 前に三角形の並び 嘴の上部中央に 小球と4つの点	三角形の中に6つの小球のあ るトルク（？）中央にロゼッタ 模様	1
IV A	曲がった葉からなる冠の縁取り 端	トルクと小球	3

	に小球		
VI	角のある鹿の頭	プロペラのような形に並んだ 三角形	1
ボイイ族の Muschelstatere	不規則な装飾突起	二枚貝（Muschel）の形と幾何 学模様	10

表 9：ガガースの出土貨幣 タイプ別 [出典 *Ebd.*, S.171-175 を基に筆者作成。]

イルシングとガガースの金貨のモチーフを見ていくと、表面には「鳥の頭」・「蛇」・「葉冠」・「右向きの人頭」・「牡羊の頭」「冠」がえがかれている。いっぽうで裏面には、「トルク（首輪）」・「竖琴」・「小球（Kugel）」・「十字」・「花のつぼみ」・「葉」・「トゲ」・「曲線の装飾」・「プロペラのような装飾」がほどこされる。このうちでもっとも多いものが、タイプIIのシリーズにほどこされる「鳥の頭」のモチーフである。



図 82：Inv. Nr. Münzslg. Ph. 3.17 (neu)，スタテル，金，7.4g，「虹の小鉢」タイプ II Ca（表：左を向いた鳥の頭 裏：6つの点のあるトルク）

[出典：*Ebd.*, Taf.45 より抜粋。]

図 82 はタイプ II C のうちの一枚である。表面には、外周の 3 分の 2 程度を囲むように葉冠がほどこされており、中央には大きく曲がったくちばしを持つ鳥の頭が、上下を小さな円の装飾に挟まれるかたちで配置される。

美術装飾の視点から見ると、「鳥」はめずらしいものではない。美術装飾において太陽信仰・水源信仰とのむすびつきを持つ「鳥」のモチーフが、ケルト以前の時代から青銅器や鉄器にほどこされてきたことは、前章でも触れたとおりである。

この「鳥の頭」について、バイエルンとオーストリアのケルトの研究者ルドルフ・ライザー（Rudolf Reiser）は、この「鳥」は「ワシ」であり、このモチーフを配した貨幣が、マンヒングのオッピドゥムと結びつく根拠であると結論づける。彼によれ

ば、マンヒングの古代の名前とされる“Artobriga (アルトブリガ)”は、ケルト系の言語の意味において「ワシの丈夫な橋」になるという。Ar がブルトン語で「ワシ」、to がブルトン語で「丈夫な」、briga がスコットランド語で「橋」、というように<sup>32</sup>。マンヒング、すなわち「アルトブリガ」は、その名に「ワシ」を冠するため、そこで製造される貨幣にもワシの図像がほどこされたということだ。

ライザーのこの主張は、いくつかのケルト系言語をつなぎ合わせて導かれたものであって、手放しに受け容れることはできない。しかし、彼の主張は、貨幣の図像に製造地の社会的背景や、流布していた観念が反映されていたと考えるための一助となるだろう。なぜなら、この「ワシ」という生き物は、信仰との関わりを持つ可能性があるからだ。

ケルト美術において、「ワシ」ないしは「カラス」のような猛禽類はケルト世界の大神の1柱、テウタテス (Teutates) の象徴とされる。この点から考えると、「虹の小鉢」型貨幣の「鳥の頭」は、テウタテスを表現するモチーフとしてとらえることもできるが、それを決定づけるには傍証が不十分である。しかし、「虹の小鉢」に描かれたそのほかのモチーフも、神性との結びつきをうかがえるものがある。たとえば、「蛇」と「豎琴」はエスス (Esus)、牡羊は鳥の頭と同じくテウタテス、といったように<sup>33</sup>。このような金貨のモチーフにおける神性との結びつきの暗示は、先に述べた銀貨などのモチーフには見出しがたいものである。この点において、金貨とそれ以外の貨幣は、そもそもの性格が異なっており、そのことがモチーフにも反映されていたのではないかと考えられる。

イルシングやガガス出土の貨幣以外にも、「埋蔵貨」出土の貨幣にはいずれも独特の図像が刻印されている。たとえば、グロースビッセンドルフ出土の貨幣には「星」、「トルク」と「円形浮彫のある葉」、「ユリの花」、「整った髪の人頭」のモチーフがあり、アマー湖 [Ammersee] では、裏面が「星」と「3つの円」、そして「リラ」のある貨幣のほか、「巻き髪の人頭」、「プロペラのようなかたち」、「花」のモチーフが発見されている<sup>34</sup>。

これらのモチーフはすべて抽象的であり、ケルトの貨幣の起源となったマケドニア、あるいはマッサリアなどの貨幣における、神ないし為政者の写実的な横顔や、それらの象徴を施した図像とは対照的である。この違いについて、筆者は次のように考えている。ケルト美術の伝統において、人の姿をした神像が制作されることは、ローマ支配下に入るまでほとんどなかった<sup>35</sup>。ローマ支配以前のケルト美術において表わされる神像は、はっきりと人間の姿をせず、動物と植物と人間が融合したような、不可思議な図像であった。鶴岡真弓氏はこれを「反人像主義 (アンソロポモルフィズム)」と称し、「対象／モチーフの個性性を刻々に瓦解させ、めくるめく変貌の『過程』をそこに見させる美術」とか、「モノの『縁／際／境』に蠢く縁の造形」などと説明する<sup>36</sup>。神の姿を人間として表現するギリシアと、表現しないケルト。この違いは、ギリシアとケルトのあいだの「神の見方」の違いをはっきりと表してい



るといえよう。貨幣における抽象的な図像は、このようなケルト人の「神に対する見方」を反映していると考えられる。

#### 4節 小括

本章では、「埋蔵貨」を中心として、ケルトの貨幣に神聖な意味が込められ得たのか、込められていたとしたらどのような意味が込められたのかを考えた。その結果、「埋蔵貨」と居住地出土の貨幣との比較からは、貨幣の材質による根本的な製造意義の差異を看取できた。流通を目的としない「金貨」と、実用されるものとしての「銀貨」や「合金貨幣」。少なくとも「金貨」には、神聖な意味の込められうる隙間があったのではないかと考えられる。金貨のモチーフは、おそらくは、それが鑄造された場所での宗教観や精神世界を反映しうるものであり、対して銀貨などは、マケドニアやギリシアの模倣から純粋に発展して、抽象的になったモチーフがもちいられたと推測できる。

「埋蔵貨」の役割については不明なところが多い。筆者は、「埋蔵貨」の役割の可能性のひとつとして、危機の時代の特殊な状況下における、宗教的な意味を含んだ振る舞いの痕跡と考える。「埋蔵貨」は聖域のほか、地中や水中など、古くよりケルトの神々が宿ると考えられた場所に、農民の小規模な儀式の形態である「埋納」というかたちで遺される。「埋蔵貨」のある場所は簡単な「聖域」として機能し、人々によって自発的に崇められる場所であったのではないだろうか。ケルト貨幣の「埋蔵貨」の存在は、ケルト社会が「都市」へと変化していくなかで、人々の持っていた自然の神への信仰心が、「貨幣」という新しくもたらされた要素をもちいることで続けられていたことをしめすものなのではないだろうか。

むろん、検討事例が鮮少であるゆえに、これらの議論は現段階では推測の域を出ない。銀貨や合金貨幣にえがかれる「人頭」についても、単にギリシアやマケドニアの模倣からの発展ととるか、それとも神や英雄の典型的なモチーフとしての崇敬対象<sup>37</sup>ととるかで認識が変わってくるであろう。しかし、このようなモチーフの複雑さは、「貨幣」が「商業のための道具」だけでなく、「信仰のための道具」でもあった可能性を見出すには十分なのではないだろうか。

---

#### 【註】

<sup>1</sup> 松平千秋訳、『歴史（上）』,岩波書店,1971,1977年,78-79頁。

<sup>2</sup> Hans-Gert Bachmann et. al., “New aspects of Celtic gold coinage production in Europe,” in *Gold Bulletin*, 32 (1), 1999, pp.24-29, p.24.

<sup>3</sup> Daphne Nash Briggs, “Coinage,” in Miranda J. Green (ed.), *The Celtic world*, pp.244-253, p.247.

<sup>4</sup> Hans-Jörg Kellner, “Coinage,” in Venceslas Kruta, et. al. (eds.), *op. cit.*, pp.475-484, p.475.

- 
- <sup>5</sup> Colin Haselgrove, "Iron Age coin-finds from religious sites and contexts in N Gaul," in Ralph Häussler, Anthony C. King (eds.), *Continuity and innovation in religion in the Roman West* : 2, Society for the Promotion of Roman Studies, Portsmouth, 2008, pp. 7-23, pp. 7-8.
- <sup>6</sup> Hans-Jörg Kellner, "Coinage," p.476.
- <sup>7</sup> Bernward Ziehaus, „Keltische Münzwerkzeuge aus dem Nörtlinger Ries Ein Vorbericht,“ in *Abhandlungen der Braunschweigischen wissenschaftlichen Gesellschaft*, Bd.60, 2008, S.113-127, S.115-116.
- <sup>8</sup> Rupert Gebhard, "The "Celtic" oppidum of Manching and its exchange system," in *Different Iron Ages : Studies on the Iron Age in Temperate Europe*, Tempus Reparatum, Oxford, 1995, pp.111-120, pp. 112-113.
- <sup>9</sup> Ibid., p.113.
- <sup>10</sup> アンドリュウ・バーネット (小山修三監修,新井佑造訳),『コインの考古学 (大英博物館双書⑥)』, 學藝書林,1998 年では、Hoard は「貯蔵庫」とも訳される。
- <sup>11</sup> Colin Haselgrove, op. cit., p.12; Derek F. Allen, "Celtic coins from the Romano-British temple at Harlow, Essex," in *The British Numismatic Journal*, 33, 1964, pp.1-6.
- <sup>12</sup> Colin Haselgrove, op. cit., p.9.
- <sup>13</sup> Ibid., p.9.
- <sup>14</sup> 「虹の小鉢 (Regenbogenschüsselchen)」は、ドイツ南部で鑄造されたと考えられる片面がへこんだ貨幣のこと。「財宝が虹の端で見つかる」という中世の迷信に由来する名前。
- <sup>15</sup> Bernward Ziehaus, "New aspects on Celtic coin hoards in Southern Germany," in Morteani, Giulio, Northover, Jeremy P. (eds.), *Prehistoric gold in Europe : Mines, metallurgy and manufacture*, Kluwer Academic Publishers, 1995, pp. 597-608, p.599.
- <sup>16</sup> Thomas Fischer et. al., „Der keltische Münzschatz von Wallersdorf,“ in *AJB*, 1988, S. 87-89.
- <sup>17</sup> *Ebd.*, S.88-89.
- <sup>18</sup> Björn-Uwe Abels, Bernhard Overbeck, „Ein Schatzfund keltischer Münzen aus Neuses, Gemeinde Eggolsheim, Landkreis Forchheim, Oberfranken,“ in *AJB*, 1981, S.126-127, S.126.
- <sup>19</sup> Thomas Fischer, Michael Brandt, „Ein Hortfund spätkeltischer Goldmünzen aus Hohenfels,“ in *AJB* 1987, 1988, S.89-90.
- <sup>20</sup> Hans-Jörg Kellner, *Die Münzfunde von Manching und die keltischen Fundmünzen aus Südbayern (Die Ausgrabungen in Manching Bd. 12)*, Franz Steiner Verlag GMBH Wiesbaden, 1990, S.37.
- <sup>21</sup> Bernward Ziehaus, "New aspects on Celtic coin hoards in Southern Germany," pp.605-606.
- <sup>22</sup> Bernward Ziehaus, "New aspects on Celtic coin hoards in Southern Germany," p. 605 ; Rudolf Pörtner, *Bevor die Römer Kamen*, S.386-387.
- <sup>23</sup> Haselgrove, op.cit., p.12.  
これらの地域では、水中や聖域内で発見されることが多い。水中の場合、沈められる場所は「川」が最も多く、次いで「泉」、「沼」などの流れのない水辺に出土する (Haselgrove, op.cit., p.11.)。出土する貨幣の大半は、青銅あるいは銀と銅の合金といった価値があまり高くないものであるが、まれに 2 分の 1 スタテルなどの金貨も納められる。また「聖域」における貨幣の埋納は、それ以前の聖域での主たる埋納物であった武具と人骨にとってかわるかたちで、紀元前 1 世紀ころよりおこなわれるようになった。
- <sup>24</sup> Hans-Jörg Kellner, *Die Ausgrabungen in Manching Bd. 12*, S.35-37.
- <sup>25</sup> 飯尾都人訳,『ギリシア・ローマ世界地誌』,321-322 頁。
- <sup>26</sup> 高橋宏幸訳, 194~195 頁。
- <sup>27</sup> Jean-Louis Brunaux, *The Celtic Gauls*, pp.89-90.を参照。
- <sup>28</sup> Jürgen Zeidler, "Cults of the 'Celts' : A new approach to the interpretation of the religion of Iron Age cultures," in Raimund Karl, Jutta Leskovar (Hrsg.), *Interpretierte Eisenzeiten. Fallstellen, Methoden, Theorie*, Fdge. 18, 2005, pp.171-179, pp.174-175.
- <sup>29</sup> Gebhard Dobesch, "Ancient Literary Sources," in Venceslas Kruta et. al. (eds.), *op. cit.*, pp.30-38.
- <sup>30</sup> Bernward Ziehaus, "New aspects on Celtic coin hoards in Southern Germany," pp.604-605.
- <sup>31</sup> アンドリュウ・バーネット (小山修三監修,新井佑造訳),『コインの考古学』, 45-

---

49 頁。

<sup>32</sup> Rudolf Reiser, *Die Kelten in Bayern und Österreich*, S.22.

<sup>33</sup> Jean-Jaques Hatt, „Die keltische Götterwelt und ihre bildliche Darstellung in vorrömischer Zeit,“ S. 54-60.

<sup>34</sup> Ziegau, “New aspects on Celtic coin hoards in southern Germany,” pp.600-603.

<sup>35</sup> 疋田隆康, 「古代ガリア社会におけるケルトの伝統ーガロ=ローマ文化の形成」, 543 頁; 鶴岡真弓, 『ケルト/装飾的思考』, 筑摩書房, 1989, 1993 年, 131-134 頁。

<sup>36</sup> 鶴岡真弓, 「反人像主義ーケルト美術の枠組ー」, 『史潮』, 37, 1995 年, 2-18 頁, 11-12 頁。

<sup>37</sup> 「人頭」の神聖性については、Jean-Jaques Hatt, „Die keltische Götterwelt und ihre bildliche Darstellung in vorrömischer Zeit,“, S.55-59; Jean-Louis Brunaux, *op. cit.*, pp.109-111; トーマス・パウエル (笹田公明訳), 『ケルト人の世界』, 153 頁参照。

表 10：マンヒング出土の「ケルト貨幣」一覧 [出典：Hans-Jörg Kellner, Die Ausgrabungen in Manching Bd. 12, S. 444-61 を基に作成。]

	出土状況	種類	材質	重さ	所蔵	タイプ	表面	裏面
1	Grabung 1972, Schnitt 679 Baggerschnitt 78	中銅貨	青銅	14.357	1974, 1068	マツサリアの青銅貨幣 紀元前 3 世紀頃	アポロの頭 (左)	突進する牛
2	Grabung 1972, Schnitt 744	ドラクマ	銀	2.986	1974, 1883	“Monnaies a la croix” 型 「ラング ドシヤ型」3	尖点のような巻き髪の人頭 (左) 外側 右に点	十字 半月 百合の花のような装飾
3	Grabung 1972, Schnitt 744, Grube a1 上の層	ドラクマ	銀	3.33	1974, 1885	“Monnaies a la croix” 型 「ラングド シヤ型」3 バリエーション 1	人頭 (左) 頭の下に渦巻	十字 内側に点のある半円
4	Grabung 1972, Schnitt 732	4分の1スタテル	金	3.33	1974, 1884	“Monnaies a la croix” 型 「ラングド シヤ型」3 バリエーション 1	もっさりとした巻き髪の人頭 (右)	ペガサス (右) 上下に無数の点
5	Grabung 1972, Schnitt 107	貨幣用銀銅貨幣 (Potin)	銅	2.816 (部分)	1974, 1574	レウキー族の合金貨幣	鉢巻を巻いた人頭 (左)	毛を逆立てたようなイノシシ (左) その下に輪
6	Grabung 1972, Schnitt 756	貨幣用銀銅貨幣	銅	5.856	1974, 1969	レウキー族の合金貨幣	鉢巻を巻いた人頭 (左)	毛を逆立てたようなイノシシ (左) その下 に大きな輪と 2 つの小さな輪のようなもの
7	Grabung 1972, Schnitt 728	貨幣用銀銅貨幣	銅	6.272	1974, 1766	レウキー族の合金貨幣	鉢巻を巻いた人頭 (左) 4 本の巻き髪 の房	毛を逆立てたようなイノシシ (左) 下に 線と大きな輪
8	Grabung 1972, Schnitt 752	貨幣用銀銅貨幣	銅	4.479	1974, 1934	レウキー族の合金貨幣	鉢巻を巻いた人頭 (左) 点の目と角度 のついた鼻 5 本の巻き髪 <small>の房</small>	毛を逆立てたようなイノシシ (左) 下に 2 つの半円の間の大きな輪
9	Grabung 1972, Schnitt 713, Baggerschnitt 8	貨幣用銀銅貨幣	銅	3.791	1974, 1627	レウキー族の合金貨幣	強調された鼻の人頭 (左)	毛を逆立てたイノシシ (左) 下に 3 枚の葉
10	Grabung 1966, Schnitt 312, Grube a	貨幣用銀銅貨幣	銅	5.380 (部分)	1967, 498	レウキー族の合金貨幣	判別不能	毛を逆立てたようなイノシシ (左)
11	Grabung 1957, Schnitt 60, Grube e	貨幣用銀銅貨幣	銅	3.322	1958, 58	レウキー族の合金貨幣	判別不能	毛を逆立てたようなイノシシ (左)
12	Grabung 1972, Schnitt 752, Grube a の上層	貨幣用銀銅貨幣	銅	4.8	1974, 1936	おそらくレウキー族の合金貨幣	おそらく人頭	毛を逆立てたようなイノシシ (左)



13	Grabung 1955, Planquadrat k8	クイナリウス	銀	1.8	1956, 930	カルテン族のクイナリウス	兜をかぶったローマ人の頭 (左) 小円	馬 (左) その下に三角と半分の車輪
14	Grabung 1972, Schnitt 756	貨幣用銀銅貨幣	銅	5.428	1974, 1970	セノネース族の合金貨幣	人頭 (右) 点の目と 6 つの巻き髪 房 ねじれた輪	馬 (左) 頭ふさふさの尾 胸の前と身体の上下に円
15	Grabung 1957, Schnitt 83, Grube f	貨幣用銀銅貨幣	銅	2.393	1958, 435	セノネース族の合金貨幣?	人頭 (向き不明)	馬 (左)
16	Grabung 1972, Schnitt 687	貨幣用銀銅貨幣	銅	6.289	1974, 1189	セークアニー族の合金貨幣 A1 "Grosse Tête"	二重に鉢巻をした人頭 (左)	突進する牛
17	Grabung 1965, Schnitt 249, Grube b 地層 0.65m 下	貨幣用銀銅貨幣	銅	2.686	1967, 366	セークアニー族の合金貨幣 A1 "Grosse Tête"	二重に鉢巻をした人頭 (左) くぼんだ目	突進する牛
18	Grabung 1958, Schnitt 111, Grube e	貨幣用銀銅貨幣	銅	4.136	1959, 95	セークアニー族の合金貨幣 A1 "Grosse Tête" のフォルムでない	二重に鉢巻をした人頭 (左)	突進する牛
19	Grabung 1971, Schnitt 619, "Grube a"	貨幣用銀銅貨幣	銅	4.42	1974, 99	セークアニー族の合金貨幣 A1 "Grosse Tête"	人頭 (左) 鉢巻と鼻が分かる	突進する牛
20	Grabung 1984, Schnitt 827, Grube a1 Planum 2 0.3m 下	貨幣用銀銅貨幣	銅	4.169	1984, 5091	セークアニー族の合金貨幣 A1 "Grosse Tête"	二重の鉢巻の人頭 (左)	突進する牛 (左)
21	Grabung 1972, Schnitt 723, Schnitt 72 Grube a 上層	貨幣用銀銅貨幣	銅	6.138	1974, 1708	セークアニー族の合金貨幣 A1 "Grosse Tête"	二重の鉢巻の人頭 (左) くぼんだ目 半円の口	突進する牛 (左)
22	Grabung 1971, Schnitt 620, "Grube a1" 上層	貨幣用銀銅貨幣	銅	4.895	1974, 109	セークアニー族の合金貨幣 A1	人頭 (左) 鉢巻と、並外れて幅広い首と胸	突進する牛 (左)
23	Grabung 1971, Schnitt 665, Grube a 上層の塊	貨幣用銀銅貨幣	銅	5.862	1974, 491	セークアニー族の合金貨幣 A2 "Grosse Tête"	二重の鉢巻の人頭 (左)	突進する牛 (左)
24	Grabung 1962, Schnitt 175, Abschnitt c-7, Grube a	貨幣用銀銅貨幣	銅	5.043	1963, 1018	セークアニー族の合金貨幣 A2 "Grosse Tête"	人頭 (左) 点の鼻と顎 二重の鉢巻	突進する牛 (左)
25	Gegfundten 1983, Flur Nr. 1779	貨幣用銀銅貨幣	銅	4.694		セークアニー族の合金貨幣 A2 "Grosse Tête"	二重の鉢巻の人頭 (左)	突進する牛 (左)

26	Grabung 1972, Schnitt 753, Grube a. 上の層	貨幣用銀銅貨幣	銅	5.709	1974, 1947	セークアニー族の合金貨幣の A2 "Grosse Tête"	二重の鉢巻の人頭 (左) くぼんだ目の口	突進する牛 (左)
27	Grabung 1958, Schnitt 111, Grube b	貨幣用銀銅貨幣	銅	4.384	1959, 91	セークアニー族の合金貨幣の A2 "Grosse Tête"	二重に鉢巻をした人頭 (左)	突進する牛 (左)
28	Grabung 1958, Schnitt 127	貨幣用銀銅貨幣	銅	4.393	1959, 329	セークアニー族の合金貨幣の A2 "Grosse Tête"	人頭 (左) 円形の目と点状の顎 二重の鉢巻	突進する牛 (左)
29	Grabung 1972, Schnitt 706	貨幣用銀銅貨幣	銅	3.655 (部分)	1974, 1571	セークアニー族の合金貨幣の "Grosse Tête"	人頭 (左)	突進する牛 (左)
30	Grabung 1972, Schnitt 755	貨幣用銀銅貨幣	銅	2.613	1974, 1959	セークアニー族の合金貨幣のグループ C	ほっそりした人頭 (左) 小さな鉢巻 大きな鼻と顎 巻髪 外側にほっそりした縁取りのねじれ	4 本足の動物 (左)
31	Grabung 1973, Schnitt 758 Grube a1 上 Teil 3	貨幣用銀銅貨幣	銅	2.879	1974, 2024	セークアニー族の合金貨幣?	人頭?	突進する牛か馬
32	Grabung 1958, Schnitt 118, Pfosten 27	スタテル	金	5.501	1959, 203	質の良くないヘルウェイ族のスタテル	鉢巻きのようなねじれと巻き髪の人頭 (右)	二頭立て戦車 (左)
33	Grabung 1972, Schnitt 757	貨幣用銀銅貨幣	銅	3.232	1974, 1981	ヘルウェイ族の合金貨幣 "Zürcher Typs"	対称的な 2 つの錨 (Anker) の装飾	山羊 回顧的な人頭と大きな尾のある白鳥
34	Grabung 1972, Schnitt 736	貨幣用銀銅貨幣	銅	3.588	1974, 1825	ヘルウェイ族の合金貨幣 "Zürcher Typs"	対称的な 2 つの錨 (Anker) の装飾 4 分の 3 ほどの円をとまなう	山羊 回顧的な人頭と大きな尾のある白鳥
35	Grabung 1971, Schnitt 610	貨幣用銀銅貨幣	銅	3.76	1974, 41	ヘルウェイ族の合金貨幣	対称的な 2 つの錨の装飾 半円	山羊 回顧的な人頭と大きな尾のある白鳥
36	Grabung 1958, Schnitt 113, Sumpfbodem f	クイナリウス	銀と銅	1.402	1959, 151	Düren 型の十字模様の貨幣	人頭 (右)	十字 角と 3 つの円
37	Grabung 1957, Schnitt 94	クイナリウス	銀	1.919	1958, 489	Zwischen 型の十字模様の貨幣	大きな鼻の人頭 (右)	十字 角の中に V 字型、2 つの点、円と点をともなう線
38	Grabung 1972, Schnitt 683	クイナリウス	銀	1.815	1974, 1139	Schönaich I の十字模様の貨幣	人頭 (右) 巻き髪のかつらと 2 つの半月	十字 角の中に V 字型、2 つの点、円と点をともなう線

39	Grabung 1972, Schnitt 681	クイナリウス	銀	1.616	1974, 1008	Schönaitch の貨幣	人頭 (右) 点の目と鼻翼と唇	十字 角の中に V 字型、2 つの点、円と点 をともなう線
40	Grabung 1984, Schnitt 809, Grube a, Planum2 の 0.2m 下	クイナリウス	銀	1.835	1984, 4749	Schönaitch I の十字模様の貨幣	人頭 (右) 点の目 2 つの線のなかに 巻き髪	十字 角の中に V 字、曲線、点
41	Grabung 1966, Schnitt 312, Grube a, Schnitt 292, Grube a	クイナリウス	銀	1.778	1967, 465	Schönaitch II の十字模様の貨幣	人頭 (右) 巻き髪	十字 角の中に V 字型、終端に点のある線 O 字型の楕円 2 つの点
42	Grabung 1985, Schnitt 855, Grube e, Planum2 の 0.24m 下	クイナリウス	銀	1.841	1985, 5100i	Schönaitch II の十字模様の貨幣	人頭 (右)	十字 角の中に V 字型、2 つの点 楕円
43	Grabung 1955, Schnitt 33, Planum1 上	クイナリウス	銀	2.036	1956, 535	おそらく Schönaitch の十字模様の 貨幣	人頭 裝飾突起と巻き髪	十字
44	Grabung 1966, Schnitt 1 と 1B	クイナリウス	銀	1.841	1956, 892	リラのある十字模様の貨幣	人頭 (右)	十字、V 字型、リラ状の円の裝飾
45	Grabung 1984, Schnitt 802, Grube b1	クイナリウス	銀	1.484	1984, 4638	Karlstein 型の十字模様の貨幣	なめらかな裝飾突起	十字 V 字型 2 つの半分の曲線 輪 2 つ の半分の曲線
46	Grabung 1955, Schnitt 50	スタテル	金	7.919	1956, 785a	なめらかな「虹の小鉢」VA	なめらかなこぶ 縁に円形の縁取り	くぼんでいる
47	Grabung 1955, Schnitt 50	スタテル	金	7.507	1956, 785b	なめらかな「虹の小鉢」VA	なめらかなこぶ	くぼんでいる
48	Grabung 1955, Schnitt 50	スタテル	金	7.695	1956, 785c	なめらかな「虹の小鉢」VA	なめらかなこぶ 縁に円形の縁取り	くぼんでいる ひよっとしたら円の裝飾の あるトルクの痕跡
49	Grabung 1955, Schnitt 50	スタテル	金	8.019	1956, 785d	なめらかな「虹の小鉢」VA	なめらかなこぶ	くぼんでいる
50	Grabung 1972, Schnitt 694, Grube a1	スタテル	金と銅	?	1974, 1293	なめらかな「虹の小鉢」VA	湾曲したかたち	くぼんでいる
51	Flugplatz 1961	スタテル	金	7.626	1964, 1424	なめらかな「虹の小鉢」VD	なめらかなこぶ	くぼんでいる
52	Lesefund 1821	スタテル	金	約 7.3		「虹の小鉢」III	鳥の頭 (右)	5, 6 個の点のあるトルク
53	Grabung 1965, Schnitt 205, Graben2 上	スタテル	金と銅	4.365	1967, 163	「虹の小鉢」II E	嘴の大きな鳥の頭 (左) 葉冠	4 本の放射線状の星 上部に 3 つの点 下 に 2 つの十字型の線と中間点
54	Lesefund bei Ingolstadt	4分の1スタテル	金	1.737	1966, 188	なめらかな「虹の小鉢」VA	なめらかな 縁に円形の裝飾の痕跡	くぼんでいる
55	Lesefund vor 1831 auf den	スタテルの一部	金	約 3.49		なめらかな「虹の小鉢」?	なし	なし

56	Burgfeld "Grammatwehle"	4分の1スタテル	金	1.992	1974, 1598f	なめらかな「虹の小髻」 VA	凸面	へこんでいる	
57	Schatzfund 1972(Grabung 1972, Schnitt 711, Grube a2)	24分の1スタテル	金	0.328	1974, 1598a	Manching A	人頭(右) 目のねじれと二重の巻き髪 の冠	馬(右) 後方に熟練した人頭と鳥の脚 の下にこぶのような隆起	
58	Schatzfund 1972	24分の1スタテル	金	0.345	1974, 1598b	Manching A	人頭(右) 目のねじれと二重の巻き髪 の冠	馬(右) 後方に熟練した人頭と鳥の脚	
59	Schatzfund 1972	24分の1スタテル	金	0.333	1974, 1598c	Manching B	人頭(右) 目はなく、尖った鼻、強調 された上唇 二重の巻き髪	馬(右) 後方に熟練した人頭と鳥のよう な後ろ脚 胸の下にこぶのような隆起	
60	Schatzfund 1972	24分の1スタテル	金	0.329	1974, 1598d	Manching B	人頭(右) 目はなく、尖った鼻、強調 された上唇 二重の巻き髪	馬(右) 後方に熟練した人頭と鳥のよう な後ろ脚 胸の下にこぶのような隆起	
61	Schatzfund 1972	24分の1スタテル	金	0.354	1974, 1598e	Manching C	人頭(右) 髪のようなものはない	馬(右) 3つの点 頭とたてがみに5つの 点	
62	Grabung 1955, Schnitt 55 Grube m	24分の1スタテル	金	0.324	1956, 877	Kellnerの Manching I	双頭 上下に3つの点	馬(右) 上部に3つの点	
63	Grabung 1972, Schnitt 704	スタテルの一部	金	0.118	1974, 1558	Kellnerの Manching Iの24分の 1スタテル	双頭 上(下にも?)に3つの点	馬(右) 上部に3つの点	
64	Grabung 1972, Schnitt 675	24分の1スタテル	金	0.329	1974, 1015	Manching A	人頭(右) 厚い目、腕い花輪状に編ん だ髪	馬(右) 背に大きな人頭 花輪状に編ん だたてがみ	
65	Grabung 1972, Schnitt 712	24分の1スタテル	金	0.328	1974, 1604	Manching B	人頭(右) 首と不規則な花輪状に編ん だ髪	馬(右) 背に大きな人頭と鳥のような後 ろ足	
66	Grabung 1972, Schnitt 735	クイナリウス	銀	1.911	1974, 1818	“羽根飾り型(Büschel)”クイナリ ウスのプロトタイプ	人頭(左) 楕円の目 耳 王冠と花輪 状の髪	馬(右) 線のたてがみと折れ曲がった前 足、頭としっぽは平行 馬の前に蛇	
67	Grabung 1972, Schnitt 698	クイナリウス	銀	1.605	1974, 1397	“羽根飾り型(Büschel)”クイナリ ウスのプロトタイプ	人頭(左) 髪の一部 その前に装飾突 起	馬(左) 後ろ部分と足が分かる その前 に蛇の描写	



68	Grabung 1984, Schnitt 795, Grube d2	クイナリウス	銀	1.367	1984, 4581a	“羽根飾り型”クイナリウスのブ ロタイプ	人頭(左) 楕円の点の王冠 平行な花輪状の髪	馬(左) 折れ曲がった後ろ足
69	Grabung 1973, Schnitt 760 の北Graben1上の第2層	クイナリウス	銀	1.9	1974, 2114	“羽根飾り型”クイナリウスのブ ロタイプ	人頭(左) 冠、点の目と2本の線による耳、後ろ頭に6つの装飾突起	馬(左) たてがみと点の蹄 2つの点 長い尾 馬の前に蛇
70	Lesefund 1978	クイナリウス	銀	1.713		“羽根飾り型”クイナリウス A	人頭(左) 3本の線の線の耳 点の目と口 巻き髪	馬(左) 点のたてがみと蹄と曲がった前足 身体の上に曲線と内側の点
71	Grabung 1961, Schnitt 156	クイナリウス	銀と銅	1.726	1962, 16	“羽根飾り型”クイナリウス A	人頭(左) 装飾突起状の巻き髪	馬(左) 点のたてがみと点の蹄 その上に小球
72	Grabung 1984, Schnitt 791, Grube a4	クイナリウス	銀	1.62	1984, 4505k	“羽根飾り型”クイナリウス A	人頭(左) 装飾突起状の巻き髪 点の目と口	馬(左) たてがみと点の蹄、その上に小球とトルク
73	Grabung 1972, Schnitt 695, Grube a4	クイナリウス	銀	1.826	1974, 1299	“羽根飾り型”クイナリウス ロタイプか A	人頭(左) 2つの厚い点の耳 点の目 巻き髪	馬(左) たてがみ 曲がった前足 蹄と関節は点 その上にV字型のオーナメント
74	Grabung 1984, Schnitt 822, Planum2の0.38m下	クイナリウス	銀	2.059	1984, 4992s	“羽根飾り型”クイナリウス A	人頭(左) 点の耳	馬(左) 足は曲がり、点の関節と蹄 身体は2つの小球 上におそらく蛇
75	Grabung 1973, Schnitt 758, 第3層	クイナリウス	銀	1.787	1974, 2012	“羽根飾り型”クイナリウス A か B	人頭(左) 鼻と耳は点	馬(左) たてがみとひづめは点 その背の上に大きな小球
76	Grabung 1972, Schnitt 740	クイナリウス	銀と銅	0.837	1974, 1858	“羽根飾り型”クイナリウス A か B	人頭(左) 点の耳、点の目、巻き髪	馬(左) 点のたてがみ 関節と後ろ足は点 その背の上に大きな小球
77	Grabung 1984, Schnitt 823, Grube a2, Planum1-2	クイナリウス	銀	1.717	1984, 5030s	“羽根飾り型”クイナリウス B	人頭(左)	馬(左) 点のたてがみと点の蹄 その上にトルクと小球
78	Grabung 1984, Schnitt 816, Grube c 第2層の0.54m下	クイナリウス	銀	1.573	1984, 5153z	“羽根飾り型”クイナリウス A か B	人頭(左) 点の目、髪は装飾突起のよう	馬(左) まっすぐな点のたてがみ から だは2つの小球
79	Grabung 1984, Schnitt 816, Grube c, 第2層の0.04m下	クイナリウス	銀	1.211	1984, 4924i	“羽根飾り型”クイナリウス B?	羽根飾りと3つの点	馬(左) 頭に3つの点 点のたてがみ その上に小球
80	Grabung 1972, Schnitt 694	クイナリウス	銀と銅	1.172	1974, 1282	“羽根飾り型”クイナリウス B?	上部に切り替わった羽根飾りと2つの点	馬(左) その上に小球 その下に蛇

81	Lesefund 1972	クイナリウス	銀と銅	1			“羽根飾り型”クイナリウス A か B?	人頭 (左) 3つの点の耳の渦のような巻き髪	馬 (右) 点のたてがみと点の蹄の上 に下向きに開いた曲線と内側の点 前の蹄まで縁取る蛇
82	Lesefund 1978	クイナリウス	銀	1.724			“羽根飾り型”クイナリウス C?	羽根飾り	馬 (左) 角ばった頭と点のたてがみ の上に終端に小球のある2つの曲線 内側の点
83	Grabung 1967, Schnitt 456	クイナリウス	銀	1.725	1967, 660		“羽根飾り型”クイナリウス B?	人頭 (左)	馬 (左) 点のたてがみとひづめ にトルクのある小球
84	Grabung 1972, Schnitt 694, Grube a I 上	クイナリウス	銀と銅	1.293	1974, 1291		“羽根飾り型”クイナリウス C	周囲に3つの点のある羽根飾り 分け目	馬 (左) 点のたてがみと蹄 その上に点のあるトルク
85	Grabung 1972, Schnitt 701, Posten71 上	クイナリウス	銀	1.818	1974, 1482		“羽根飾り型”クイナリウス C	周囲に3つの点のある羽根飾り 分け目	馬 (左) 点のたてがみと関節と蹄 足は折れ曲がる 上に点のあるトルク
86	Grabung 1984, Schnitt 825, 第1層	クイナリウス	銀と銅	1.422	1984, 5054p		“羽根飾り型”クイナリウス C?	周囲に3つの点のある羽根飾り	馬 (左)
87	Grabung 1984, Schnitt 788, Grube b Putzen Planum I	クイナリウス	銀と銅	0.540 (部分)	1984, 4472f		“羽根飾り型”クイナリウス B か C	羽根飾り	馬
88	Grabung 1984, Schnitt 792, Grube a, 第1層の0.18m 下	クイナリウス	銀	1.822	1984, 4553k		“羽根飾り型”クイナリウス E	渦巻と6つの羽根飾り 周囲に3つの内側の点	馬 (左) 角ばった頭と点のたてがみ その下に十字、その前に湾曲、その上に点の並び?
89	Grabung 1972, Schnitt 732	クイナリウス	銀	1.816	1974, 1802		“羽根飾り型”クイナリウス E	渦巻と6つの羽根飾り 周囲に4つの内側の点	馬 (左) 点の関節と蹄とたてがみ 曲がった目、上部に点をともなう円
90	Grabung 1966, Schnitt 317, Grube a 貨幣 Nr.110 とともに 出土	クイナリウス	銀と銅	0.268 (部分)	1967, 509		“羽根飾り型”クイナリウス お そらく A	羽根飾り	馬
91	Grabung 1966, Schnitt 343 Graben I	クイナリウス	銀と銅	0.603 (部分)	1967, 541		“羽根飾り型”クイナリウス	羽根飾り	馬

92	Grabung 1961, Schnitt 164	クイナリウス	銀と銅	1.21	1962, 249	“羽根飾り型”クイナリウス?	人頭 (右?)	馬 (左?)
93	Grabung 1972, Schnitt 696	クイナリウス?	銅	0.633	1974, 1318	“羽根飾り型”クイナリウス?	人頭 (左)	馬 (右)
94	Grabung 1957, Schnitt 83	クイナリウス	銀	1.496	1958, 424	知られていない	巻き髪の人頭 (左) 裝飾突起	馬 (右)
95	Grabung 1972, Schnitt 703, Grube a 上	小銀貨 (Kleinsilber)	銀	0.394	1974, 1548	Manching 2	人頭 (左)	馬 (左)
96	Grabung 1972, Schnitt 706	小銀貨	銀	0.341	1974, 1570	Manching 2	人頭 (左)	馬 (左)
97	Grabung 1972, Schnitt 683, Grube 682d 上	小銀貨	銀	0.457	1974, 1152	Manching 2	人頭 (左)	馬 (左)
98	Grabung 1967, Schnitt 445, Graben 3	小銀貨	銀	0.187	1967, 649	Manching 2	人頭 (左) とがった鼻 点の目と巻き髪	馬 (左) 点の蹄 その下に半円の先端
99	Grabung 1966, Schnitt 288, Grube b, Grabenteil b3	小銀貨	銀	0.318	1967, 459	Manching 2	人頭 (左) 強調された目と髪の部分	馬 (左)
100	Grabung 1984, Schnitt 791, Graben a4-b3	小銀貨	銀	0.403	1984, 4509	Manching 2 のバリエーション	人頭 (左) 点の目と尖った鼻	馬 (左) 上に十字のなかに5つの点
101	Grabung 1984, Schnitt 791, Graben a4-f, Platum 1 下	小銀貨	銀	0.426	1984, 4512d	Manching に近い	人頭 (左) 点の目と尖った鼻 不規則な髪の流れ 半円の首	馬 (左)
102	Grabung 1972, Schnitt 699	小銀貨	銀	0.346	1974, 1406	とげとげの髪 of the タイプ	人頭 (左) 尖った鼻 点の目と髪 半円の首	馬 (左) 点のたてがみ 十字のなかに5つの点
103	Grabung 1971, Schnitt 625, Grube d	小銀貨	銀	0.362	1974, 142	とげとげの髪 of the タイプ	人頭 (左) 尖った鼻 点の目 巻き髪	馬 (左) 点のたてがみ 4つの点の頭 背面に点の十字
104	Grabung 1972, Schnitt 718	小銀貨	銀	0.378	1974, 1676	ポイイ族の貨幣 Hrazany や Stradonice で見られるものの亜種	人頭 (左) 点の目と大きな鼻の点 2つ 点の唇 四角形の点の鉢巻	馬 (左) 点の関節と蹄
105	Grabung 1984, Schnitt 795, Grube b 第1層の 0.02m 下	小銀貨	銀	0.354	1984, 45740	Karlstein	人頭	馬 (左) 2つの円の胴体 上に点
106	Grabung 1972, Schnitt 689	小銀貨	銀	0.414	1974, 1218	裏面に十字模様のある小銀貨のクイナリウス	人頭 (左) 丸くなった鼻 点の目と唇 明らかに薄い鉢巻 半円に点の髪	十字 端に円, 尖った角 2つの点 曲がった部分に角型 または裝飾

107	Grabung 1972, Schnitt 732	小銀貨	銀	0.48	1974, 1804	Dühren 型の小銀貨	鉢巻きを巻いた人頭 (右)	巻き髪	小さな十字 3つの円 右の角に終端の点
108	Grabung 1966, Schnitt 390, Graben 1上	小銀貨	銀	0.384	1967, 591	?	人頭 (右)	馬?	
109	Lesefund auf dem Burgfeld	スタテル	金と銀	?		Mardorf 型	対称的な4分の3の葉冠 小さな円 3つの渦巻	円状のジグザグ 8つの円	
110	Grabung 1966, Schnitt 317, Grube a 貨幣 Nr.90 とともに出土	スタテル	金	7.339	1967, 507	Basler のグループのスタテル	不規則な装飾突起	へこんでいる 外側に半円	
111	Grabung 1972, Schnitt 723, Grube a 上	スタテル	金	7.571	1974, 1713	ポイイ族の二枚員の装飾のスタテル (Muschelstater)	不規則な装飾突起と2, 3の点	“Muschel (二枚員)” と異常に厚いねじれ縁に縁	
112	Grabung 1966, Schnitt 292, Grube a	大銀貨	銀と銅	4.059 (部分)	1967, 466	Velem 型	人頭	馬 (左)	
113	Grabung 1972, Schnitt 735	ドラクマ	銀	4.182	1974, 1817	光線の装飾のあるドラクマ貨幣	鉢巻きを巻いた青少年 (アポロ) の頭 (右)	馬 (右) 8つの線の星 その下に円形の装飾	
114	Grabung 1958, Schnitt 106, Pfosten 1の北	クイナリウス	銅	1.328	1959, 25	決められない	人頭 (左)	馬 (左)	
115	Grabung 1961, Schnitt 157, Graebchen 81	クイナリウス	銅	0.570 (部分)	1962, 128	決められない	?	?	
116	Grabung 1972, Schnitt 695, Grube b1 と b2	半分の断片	銅	0.382 (部分)	1974, 1303	?	?	?	
117	Grabung 1957, Schnitt 75	貨幣鑄貨板?	銀	3.097	1958, 336	?	中央に不規則な装飾突起	腐食	
118	Grabung 1972, Schnitt 753, Grube a 上の層	貨幣用銀銅貨幣	銅	4.737	1974, 1949	?	平行の線に2つの領域 とがった角 その下に装飾の痕跡	不明	
119	Grabung 1972, Schnitt 741	貨幣用銀銅貨幣	銀・赤銅	3.332	1974, 1861	?	人頭 (右)	馬 (右) 点の跡	
120	Grabung 1972, Schnitt 728	赤銅の破片 (損傷)	銅	1.353 (部分)	1074, 1767	?	?	?	



121	Grabung 1961, Schnitt 171, 第3層と第4層の間	貨幣鍍貨板?	銅	6.72	1962, 403a	?	半円	くぼんでいる	平坦
-----	--------------------------------------	--------	---	------	------------	---	----	--------	----

表 11：ベルヒンク・ポランテン出土の貨幣一覧

[出典：Ebd., S. 148-157; Hans-Jörg Kellner, „Neue keltische Fundmünzen aus Berching-Pollanten.“ S. 213-215; Hans-Jörg Kellner, „Die keltischen Münzen von Pollanten, Gemeinde Berching, Landkreis Neumarkt, Oberpfaltz.“ in *AJB* 1982, 1982, S.80-83 を基に筆者作成。]

	出土場所	単位	素材	重さ	Inv. Nr.	タイプ	モチーフ表	モチーフ裏
1	Grabung 1983, Schnitt 70/71, Objekt 5, Planum 2 の下	貨幣用銀銅貨幣	銅	3.349	Regensburg MK 3427	レウキー族の合金貨幣	鉢巻きを巻いた人頭 (左)	イノシシ
2	Grabung 1985, Schnitt 159, Objekt 5, Planum 2 と 3 の間 侵食の北	貨幣用銀銅貨幣	銅	2.98	Regensburg MK 3457	レウキー族の合金貨幣	鉢巻きを巻いた人頭 (左)	イノシシ
3	Grabung 1985, Schnitt 190, Objekt 84, Planum 3 の下	貨幣用銀銅貨幣	銅	4.347	Regensburg MK 3453	セークアニー族の合金貨幣	波打った髪型の人頭 (左) 半円形の首	突進する牛 (左)
4	Grabung 1982, Schnitt 30 / 31, Objekt 13	貨幣用銀銅貨幣	銅	1.992 (部分)	Regensburg MK 3401	"a la tête diabolique"? トウローネス族のもの?	人頭 (左)	突進する牛 (左)
5	Grabung 1982, Schnitt 6, Objekt 2	クイナリウス	銀	1.961	Regensburg MK 3384	ハエドゥイー族のクイナリウスの模倣	人頭 (右) 尖った楕円のなかの点の目 取っ手のような耳	馬 (左)
6	Grabung 1982, Schnitt 5, Objekt 2, Planum 2 と 3 の間	クイナリウス	銀	1.947	Regensburg MK 3385	ハエドゥイー族のクイナリウスの模倣	人頭 (右) 尖った楕円のなかの点の目 取っ手のような耳	馬 (左)
7	Grabung 1985, Schnitt 193, Objekt 99, Planum 1 の下	スタテル	金/銅	1.792 (部分)	Regensburg MK 3454	なめらかな「虹の小鉢」型貨幣 V A	弓なりに反っている	凹面 なめらか
8	Grabung 1983, Schnitt 43, Objekt 2	4分の1スタテル	金	1.993	Regensburg MK 3405	なめらかな「虹の小鉢」型貨幣 V A	弓なりに反っている	凹面 なめらか
9	Grabung 1981	4分の1スタテル	金/銅	0.76	Regensburg MK 3432	なめらかな「虹の小鉢」型貨幣 V A	弓なりに反っている	凹面
10	Grabung 1986, Schnitt 205,	4分の1スタテル	金/銅	0.986	Regensburg MK 3459	なめらかな「虹の小鉢」型貨幣	弓なりに反っている	凹面

Objekt 41	クイナリウス	銀	0.948 (部分)	Regensburg MK 3416	十字模様の貨幣	人頭 (右) ?	十字 幾何学模様
11	Grabung 1983, Schnitt 65 / 66, Objekt 1, Planum 3 と 4 の間	銀	0.948 (部分)	Regensburg MK 3416	十字模様の貨幣	人頭 (右) ?	十字 幾何学模様
12	Grabung 1985, Schnitt 134	銀	1.944	Regensburg MK 3441	“羽根飾り型 (Büschel) ” クイ ナリウスのプロトタイプ?	人頭 (左)	馬 (左)
13	Grabung 1983, Schnitt 70	銀	1.921	Regensburg MK 3429	“羽根飾り型”クイナリウス A	人頭 (左)	馬 (左)
14	Grabung 1983, Schnitt 70/71	銀	1.275	Regensburg MK 3430	“羽根飾り型”クイナリウス A	人頭 (左)	馬 (左)
15	Grabung 1982, Schnitt 28	銀	1.786	Regensburg MK 3383	“羽根飾り型”クイナリウス A/B	人頭 (左)	馬 (左)
16	Grabung 1983, Schnitt 36	銀	1.808	Regensburg MK 3403	“羽根飾り型”クイナリウス A/B	人頭 (左)	馬 (左)
17	Grabung 1984, Schnitt 123	銀	1.904	Regensburg MK 3442	“羽根飾り型”クイナリウス B	人頭 (左)	馬 (左) トルク?
18	Grabung 1983, Schnitt 64/65	銀	1.811	Regensburg MK 3415	“羽根飾り型”クイナリウス B	人頭 (左)	馬 (左)
19	Grabung 1983, Schnitt 36	銀	1.576	Regensburg MK 3402	“羽根飾り型”クイナリウス B	人頭 (左)	馬 (左) 上部に下側に開いたトルク
20	Grabung 1983, Schnitt 65/66	銀/銅	1.46	Regensburg MK 3419	“羽根飾り型”クイナリウス A /B?	人頭 (左)	馬 (左)
21	Grabung 1984, Schnitt 74	銀/銅	1.205	Regensburg MK 3440	“羽根飾り型”クイナリウ ス ?	羽根飾り	馬
22	Grabung 1985, Schnitt 159	銀	1.952	Regensburg MK 3455	? 目のある装飾突起	目のある装飾突起	馬 (右)
23	Grabung 1982, Schnitt 23 / 24	小銀貨 (Kleinsilber)	0.446	Regensburg MK 3386	振り返った頭のある馬のタイ プ	人頭 (左) とがった鼻 点の目と口 取っ手状の耳	馬 (右) 2つの小球による振り返っ ている頭
24	Grabung 1983, Schnitt 67	小銀貨	0.4	Regensburg MK 3426	Manching 2	とがった鼻のある人頭 (左)	馬 (左) 2つの点による頭 点の関 節と蹄 分かれた尻尾 上部に十字 と5つの点 下に幾何学模様

25	Grabung 1983, Schnitt 64/ 65	小銀貨	銀	0.377	Regensburg MK 3413	Manching 2	とがった鼻のある人頭 (左)	馬 (左) 2つの点による頭点の関節と蹄分かれた尻尾 上部に十字と5つの点 下に幾何学模様
26	Grabung 1982, Schnitt 24	小銀貨	銀	0.438	Regensburg MK 3387	Manching 2	とがった鼻と点の目のある人頭 (左)	馬 (左) 点による目とたてがみ、蹄と関節 上部に十字と5つの点 下に幾何学模様
27	Grabung 1982, Schnitt 23	小銀貨	銀	0.395	Regensburg MK 3388	Manching 2	とがった鼻と点の目のある人頭 (左)	馬 (左) 点による目とたてがみ、蹄と関節 上部に十字と5つの点 下に幾何学模様
28	Grabung 1983, Schnitt 65/ 66	小銀貨	銀	0.344	Regensburg MK 3414	Manching 2	とがった鼻と点の目のある人頭 (左)	馬 (左) Nr. 26 に似ている
29	Grabung 1982, Schnitt 160	小銀貨	銀/銅	0.247	Regensburg MK 3449	Manching 2	人頭 (左)	馬 (左) 上部に4つの点 その下に幾何学模様
30	Grabung 1986, Schnitt 204	小銀貨	銀/銅	0.305	Regensburg MK 3460	Manching 2	人頭 (左)	馬 (左)
31	Grabung 1983, Schnitt 70/ 71	小銀貨	銀	0.361	Regensburg MK 3431	Manching 2	人頭 (左) 点の目ととがった鼻 2本の線による唇	馬 (左) 点のたてがみ 上部に幾何学模様と5つの点 下に直角に折れ曲がった半円の一部分
32	Grabung 1984, Schnitt 160	小銀貨	銀	0.301 (部分)	Regensburg MK 3445	Manching 2	人頭 (左) Nr.31 に似ている	馬 (左)
33	Grabung 1982, Schnitt 24	小銀貨	銀	0.397	Regensburg MK 3389	Manching 1	人頭 (左) とがった鼻 半円状の頭	いなく馬 (左) 上下に (?) 幾何学模様
34	Grabung 1984, Schnitt 160	小銀貨	銀	0.369	Regensburg MK 3443	Manching 1	Nr. 33 に似ている	馬 (左) 幾何学模様
35	Grabung 1983, Schnitt 70/ 71	小銀貨	銀	0.295 (部分)	Regensburg MK 3435	Manching ?	人頭 (左)	馬 (左)
36	Grabung 1982, Schnitt 6	小銀貨	銀	0.445	Regensburg MK 3395	Pollanten	ほっそりした人頭 (左) 点の目と取っ手状の耳	馬 (右) 尖った頭と曲がった両足

37	Grabung 1982, Schnitt 24	小銀貨	銀	0.356	Regensburg MK 3396	Pollanten	ほっそりした人頭 (左) 点の目と取っ手状の耳	馬 (右) 尖った頭と曲がった両足
38	Grabung 1985, Schnitt 159	小銀貨	銀	0.409	Regensburg MK 3456	Pollanten	人頭 (左)	馬 (右) 尖った頭と曲がった両足
39	Grabung 1984, E-Mast	小銀貨	銀	0.445	Regensburg MK 3441	Pollanten	ほっそりした人頭 (左) 点の目と取っ手状の耳	馬 (右) 尖った頭と曲がった両足
40	Grabung 1983, Schnitt 31 / 35	小銀貨	銀	0.405	Regensburg MK 3408	Pollanten	半月のようなかたたちの人頭 (左)	馬 (右)
41	Grabung 1984, Schnitt 161	小銀貨	銀 (銅)	0.393	Regensburg MK 3447	Pollanten	ほっそりした人頭 (左) Nr. 36 に似ている	馬 (右) Nr. 36 と同じ
42	Grabung 1982, Schnitt 5	小銀貨	銀	0.476	Regensburg MK 3397	Pollanten	半月のようなかたたちのほっそりした人頭 (左) 点の目と取っ手状の耳 波打つ髪	馬 (右) Nr. 37 と同じ
43	Grabung 1981	小銀貨	銀	0.368	Regensburg MK 3398	Pollanten	Nr. 40 と同じ	馬 (右) Nr. 38 と同じ
44	Grabung 1984, Schnitt 160	小銀貨	銀	0.469	Regensburg MK 3450	Pollanten?	不規則な、ほぼ三角形の装飾突起	馬 (右)
45	Grabung 1983, Schnitt 65/66	小銀貨	銀	0.464	Regensburg MK 3418	Pollanten Var?	ほっそりした長い人頭 (左)	馬 (右)
46	Grabung 1983, Schnitt 53	小銀貨	銀	0.458	Regensburg MK 3425	Süddeutsch?	人頭 (左) 点の目と唇 不規則な線による髪	馬 (左) 点の目とたてがみ 幾何学模様
47	Grabung 1983, Schnitt 65/66	小銀貨	銀	0.399	Regensburg MK 3417	Manching のバリエーション	人頭 (左) 点の唇と波打つ髪	馬 (左) 点の目とたてがみと関節と蹄 その上に点
48	Grabung 1983, Schnitt 64/65	小銀貨	銀	0.429	Regensburg MK 3420	Süddeutsch?	人頭 (左)	馬 (左)
49	Grabung 1982, Schnitt 29/30	小銀貨	銀	0.322 (部分)	Regensburg MK 3390	とげとげの髪の種類	人頭 (左)	馬 (左) その上に幾何学模様
50	Grabung 1983, Schnitt 44/45	小銀貨	銀	0.408	Regensburg MK 3407	とげとげの髪の種類	とがった鼻と点の目の人頭 (左) 裾で3つに分かれた半月状の髪 4つの点	強調された目の馬 (左) 点のたてがみと関節と蹄 上部に幾何学模様
51	Grabung 1983, Schnitt 36	小銀貨	銀	0.408	Regensburg MK 3409	とげとげの髪の種類	とがった鼻の人頭 (左)	馬 (左) 点のたてがみと関節と蹄 上部に幾何学模様



52	Grabung 1983, Schnitt 50	小銀貨	銀	0.389 (部分)	Regensburg MK 3404	とげとげの髪 のタイプ	とがった鼻の人頭 (左)	馬(左) 点のたてがみと関節と蹄 上部に幾何学模様
53	Grabung 1985, Schnitt 181	小銀貨	銀	0.380 (部分)	Regensburg MK 3452	とげとげの髪 のタイプ	とがった鼻と点の目の人頭(左) 裾で 3つに分かれた半月状の髪 4つの点	強調された目の馬(左) 点のたて がみと関節と蹄 上部に幾何学模様
54	Grabung 1982, Schnitt 29/30	小銀貨	銀	0.271 (部分)	Regensburg MK 3391	とげとげの髪 のタイプ	とがった鼻の人頭(左) 点の目と2つ の点による口 頭髪は6つの線と点で 表わされる	点のたてがみをもつ馬(左) 上部に 5つの点と十字
55	Grabung 1983, Schnitt 45	小銀貨	銀	0.395g	Regensburg MK 3405	とげとげの髪 のタイプ	人頭(左)	点のたてがみをもつ馬(左)
56	Grabung 1981, Schnitt 14	小銀貨	銀	0.450g	Regensburg MK 3393	右向きのとげとげの髪 のタイプ プ	とがった鼻の人頭(右) 点の目とうな じに3つの点 5つの点による頭髪	点のたてがみをもつ馬(左) 上部に 5つの点と十字
57	Grabung 1985, Schnitt 181	小銀貨	銀	0.387g	Regensburg MK 3451	右向きのとげとげの髪 のタイプ プ	とがった鼻の人頭(右) 点の目とうな じに3つの点 5つの点による頭髪	点のたてがみをもつ馬(左) 上部 に5つの点と十字
58	Grabung 1981, Schnitt 14	小銀貨	銀	0.205g (部分)	Regensburg MK 3394	右向きのとげとげの髪 のタイプ プ	Nr. 56 と似ている	馬(左)
59	Grabung 1982, Schnitt 29	小銀貨	銀	0.521	Regensburg MK 3392	ポイイ族の小銀貨	幅の広い王冠を被った人頭(左)	馬(左) 点のたてがみと関節と蹄 胴体は2つの小球 上部に点
60	Grabung 1984, Schnitt 86	小銀貨	銀	0.506	Regensburg MK 3436	ポイイ族かノリクムのもの? Strengem Gesicht	尖った鼻の人頭(左) 不規則な巻き髪	馬(右) 背中の上に小球と点の並び 線のたてがみをもつ馬(左)
61	Grabung 1983, Schnitt 64 /65	小銀貨	銀	0.473	Regensburg MK 3412	Strengem Gesicht	尖った鼻と顎髭のある人頭(左)	
62	Grabung 1983	小銀貨	銀	0.485	Regensburg MK 3433	Strengem Gesicht	尖った鼻とねじれた目の人頭(左) 2 つに分かれた髪 顎髭	Nr. 61 と同じ
63	Grabung 1984, Schnitt 75	小銀貨	銀	0.212 (部分)	Regensburg MK 3437	?	人頭(左)	馬(左)
64	Grabung 1984, Schnitt 160	小銀貨	銀	0.308 (部分)	Regensburg MK 3446	?	人頭(右)	点のたてがみをもつ馬(左) 上部に 4つの点
65	Grabung 1982, Schnitt 26	小銀貨	銀	0.432	Regensburg MK 3399	ポイイ族かノリクムのもの? Strengem Gesicht	人頭(左) ?	馬(右) Nr.60 と同じ

66	Grabung 1983, Schnitt 35	小銀貨	銀	0.943	Regensburg MK 3410	Kapostal	滑らかな装飾突起 縁に点	馬(左) 上部に点
67	Grabung 1986, Schnitt 200	小銀貨	銀	0.543	Regensburg MK 3461	Karlsteiner Art	滑らかな装飾突起	馬(左) 上部に4つの点 両脚に点
68	Grabung 1983, Schnitt 63/64/65	小銀貨	銀	0.211	Regensburg MK 3423	Karlstein?	不規則な装飾突起	馬(左)
69	Grabung 1985, Schnitt 161	小銀貨	銀	0.377	Regensburg MK 3458	?	人頭(右)	馬(左) 上部に小球
70	Grabung 1984, Schnitt 161	小銀貨	銀	0.365	Regensburg MK 3448	Kleinsilber-Kreuzmünze	尖った鼻の人頭(左)	十字 3つの円と幾何学模様
71	Grabung 1983, Schnitt 65	小銀貨	銀	0.471	Regensburg MK 3411	Dühren 型	鉢巻を巻いた巻き毛の人頭(右)	十字 3つの円と幾何学模様
72	Grabung 1983, Schnitt 49/50	小銀貨	銀	0.463	Regensburg MK 3421	Dühren 型	鉢巻を巻いた巻き毛の人頭(右)	十字 3つの円と幾何学模様
73	Grabung 1983, Schnitt 55	小銀貨	銀	0.249	Regensburg MK 3422	Dühren 型	鉢巻を巻いた巻き毛の人頭(右)	十字 3つの円と幾何学模様
74	Grabung 1982, Schnitt 10	小銀貨	銀	0.462	Regensburg MK 3400	Dührenのバリエーション	人頭(右) 写実的な耳 鉢巻 なめらかな髪	十字 3つの円と幾何学模様
75	Grabung 1984, Schnitt 82	小銀貨	銀	0.486	Regensburg MK 3438	Stüddeutsch	直線的な鼻の人頭(右)	十字 幾何学模様
76	Grabung 1984, Schnitt 82	小銀貨	銀	0.493	Regensburg MK 3439	Nr. 75 と同じ	直線的な鼻の人頭(右)	十字 幾何学模様
77	Grabung 1984, Schnitt 68	小銀貨	銀	0.308	Regensburg MK 3428	Dühren 型	人頭(右) Nr. 75 に似ている	十字 3つの円と幾何学模様
78	Grabung 1983, Schnitt 64/65	小銀貨	銀	0.534	Regensburg MK 3424	モラビアのもの?	自然な人頭(右) 字の痕跡?	十字 2つの点と幾何学模様 S字の線 W字の線
79	Grabung 1983, Schnitt 70/71	フォリス銅貨, (後 335/337 年, シスキアにて鑄造)	銅	1.724	Regensburg MK 3434	RIC 262	月桂樹の冠をかぶったコンスタンティヌス2世の胸像(右) CONSTANTINVS IVN NOB C.	2人の軍人 その間にGLORIA EXERCITVSの識別標識
80	詳細なし	小銀貨	銀	0.382	Regensburg MK 3483	Manching 2	とがった鼻の人頭(左)	馬(左) 上部に5つの点と十字 下部に幾何学模様
81	詳細なし	小銀貨	銀	0.345 (部分)	Regensburg MK 3486	Manching 2	人頭(左)	馬(左)
82	詳細なし	小銀貨	銀	0.474	Regensburg MK 3484	Manching 2	人頭(左)	馬(左) 上部に4つの点 下部に幾何学模様
83	詳細なし	小銀貨	銀	0.415	Regensburg MK 3485	Manching 2	とがった鼻の人頭(左)	馬(左)

84	詳細なし	小銀貨	銀	0.508	Regensburg MK 3478	Manching 1/2	人頭 (左)	馬 (左)
85	詳細なし	小銀貨	銀	0.301	Regensburg MK 3479	Manching 2	人頭 (左)	馬(左) 上部に三角形と4つの点 下部に幾何学模様
86	詳細なし	小銀貨	銀	0.462	Regensburg MK 3463	Manching 2	人頭 (左)	馬 (左) 上部に6つの点からなる口ゼツタ模様 下に幾何学模様
87	詳細なし	小銀貨	銀	0.391	Regensburg MK 3476	Manching 2	人頭 (左)	馬 (左)
88	詳細なし	小銀貨	銀	0.44	Regensburg MK 3477	Manching 2	人頭 (左)	馬 (左) 口を開けている
89	詳細なし	小銀貨	銀	0.409	Regensburg MK 3464	Manching 2	とがった鼻の人頭 (左)	馬 (左) 上部に5つの点と十字
90	詳細なし	小銀貨	銀	0.389	Regensburg MK 3487	Pollanten ?	ほっそりした人頭 (おそらく左)	馬 (右)
91	詳細なし	小銀貨	銀	0.372	Regensburg MK 3475	とげとげの髪タイプ	とがった鼻の人頭 (左) 6つの点と線からなる髪	ずんぐりした馬 (右)
92	詳細なし	小銀貨	銀	0.396	Regensburg MK 3462	とげとげの髪タイプ	分厚い鼻の人頭 (左)	馬 (左)
93	詳細なし	小銀貨	銀	0.411	Regensburg MK 3481	Strengem Gesicht	がっしりとした人頭 (左)	馬 (左)
94	詳細なし	小銀貨	銀	0.545	Regensburg MK 3480	?	人頭 (左)	ほっそりとした馬 (左)
95	詳細なし	貨幣用銀銅貨幣	銅	4.656	Regensburg MK 3482	Leukerpotin	鉢巻を巻いた人頭 (左)	毛を逆立てたイノシシ (左)
96	1982年11月29日出土	クイナリウス	詳細なし	1.786	詳細なし	詳細なし	人頭 (左) 装飾突起のある髪	馬 (左) その上に開いたトルク
97	1982年8月1日、8月10日出土	クイナリウス	詳細なし	1.961	詳細なし	詳細なし	人頭 (右) とがった鼻と弧の耳 刻印があるかもしれない	馬 (左) 点のたてがみと真珠粒の点の脚
98	1982年8月1日、8月10日出土	クイナリウス	詳細なし	1.947	詳細なし	詳細なし	人頭 (右) とがった鼻と弧の耳 刻印があるかもしれない	馬 (左) 点のたてがみと真珠粒の点の脚
99	詳細なし	小銀貨	詳細なし	0.446	詳細なし	詳細なし	人頭 (左) とがった鼻と弧の耳	馬 (右) 様式化されている
100	1982年9月29日出土	Manching 型の小銀貨	詳細なし	0.438	詳細なし	詳細なし	人頭 (左) 巻き髪	馬 (左) その上に点の十字 その下に Y 字のようなもの Manching の Nr.59 に似た刻印
101	1982年10月10日出土	Manching 型の小銀貨	詳細なし	0.395	詳細なし	詳細なし	Nr. 100 に似ている	Nr. 100 に似ている

102	1982年10月11日出土	Manching 型の小銀貨	詳細なし	0.397	詳細なし	詳細なし	人頭 (左) 巻き髪 真珠粒 Neuse の Nr. 92 に似ている	馬 (左) その上に M 字型のもの
103	1982年11月29日出土	小銀貨	詳細なし	0.322 (部分)	詳細なし	詳細なし	人頭 (左) 厚い鼻 厚い髪	馬 (左) その上に点の十字
104	1982年11月29日出土	小銀貨	詳細なし	0.271	詳細なし	詳細なし	人頭 (左) 6本の線による巻き髪	馬 (左) その上に点の十字 周辺に弧
105	1982年12月13日出土	小銀貨	詳細なし	0.521	詳細なし	詳細なし	人頭 (左) 滑らかな髪 首の表現	馬 (左) 真珠粒のたてがみと球体の関節 体は2つの球体 しっぽは上に上がっている 2つの球体 Hradischt bei Stradonice の Paulsen 567 のタイプ
106	1981年8月24日出土	小銀貨	詳細なし	0.45	詳細なし	詳細なし	人頭 (右) 尖った鼻 5本線の髪と点	馬 (左) その上に点の十字
107	1981年8月27日出土	小銀貨	詳細なし	0.205	詳細なし	詳細なし	Nr. 106 に似ている	Nr. 106 に似ている
108	1982年7月18日出土	小銀貨	詳細なし	0.445	詳細なし	詳細なし	人頭 (左) 2本の線の巻き髪と弧の耳	馬 (右) 頭と脚は角ばっている
109	1982年9月29日出土	小銀貨	詳細なし	0.356 (部分)	詳細なし	詳細なし	Nr. 108 に似ている	Nr. 108 に似ている
110	1982年8月8日出土	小銀貨	詳細なし	0.476	詳細なし	詳細なし	Nr. 108 に似ている	Nr. 108 に似ている
111	1981年9月3日出土	小銀貨	詳細なし	0.368	詳細なし	詳細なし	長い線の巻き髪のある半月形の人頭	尖った馬の頭 耳とたてがみ
112	1982年11月10日出土	小銀貨	詳細なし	0.432	詳細なし	詳細なし	人頭 (左) 巻き髪	馬 (右) その上に厚い点 頭は3つの点
113	1982年4月28日出土	小銀貨	詳細なし	0.462	詳細なし	詳細なし	人頭 (右) 長い鼻と大きな耳	十字 3つの輪と幾何学模様
114	1982年12月6日出土	貨幣用銀銅貨幣	詳細なし	1.922	詳細なし	詳細なし	ねじれた円のある人頭 (左) おそらく "a tete diabolique" 型	突進する牛 (左) ねじれた円



表 12：イルシング出土の貨幣 ※すべて「虹の小鉢」型スタテル金貨 [出典：Hans-Jörg Kellner, *Die Ausgrabungen in Manching* Bd. 12., S.159-169 を基に作成。]

	重さ	所蔵	タイプ	モチーフ 表	モチーフ 裏
1	7.497	—	タイプIA	長いくちばしと「牡羊の角」のある円状の蛇 しっぽが渦巻いている (“Rolltier”)	6つの点のあるトルク 背部に点か線の髭
2	7.476	—	タイプIA	長いくちばしと「牡羊の角」のある円状の蛇 しっぽが渦巻いている (“Rolltier”)	6つの点のあるトルク 背部に点か線の髭
3	—	—	タイプIA	長いくちばしと「牡羊の角」のある円状の蛇 しっぽが渦巻いている (“Rolltier”)	6つの点のあるトルク 背部に点か線の髭
4	7.455	Münzslg. Ph. 3,1	タイプIA	長いくちばしと「牡羊の角」のある円状の蛇 しっぽが渦巻いている (“Rolltier”)	6つの点のあるトルク 背部に点か線の髭
5	7.47	Slg. König	タイプIA	長いくちばしと「牡羊の角」のある円状の蛇 しっぽが渦巻いている (“Rolltier”)	6つの点のあるトルク 背部に点か線の髭
6	7.367	Slg. Gotha	タイプIA	長いくちばしと「牡羊の角」のある円状の蛇 しっぽが渦巻いている (“Rolltier”)	6つの点のあるトルク 背部に点か線の髭
7	6.56	個人蔵	タイプIA	長いくちばしと「牡羊の角」のある円状の蛇 しっぽが渦巻いている (“Rolltier”)	6つの点のあるトルク 背部に点か線の髭
8	7.545	—	タイプIA	長いくちばしと「牡羊の角」のある円状の蛇 しっぽが渦巻いている (“Rolltier”)	6つの点のあるトルク 背部に点か線の髭
9	7.536	—	タイプIA	長いくちばしと「牡羊の角」のある円状の蛇 しっぽが渦巻いている (“Rolltier”)	6つの点のあるトルク 背部に点か線の髭
10	7.462	—	タイプIA	長いくちばしと「牡羊の角」のある円状の蛇 しっぽが渦巻いている (“Rolltier”)	6つの点のあるトルク 背部に点か線の髭
11~41	—	—	タイプIA	長いくちばしと「牡羊の角」のある円状の蛇 しっぽが渦巻いている (“Rolltier”)	6つの点のあるトルク 背部に点か線の髭
42	7.461	—	タイプIA	長いくちばしと「牡羊の角」のある円状の蛇 しっぽが渦巻いている (“Rolltier”)	6つの点のあるトルク Streber II 3-10 と刻印で似ていない

43	7.43	個人蔵	タイプIA	長いくちばしと「牡羊の角」のある円状の蛇 しっぽが渦巻いている (“Rolltier”)	背部に点か線の髭	6つの点のあるトルク Nr. 1060 に似ている
44	7.519	—	タイプIA	長いくちばしと「牡羊の角」のある円状の蛇 しっぽが渦巻いている (“Rolltier”)	背部に点か線の髭	6つの点のあるトルク
45	—	—	タイプIA	長いくちばしと「牡羊の角」のある円状の蛇 しっぽが渦巻いている (“Rolltier”)	背部に点か線の髭	6つの点のあるトルク
46	7.585	個人蔵	タイプIA	長いくちばしと「牡羊の角」のある円状の蛇 しっぽが渦巻いている (“Rolltier”)	背部に点か線の髭	6つの点のあるトルク
47	—	—	タイプIA	長いくちばしと「牡羊の角」のある円状の蛇 しっぽが渦巻いている (“Rolltier”)	背部に点か線の髭	6つの点のあるトルク
48	7.552	—	タイプIA	長いくちばしと「牡羊の角」のある円状の蛇 しっぽが渦巻いている (“Rolltier”)	背部に点か線の髭	6つの点のあるトルク
49~54	—	—	タイプIA	長いくちばしと「牡羊の角」のある円状の蛇 しっぽが渦巻いている (“Rolltier”)	背部に点か線の髭	6つの点のあるトルク
55	7.507	個人蔵	タイプIA	長いくちばしと「牡羊の角」のある円状の蛇 しっぽが渦巻いている (“Rolltier”)	背部に点か線の髭	6つの点のあるトルク
56	7.522	個人蔵	タイプIA	長いくちばしと「牡羊の角」のある円状の蛇 しっぽが渦巻いている (“Rolltier”)	背部に点か線の髭	6つの点のあるトルク
57~59	—	—	タイプIA	長いくちばしと「牡羊の角」のある円状の蛇 しっぽが渦巻いている (“Rolltier”)	背部に点か線の髭	6つの点のあるトルク
60	7.405	Münzslg. Ph. 3,3 (neu)	タイプIA	長いくちばしと「牡羊の角」のある円状の蛇 しっぽが渦巻いている (“Rolltier”)	背部に点か線の髭	6つの点のあるトルク
61~69	—	—	タイプIA	長いくちばしと「牡羊の角」のある円状の蛇 しっぽが渦巻いている (“Rolltier”)	背部に点か線の髭	6つの点のあるトルク
70	7.3	Münzslg. Ph. 3,4 (neu)	タイプIA	長いくちばしと「牡羊の角」のある円状の蛇 しっぽが渦巻いている (“Rolltier”)	背部に点か線の髭	6つの点のあるトルク

71	7.505	Münzslg. Ph. 3,6 (neu)	タイプIA	長いくちばしと「牡羊の角」のある円状の蛇 しっぽが渦巻いている (“Rolltier”)	背部に点か線の髭	6つの点のあるトルク
72	7.395	—	タイプIA	長いくちばしと「牡羊の角」のある円状の蛇 しっぽが渦巻いている (“Rolltier”)	背部に点か線の髭	6つの点のあるトルク
73~86	—	—	タイプIA	長いくちばしと「牡羊の角」のある円状の蛇 しっぽが渦巻いている (“Rolltier”)	背部に点か線の髭	6つの点のあるトルク
87	7.482	Slg. Gotha	タイプIA	長いくちばしと「牡羊の角」のある円状の蛇 しっぽが渦巻いている (“Rolltier”)	背部に点か線の髭	6つの点のあるトルク
88	7.51	Münzkabinett Wien 27147	タイプIA	長いくちばしと「牡羊の角」のある円状の蛇 しっぽが渦巻いている (“Rolltier”)	背部に点か線の髭	6つの点のあるトルク
89	7.49	Münzkabinett Wien 27146	タイプIA	長いくちばしと「牡羊の角」のある円状の蛇 しっぽが渦巻いている (“Rolltier”)	背部に点か線の髭	6つの点のあるトルク
90	7.569	SLMAG K21	タイプIA	長いくちばしと「牡羊の角」のある円状の蛇 しっぽが渦巻いている (“Rolltier”)	背部に点か線の髭	6つの点のあるトルク
91	7.59	SLMM 8168	タイプIA	長いくちばしと「牡羊の角」のある円状の蛇 しっぽが渦巻いている (“Rolltier”)	背部に点か線の髭	6つの点のあるトルク
92	7.468	Museum Neuburg a.d. Donau	タイプIA	長いくちばしと「牡羊の角」のある円状の蛇 しっぽが渦巻いている (“Rolltier”)	背部に点か線の髭	6つの点のあるトルク
93	7.213	Slg. Gotha	タイプIA	長いくちばしと「牡羊の角」のある円状の蛇 しっぽが渦巻いている (“Rolltier”)	背部に点か線の髭	6つの点のあるトルク
94	7.439	Stslg. Inv. 1895, 69a	タイプIA	長いくちばしと「牡羊の角」のある円状の蛇 しっぽが渦巻いている (“Rolltier”)	背部に点か線の髭	6つの点のあるトルク
95	7.38	MNM Budapest 16/1955	タイプIA	長いくちばしと「牡羊の角」のある円状の蛇 しっぽが渦巻いている (“Rolltier”)	背部に点か線の髭	6つの点のあるトルク
96~181	—	—	タイプIB	IAの“Rolltier”に同じ		3つのリラの形のオーナメント 外側に点 球体
182	7.59	Münzslg. Ph. 3,7 (neu)	タイプIB	IAの“Rolltier”に同じ		3つのリラの形のオーナメント 外側に点 球体

183	7.463	個人蔵	タイプIB	IAの"Rolltier"に同じ	3つのリラの形のオーナメント	外側に点	球体
184~185	—	—	タイプIB	IAの"Rolltier"に同じ	3つのリラの形のオーナメント	外側に点	球体
186	7.67	Münzslg. Ph. 3,8 (neu)	タイプIB	IAの"Rolltier"に同じ	3つのリラの形のオーナメント	外側に点	球体
187	7.657	Münzslg. Acc. 92941	タイプIB Streber 17	IAの"Rolltier"に同じ	3つのリラの形のオーナメント	外側に点	球体
188	7.742	Stslg. Inv. 1965, 213	タイプIB Streber 17	IAの"Rolltier"に同じ	3つのリラの形のオーナメント	外側に点	球体
189	6.49	—	タイプIB	IAの"Rolltier"に同じ	3つのリラの形のオーナメント	外側に点	球体
190	7.599	—	タイプIB	IAの"Rolltier"に同じ	3つのリラの形のオーナメント	外側に点	球体
191	7.677	—	タイプIB	IAの"Rolltier"に同じ	3つのリラの形のオーナメント	外側に点	球体
192	不明	—	タイプIB	IAの"Rolltier"に同じ	3つのリラの形のオーナメント	外側に点	球体
193	7.55	Münzslg. Ph. 4,3 (neu)	タイプIIA	鳥の頭 (左) 鉤状の嘴 その前に葉冠 半分の冠 冠の頂に点	3つの点のあるトルク		
194	7.355	個人蔵	タイプIIA	鳥の頭 (左) 鉤状の嘴 その前に葉冠 半分の冠 冠の頂に点	3つの点のあるトルク		
195	7.44	個人蔵	タイプIIA	鳥の頭 (左) 鉤状の嘴 その前に葉冠 半分の冠 冠の頂に点	3つの点のあるトルク		
196	7.572	SLM M8171 aus Slg. Forrer	タイプIIA Streber 53	鳥の頭 (左) 鉤状の嘴 その前に葉冠 半分の冠	3つの点のあるトルク		
197	7.67	Mus. Günzburg 665	タイプIIA Streber 53	鳥の頭 (左) 鉤状の嘴 その前に葉冠 半分の冠	3つの点のあるトルク		
198	7.51	Münzkabinett Wien 27150	タイプIIA Streber 53	鳥の頭 (左) 鉤状の嘴 その前に葉冠 半分の冠	3つの点のあるトルク		
199	7.37	個人蔵	タイプIIA Streber 54	鳥の頭 (左) 鉤状の嘴 その前に葉冠 半分の冠	3つの点のあるトルク		
200	7.55	個人蔵	タイプIIA Streber 53-54	鳥の頭 (左) 鉤状の嘴 その前に葉冠 半分の冠	3つの点のあるトルク		
201	7.526	紛失	タイプIIA	鳥の頭 (左) 鉤状の嘴 その前に葉冠 半分の冠	3つの点のあるトルク		
202~436	7.55	—	タイプIIA	鳥の頭 (左) 鉤状の嘴 その前に葉冠 半分の冠	3つの点のあるトルク		



437	—	—	タイプII A Streber 52-54	鳥の頭 (左) 鈎状の嘴 その前に葉冠 半分の冠	3つの点のあるトルク
438~441	7.52	—	タイプII A Streber 30	鳥の頭 (左) 鈎状の嘴 その前に葉冠 半分の冠	3つの点のあるトルク
442	7.46	Münzslg. Ph. 3.16 (neu)	タイプII Ca	鳥の頭 (左) 葉冠の縁取り 嘴は2つの円に挟まれる	6つの点のあるトルク Nr. 446 と 447 に刻印で類似
443	7.4	Münzslg. Ph. 3.17 (neu)	タイプII Ca	鳥の頭 (左) 葉冠の縁取り 嘴は2つの円に挟まれる	6つの点のあるトルク
444	7.62	Münzkabinett Wien 27149	タイプII Ca	鳥の頭 (左) 葉冠の縁取り 嘴は2つの円に挟まれる	6つの点のあるトルク
445	7.47	—	タイプII Ca	鳥の頭 (左) 葉冠の縁取り 嘴は2つの円に挟まれる	6つの点のあるトルク
446	7.465	Münzslg. Ph. 3.18 (neu)	タイプII Ca	鳥の頭 (左) 葉冠の縁取り 嘴は2つの円に挟まれる	6つの点のあるトルク
447	7.516	SLM AG K22	タイプII Ca	鳥の頭 (左) 葉冠の縁取り 嘴は2つの円に挟まれる	6つの点のあるトルク
448	7.753	Staatl. Münzslg. Ph. 3.19 (neu)	タイプII Ca	鳥の頭 (左) 葉冠の縁取り 嘴は2つの円に挟まれる	6つの点のあるトルク
449	7.753	個人蔵	タイプII Ca	鳥の頭 (左) 葉冠の縁取り 嘴は2つの円に挟まれる	6つの点のあるトルク
450	6.745	Münzslg. Ph. 3.20 (neu)	タイプII Ca	鳥の頭 (左) 葉冠の縁取り 嘴は2つの円に挟まれる	6つの点のあるトルク
451	7.49	—	タイプII Ca Streber 35	鳥の頭 (左) 葉冠の縁取り 嘴は2つの円に挟まれる	6つの点のあるトルク
452~541	—	—	タイプII Ca	鳥の頭 (左) 葉冠の縁取り 嘴は2つの円に挟まれる	6つの点のあるトルク
542	7.415	Münzslg. Ph. 3.21 (neu)	タイプII Ca	鳥の頭 (左) 葉冠の縁取り 嘴は2つの円に挟まれる	6つの点のあるトルク
543	7.33	個人蔵	タイプII Ca	鳥の頭 (左) 葉冠の縁取り 嘴は2つの円に挟まれる	6つの点のあるトルク
544	7.316	—	タイプII Ca Streber 37	鳥の頭 (左) 葉冠の縁取り 嘴は2つの円に挟まれる	6つの点のあるトルク
545~553	7.34	—	タイプII Ca	鳥の頭 (左) 葉冠の縁取り 嘴は2つの円に挟まれる	6つの点のあるトルク
554	7.475	Münzslg. Ph. 3.22 (neu)	タイプII Ca	鳥の頭 (左) 葉冠の縁取り 嘴は2つの円に挟まれる	6つの点のあるトルク
555~565	7.47	—	タイプII Ca	鳥の頭 (左) 葉冠の縁取り 嘴は2つの円に挟まれる	6つの点のあるトルク
566	7.46	Münzslg. Ph. 3.23 (neu)	タイプII Ca	鳥の頭 (左) 葉冠の縁取り 嘴は2つの円に挟まれる	6つの点のあるトルク
567~579	—	—	タイプII Ca	鳥の頭 (左) 葉冠の縁取り 嘴は2つの円に挟まれる	6つの点のあるトルク

580	7.4	個人蔵	タイプII Ca	鳥の頭 (左)	葉冠の縁取り 嘴は2つの円に挟まれる	6つの点のあるトルク
581~593	—	—	タイプII Ca	鳥の頭 (左)	葉冠の縁取り 嘴は2つの円に挟まれる	6つの点のあるトルク
594~606	7.42	—	タイプII Ca	鳥の頭 (左)	葉冠の縁取り 嘴は2つの円に挟まれる	6つの点のあるトルク
607	7.415	個人蔵	タイプII Cb	鳥の頭 (左)	葉冠の縁取り 嘴は2つの円に挟まれる	5つの点のあるトルク
608~621	7.4	—	タイプII Cb	鳥の頭 (左)	葉冠の縁取り 嘴は2つの円に挟まれる	5つの点のあるトルク
622	7.57	—	タイプII Cb	鳥の頭 (左)	葉冠の縁取り 嘴は2つの円に挟まれる	5つの点のあるトルク
623~624	—	—	タイプII Cb	鳥の頭 (左)	葉冠の縁取り 嘴は2つの円に挟まれる	5つの点のあるトルク
625	7.555	個人蔵	タイプII Cb	鳥の頭 (左)	葉冠の縁取り 嘴は2つの円に挟まれる	5つの点のあるトルク
626~627	7.57	—	タイプII Cb	鳥の頭 (左)	葉冠の縁取り 嘴は2つの円に挟まれる	5つの点のあるトルク
628~636	7.58	—	タイプII Cb	鳥の頭 (左)	葉冠の縁取り 嘴は2つの円に挟まれる	5つの点のあるトルク
637	6.915	個人蔵	タイプII Cb	鳥の頭 (左)	葉冠の縁取り 嘴は2つの円に挟まれる	5つの点のあるトルク
638	7.32	RGZM 27562	タイプII D	鳥の頭 (左) 2つの小球に挟まれる大きく曲がったくちばし 2つの点のある三角形の葉冠	5つの点のあるトルク 小球とトルクの間に線	
639	7.2	個人蔵	タイプII D	鳥の頭 (左) 2つの小球に挟まれる大きく曲がったくちばし 2つの点のある三角形の葉冠	5つの点のあるトルク 小球とトルクの間に線	
640~643	—	—	タイプII D	鳥の頭 (左) 2つの小球に挟まれる大きく曲がったくちばし 2つの点のある三角形の葉冠	5つの点のあるトルク 小球とトルクの間に線	
644	7.595	Münzslg. Ph. 3.10 (neu)	タイプII E	鳥の頭 (左) くちばしに小球はない 点のある冠	十字、3つの小球 リラの装飾とS字型の線刻	
645	7.565	Münzslg. Ph. 3.11 (neu)	タイプII E	鳥の頭 (左) くちばしに小球はない 点のある冠	十字、3つの小球 リラの装飾とS字型の線刻	
646	7.2	SLM ZB 1052	タイプII E	鳥の頭 (左) くちばしに小球はない 点のある冠	十字、3つの小球 リラの装飾とS字型の線刻	
647	7.45	SLMM 11379	タイプII F	鳥の頭 (左) 葉冠 「コンマ」の形のシンボル 環状の装飾	6つの点のあるトルク 花のつぼみ	
648	7.575	Münzslg. Ph. 3.13 (neu)	タイプII F	鳥の頭 (左) 葉冠 「コンマ」の形のシンボル 環状の装飾	6つの点のあるトルク 花のつぼみ	
649	7.55	SLMM 11449	タイプIII A	鳥の頭 (右) 両端に小球のついた葉冠	6つの点のあるトルク	
650	6.933	Stslg. Inv. 1965, 212	タイプIII A	鳥の頭 (右) 両端に小球のついた葉冠	6つの点のあるトルク	
651~657	6.949	—	タイプIII A	鳥の頭 (右) 両端に小球のついた葉冠	6つの点のあるトルク	
658	7.54	Münzslg. Ph. 3.14 (neu)	タイプIII A	鳥の頭 (右) 両端に小球のついた葉冠	6つの点のあるトルク	

659	7.439	Stslg. Inv. 1965, 446	タイプIII A	鳥の頭(右) 両端に小球のついた葉冠	6つの点のあるトルク
660	7.67	SLM LMB AB 2256	タイプIII A	鳥の頭(右) 両端に小球のついた葉冠	6つの点のあるトルク
661	7.54	Münzslg. Ph. 3.12(neu)	タイプIII B	鳥の頭(右)「コンマ」の形のシンボル 線の装飾 タイプII Fに似ている Nr. 1665 と類似?	タイプII Fと同じ
662~665	—	—	タイプ不明 Streber 51?	鳥の頭	4つ(?)の点のあるトルク
666	7.52	—	タイプIV Aa	ふさふさとした葉冠 両端に小球	6つの点のあるトルク
667	7.54	Münzslg. Ph. 4.7 (neu)	タイプIV Aa	ふさふさとした葉冠 両端に小球	6つの点のあるトルク
668~672	—	—	タイプIV Aa	ふさふさとした葉冠 両端に小球	6つの点のあるトルク
673	7.635	Münzslg. Ph. 4.8 (neu)	タイプIV Aa	ふさふさとした葉冠 両端に小球	6つの点のあるトルク
674~675	7.645	—	タイプIV Aa	ふさふさとした葉冠 両端に小球	6つの点のあるトルク
676	6.77	Münzslg. Ph. 4.9 (neu)	タイプIV Aa	ふさふさとした葉冠 両端に小球	6つの点のあるトルク
677	7.615	個人蔵	タイプIV Aa	ふさふさとした葉冠 両端に小球	6つの点のあるトルク
678	7.335	Münzslg. Ph.4.10 (neu)	タイプIV Aa	ふさふさとした葉冠 両端に小球	6つの点のあるトルク
679	7.548	Münzslg. Ph. 4.11 (neu)	タイプIV Aa	ふさふさとした葉冠 両端に小球	6つの点のあるトルク
680~687	—	—	タイプIV Aa	ふさふさとした葉冠 両端に小球	6つの点のあるトルク
688	7.58	紛失	タイプIV Aa	ふさふさとした葉冠 両端に小球	6つの点のあるトルク
689~691	—	—	タイプIV Aa	ふさふさとした葉冠 両端に小球	6つの点のあるトルク
692	7.345	紛失	タイプIV Aa	ふさふさとした葉冠 両端に小球	6つの点のあるトルク
693	7.635	個人蔵	タイプIV Aa	ふさふさとした葉冠 両端に小球	6つの点のあるトルク
694	7.39	Münzkabinett Wien 27148	タイプIV Aa	ふさふさとした葉冠 両端に小球	6つの点のあるトルク
695~750	—	—	タイプIV Aa	ふさふさとした葉冠 両端に小球	6つの点のあるトルク
751	7.56	Münzslg. Ph. 4.15 (neu)	タイプIV Aa	ふさふさとした葉冠 両端に小球	6つの点のあるトルク
752	7.585	Münzslg. Ph. 4.12 (neu)	タイプIV Aa	ふさふさとした葉冠 両端に小球	6つの点のあるトルク
753	7.56	Münzslg. Ph. 4.14 (neu)	タイプIV Aa	ふさふさとした葉冠 両端に小球	6つの点のあるトルク
754~780	7.56	—	タイプIV Aa	ふさふさとした葉冠 両端に小球	6つの点のあるトルク

781	7.455	Münzslg. Ph. 4.13 (neu)	タイプIVAa	ふさふさとした葉冠 両端に小球	6つの点のあるトルク
782	7.415	Münzslg. Ph. 4.16 (neu)	タイプIVAa	ふさふさとした葉冠 両端に小球	6つの点のあるトルク
783	7.535	Münzslg. Ph. 4.17 (neu)	タイプIVAa	ふさふさとした葉冠 両端に小球	6つの点のあるトルク
784	7.63	BN Paris Nr. 9424	タイプIVAa	ふさふさとした葉冠 両端に小球	6つの点のあるトルク
785~827	—	—	タイプIVAa	ふさふさとした葉冠 両端に小球	6つの点のあるトルク
828	7.545	Staatl. Münzslg. Ph. 4.18 (neu)	タイプIVAb	ふさふさとした葉冠 両端に小球	5つの点のあるトルク
829	7.405	個人蔵	タイプIVAb	ふさふさとした葉冠 両端に小球	5つの点のあるトルク
830~831	—	—	タイプIVAb	ふさふさとした葉冠 両端に小球	5つの点のあるトルク
832	7.455	Münzslg. Ph. 4.19 (neu)	タイプIVAb	ふさふさとした葉冠 両端に小球	5つの点のあるトルク
833	7.54	Münzslg. Ph. 4.21 (neu)	タイプIVAc	ふさふさとした葉冠 両端に小球	3つの点のあるトルク
834~836	7.54	—	タイプIVAc	ふさふさとした葉冠 両端に小球	3つの点のあるトルク
837	7.48	Münzslg. Ph. 4.6 (neu)	タイプIVBa	ふさふさとした葉冠 両端に小球 葉冠の開いた部分に3つの三角形 点	6つの点のあるトルク
838	7.439	Stslg. Inv. 1895, 69b aus Slg. Fellmeyer, K 1461	タイプIVBa Streber. 58	ふさふさとした葉冠 両端に小球 葉冠の開いた部分に3つの三角形 点	6つの点のあるトルク
839	7.492	Mus. Neuburg a.d. Donau	タイプIVBa Streber. 57	ふさふさとした葉冠 両端に小球 葉冠の開いた部分に3つの三角形 点	6つの点のあるトルク
840~878	7.480 7.510 7.560	—	タイプIVBa	ふさふさとした葉冠 両端に小球 葉冠の開いた部分に3つの三角形 点	6つの点のあるトルク
879	7.42	Münzslg. Ph. 4.20 (neu)	タイプIVBb	ふさふさとした葉冠 両端に小球 葉冠の開いた部分に3つの三角形 点 Nr. 837, 838, 880 と刻印が同じ	3つの点のあるトルク Nr. 880 と刻印が同じ
880	7.569	個人蔵	タイプIVBb	ふさふさとした葉冠 両端に小球 葉冠の開いた部分に3つの三角形 点 Nr. 879 と刻印が同じ Nr. 837, 838 と同じ	3つの点のあるトルク Nr. 879 と刻印が同じ

881~886	—	—	タイプIVBb	ふさふさとした葉冠 両端に小球 葉冠の開いた部分に3つの三角形点	3つの点のあるトルク
887~892	—	—	タイプIVBb Streber 57-80	ふさふさとした葉冠 両端に小球 葉冠の開いた部分に3つの三角形点	3つの点のあるトルク
893	7.51	Münzslg. Ph. 4.22 (neu)	タイプIVC	葉冠の内側に小球 幾何学模様	6つの点のあるトルク
894	—	—	タイプIVC	葉冠の内側に小球 幾何学模様	6つの点のあるトルク
895	7.54	個人蔵	タイプIVC	葉冠の内側に小球 幾何学模様	6つの点のあるトルク
896	7.701	Münzslg. Ph. 4A, 17 (neu)	タイプVA	画像なし (いわゆる「なめらかな虹の小鉢」)	画像なし (いわゆる「なめらかな虹の小鉢」)
897	7.284	Münzslg. Ph. 4A, 16 (neu)	タイプVA	画像なし (いわゆる「なめらかな虹の小鉢」)	画像なし (いわゆる「なめらかな虹の小鉢」)
898~899	7.277	—	タイプVA	画像なし (いわゆる「なめらかな虹の小鉢」)	画像なし (いわゆる「なめらかな虹の小鉢」)
900	7.53	—	タイプVA	画像なし (いわゆる「なめらかな虹の小鉢」)	刻印の痕跡
901	7.525	個人蔵	タイプVA	画像なし (いわゆる「なめらかな虹の小鉢」)	刻印の痕跡
902	7.73	Münzslg. Ph. 4A, 12 (neu)	タイプVD	凸面	十字のようなもの 凹面
903~904	7.737	—	タイプVD	凸面	十字のようなもの 凹面
905	7.73	Münzslg. Ph. 4A, 7 (neu)	タイプXI	規則的でない装飾突起 中央に点刻	プロペラ型の3枚の葉と小球
906	7.737	—	タイプXI	規則的でない装飾突起 中央に点刻	プロペラ型の3枚の葉と小球
907	7.582	SLMM 11380	タイプXI	規則的でない装飾突起 中央に点刻	プロペラ型の3枚の葉と小球
908	7.61	Münzslg. Ph. 4A, 4 (neu)	タイプVIIA	植物の「がく」の形の渦巻き装飾 中央に小球	線対称の曲線装飾とトゲ
909	7.71	Münzslg. Ph. 4A, 5 (neu)	タイプVIIA Streber 91	植物の「がく」の形の渦巻き装飾 中央に小球	線対称の曲線装飾とトゲ
910	7.638	Württembergisches Lm Stuttgart	タイプVIIA Streber 91	植物の「がく」の形の渦巻き装飾 中央に小球	線対称の曲線装飾とトゲ
911	7.57	Münzslg. Ph. 4A, 6 (neu)	タイプVIIA	植物の「がく」の形の渦巻き装飾 中央に小球	線対称の曲線装飾とトゲ
912	7.622	Münzslg. Ph. 4A, 2 (neu)	タイプVIII	巻き髪の人頭 (右)	向き合うリラの装飾とS字の曲線 麦粒のような装飾



913	7.505	個人蔵	タイプVIII Streber 86	巻き髪の人頭 (右)	向き合うリラの装飾と S 字の曲線 麦粒のような装飾
914	7.51	Münzslg. Ph. 4A, 3 (neu)	タイプVIII	巻き髪の人頭 (右)	向き合うリラの装飾と S 字の曲線 麦粒のような装飾
915	7.5	—	タイプVIII	巻き髪の人頭 (右)	向き合うリラの装飾と S 字の曲線 麦粒のような装飾
916~917	7.475	—	タイプVIII	巻き髪の人頭 (右)	向き合うリラの装飾と S 字の曲線 麦粒のような装飾

表 13：ガガースの出土貨幣 [出典：Ebd., S.171-175 を基に作成。]

	重さ	所蔵	タイプ	モチーフ 表	モチーフ 裏
1	7.833	—	「虹の小鉢」 I A	長いくちばしと「牡羊の角」のある円状の蛇 背部に点か線の 髭 しっぽが渦巻いている (“Rolltier”)	6 つの点のあるトルク
2	7.425	Münzslg. Ph. 3, 2 (neu)	「虹の小鉢」 I A	長いくちばしと「牡羊の角」のある円状の蛇 背部に点か線の 髭 しっぽが渦巻いている (“Rolltier”)	6 つの点のあるトルク
3	7.577	—	「虹の小鉢」 I A	長いくちばしと「牡羊の角」のある円状の蛇 背部に点か線の 髭 しっぽが渦巻いている (“Rolltier”)	6 つの点のあるトルク
4	7.169	Münzslg. Ph. 3, 5 (neu)	「虹の小鉢」 I A	長いくちばしと「牡羊の角」のある円状の蛇 背部に点か線の 髭 しっぽが渦巻いている (“Rolltier”)	6 つの点のあるトルク
5	—	—	「虹の小鉢」 I A Streber II 14	長いくちばしと「牡羊の角」のある円状の蛇 背部に点か線の 髭 しっぽが渦巻いている (“Rolltier”)	6 つの点のあるトルク
6	7.15	BN Paris 9420	「虹の小鉢」 I A	長いくちばしと「牡羊の角」のある円状の蛇 背部に点か線の 髭 しっぽが渦巻いている (“Rolltier”)	6 つの点のあるトルク
7	7.52	—	「虹の小鉢」 II A	鳥の頭 (左) 鉤状の嘴 その前に葉冠 点のない半分冠	6 つの点のあるトルク
8	7.57	—	「虹の小鉢」 II A	鳥の頭 (左) 鉤状の嘴 その前に葉冠 点のない半分冠	4 つの点のあるトルク
9	7.526/7.550	—	「虹の小鉢」 II A	鳥の頭 (左) 鉤状の嘴 その前に葉冠 点のない半分冠	3 つの点のあるトルク
10	7.57	個人蔵	「虹の小鉢」 II A Streber II 53/54	鳥の頭 (左) 鉤状の嘴 その前に葉冠 点のない半分冠	3 つの点のあるトルク
11	—	—	「虹の小鉢」 II C	鳥の頭 (左) 葉冠の縁取り 嘴は 2 つの円に挟まれる	6 つの点のあるトルク

12	7.555	個人蔵	「虹の小鉢」 II C	鳥の頭 (左) 葉冠の縁取り 嘴は2つの円に挟まれる	5つの点のあるトルク
13	7.555	Münzslg. Ph. 4, 1 (neu)	「虹の小鉢」 II C	鳥の頭 (左) 葉冠の縁取り 嘴は2つの円に挟まれる	5つの点のあるトルク
14	7.242	Münzslg. Ph. 4, 2 (neu)	「虹の小鉢」 II C	鳥の頭 (左) 葉冠の縁取り 嘴は2つの円に挟まれる	5つの点のあるトルク
15	6.98	—	「虹の小鉢」 II D	鳥の頭 (左) 2つの小球に挟まれる大きく曲がったくちばし 2つの点のある三角形の葉冠	5つの点のあるトルク 小球とトルクの間に線
16	7.48	Münzslg. Ph. 3, 24 (neu)	「虹の小鉢」 II D Streber II 44/45	鳥の頭 (左) 2つの小球に挟まれる大きく曲がったくちばし 2つの点のある三角形の葉冠	5つの点のあるトルク 小球とトルクの間に線
17	7.42	個人蔵	「虹の小鉢」 II D Streber II 45	鳥の頭 (左) 2つの小球に挟まれる大きく曲がったくちばし 2つの点のある三角形の葉冠	5つの点のあるトルク 小球とトルクの間に線
18	7.45	Münzslg. Ph. 3, 15 (neu)	「虹の小鉢」 II G	幅広の首を持つ鳥の頭 (左) その前に三角形の並び 嘴の上部 中央に小球と4つの点	三角形の中に6つの小球のあるトルク (?) 中央にロゼッタ模様
19	7.64	—	「虹の小鉢」 IVA Streber II 68	曲がった葉からなる冠の縁取り 端に小球	トルクと6つの小球
20	7.753	—	「虹の小鉢」 IVA	曲がった葉からなる冠の縁取り 端に小球	5つの点のあるトルク
21	—	—	「虹の小鉢」 IVA Streber II 76?	曲がった葉からなる冠の縁取り 端に小球	だいたい5つの点のあるトルク
22	7.39	Münzslg. Ph. 4A, 1 (neu)	「虹の小鉢」 IV	角のある鹿の頭	プロペラのような形に並んだ三角形
23	6.929	個人蔵	ポイイ族の二枚貝の装飾の スタテル (Muschelstater)	不規則な装飾突起	二枚貝 (Muschel) の形と幾何学模様
24	7.17	Münzslg. Ph. 4A, 21 (neu)	ポイイ族の二枚貝の装飾の スタテル	不規則な装飾突起	二枚貝 (Muschel) の形と幾何学模様
25	6.88	Münzslg. Ph. 4A, 20 (neu)	ポイイ族の二枚貝の装飾の スタテル	なめらかな装飾突起	二枚貝 (Muschel) の形と不規則な線
26	6.874	Münzslg. Ph. 4A, 18 (neu)	ポイイ族の二枚貝の装飾の スタテル	Nr. 25 に同じ	Nr. 25 に同じ

27	7.005	個人蔵	ポイイ族の二枚員の装飾の スタテル	Nr. 25に同じ	Nr. 25に同じ
28	6.888	—	ポイイ族の二枚員の装飾の スタテル	Nr. 25に同じ	Nr. 25に同じ
29	7.033	個人蔵	ポイイ族の二枚員の装飾の スタテル	Nr. 25に同じ くぼんでいる	Nr. 25に同じ
30	6.911	—	ポイイ族の二枚員の装飾の スタテル Nr.27に同じ	Nr. 29に似ている	Nr. 29に似ている
31	6.918	—	ポイイ族の二枚員の装飾の スタテル Nr. 27に同じ	Nr. 29に似ている	Nr. 29に似ている
32	6.975	Münzslg. Ph. 4A, 19 (neu)	ポイイ族の二枚員の装飾の スタテル Nr. 27に同じ	装飾突起 周囲に5本の光線のある小球	たくさんの不規則な光線と穀物の核 (Getreidekorn) ”のある 二枚員

## 補論 「ケルト」とは何か

### はじめに

本稿では、紀元前3世紀以降のケルト社会について、信仰を軸に、ウィンデリキアの事例から検討してきた。

しかし、「ケルト」を論じるうえで、避けることのできない問題に踏み入ってこなかった。すなわち、「“島のケルト”否定論」をはじめとする「ケルト」概念—どこからどこまでが「ケルト」か、あるいは何が「ケルト」か—をめぐる不安定さについてである。

「“島のケルト”否定論」とは、1970年代以降、とくにイギリス考古学界において盛んになった、従来の「ローマ侵略以前に大陸のケルト人がブリテン島とアイルランドに移住し、中世に入っても自分たちの文化を保持し続けた」という説を否定する論調のことである。ジョン・コリスなどの否定論者は、「島のケルト」について、18世紀以降のロマン主義やナショナリズムの高揚の中で捏造されたものであり、本当はブリテン島やアイルランドには「ケルト人」はいなかったと言うのである<sup>1</sup>。さらに、その議論は「ケルト」概念そのものにまでおよんだのである。すなわち、「ケルト」という民族的な同一性を持った集団はそもそも存在しなかったのだ、と<sup>2</sup>。

このように、「ケルト」研究の土台であるべき「ケルト」の概念はもろく、いつ流されて消えゆくかもしれないほどである。しかし、この「ケルト」概念の不安定さは、何を原因に生じ、なぜ現在までつづいているのか。そしてその危うい土台のうえで、「ケルト」を研究することや、本稿は、どのような意味を持ち得るのか。本補論では、ケルト概念やこれまでのケルト史研究の展開を概観し、「ケルト」研究の意義をあらためて確認していきたい。

### 1 19世紀までのケルト研究

#### 1-1) 16～17世紀：「ケルト（ガリア）」の再評価の兆し

原聖氏の論考がしめしているように<sup>3</sup>、古代史に強烈な印象を残した「ケルト（ガリア）人」は、14世紀初頭までは「周縁の野蛮人」として認識されるにすぎず、ほとんど忘れ去られた存在であった。「ガリア」と「ケルト」の区別もつけられないままであった。

15世紀から16世紀にかけて、その状況に変化がおとずれる。イギリスやフランスをはじめとした国家の枠組みの確立や、プロテスタントの誕生を経て、ヨーロッパ各国に「独自性」意識の芽生えが起こりはじめた<sup>4</sup>。人々は「起源神話」を求めようになった。フランスにとって、起源となる民族はガリア人、すなわちケルト人であった。

1552年、フランスの言語学者ギヨーム・ポステル（Guillaume Postel）は、著書『ガリアの弁明』において、ガリア人すなわちフランス人の祖先として、旧約聖書のノアの子孫・ゴメルを掲げた。ガリア人の先祖としてノアの子孫を挙げるのはポステルが初めてではなく、1498年、イタリアの神学者で偽書制作者でもあるヴィテルボのアンニウス（Annio da Viterbo）が、ガリアの王の先祖としてのブリタニア王の系図に連なる者として、同じくノアの息子ヤフェトを挙げている。それまで「ヨーロッパの起源」として信じられていたのは、ジェフリー・オブ・モンマス（Geoffrey of Monmouth）が『ブリタニア列王伝』で記したように、「トロイアのアイネイアス」であった<sup>5</sup>。アンニウスの記述は、これをはるかに遡るものであり、ポステルの時代である16世紀においても継承されていた考え方であった。原氏は、国の起源と聖書を結びつけたポステルの主張は、ヨーロッパ、すなわち当時の世界全体における「フランス」という国家の政治的優位性を主張することをもくろんだものであったと述べる<sup>6</sup>。

## 1-2) 「ケルトマニア」の登場

「ケルトマニア」は、「言語の類似性を重要視し、ケルトの正統な継承地をブルターニュとウェールズとする」人たちであり、ひいては「ヨーロッパの始原の民としての“ケルト人”を過剰に礼賛する」人たちのことである。18世紀は、こういったケルトマニアが数多く現れる時代であったと原氏は言う<sup>7</sup>。17世紀は、言語学的な「ケルト」と「ケルトマニア」出現の萌芽といえる。「言語」の観点から民族やその優位性について考える論考が多く著された。哲学者・数学者として名高いゴットフリート・ライプニッツ（Gottfried Wilhelm Leibniz）もこのうちのひとりである。「言語」と「民族」とがイコールで結ばれていた時代といえる。「ケルトマニア」の登場は、言語学における「ケルト」が定められるにあたって大きな役割を負ったといえよう。18世紀、それは2人の人物によっておこなわれた。大陸と島嶼の「ケルト」を結びつけたフランスのポール・イヴ・ペズロン（Paul-Yves Pezron）やウェールズのエドワード・ルイド（Edward Lhuyd）は、現代に続く「ケルト」の考え方の嚆矢である。

ペズロンは1639年、ブルターニュのエンヌボン生まれの神学者である。彼は1703年、*Antiquité de la Nation et de la langue des Celtes* を出版し、ケルト語を、「人類最初の言語（始原語）」であると唱え、さらには、彼の同時代にも話されていたブルトン語が最古のケルト語であると述べた<sup>8</sup>。彼は、「偉大な」ガリアを継承する



ものとしてブルターニュとウェールズ語を設定し、「ヨーロッパ最初の民族ケルト人の祖」であるノアの子孫ゴメルの話語が、ブレイス（ブルトン）語とカムリー（ウェールズ）語の直接の祖先であると主張した。

ルイドはペズロンの同時代人であり、1660年生まれのウェールズ出身の学者である。彼は1696年から1701年にかけて、ウェールズ、スコットランド、アイルランド、コーンウォール、そしてブルターニュを旅し、各地に残る石碑を模写して集めた。彼が、同時代のアングロ・サクソン史家などとの交流のなかで、中世のケルト考古学に寄与した貢献を評価する声もある<sup>9</sup>。しかし、彼の最大の功績は、1707年の *Archaeologica Britannia* である。ルイドはこの著書において、アイルランド語も含めた「島嶼ケルト語」のすべてが古代ガリア語の仲間であると述べ、これらの言語の話者を「ケルト人」と呼びあらわした。彼はケルト系言語全体を把握し、ケルト系言語話者を「ケルト人」と呼んだ初の人物である。

すでに16世紀末には、ジョージ・ブキャナン（George Buchanan 1506～1582）が古代のガリア語と古代スコットランド・ゲール語およびアイルランド語との同一性を述べていたけれども、ペズロンやルイドはそれよりさらに飛躍して、古代ブリテン島の人々と古代ガリアの人々を「同じ言語の話者＝同族」とみなした。そのうえ、「ヨーロッパ最初の民族と、彼らの生き残る地」として、16世紀にそれぞれフランスとイギリスに併合されていた「辺境」のブルターニュとウェールズ、という主張を生み出したのである。

ペズロンとルイドが、単なる古代への学問的な情熱のために「ケルト（ガリア）の偉大さ」を唱える人々と一線を画す理由がもうひとつある。それは、ふたりとも「ケルト語圏出身者」であるという点だ。彼らがケルト（ガリア）の偉大さを唱え、ケルトは「ヨーロッパの起源」であり、その正統な末裔が、ケルト系言語の話者であるブルターニュ人、ウェールズ人であると定めることは、現実では大国に組み入れられた「辺境」である自分たちの故郷を称揚するという、愛郷的側面があったとみることもできよう。

18世紀後半は、ケルト語圏出身者による「ケルト＝ヨーロッパの起源」論が過熱した。彼らは言語の、音韻の類似性を重要視し、ケルトの正統な継承地をブルターニュとウェールズだと考え、固執した。他の言語との比較によって、ケルト語、とくにブレイス語、カムリー語、コーンウォール語であるケルノウ語が「人類最初の言語」「始原語」であるという自分たちの主張を裏づけようとしたのである。ジャック・ル・ブリガン（Jacques Le Brigen）やテオフィル・マロ・ド・ラ・トゥール・ドーヴェルニュ（Théophile Malo de La Tour d'Auvergne）などのブルターニュ出身の研究者たちが、「ブレイス語」が最初の言語としての優位性を有していると主張した。18世紀における「ケルト」とは、ブルターニュとウェールズであり、それはつまり、始原語としてのケルト語の生き残る場所とその話し手を意味していた。

ところで、18世紀後半にはもうひとつの大きな出来事があった。スコットランドの詩人ジェームズ・マクファーソン (James MacPherson) による『オシアン *Ossian*』の発表である。

『オシアン』は、3世紀の英雄フィンガルの息子オシアンが、自分の息子の許嫁であるマルヴィーナに語った、父の若きころの武勲の物語である。マクファーソンはこれらの物語を、スコットランドのゲール語話者への取材などによって集めた。この、当時の現代に語り継がれた古代の歌物語の発見は、近代化が著しく進むなかで、「文明への逆行の象徴」として、ロマン派の人々に称賛をもって受け入れられた<sup>10</sup>。そして、ヨーロッパ各地で古歌採集が流行するわけであるが、それは、自分たちの祖先やアイデンティティの探求につながる、一種のナショナリズム的なものでもあったのである。

### 1-3) 考古学の確立と「島のケルト」の「発見」

1804年、前世紀のケルトマニアたちの「熱心な」活動のおかげもあり、フランスにてケルト・アカデミーが創設された。アカデミーでの研究対象にはアルバ語 (スコットランド・ゲール語) も加えられ、19世紀初頭には、ブリテン島北部が「ケルト」として認識されつつあった。しかし、このアカデミーは、その創設を支援した皇帝ナポレオンの没落とともに衰退し、1814年、「フランス王立考古協会」に改組を余儀なくされる。ここには、ナポレオンの偉業を、ローマとは異なる「フランスの古代＝ガリア」と結びつけようとした明確な意図を理解することができる<sup>11</sup>。

しかし、古き良き祖先の伝統を求めるパトリオティックな動きはとどまることを知らなかった。そのうちでもっとも大きなものが、『バルザス・ブレイス *Barzaz Breiz*』である。ブルターニュの農村に伝わっていた5世紀から6世紀の古謡を集めたこの書は、ブルターニュ出身の貴族階級の青年、テオドール・エルサル・ラ・ヴィルマルケ (Théodore Hersart de La Villemarqué) によって編まれた。『イスの町の水没』<sup>12</sup>などをはじめとした、キリスト教と「ケルト」の死生観が混ざり合った幻想的な民謡は、『オシアン』と同様に、近代化する世界のなかに残されていた、古く素朴な農村の原始的な文化を象徴するものであった。序文においてヴィルマルケは、「(同時代の) 批判的研究は、・・・古代のバルドたちの冠であった花をつけた白樺の小枝を優雅に受け取るのだ。この白樺の小枝は、長いあいだ逃れ追<sup>ミューズ</sup>い払われていたブルターニュの詩神によりやくその順番が回ってきて、批判的研究に捧げにやってきたものである」と書いている<sup>13</sup>。ここにも、抑圧された故郷の正しい評価を望む思いが、少なからず込められているように思われる。「フランス」という国の基層文化として規定されていた文化と一線を画するケルト系文化の存在を主張するのが『バルザス・ブレイス』である、と、山内淳氏は述べる<sup>14</sup>。

このような民謡採集の活発化は、民俗学の発展に大きく貢献した。そのいっぽうで、実証的研究もスタートするのが19世紀後半である。1840年代以降、考古学が学問として確立すると、ヨーロッパの各地で古代遺跡の発掘調査が盛んにおこなわれるようになる。この考古学の体系化は、人々の古代への関心をさらに掻き立てるものとなった。1846年から1868年にかけてのハルシュタット、1857年のラ・テーヌ両発掘もこの機運のなかでおこなわれたものだ。フランスにおいても、ときの皇帝ナポレオン3世の熱心な主導により、ガリアとローマの戦いの舞台であるアレシア [Alesia]、ゲルゴウィア [Gergovia]、そしてビブラクテ [Bibracte] に比定される地の発掘がおこなわれた。とくに、ガリア人とカエサル最後の戦いの場であるアレシアには、ガリア人の英雄ウエルキンゲトリクスの像が建てられた。その顔はナポレオン3世に似せて作られていた<sup>15</sup>。

この時代、そして後々までの「ケルト」にまつわる研究に大きな影響を与えたのが、フランスの考古学者ヨセフ・デシュレット (Joseph Déchelette) だった。彼は、当時発展しつつあった層位学の方法を、考古学に応用した。彼は、土葬を「ケルト人」、火葬を「ゲルマン人」の文化とし、フランス北部での土葬から火葬への移行を「ゲルマン人の侵食」としてとらえた。このような出土物によって民族を分ける考え方は、20世紀初頭の「文化グループ」の考え方に先立つ主張であった<sup>16</sup>。そして、彼によって「ラ・テーヌ美術＝ケルト美術」の図式が確立され、20世紀においてもそれは支持された。

またドイツでは、19世紀後半にローマ遺物の研究機関がいくつか創設された。それらは、とくに「ケルト」を中心としていたわけではなかったが、ドイツ国民の「祖先」である民族（主にゲルマン人）の文化をローマ文化の遺物のなかから探し出し、賞賛するために古代史を研究する機関であった。これは、1871年のドイツ統一と関連する、民族主義、あるいは愛国主義的側面を有していた<sup>17</sup>。

ブリテン島でも、考古学的大発見があった。ジョン・エヴァンズ (John Evans) とアーサー・エヴァンズ (Arthur Evans) の父子2代にわたるブリテン島の発掘調査 (1864年、1886年) によって、カエサル到来以前のブリテン南東部における鉄器文化に、大陸との共通点を見出された。このことが「ベルガエ人の移住」のあった証左とされたことにより、「ケルト」による大陸と島の結びつきがしめされた<sup>18</sup>。ここに「島のケルト」が「発見」されたのである。

これらのことを経て、純粋な古代への憧憬と歴史的興味と、そして政治的思惑に彩られながら、「ケルト」研究は体系化されつつあった。このように見ると、19世紀までの「ケルト」とは、おおむね「今や辺境の生き残りである始原の民」や、「古の文化を今に伝える慈しむべき存在」、あるいは「祖国のアイデンティティをしめすもの」という認識であったと考えてよいだろう。そこには、研究する主体の個人的な民族意識が、多かれ少なかれ反映されているといえる。とくに18世紀の

「ケルトマニア」たちの研究は、現在の価値観では学問的とはいえないのかもしれない。しかし彼らの考え方は、当時はもちろん、ひいては後代の「ケルト」観に多大な影響を及ぼしている。

## 2 20世紀における「ケルト」の展開

### 2-1) 20世紀前半の「ケルト」—民族主義の気風のなかで—

20世紀初頭、グスタフ・コッシーナ (Gustaf Kossina) やゴードン・チャイルド (Gordon Childe) によって、「文化グループ (Cultural Group)」理論が提唱された。これは、ひとつの物質文化を「ひとつの民族のもの」として捉え、物質文化の広がりによって民族の移動や侵略を説明するものであった。19世紀におけるデシユレットの、土葬を「ケルト人」、火葬を「ゲルマン人」の文化だと固く結びつける方法と同様のことである。これは「ケルト」においても当てはめられた。「ラ・テーヌ文化」が「ケルト」と固く結ばれ、その文化の広範な広がりこそ、「ケルト人の大移動」を証明するものであると信じられた。とくにブリテン島におけるラ・テーヌ様式の鉄器文化の遺物の存在は、この地に大陸の「ケルト」、すなわちベルガエ人が移住したことをしめすものであると解釈された。以降、「“島のケルト”否定論」が噴出するまで、「ケルト人のブリテン島移住」説は、少しの批判を受けることもなかった。おもに貨幣研究の視点から、「島のケルト」は研究されていった。貨幣研究者デレック・アレン (Derek F. Allen) などによって、ベルガエ人の王の名が刻まれた貨幣がブリテン島でも出土しているという事実から、移住説は補強され、支持された<sup>19</sup>。またアイルランドでは、1920年代にキリスト教文学や法などの文書を用いた中世史研究が本格化し、修道院文学にも目が向けられるようになった。これらには先の時代の「ケルト」の影響が強く残っていると信じられていた。1922年の独立前後の気風のなかで、「民族の誇り」として「ケルト」は研究の対象となった。法制史家のダニエル・ビンチー (Daniel A. Binchey) が編纂した *Corpus Iuris Hibernici* は、古・中世アイルランド世俗法の集成であり、初期アイルランドの歴史の一端をあきらかにすることに貢献したほか、それらの法律のなかにはキリスト教以前の慣習—ビンチーはそれを「ケルト」ととらえた—が変わらず残されていると述べたのである。

戦争は、古代史研究にも大きな影を落とす。とくにドイツでのそれは著しいもので、ナチの台頭により、はからずも人種主義的な側面をはらむこととなった。ナチの思想に同調した研究者も少なからずいたが、背いた者もいた。第1部3章においても述べたゲルハルト・ベルスのほか、パウル・ヤーコプスタール (Paul Jacobstal) もドイツを去り、1944年、ケルト美術史学における大著 *Early Celtic Art* をイギリスにて上梓した<sup>20</sup>。

## 2-2) 20世紀後半の「ケルト」—「ケルト」概念のゆらぎのはじまり—

戦争が終わり、ポスト帝国主義の流れのなかで、戦前の「ケルト」研究への批判的視点が、徐々にあらわれるようになった。まず1960年代、イギリス考古学界において、それまで定説であった「ベルガエ人のブリテン島移住説」への批判が起こりはじめた。しかし、当時の批判する学者たちは、もし人の移住がなかったのであれば、なぜ大陸とおなじ物質文化—すなわち、ラ・テーヌ文化の遺物—がブリテン島南東部に存在しているのか、という疑問への回答を出すことができなかった。この点については、文化だけが交易などの理由で伝播したとも推定されるが、断言はできない。

アイルランドでも、1970年代以降、従来の中世キリスト教文学研究の見直しが始まり、中世アイルランド文学を「ケルトの遺産」とすることへの批判がおこった。ビンチーなどの主張は今や否定されている。田中美穂氏は、研究におけるこの方向転換を、「独立達成から半世紀を経て、苦い歴史体験にもとづく国民感情が克服され、冷静に客観的に自国の過去の歴史や文化が研究されるようになったといえる」と述べる<sup>21</sup>。

もはや過去とは違い、「ケルト」が島嶼の古代の根幹を成すものであるという説には、つねに疑問や不信がつきまとうようになりつつあった。そのようななかで叫ばれたのが「“島のケルト” 否定論」だ。それまでの安易な「ケルト」との結びつけが否定されるようになり、大陸からの「移住」がなかったということがきっぱりと断言された。近年のイギリスの考古学者たちは、ヘルメット（図83）などの遺物が、無批判に「ケルト」の遺物とされてきたことを反省する。とりわけ、ジョン・コリスやサイモン・ジェームス（Simon James）などの代表的な「ケルト否定論者」は、「ケルト」などという統一的な文化集団は存在しない、それどころか、「ケルト」は近代の捏造であると言いつつ切っているのである。しかし、彼らの批判の裏には、EU発足前夜のヨーロッパにおいて、「ヨーロッパ統合の象徴」として、政治プロパガンダ的に「ケルト」が使われるようになったことへの反発があったのではないかと、南川高志氏は述べる<sup>22</sup>。折しも1991年、ベネチアで「ケルト人」をテーマとした大規模な展覧会が開催された。そこでは、キリスト教とならぶもうひとつの「ヨーロッパの礎」として「ケルト人」を紹介する主旨があり、それはベルリンの壁崩壊後のヨーロッパにおける「団結」の気風を反映するものであった。このような気風への反発が「ケルト否定論」だったのである。

コリスやジェームスの唱える「ケルト否定論」は、イギリス国内でも全体に受け入れられたわけではなく、ある意味で彼らは「過激派」であった。彼らに真っ向から対立したのが、オーストラリアのケルト美術史家のヴィンセントとルース・ミゴ夫妻（Vincent J. S. Megaw, Ruth Megaw）である。彼らは「ケルト」を「汎ヨーロッパ的・統一的な文化集団」として見る研究者で、雑誌 *Antiquity* においてコ



リスと「ケルト」をめぐる議論を交わしたことで知られる<sup>23</sup>。しかしミゴー夫妻の功罪は彼らの思想自体ではなく、「ケルト」の問題を歴史学以外の場所へ引きずり出してしまったことである。すなわち、論争のなかで、夫妻は「イギリスにおけるケルトの否定は、マイノリティの否定にほかならない<sup>24</sup>」と述べたのだ。マイノリティという、きわめてデリケートな範囲に及んでしまった「ケルト」概念をめぐる議論は、この論争以降ほとんどされなくなってしまった。



図 83：テムズ川出土の兜 [出典：Miranda J. Green, *The Celtic Art*, p. 102.]

### 2-3) 「ケルトブーム」と日本の「ケルト」

ところで、学問上での批判的な視点の芽生えとは対照的に、一般民衆の世界では「ケルト」がますます礼賛されることになる。ポップカルチャーとしての「ケルト」の流行である。まずフランスでは、ルネ・ゴシニ（René Goscinny）とアルベル・ユデルゾ（Albert Uderzo）による漫画『アステリックス *Astérix*』がその代表といえる。ウェルキングトリクスをあきらかにモデルとしている主人公・アステリックスとその仲間たちが、ローマ軍の鼻を明かして活躍するこの漫画には、18世紀以来の「偉大なガリア」のイメージがふんだんに込められている。1970年代のフランスでは、「ケルト」が「文明に対抗するもの」として若者に受け入れられた<sup>25</sup>。

1980年代の第2次ケルトブームでは、エンヤを筆頭としたアイリッシュミュージックなどを礼賛する動きがあった。それは「ファンタジーなもの」としてのケルトへの憧憬であり、トゥアハ・デ・ダナーンの物語群、『ケルズの書』などの中世アイルランド文学・キリスト教美術研究からの影響が大きい。日本で「ケルト」が注目されはじめたのもこのころだ。『ケルト／装飾的思考』の著者である鶴岡真弓氏は、日本における「ケルト」研究のパイオニアであり大家である。彼女の著書は、アイルランドを中心に、それらの地域を「島のケルト」として躊躇うことなく

扱う。ブリテン、アイルランドの遺物を「ケルトの生き残り」として褒めそやし、アイルランドを「ケルト」と見なし、果てはユーラシア大陸の「西の端」と

日本列島「東の端」の島国の民に文化的な類似性を見出そうとしている。氏の「ケルト」観はミゴ夫妻のそれに近く、日本における「ケルト」研究の支配的な見方といえる。鶴岡氏とは対照的に、アイルランド中世史研究者の田中美穂氏は、近年のヨーロッパでの議論を取り入れて「島のケルト」へ批判的な視点を向けており、鶴岡氏への批判もおこなっている<sup>26</sup>。また田中氏は、アイルランドにおける分子遺伝学の研究を題材に「島のケルト」論にも取り組んだ<sup>27</sup>。それによれば、分子遺伝学的にはアイルランド人のルーツがスペインにあることがあきらかとなっているが、それが「ケルト」の移住をしめすものであるかとか、それらの人々がいつアイルランドへやってきたのかなどについては共通の見解が出ておらず、さらに「ケルト」概念についても、はっきりとしたことが言える状況にはないのがアイルランドの現状であるという<sup>28</sup>。

ともかく、ヨーロッパの最新の研究動向を取り入れ、批判的な「ケルト」研究をおこなっているのは田中氏がほとんど唯一であろう。日本ではおおむね、見直しの必要のある「ケルト概念」を無批判に使用している現状である。それゆえに、通俗的なものに過ぎないといえよう。

## おわりに

本補論では、本稿の土台である「ケルト」概念そのものについてと、現在の「ケルト」概念が形成されるまでを概観した。「ケルト」のあいまいさは、おのおのの時代、おのおのの国での政治的な風潮を色濃く受け、明白な矛盾や齟齬を抱えたまま、ひとまとめにされた結果であるといえるだろう。図 84 はコリスによるもので、現在「ケルト」として含まれる事柄を記したものである。

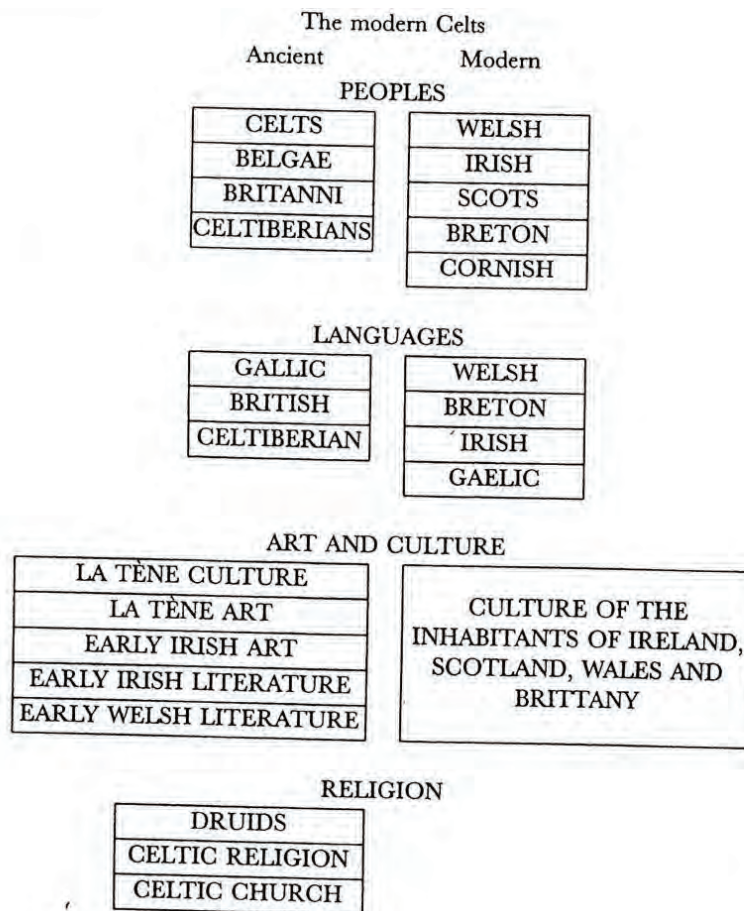


図 84：「ケルト」概念が含むもの [出典：Collis, “Origin and Spread of the Celts”, Fig.10.]

「ケルト」は、まず「人々」「言語」「芸術と文化」そして「宗教」に分かれ、最初の3項目はそのなかでさらに「古代」と「近代」に二分される。これらの、さまざまなファクターのほとんどが相互のつながりを学問的に証明されないまま、「ケルト」にカテゴライズされているのである。

例として、ここでは「言語」について考えてみよう。

まず「古代ケルト語」は、文献に残る「ケルトイ」を含む多くの人々（部族）が話していた言語の総称——ガリア語、ブリテン語、ケルティベリア語——である。いっぽう、「近代ケルト語」は、17世紀の民族起源論の高揚のなかで、「ゴメル（とその子孫）＝ヨーロッパ最初の民族」の物語の正統な末裔とされた言語——ウェールズ語、ブルトン語——、および、それと音韻的に類似する言語——アイルランド語、ゲール語、コーンウォール語——を指す。この2種類には、直接的な関係性の明示はなく、もちろん無関係である可能性もある。しかし、現在の「“ケルト”概念」では、これらが一直線につながるものであるとみなして論考が進められるのである。古代の遺物を、近代の解釈に当てはめて考えるということが、「ケルト」というものをますます茫洋としたものにしていくように感じられる。

最後に、筆者の考える「ケルト」の定義について述べておきたい。「ケルト」とは、ヨーロッパ地域における、ローマ支配以前に居住した「複数の」民族の総称に過ぎないのではないだろうか。もしかしたら、「ケルト」という言葉は不適切でさえあるかもしれないのであり、今後の研究の進展により、別の呼び名があたえられる可能性すらある。そして、複数の集団の総称なのだから、個々の文化の差があるのは当然のことであり、その差が表出するのが、地域ごとでの遺物の差異なのだと考えている。しかし、ラ・テーヌ文化の遺物のように、彼らが似通った文化を共有していたこともまた事実である。それは、オッピドゥムのような物質文化だけでなく、「ケルト」の3大神—テウタテス、エスス、タラニス—をふくむ宗教観など、精神的な面においても同様である。そのことを考慮しつつ、おのおのの集団、あるいは部族の社会を個別にみることによって、比較的現実味のある、要は地に足のついた「ケルト」像の描出が可能なのではないだろうか。それが、本稿で試みた「ケルトの地域性」を見ることの重要性につながるのではないだろうか。地中海世界の外の多様な社会のなかで、彼らが自らを、あるいは近隣のよそ者をどのように認識していたのか、彼らのアイデンティティの形成に寄与したものは何かを考察することが、必要になってくるであろう。ローマ支配以前のアルプスの北に住んだ人たちの社会を、「個別の事例」として見ることにより、「ケルト」という包括的な概念のなかでは見ることのできない、「ケルト」と呼ばれた人たちの「幻想的でない」ありようを知ることができるはずである。

---

## 【註】

- <sup>1</sup> 田中美穂, 「研究動向 『島のケルト』再考」, 『史學雑誌』, 111 卷 10 号, 2002 年, 56~78, 57 頁。
- <sup>2</sup> 原聖, 「ケルト概念再考問題」, 京都大学大学院文学研究科 21 世紀 COE プログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」編, 『人文知の新たな総合に向けて第二回報告書 I [歴史篇]』, 2004 年, 291~306, 301 頁。
- <sup>3</sup> 原聖, 「ケルトマニアの系譜-ケルト起源神話に憑かれた人々」, 鎌田東二, 鶴岡真弓編, 『ケルトと日本』, 角川書店, 2000 年, 125~151, 125~126 頁。
- <sup>4</sup> 同上, 128~129 頁。
- <sup>5</sup> ジェフリー・オブ・モンマス (瀬谷幸男訳), 『ブリタニア列王史:アーサー王ロマンス原拠の書』, 南雲堂フェニックス, 2007 年, 11~36 頁。
- <sup>6</sup> 原聖, 「ケルトマニアの系譜」, 136 頁。
- <sup>7</sup> 同上, 146~147 頁。
- <sup>8</sup> Paul Yves Pezron, *The Antiquities of Nations; more particularly of the Celtae or Gauls, taken to be originally the same people as our ancient Britains*, 1703, URL : <http://www.truth1.info/pezron.htm#CONTENTS>
- <sup>9</sup> Nancy Edwards, "Edward Lhuyd and the origins of early medieval Celtic archaeology," in *The Antiquaries Journal*, 87, 2007, pp. 165-196.
- <sup>10</sup> 山内淳, 「フランス ケルト学事始(1)」, 『日本大学芸術学部紀要』, 48, 2008, 105~114, 111 頁。

- 
- <sup>11</sup> 山内淳, 「ケルト学誕生の軌跡 フランスを例として」, 『藝文攷』, 13, 2008年, 135～140, 138頁。
- <sup>12</sup> キリスト教初期の時代、神への信仰を忘れ享樂の限りを尽くすイスの町が、一夜にして海の底に沈む物語。
- <sup>13</sup> 山内敦監訳, 大場静枝他訳, 『バルザス・ブレイス ブルターニュ古謡集』, 彩流社, 2018年, 16～17頁。
- <sup>14</sup> 山内淳, 「フランス ケルト学事始(2)」, 『日本大学芸術学部紀要』, 49, 2009, 119-128, 124頁。
- <sup>15</sup> Michael Dietler, “A Tale of Three Sites: The monumentalization of Celtic oppida and the politics of collective memory and identity,” in *World Archaeology*, 1998, 30:1, pp.72-89, p.75.
- <sup>16</sup> John Collis, “Déchelette's contribution to Iron Age Studies: theory and practice,” in *Anabases*, 9 (2009), pp.239-247, p.243.
- <sup>17</sup> Ingo Wiwjorra, “German archaeology and its relation to nationalism and racism,” in Margarita Díaz-Andreu, and Timothy Champion, *Nationalism and archaeology in Europe*, Westview Press, Boulder, Colorado, 1996, pp. 164-188, p.168.
- <sup>18</sup> 南川高志, 『海のかなたのローマ帝国』, 岩波書店, 2003年, 76頁。
- <sup>19</sup> Derek F. Allen, “Celtic coins from the Romano-British temple at Harlow,” in *The British Numismatic Journal*, 37, 1968, pp.1-6.
- <sup>20</sup> Paul Jacobsthal, *Early Celtic Art*, Clarendon Press, Oxford, 1944 ; Sally Crawford and Katharina Ulmschneider, “Paul Jacobsthal's Early Celtic Art, his anonymous co-author, and National Socialism: new evidence from the archives,” in *Antiquity*, Volume 85, Issue 327, 2011, pp. 129-141.
- <sup>21</sup> 田中美穂, 「研究動向 『島のケルト』再考」, 62～63頁。
- <sup>22</sup> 南川高志, 『海のかなたのローマ帝国』, 81頁。
- <sup>23</sup> Ruth and Vincent Megaw, “The Celts: the first Europeans?,” in *Antiquity*, 66, 250, 1992, pp. 254-260 ; Ruth and Vincent Megaw, “Ancient Celts and modern ethnicity,” in *Antiquity*, 70,267, 1996, pp.175-181 ; John Collis, “Celtic myths,” in *Antiquity*, 71, 271, 1997, pp. 195-201.
- <sup>24</sup> Ruth and Vincent Megaw, “The Celts: the first Europeans?,” p.259.
- <sup>25</sup> 原聖, 「ケルト概念再考問題」, 299頁。
- <sup>26</sup> 田中美穂, 「研究動向 『島のケルト』再考」, 60頁。
- <sup>27</sup> 田中美穂, 「アイルランド人の起源をめぐる諸研究と「ケルト」問題」, 『大分工業高等専門学校紀要』, 第51号, 2014年, 1～6頁。
- <sup>28</sup> 同上, 5頁。



## 終章

本稿では、オッピドゥムの時代のウィンデリキアを例にとり、「ケルト人」とされた人々の信仰のかたちを描写することで、「ケルト」の地域性・多様性に向き合うことを試みた。最後に各章での考察をまとめ、むすびとしたい。

紀元前最後の 200 年間に、ケルト社会を変貌させた「オッピドゥム」は、ケルト社会のゆるやかな発展の終着点として形成された社会であった。オッピドゥム社会の特徴とされてきた「手工業の発展」は、すでに紀元前 3 世紀から進行していたことであって、囲壁に守られたことによる平穏な空間の実現は、それをさらに助長させたのであった。「平民階級の地位の向上」と、「権力者の弱体化」という特殊な状況も、大規模な移動が収束したケルト社会の順当な発展のうえに起こったことであった。そして同時にもたらされた 3 つの文化的変容—土葬から火葬への転換、聖域の建造、そして貨幣製造—は、ケルト社会の人々の精神世界の表現にも変革をもたらしたのである。

オッピドゥム社会の形成と「都市化」は、多少の時代のズレはあれど、「ケルト」とされる中央ヨーロッパ地域とで押し並べて起こったことであった。3 つの階級が生まれ、特別な政体が完成されたガリアや、先住民族の文化が継承され、ほとんど独自の環境を築いていたイベリアのように、各地域の差は著しく大きかったといえよう。本稿では、そのような「ケルト」の、社会的・文化的な多様性に注目し、「信仰」を手掛かりに、ウィンデリキアを例にとって考察をおこなった。

第 2 部第 1 章では、マンヒングのオッピドゥムを中心に、遺構の状況やその配置から推測される信仰のありかたについて論じた。マンヒング、ケルハイム、そしてハイデングラーベンという規模の大きなオッピドゥムにおいては、先の時代の遺物を有効利用して、共同体の人々の連帯を図ろうとしていたことがうかがえた。マンヒングにおける「聖堂」と「火葬墓」は、かつて紀元前 8 世紀から紀元前 6 世紀における、「祖先崇拜の対象」としての巨大墳墓がになった役割を受け継ぎつつ、新しいかたちで表現するものであった。ケルハイムとハイデングラーベンでは、検討事例に違いがあったものの、儀式的な行為が共同体よりも小規模の集団によっておこなわれ、その集団の紐帯を確認するためのものとして機能していたことがわせた。このことは、マンヒングのアルテンフェルト区画に残る「聖堂」様の構造物の存在からも言えるだろう。それらの場所での儀式的行為は、祖先信仰や死者信仰とのかかわりを想起させ、「神との結びつき」よりも現実的で社会的な根底があることが理解できた。

第2章で論じた「方形土塁」は、ドイツ南部や南西部において紀元前2世紀半ばから紀元前1世紀にかけて数多く建造された。これらの建造者は不明ではあるが、それらが何らかの共通した観念に基づいて建造されたことは明白であり、そこでの活動は、宗教的・社会的・政治的、すべての要素を包括するものであった。一部の事例では、あきらかに宗教儀式がおこなわれたであろうことや、英雄信仰や祖先信仰とのつながりが推測されるところもある。けれども、すべての事例がこれらの要素を持っていたわけではなく、その役割は多様であったと考えるべきであろう。それは、ウィンデリキアの「ケルト」が有していた独特の観念、すなわち、「“神聖”と“世俗”とが明確に区別されない」というものを反映していると考えられる。

第3章における植物、動物、そしてヒトをかたどった装飾のある出土物の分析からは、土着の要素と他文化の影響が美しく混じり合っていたことを確認するとともに、その思想の面においても他文化の影響が及んでいた可能性を示唆することができた。《崇拝の木》からは、ディオニュソスへの信仰を基盤としたギリシアの植物観の影響を看取することができ、動物を模した小像からは、のちのガロ・ローマ期の「動物と人間の像」につながる図像表現のかたちと、洗練された技術が表現する原始的な信仰の名残がみられた。動物の描写に対して、《分銅》における人物の描写は極めて簡素であり、「ケルト」世界の「神への視点」を投影していることが理解できた。

第4章では、「埋蔵貨」を中心として、信仰の脈絡におけるケルトの貨幣について考えた。モチーフの分析からは、少なくとも「金貨」には神聖な役割が込められた可能性を見ることができた。金貨のモチーフは、おそらくはそれが鑄造された場所での宗教観や精神世界を反映しうるものだった。そして「埋蔵貨」も、おそらくは簡単な自然信仰の「聖域」の痕跡であって、ケルト社会が「都市」へと変化していくなかで、人々の持っていた自然の神への信仰心が、「貨幣」という新しくもたらされた要素をもちいることで続けられていたことをしめすものだと考えられる。

これらの考察から得られた、ウィンデリキアの「アイデンティティとしての信仰」とは、オッピドゥムの出現と「都市化」を経験しながらも、その精神的な面においては、ハルシュタット期をはじめとした先の時代の伝統を保持した、ある意味

プリミティブで原始的なものだったといえるのではないだろうか。オッピドゥムの時代に新しくもたらされた「土葬から火葬への転換」、「聖域の建造」、そして「貨幣製造」という3つの文化的変容は、ケルト社会の信仰の表現方法にあきらかな変化をもたらした。ウィンデリキアの人々は、いっぽうでは先人の残した遺構を崇拝の対象としたり、自分たちの持つ宗教観を、最新の持物じぶつに表現したりした。「信仰」という精

神的な部分において、ガリアでは影をひそめたハルシュタット期の伝統が強く残り、そのうえに新しい地中海世界の文化が組み入れられ、独特の社会が形成されたのがウィンデリキアであったといえる。外見だけを洗練されたものに変貌させ、斜陽の時代へと突入した。精神的には前時代の素朴さを残した「都市」社会が、ここでは生まれ、発展し、その素朴さゆえにローマに取り込まれることなく消えていったのである。

本稿での議論は、絶対的な資料の乏しさにより、推測に依拠する部分が非常に多い。従来ガリアやブリタニア、そしてアイルランド中心で形成された「ケルト」の枠組みから逸れることによって見えてくる、新しい「ケルト」を提示することを目的としていたが、とくにイコノグラフィーの点において他地域の資料に依拠してしまっていることは否めない。本当の意味での「地域的なケルト」に目を向けることは至難である。しかし、補論で確認した「ケルト」概念の不安定さを鑑みるに、新しい視点から「ケルト」を捉えなおすことは必要になってくるだろう。その新しい視点とは、本稿で試みたような、地域ごとの「ケルト」の姿を見出すことであると筆者は考えている。ある程度、同じ文化は共有しているものの、本質的には異なった集団が「ケルト」なのであり、その個々の差につぶさに目を向け、その差をそのまま他の地域に適用するのではなく、あくまでも比較対象の事例として参考する。このような研究手法がとられてこそ、ローマ支配以前のヨーロッパの実際を知ることができるだろう。今後は、ウィンデリキアの「ケルト」のさらなる理解や、本稿での結論をひとつの比較対象として、他地域の「ケルト」とのすり合わせをおこなっていくことを課題としたい。

## 【参考文献一覧】

### ○古典資料○

- ・アテナイオス（柳沼重剛訳），『食卓の賢人たち』，京都大学学術出版会，1998年。
- ・エウリピデス（逸身喜一郎訳），『バツカイ：バツコスに憑かれた女たち』，岩波書店，2013年。
- ・カエサル（高橋宏幸訳），『カエサル戦記集 ガリア戦記』，岩波書店，2015年。
- ・ストラボン（飯尾都人訳），『ギリシア・ローマ世界地誌』，龍溪書舎，1994年。
- ・トログス，ポンペイウス（合阪學訳），『ユニアヌス・ユスティヌス抄録 地中海世界史』，京都大学学術出版会，1998年。
- ・プトレマイオス，クラウディウス（織田武雄監修，中務哲郎訳），『プトレマイオス地理学』，東海大学出版会，1986年。
- ・プリニウス（中野定雄他訳），『プリニウスの博物誌』雄山閣，1986年。
- ・ヘロドトス（松平千秋訳），『歴史（上）』，岩波書店，1971，1977年。
- ・ポリュビオス（城江良和訳），『歴史』，京都大学学術出版会，2004年。
- ・リウイウス（毛利晶訳）『ローマ建国以来の歴史』，京都大学学術出版会，2008年。
- ・Ammianus Marcellinus（trans. Rolfe John C.），*The surviving books of the history: rerum gestarum libri quae supersunt 1-3*，Heinemann, London, 1958-1963, rep. 1982.
- ・Lucan（trans. Duff Duff, James），*The civil war (Pharsalia)*，William Heinemann LTD, London, 1925, rep. 1988.

### ○日本語文献、論文○

- ・ド・ラ・ヴィルマルケ，テオドール，エルサール（山内敦監訳，大場静枝他訳），『バルザス・ブレイス ブルターニュ古謡集』，彩流社，2018年。
- ・オラハリー，コルマーン，（フューシャ訳），『トーイン クアルングの牛捕りとクーフリンの物語』，奈良書店，2014年。
- ・カーソン，キアラン（栩木伸明訳），『トーイン クアルングの牛捕り』，東京創元社，2011年。
- ・グリーン，ミランダ，J.（市川裕見子訳），『ケルトの神話』，丸善ブックス，1997年。
- ・グリーン，ミランダ，J.（井村君江，大出健訳），『図説ドルイド』，東京書籍，2000年。
- ・ジャンメール，アンリ（小林真紀子，福田素子，松村一男，前田寿彦訳），『ディオニュソース バツコス崇拜の歴史』，（言叢社，1991年）。
- ・タルバート，リチャード・J. A.編（野中夏実，小田謙爾訳），『ギリシア・ローマ歴史地図』，原書房，1996年。

- ・ディレイニー, フランク (森野 聡子訳)、『ケルト—生きている神話』、創元社、1999年。
- ・パウエル, トーマス G. E. (笹田公明訳)、『ケルト人の世界』、東京書籍、1990年。
- ・バーネット, アンドリュー (小山修三監修, 新井佑造訳)、『コインの考古学 (大英博物館双書⑥)』、学芸書林、1998年。
- ・バハオーフェン, ヨハン, ヤーコプ (平田公夫, 吉原達也訳)、『古代墳墓象徴試論』、(作品社、2004年)。
- ・バンヴェニスト, エミール (蔵持不三也他訳)、『インド・ヨーロッパ諸制度語彙集Ⅱ 王権・法・宗教』、言叢社、1987年。
- ・ピゴット, スチュアート (鶴岡真弓訳)、『ケルトの賢者「ドルイド」：語りつがれる「知」』、講談社、2000年。
- ・フレイザー, ジェイムズ, ジョージ (吉川信訳)、『初版 金枝篇 (上下)』、(筑摩書房、2003年、2014年)。
- ・ヘイウッド, ジョン (井村君江監訳, 倉嶋雅人訳)、『ケルト歴史地図』、東京書籍、2003年。
- ・マイヤー, ベルンハルト (鶴岡真弓監修, 平島直一郎訳)、『ケルト事典』、創元社、2001年 (第2刷、2006年)。
- ・マクファーソン, ジェームズ (中村徳三郎訳)、『オシアン-ケルト民族の古歌』、岩波文庫、1971年。
- ・マルカル, ジャン (金光任三郎, 渡邊浩司訳)、『ケルト文化事典』、大修館書店、1999年。
- ・モース, マルセル (有地亨訳)、『贈与論』勁草書房、2008年、26-30頁。
- ・オブ・モンマス, ジェフリー (瀬谷幸男訳)、『ブリタニア列王史:アーサー王ロマンス原拠の書』、南雲堂フェニックス、2007年。
- ・ラッチェ, アネッテ (大森寿美子訳)、『エトルリア文明 700年の歴史と文化』、遊タイム出版、2001年。
- ・ラング, ロイド&ジェニファー (鶴岡真弓訳)、『ケルトの芸術と文明』、創元社、2008年。
- ・レンフルー, コリン (橋本楨矩訳)、『ことばの考古学』、青土社、1993年。
- ・相京邦宏、「ケルトとローマの文化的融合とその限界-ミラノ碑文の分析を中心に-」、『社会文化史学』、27号、1991年、1~16頁。
- ・井村君江、「ケルト民族の Fairyland 観」、『鶴見大学紀要 第2部 外国語・外国文学編』、18号、1981年、27~52頁。
- ・井村君江、「ケルト神話の宇宙観-ドルイドを中心にして」、鎌田東二・鶴岡真弓編、『ケルトと日本』、角川書店、2000年、28~64頁。



- ・北村 一親, 「ケルト語の特異性」, 『岩手大学人文社会科学部』, 50, 1992 年, 1-16 頁。
- ・木村正俊 『ケルト人の歴史と文化』, 原書房, 2012 年。
- ・狐野利久, 「ヨーロッパ文化の底流にあるもの--ケルトの残照を求めて--」, 『札幌大谷短期大学紀要』, 33, 2002 年, 53-86 頁。
- ・田中美穂, 「『島のケルト』再考」, 『史學雑誌』, 111 卷 10 号, 2002 年, 56-78 頁。
- ・田中美穂, 「アイルランド人の起源をめぐる諸研究と「ケルト」問題」, 『大分工業高等専門学校紀要』, 第 51 号, 2014 年, 1~6 頁。
- ・鶴岡真弓, 『ケルト／装飾的思考』, 筑摩書房, 1989 年。
- ・鶴岡真弓, 「反人像主義(アンスロポモルフィズム)—ケルト美術の枠組—」, 『史潮』, 37, 1995 年, 2~18 頁。
- ・鶴岡真弓, 『ケルト美術』, 筑摩書房, 2001 年。
- ・鶴岡真弓, 「インド=ヨーロッパ語と神話に再建される『祭司王』の概念」, 初期王権研究委員会編, 『古代王権の誕生 IV ヨーロッパ編』, 角川書店, 2003 年, 255~265 頁。
- ・原聖, 「ケルトマニアの系譜-ケルト起源神話に憑かれた人々」, 鎌田東二, 鶴岡真弓編『ケルトと日本』, 角川書店, 2000 年, 125-151 頁。
- ・原聖, 「ケルト概念再考問題」, 京都大学大学院文学研究科 21 世紀 COE プログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」編『人文知の新たな総合に向けて第二回報告書 I〔歴史篇〕』, 2004 年, 291-306 頁。
- ・原聖, 『興亡の世界史 07 ケルトの水脈』, 講談社, 2007 年。
- ・疋田隆康, 「古代ガリア社会におけるケルトの伝統-ガロ=ローマ文化の形成」『史林』86 卷 4 号, 2003 年, 535~566 頁。
- ・疋田隆康, 「古代ケルト社会の『祭司と剣』—ガリア、イベリア、ブリタニアー」, 初期王権研究委員会編『古代王権の誕生 IV ヨーロッパ編』, 角川書店, 2003 年, 296~315 頁。
- ・疋田隆康, 「古代イベリア半島のケルト・アイデンティティ」, 『西洋古代史研究』第 7 号, 2007 年, 1~15 頁。
- ・三浦弘万, 「ヨーロッパ基層文化の生成と発達-ケルトの人びととその文化に焦点を合わせて-」, 『創価大学人文論集』, 18 号, 2006 年, 1~72 頁。
- ・南川高志, 『海のかなたのローマ帝国—古代ローマとブリテン島』, 岩波書店, 2003 年。
- ・八住利雄編, 『イギリスの神話伝説-アイルランドの神話伝説〔I〕』, 名著普及会, 1987 年。
- ・山内淳, 「ケルト学誕生の軌跡 フランスを例として」, 『藝文攷』, 13, 2008 年, 135~140 頁。

・山内淳, 「フランス ケルト学事始(1)」, 『日本大学芸術学部紀要』, 48, 2008 年, 105～114 頁。

・山内淳, 「フランス ケルト学事始(2)」, 『日本大学芸術学部紀要』, 49, 2009, 119～128 頁。

### ○邦語学会報告○

・鈴木慎也, 「小アジアのケルト人—ガラティアの物質文化に関する一考察—」, 日本西洋史学会 (2017 年, 於: 一橋大学)。

### ○外国語文献・論文○

・Abels, Björn-Uwe, Overbeck, Bernhard, „Ein Schatzfund keltischer Münzen aus Neuses, Gemeinde Eggolsheim, Landkreis Forchheim, Oberfranken,“ in *AJB*, 1981, S.126-127.

・Ade, Dorothee, et. al., *Der Heidengraben - ein keltisches Oppidum auf der Schwäbischen Alb* (Führer zu archäologischen Denkmälern in Baden-Württemberg ; Bd. 27), Theiss, Stuttgart, 2013.

・Alcock, Joan P., *Daily life of the pagan Celts*, Greenwood, Oxford, 2009.

・Allen, Derek F., “Celtic coins from the Romano-British temple at Harlow, Essex,” in *The British Numismatic Journal*, 33, 1964, pp.1-6.

・Allen, Derek F., *Catalogue of the Celtic coins in the British Museum: with supplementary material from other British collections* (Vol. 1, 2, 3), Trustees of the British Museum by British Museum Publications, London, 1987-1995.

・Allen, Derek. F., “Wealth, money and coinage in a Celtic society,” in Megaw, John Vincent Stanley, Piggott, Stuart, *To illustrate the monuments. Essays on archaeology presented to Stuart Piggott on the occasion of his sixty-fifth birthday*, Thames and Hudson, London, 1976, pp. 199-208.

・Allen, George H., “Excavations on the site of the ancient town of Alesia,” in *The Classical Weekly*, vol. 28, no. 22, 1935, pp. 169-176.

・Almargo-Gorbea, Martín, “The Celts of the Iberian Peninsula,” in Kruta, Venceslas et. al. (eds.), *The Celts*, Gruppo Editoriale Fabbri, Bompiani, Sonzogno, Etas S.p.A., Milan, 1991 (rep. Rizzoli International Publications, New York, 1999), pp.394-419.

・Álvarez-Sanchís, Jesús R., “Oppida and Celtic society in western Spain,” in *Journal of Interdisciplinary Celtic Studies volume 6: The Celts in Iberian Peninsula*, 2005, 28, pp.255-285.

・Ambs, Richard, „Erste Ergebnisse der Grabungen in der Viereckschanze von Beuren, Gemeinde Pfaffenhofen a.d. Roth, Landkreis Neu-Ulm, Schwaben,“ in *AJB*, 1998, S.62-65.

- Arnold, Bettina, “A Landscape of Ancestors: The Space and Place of Death in Iron Age West-Central Europe,” in *Archeological Papers of the American Anthropological Association*, Volume 11, Issue 1, January 2002, pp.129–143.
- Arnold, Bettina, “The material culture of social structure: rank and status in early Iron Age Europe,” in in Arnold, Bettina and Gibson, D. Blair, *Celtic chieftdom, Celtic state: The evolution of complex social systems in prehistoric Europe*, Cambridge University Press, Cambridge, 1995, pp.43-52.
- Arnold, Bettina, “‘Drinking the feast’ : Alcohol and the legitimation of power in Celtic Europe,” in *Cambridge Archaeological Journal*, 9,1, 1999, pp.71-93.
- Audouze, Françoise and Büchschütz, Olivier, (trans. Henry Cleere), *Towns, villages, and countryside of Celtic Europe: from the beginning of the second millennium to the end of the first century BC*, BCA, London, 1991.
- Bachmann, Hans-Gert et. al., “New aspects of Celtic gold coinage production in Europe,” in *Gold Bulletin*, 32(1), 1999, pp.24-29.
- Bell, Martin, “People and nature in the Celtic world,” in Green, Miranda J. (ed.), *The Celtic world*, Routledge, London, 1995, pp.145-158.
- Berghausen, Karin and Fassbinder, Jorg W. E., “Magnetometry and soil magnetism on Celtic square enclosures in Bavaria, Southern Germany,” in *ArchéoSciences*, 2009/1, no. 33, pp.27-29.
- Biel, Jörg, “The Celtic princes of Hohenasperg (Baden-Württemberg),” in Kruta, Venceslas, et.al. (eds.), *The Celts*, Gruppo Editoriale Fabbri, Bompiani, Sonzogno, Etas S.p.A., Milan, 1991 (rep. Rizzoli International Publications, New York, 1999), pp.123-131.
- Biel, Jörg, „Eberdingen-Hochdorf, Kr. Ludwigsburg, Baden-Württemberg,” in *Brathair*, 6 (1), 2006, pp.3-9.
- Birzier, Stefanie, et. al., „Ausgrabung 1997 am zweiten Wall auf dem Kelheimer Michelsberg,“ in Rind, Michael M. (Hrsg.), *Geschichte ans licht gebracht* (Archäologie im Landkreis Kelheim Band 3, 1997-1999), Verlag Dr. Faustus, Büchenbach, 2000, S.99-105.
- Bittel, Kurt, Kimmig, Wolfgang, Schiek, Siegwalt (Hrsg.), *Die Kelten in Baden-Württemberg*, Konrad Theiss Verlag, Stuttgart, 1981.
- Boessneck, Joachim et. al., *Die Tierknochenfunde aus dem Oppidum von Manching* (Die Ausgrabungen in Manching Bd. 6), Franz Steiner Verlag, 1971.
- Bökönyi, Sandor, “Agriculture: Animal Husbandry,” in Kruta, Venceslas, et.al. (eds.), *The Celts*, Gruppo Editoriale Fabbri, Bompiani, Sonzogno, Etas S.p.A., Milan, 1991 (rep. Rizzoli International Publications, New York, 1999), pp.444-459.
- Bott, R.D. et. al., “The oppidum of Manching,” in *Naturwissenschaften*, 81, 1994, pp.560-562.

- Bradley, Richard, "A Life Less Ordinary the Ritualization of the domestic sphere in later prehistoric Europe," in *Cambridge Archaeological Journal*, 2003, 13:1, pp.5-23.
- Brun, Patrice, "From chiefdom to state organization in Celtic Europe," in Arnold, Bettina and Gibson, D. Blair, *Celtic chiefdom, Celtic state: The evolution of complex social systems in prehistoric Europe*, Cambridge University Press, Cambridge, 1995, pp.13-25.
- Brunaux, Jean-Louis (trans. Daphne Nash), *The Celtic Gauls: gods, rites and sanctuaries*, Seaby, London, 1988.
- Büchsenschütz, Olivier, "The significance of major settlements in European Iron Age society," in Arnold, Bettina and Gibson, D. Blair (eds.), *Celtic chiefdom, Celtic state: the evolution of complex social systems in prehistoric Europe*, Cambridge University Press, Cambridge, 1995, pp.53-63.
- Büchsenschütz, Olivier, "Celts in France," in Green, Miranda J. (ed.), *The Celtic world*, Routledge, London, 1995, pp. 552-580.
- Chappy, Jean-Jacques, "The Champagne Region under Celtic Rule during the Fourth and Third Centuries B. C.," in Kruta, Venceslas, et.al. (eds.), *The Celts*, Gruppo Editoriale Fabbri, Bompiani, Sonzogno, Etas S.p.A., Milan, 1991 (rep. Rizzoli International Publications, New York, 1999), pp.265-274.
- Čižmář, Miloš, "The Celtic population of Moravia in the fourth century B. C.," in Kruta, Venceslas et. al. (eds.), *The Celts*, Gruppo Editoriale Fabbri, Bompiani, Sonzogno, Etas S.p.A., Milan, 1991 (rep. Rizzoli International Publications, New York, 1999), pp. 297-301.
- Collis John, "States without centers?: the middle La Tène period in temperate Europe," in Arnold, Bettina and Gibson, D. Blair (eds.), *Celtic chiefdom, Celtic state: the evolution of complex social systems in prehistoric Europe*, Cambridge University Press, Cambridge, 1995, pp.75-80.
- Collis, John, "Celtic myths," in *Antiquity*, 71, 271, 1997, pp. 195-201.
- Collis, John, "Déchelette's contribution to Iron Age Studies: theory and practice," in *Anabases*, 9, 2009, pp.239-247.
- Collis, John, "The first towns," in Green, Miranda J. (ed.), *The Celtic world*, Routledge, London, 1995, pp.159-175.
- Collis, John, "The origin and spread of the Celts," in *Studia Celtica*, 30, 1996, pp. 17-34.
- Cunliffe, Barry, *The Celtic world*, BCA, New York, 1986.
- Crawford, Sally and Ulmschneider, Katharina, "Paul Jacobsthal's Early Celtic Art, his anonymous co-author, and National Socialism: new evidence from the archives," in *Antiquity*, Volume 85, Issue 327, 2011, pp. 129-141.
- Crumley, Carole L., "Building an historical ecology of Gaulish polities," in Arnold, Bettina and Gibson, D. Blair (eds.), *Celtic chiefdom, Celtic state: the evolution of complex social systems in prehistoric Europe*, Cambridge University Press, Cambridge, 1995, pp. 26-33.

- Dehn, Wolfgang „Die Heuneburg an der oberen Donau und ihre Wehranlagen,“ in Deutsches Archäologisches Institut Römisch-Germanische Kommission (Hrsg.), *Neue Ausgrabungen in Deutschland*, Mann, Berlin, 1958, S. 127-145.
- Dietler, Michael, “A Tale of Three Sites: The monumentalization of Celtic oppida and the politics of collective memory and identity,” in *World Archaeology*, 30:1, 1998, pp.72-89.
- Dobesch, Gebhard, “Ancient Literary Sources,” in Kruta, Venceslas et. al. (eds.), *The Celts*, Gruppo Editoriale Fabbri, Bompiani, Sonzogno, Etas S.p.A., Milan, 1991 (rep. Rizzoli International Publications, New York, 1999), pp.30-38."
- Driesch, Andrea v. d., Peters, Joris, und Stork, Marlies, „7000 Jahre Nutztierhaltung in Bayern,“ in Stork, Marlies, Peters, Joris (Hrsg.), *Bauern in Bayern : Von den Anfängen bis zur Römerzeit. Straubing, Gäubodenmuseum, 4. Juni - 1. Nov. 1992*, Straubing, 1992, S. 157-190.
- Dunham, Sean B., “Caesar’s perception of Gallic social structures,” in Arnold, Bettina and Gibson, D. Blair (eds.), *Celtic chieftdom, Celtic state: the evolution of complex social systems in prehistoric Europe*, Cambridge University Press, Cambridge, 1995, pp.110-115.
- Edwards, Nancy, “Edward Lhuyd and the origins of early medieval Celtic archaeology,” in *The Antiquaries Journal*, 87, 2007, pp. 165-196.
- Evans, Christopher, “Archaeology and modern times: Bersu’s Woodbury 1938&1939,” in *Antiquity*, 63, 240, 1989, pp. 436-450.
- Fernández Götz, Manuel Alberto, “Reassessing the Oppida : the Role of Power and Religion,” in *Oxford journal of archaeology*, 33 (2014), Fasc.4, pp.379-394.
- Fischer, Franz (trans. Bettina Arnold), “The early Celts of west central Europe: the semantics of social structure,” in Arnold, Bettina and Gibson, D. Blair (eds.), *Celtic chieftdom, Celtic state: the evolution of complex social systems in prehistoric Europe*, Cambridge University Press, Cambridge, 1995, pp. 34-40.
- Fischer, Thomas, Rieckhoff-Pauli, Sabine, Spindler, Konrad, „Grabungen in der spätkeltischen Siedlung im Sulzthal bei Berching-Pollanten, Landkreis Neumarkt, Oberpfalz,“ in *Germania*, 62, 1984, S. 311-372.
- Fischer, Thomas et. al., „Der keltische Münzschatz von Wallersdorf,“ in *AJB*, 1988, S. 87-89.
- Fischer, Thomas, Brandt, Michael, „Ein Hortfund spätkeltischer Goldmünzen aus Hohenfels,“ in *AJB* 1987, 1988, S.89-90.
- Förster, Otto, Nägele, Gerhard, Spiegelvogel, Gernot, *Das Gold der Kelten: Ein historisches Abenteuer*, Deutsche Verlags-Anstalt, Stuttgart, 1997.
- Frankenstein, Susan, Rowlands, M. J., “The internal structure and regional context of Early Iron Age society in south-western Germany”, in Stifter, David and Karl, Raimund (eds.), *The*



*Celtic world : Critical concepts in historical studies. 2. Celtic archaeology*, Routledge, London/New York, 2007, pp. 71-116.

- Frey, Otto Hermann, "'Celtic princes' in the six century B.C.," in Kruta, Venceslas, et.al. (eds.), *The Celts*, Gruppo Editoriale Fabbri, Bompiani, Sonzogno, Etas S.p.A., Milan, 1991 (rep. Rizzoli International Publications, New York, 1999), pp.80-102
- Gavrilovic, Nadezda, "Relief of Epona from Viminacium- Certain considerations about the cult of Epona in Central Balkans," in Wolfgang Spickermann (Hrsg.) in Verbindung mit Leif Scheuermann, *Keltische Götternamen Als individuelle Option?* (Akten des 11. internationalen Workshops "Fontes Epigraphici Religionum CelticarumAntiquarum" vom 19.-21. Mai 2011 an der Universität Erfurt), Rahden/Westf. : Leidorf, 2013, pp.253-263.
- Gebhard, Rupert et. al., "Ceramics from the Celtic Oppidum of Manching and its influence in Central Europe," in *Hyperfine Interactions*, 154, 2004, pp.199-214.
- Gebhard, Rupert, "The "Celtic" oppidum of Manching and its exchange system," in *Different Iron Ages: Studies on the Iron Age in Temperate Europe*, Tempus Reparatum, Oxford, 1995, pp.111-120.
- Geyer, Laura, *Manching und die keltische Oppidakultur*, Grin, 2011.
- Gibson, D. Blair, "Chieftoms, confederacies, and statehood in early Ireland," in Arnold, Bettina and Gibson, D. Blair (eds.), *Celtic chieftdom, Celtic state: the evolution of complex social systems in prehistoric Europe*, Cambridge University Press, Cambridge, 1995, pp.116-128.
- Green, Miranda J., *Animals in Celtic Life and Myth*, Routledge, London, 2002.
- Green, Miranda J., *Celtic art. Reading the messages*, London : Weidenfeld and Nicolson, 1996.
- Green, Miranda J., *The Gods of the Celts*, A. Sutton, Gloucester, 1986.
- Green, Miranda J., *The Sun-Gods of ancient Europe*, B.T. Batsford, London, 1991.
- Gschlössl, Ronald, *Im Schmelztiegel der Religionen: Göttertausch bei Kelten, Roemern und Germanen*, Verlag Philipp von Zabern, Mainz am Rhein, 2006.
- Haffner, Alfred, „Allgemeine Übersicht,“ in Alfred Haffner, Sibylle Bauer et. al. (Hrsg.), *Heiligtümer und Opferkulte der Kelten*, Theiss, Stuttgart, 1995, S.9-42.
- Haselgrove, Colin, "Iron Age coin-finds from religious sites and contexts in N Gaul," in Ralph Häussler, Anthony C. King (eds.), *Continuity and innovation in religion in the Roman West: 2* (Journal of Roman Archaeology, Supplementary Series ; 67,2), Society for the Promotion of Roman Studies, Portsmouth, 2008, pp. 7-23.
- Haselgrove, Colin, "Late Iron Age society in Britain and north-west Europe: structural transformation or superficial change?," in Arnold, Bettina and Gibson, D. Blair (eds.), *Celtic chieftdom, Celtic state: the evolution of complex social systems in prehistoric Europe*, Cambridge University Press, Cambridge, 1995, pp.81-87.

- Hatt, Jean-Jacques, „Die keltische Götterwelt und ihre bildliche Darstellung in vorrömischer Zeit,“ in Pauli, Ludwig, Bonnamour, Louis et. al. (Hrsg.), *Die Kelten in Mitteleuropa: Kultur, Kunst, Wirtschaft: Salzburger Landesausstellung 1. Mai-30. Sept. 1980 im Keltenmuseum Hallein Österreich*, Amt der Salzburger Landesregierung, Kulturabteilung, Salzburg, 1980, S.52-67.
- Hatt, Jean-Jacques, „Eine Interpretation der Bilder und Szenen auf dem Silberkessel von Gundestrup,“ in Pauli, Ludwig, Bonnamour, Louis et. al. (Hrsg.), *Die Kelten in Mitteleuropa: Kultur, Kunst, Wirtschaft: Salzburger Landesausstellung 1. Mai-30. Sept. 1980 im Keltenmuseum Hallein Österreich*, Amt der Salzburger Landesregierung, Kulturabteilung, Salzburg, 1980, S. 68-75.
- Heinz, Sabine, *Celtic Symbols*, Sterling, New York, 2008.
- Herrmann, Fritz-Rudolf, „Grabungen in Oppidum von Kelheim 1964 bis 1972,“ in *Ausgrabungen in Deutschland, gefördert von der Deutschen Forschungsgemeinschaft, 1950-1975, 1. Vorgeschichte. Römerzeit*, Verlag des Römisch-Germanischen Zentralmuseums, Mainz, 1975, S. 298-311.
- Hornblower, Simon, Spawforth, Antony, Eidinow, Esther (eds.), *Oxford Classical Dictionary* (4th ed.), Oxford University Press, 2012.
- Jacobsthal, Paul, *Early Celtic Art*, Clarendon Press, Oxford, 1944.
- Jesse, Wilhelm, „Beiträge zu den Beziehungen zwischen Münzprägung und Kunst I . Die keltische Münzprägung,“ in *Abhandlungen der Braunschweigischen Wissenschaftlichen Gessellschaft*, Bd.2, 1950, S.211-220.
- Joffroy, René, „Das Oppidum Mont Lassois, Gemeinde Vix, Dep. Côte-d’Or,“ in *Germania*, Bd. 32 Nr. 1/2 (1954), S. 59-65.
- Kaenel, Gilbert and Müller, Felix, “The Swiss plateau,“ in Kruta, Venceslas, et.al. (eds.), *The Celts*, Gruppo Editoriale Fabbri, Bompiani, Sonzogno, Etas S.p.A., Milan, 1991 (rep. Rizzoli International Publications, New York, 1999), pp.275-282.
- Kellner, Hans-Jörg, „Neue keltische Fundmünzen aus Berching-Pollanten,“ in *Bayerische Vorgeschichtsblätter*, 54.1989, S. 213-218.
- Kellner, Hans-Jörg, “Coinage,“ in Kruta, Venceslas, et.al. (eds.), *The Celts*, Gruppo Editoriale Fabbri, Bompiani, Sonzogno, Etas S.p.A., Milan, 1991 (rep. Rizzoli International Publications, New York, 1999), pp.475-484.
- Kellner, Hans-Jörg, *Die Münzfunde von Manching und die keltischen Fundmünzen aus Südbayern* (Die Ausgrabungen in Manching Band 12), Steiner Franz Verlag, 1990.
- Kossack, Georg, “Prehistoric archaeology in Germany: its history and current situation,“ in *Norwegian Archaeological Review*, 25, 1992, pp. 73-109.
- Krämer, Werner, „Zwanzig Jahre Ausgrabungen in Manching, 1955 bis 1974,“ in *Ausgrabungen in Deutschland, gefördert von der Deutschen Forschungsgemeinschaft, 1950 -*

1975, 1. Vorgeschichte. Römerzeit, Verlag des Römisch-Germanischen Zentralmuseums, Mainz, 1975, S. 287-297.

• Krämer, Werner, „Die eiserne Roß von Manching: Fragmente einer mittellatènezeitlichen Pferdeplastik,“ in *Germania : Anzeiger der Römisch-Germanischen Kommission des Deutschen Archäologischen Instituts*, 67, 1989, S. 519-539.

• Krämer, Werner, „Keltische Gewichte aus Manching,“ in *Archäologischer Anzeiger: Beiblatt zum Jahrbuch der Deutschen Archäologischen Instituts*, no.1, 1997, S.73-78.

• Krämer, Werner, „The Oppidum of Manching,“ in *Antiquity*, vol.34, no.135, 1960, pp.191-199.

• Krämer, Werner, Schubert, Franz, *1955-1961 Einführung und Fundstellenübersicht* (Die Ausgrabungen in Manching Band.1) , Franz Steiner Verlag GmbH, Wiesbaden, 1970.

• Krämer, Werner, *Die Grabfunde von Manching und die latènezeitlichen Flachgräber in Südbayern* (Die Ausgrabungen in Manching Band.9) , Steiner, Wiesbaden, 1985.

• Krause, Harald et. al., „Nur noch eine Ecke: Rettungsgrabungen in jüngertènezeitlichen Viereckschanze von Wartenberg,“ in *AJB 2016*, 2017, S.66-69.

• Kruta, Venceslas, “The first Celtic expansion: Prehistory to history,“ in Kruta, Venceslas, et.al. (eds.), *The Celts*, Gruppo Editoriale Fabbri, Bompiani, Sonzogno, Etas S.p.A., Milan, 1991 (rep. Rizzoli International Publications, New York, 1999), pp.206-224.

• Kruta, Venceslas, “Celtic Writing,“ in Kruta, Venceslas, et.al. (eds.), *The Celts*, Gruppo Editoriale Fabbri, Bompiani, Sonzogno, Etas S.p.A., Milan, 1991 (rep. Rizzoli International Publications, New York, 1999), pp.516-532.

• Kruta, Venceslas, “Celtic religion,“ in Kruta, Venceslas, et.al. (eds.), *The Celts*, Gruppo Editoriale Fabbri, Bompiani, Sonzogno, Etas S.p.A., Milan, 1991 (rep. Rizzoli International Publications, New York, 1999), pp.533-541.

• Künstler, Hansjörg, “The history of Vegetation,“ in Kruta, Venceslas, et.al. (eds.), *The Celts*, Gruppo Editoriale Fabbri, Bompiani, Sonzogno, Etas S.p.A., Milan, 1991 (rep. Rizzoli International Publications, New York, 1999), pp.440-443.

• Lenerz-de Wilde, Majolie, “The Celts in Spain,“ in Green, Miranda J. (ed.), *The Celtic world*, Routledge, London, 1995, pp.533-551.

• Lorenz, Herbert und Gerdson, Hermann, :*Chorologische Untersuchungen in dem Spätkeltischen Oppidum bei Manching am Beispiel der Grabungsflächen der Jahre 1965-1967 und 1971: Fundstellenübersicht der Grabungsjahre 1961-1974* (Die Ausgrabungen in Manching Band 16), Franz Steiner Verlag Stuttgart, 2004.

Mac Gonagle, Brendan, “Ab ovo- The first celtic coinage,“ URL :

[https://www.academia.edu/25857737/AB\\_OVO\\_-\\_The\\_First\\_Celtic\\_Coinage](https://www.academia.edu/25857737/AB_OVO_-_The_First_Celtic_Coinage) , 2016.

- Maier, Ferdinand, “Das Kultbäumchen von Manching. Ein Zeugnis hellenistischer und keltischer Goldschmiedekunst aus dem 3. Jahrhundert v. Chr.” in *Germania*, vol. 68, no.1, 1990, S. 129-165.
- Maier, Ferdinand, “The oppida of the second and first centuries B.C.,” in Kruta, Venceslas et. al. (eds.), *The Celts*, Gruppo Editoriale Fabbri, Bompiani, Sonzogno, Etas S.p.A., Milan, 1991 (rep. Rizzoli International Publications, New York, 1999), pp.423-439.
- Maier, Ferdinand, „Eiche und Efeu : Zu einer Rekonstruktion des Kultbäumchens von Manching,“ in *Germania*, vol.79, no.2, S. 297-307.
- Maier, Ferdinand, Geilenbruegge, Udo, Hahn, Erwin, Köhler, Heinz-Jürgen, Sievers, Susanne, *Ergebnisse der Ausgrabungen 1984-1987 in Manching* (Ausgrabungen in Manching Band 15), Steiner, Stuttgart, 1992.
- Maier, Ferdinand, mit Beiträgen von Raub, Christoph J., Gebhard, Rupert, Koller, Johann und Baumer, Ursula, „Manching und Tarent: Zur Vergoldungstechnik des keltischen Kultbäumchens und hellenistischer Blattkränze,“ in *Germania*, vol.76, no.1, 1998, S.177-216.
- Megaw, Ruth and Vincent, “The nature of celtic art,” in Green, Miranda J. (ed.), *The Celtic world*, Routledge, London, 1995, pp.345-375.
- Megaw, Ruth and Vincent, “Ancient Celts and modern society,“ in *Antiquity*, 70, no.267, 1996, pp.175-181.
- Megaw, Ruth and Vincent, “The Celts: the first Europeans?,“ in *Antiquity*, 66, no.250, 1992, pp.254-260.
- Megaw, John V. S., “The Vix burial,“ in *Antiquity*, 40, 1966, pp. 38-44.
- Megaw, Ruth, “The stone head from Mšecké Žehrovice. A reappraisal,“ in *Antiquity*, 62, 1988, pp. 631-641.
- Milcent, Piere-Yves, “Hallstatt Urban Experience before the Celtic Oppida in Central and Eastern Gaul. Two Cases-Studies: Bourges and Vix,“ in Fernández-Götz, Manuel, Wendling, Holger Winger, Katja (eds.), *Paths to complexity: Centralisation and Urbanisation in Iron Age Europe*, Oxbow Books, Oxford & Philadelphia, 2014, pp. 35-51.
- Mohen, Jean-Pierre, “The princely tombs of Burgundy,“ in Kruta, Venceslas et. al. (eds.), *The Celts*, Gruppo Editoriale Fabbri, Bompiani, Sonzogno, Etas S.p.A., Milan, 1991 (rep. Rizzoli International Publications, New York, 1999), pp.116-122.
- Murray, Matthew, “Socio-political complexity in Iron Age temperate Europe: A dialectical landscape approach,“ in Daniel A. Meyer, Peter C. Dawson, Donald T. Hanna (eds.), *Debating Complexity: proceedings of the twenty-sixth annual chaco conference*, The archaeological association of the University of Calgary, Calgary, Alberta, 1996, pp. 406-411.
- Murray, Matthew, “Viereckschanzen and Feasting: Socio-Political Ritual in Iron-Age Central Europe,“ in *Journal of European Archaeology*, Volume 3, Number 2, 1995, pp.125-151, p.136.

- Nash Briggs, Daphne, "Coinage," in Green, Miranda J. (ed.), *The Celtic world*, Routledge, London, 1995, pp.244-253.
- de Navaro, J.M., "A doctor's Grave of the middle La Tène period from Bavaria," in *The Prehistoric Society*, no.22, 1955, pp.231-248.
- Nowak, Alexandra, *Opferkulte der Kelten - Brandopferplätze, Höhlen- und Quellheiligtümer*, Grin, 2010.
- Overbeck, Bernhard, „Die Münzen: Einführung in die Ausstellung,“ in Pauli, Ludwig, Bonnamour, Louis et. al. (Hrsg.), *Die Kelten in Mitteleuropa: Kultur, Kunst, Wirtschaft: Salzburger Landesausstellung 1. Mai-30. Sept. 1980 im Keltenmuseum Hallein Österreich*, Amt der Salzburger Landesregierung, Kulturabteilung, Salzburg, 1980, S.101-110.
- Pezron, Paul Yves, *The Antiquities of Nations; more particularly of the Celtae or Gauls, taken to be originally the same people as our ancient Britains*, 1703.
- Pörtner, Rudolf, *Bevor die Römer kamen Städte und Stätten deutscher Urgeschichte*, Weltbild Verlag GmbH, Augsburg, 1995.
- Powell, Thomas, G. E., "Celtic Origins: A Stage in the Enquiry," in *The Journal of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland*, 78, 1/2, 1948, pp. 71-79.
- *Putzger Historischer Weltatlas*, Velhagen&Klasing, Berlin und Bielefeld, 1961, und Cornelesen-Velhagen & Klasing GmbH & Co. Verlag für Lehrmedien Kg, Berlin, 1979.
- Raftery, Barry, "The island Celts," in Kruta, Venceslas et. al. (eds.), *The Celts*, Gruppo Editoriale Fabbri, Bompiani, Sonzogno, Etas S.p.A., Milan, 1991 (rep. Rizzoli International Publications, New York, 1999), pp.557-578.
- Reichenberger, Alfred, „Ausgrabungen in der spätkeltischen Viereckschanze bei Pankofen. Stadt Plattling, Landkreis Deggendorf, Niederbayern,“ in *AJB*, 1994, S.90-94.
- Reiser, Rudolf, *Die Kelten in Bayern und Österreich*, Rosenheimer Verlagshaus Alfred Förg GmbH & Co. KG, Rosenheim, 1984.
- Reincke, Paul, *Mainzer Aufsätze zur Chronologie der Bronze- und Eisenzeit*, Habelt, Bonn, 1965.
- Rind, Michael M., „Ausgrabungen auf dem Weltenburger Frauenburg 1999,“ in Rind, Michael M. (Hrsg.), *Geschichte ans licht gebracht (Archäologie im Landkreis Kelheim Band 3, 1997-1999)*, Verlag Dr. Faustus, Büchenbach, 2000, S. 83-85.
- Rolleston, T. W. (ed.), *The High Deeds of Finn and other Bardic Romances of Ancient Ireland*, G. G. Harrap & Co., London, 1910.
- Ross, Anne, *The Pagan Celts*, Batsford, London, 1986, p.124.
- Ross, Anne, "Ritual and the druids," in Green, Miranda J. (ed.), *The Celtic world*, Routledge, London, 1995, pp.423-444.



- Rupert Gebhard, "The "Celtic" oppidum of Manching and its exchange system," in *Different Iron Ages: Studies on the Iron Age in Temperate Europe*, Tempus Reparatum, Oxford, 1995, pp.111-120.
- Sankot, Pavel, "The Celtic population of Bohemia in the fourth century B.C.," in Kruta, Venceslas et. al. (eds.), *The Celts*, Gruppo Editoriale Fabbri, Bompiani, Sonzogno, Etas S.p.A., Milan, 1991 (rep. Rizzoli International Publications, New York, 1999), pp.294-296.
- Schäfer, Andreas, „Eine keltische Bronzegießerwerkstatt auf dem Mitterfeld im Oppidum von Kelheim,“ in Rind, Michael M. (Hrsg.), *Geschichte ans licht gebracht* (Archäologie im Landkreis Kelheim Band 3, 1997-1999), Verlag Dr. Faustus, Büchenbach, 2000, S. 106-111.
- Schäfer, Andreas, „Zur Chronologie und Chronologie süddeutscher Latènemünzen.“ in Sandner, Ruth, Tappert, Claudia, Prammer, J., *Siedlungsdynamik und Gesellschaft. Beiträge des internationalen Kolloquiums zur keltischen Besiedlungsgeschichte im bayerischen Donaauraum, Österreich und der Tschechischen Republik. 2. - 4. März 2006 im Gäubodenmuseum Straubing* (Jahresbericht des Historischen Vereins für Straubing und Umgebung. Sonderband 3), Straubing : Historischer Verein für Straubing und Umgebung, 2007, S. 125-144.
- Schaich, Martin, „Die spätlatènezeitliche Viereckschanze von Hartkirchen,“ in *AJB*, 1996, S.104-107
- Schubert, Franz and Mary, "Metrological research into the foot measurement found in the Celtic oppidum of Manching," in *Cotnplutum*, 4. 1993, pp.227-236.
- Schwarz, Klaus, *Atlas der spätkeltischen Viereckschanzen Bayerns*, C.H.Beck' sche Verlagsbuchhandlung, München, 1959.
- Schwarz, Klaus, „ Die Geschichte eines keltischen Temenos im nördlichen Alpenvorland,“ in *Ausgrabungen in Deutschland: Teil 1. Vorgeschichte, Römerzeit, Römisch-Germanisches Zentralmuseum*, Mainz, 1975, S. 324-358.
- Sievers, Susanne, *Manching: Die Keltenstadt*, Konrad Theiss Verlag GmbH, Stuttgart, 2003.
- Sievers, Susanne, et.al., *Ergebnisse der Ausgrabungen in Manching-Altenfeld 1996-1999* (Die Ausgrabungen in Manching Band 18, T.1, 2) , Reichert, Wiesbaden, 2013.
- Spindler, Max, *Bayerischer Geschichtsatlas*, Bayerischer Schulbuch-Verlag, 1969.
- Steffgen, Ute, Ziegau, Bernward, „Untersuchungen zum Beginn der keltischen Goldprägung in Süddeutschland,“ in *Jahrbuch für Numismatik und Geldgeschichte*, 44, 1994, S. 9-34.
- Stegmeier, Gerd, „Hügelgrab und Totenkult. Außergewöhnliche Bestattungs-, Opfer- und Ritualstrukturen aus dem keltischen Oppidum Heidengraben,“ in *Archäologische Ausgrabungen in Baden-Württemberg 2015*, 2016, S. 143-148.

- Stegmeier, Gerd, „Ort der Lebenden, Ort der Toten – weitergehende Untersuchungen im Bereich des spätkeltischen Oppidums Heidengraben,“ in *Archäologische Ausgrabungen in Baden-Württemberg 2010*, 2011, S. 131-135.
- Stegmeier, Gerd, „Spätkeltischer Totenkult im Oppidum,“ in *Archäologie in Deutschland*, 2, 2016, S.72-73.
- Thomas, Constanze, „Kultbäumchen des keltischen Oppidum von Manching: Neurestauration und Rekonstruktion,“ in *Restauro: Zeitschrift für Kunsttechniken, Restaurierung und Museumsfragen*, Bd.107, Nr.6, 2001, S.460-463.
- Thomas, Robert, “The Nature of Nazi Ideology,” in *Libertarian Alliance, Historical Notes* no. 15, 1991, pp.1-4.
- Uenze, Hans-Peter, “Bavaria,” in Kruta, Venceslas et. al. (eds.), *The Celts*, Gruppo Editoriale Fabbri, Bompiani, Sonzogno, Etas S.p.A., Milan, 1991 (rep. Rizzoli International Publications, New York, 1999), pp.288-293.
- Venclová, Natalie, “Mšecké Žehrovice, Bohemia: excavations 1979-88,” in *Antiquity*, Vol.63, Issue 238, 1989, pp.142- 146.
- Venclová, Natalie, “Celtic shrines in Central Europe: A sceptical approach,” in *Oxford Journal of Archaeology*, Volume 12, Issue 1, 1993, pp.55-66.
- Wait, Gerald A., “Burial and the Otherworld,” in Green, Miranda J. (ed.), *The Celtic world*, Routledge, London, 1995, pp.489-511.
- Waldhauser, Jiří, „Die keltischen Viereckschanzen in Böhmen,“ in Jenő Fitz (ed.), *The Celts in central Europe*, Székesfehérvár, István Király Múzeum, 1975, S. 235-244..
- Webster, Jane, “Sanctuaries and sacred places,” in Green, Miranda J. (ed.), *The Celtic world*, Routledge, London, 1995, pp.445-464.
- Webster, Jane, “Translation and subjection: Interpretatio and the celtic gods,” in Hill, Jeremy David, Cumberpatch, Christopher G. (eds.), *Different Iron Ages: studies on the Iron Age in Temperate Europe*, BAR, Oxford, 1995, pp.175-183.
- Wells, Collin, “Celts and Germans in the Rheinland,” in Green, Miranda J. (ed.), *The Celtic world*, Routledge, London, 1995, pp.603-620.
- Wells, Peter S. “Settlements and social systems at the end of the Iron Age,” in Arnold, Bettina and Gibson, D. Blair (eds.), *Celtic chiefdom, Celtic state: the evolution of complex social systems in prehistoric Europe*, Cambridge University Press, Cambridge, 1995, pp.88-95.
- Wells, Peter S., “Changing models of settlement, economy, and ritual activity: Recent research in late prehistoric central Europe,” in *Journal of Archaeological Research*, vol.2, no.2, 1994, pp.135-163.

- Wells, Peter S., “Industry, Commerce, and Temperate Europe's First Cities: Preliminary Report on 1987 Excavations at Kelheim, Bavaria,” in *Journal of Field Archaeology*, Vol. 14, No. 4, 1987, pp. 399-412.
- Wells, Peter S., “Special pit deposits on late La Tène Settlements: A case study at the Oppidum of Kelheim,” in *Archäologisches Korrespondenzblatt*, 46, Fasc. 1, 2016, pp. 89-100.
- Wells, Peter S., *The barbarians speak: How the conquered peoples shaped Roman Europe*, Princeton University Press, Princeton, New Jersey, 1999.
- Wendling, Holger, “Manching reconsidered : new perspectives on settlement dynamics and urbanization in Iron Age Central Europe,” in *European Journal of Archaeology*, 16, Fasc. 3, 2013, pp. 459-490.
- Wieland, Günther (Hrsg.), *Keltische Viereckschanzen: Einem Rästel auf der Spur*, Theiss, Stuttgart, 1999.
- Wieland, Günther, mit Beiträgen von Planck, Dieter et. al., *Die Keltische Viereckschanzen von Fellbach-Schmidlen und Ehningen, Landesdenkmalamt Baden-Württemberg*, Konrad Theiss Verlag, Stuttgart, 1999.
- Wieland, Günther, “The rural contribution to urbanism: late La Tène Viereckschanzen in southwest Germany,” in Stoddart, Simon (ed.), *Delicate urbanism in context: Settlement nucleation in pre-Roman Germany (The DAAD Cambridge Symposium)*, McDonald Institute for Archaeological Research, University of Cambridge, 2017, pp. 51-59, pp.51-52.
- Wiethold, Jullan, “Late Celtic and early Roman plant remains from the oppidum of Bibracte, Mont Beuvray (Burgandy, France),” in *Veget Hist Archaeobot*, 5, 1996, pp.105-116.
- Wittur, Joyce, “Reconstruction of the oppidum on the Dünsberg (Germany),” 2001. (URL : <http://leute.server.de/wittur/Duens/oppidum.pdf> )
- Wiwjorra, Ingo, “German archaeology and its relation to nationalism and racism,” in Díaz-Andreu, Margarita and Champion, Timothy, *Nationalism and archaeology in Europe*, Westview Press, Boulder, Colorado, 1996, pp. 164-188.
- Woolf, Greg “Rethinking the oppida,” in *Oxford Journal of Archaeology*, 12(2), 1993, pp.223-234.
- Zeidler, Jürgen, “Cults of the ‘Celts’: A new approach to the interpretation of the religion of Iron Age cultures,” in Raimund Karl, Jutta Leskovar (Hrsg.), *Interpretierte Eisenzeiten. Fallstellen, Methoden, Theorie*, Fdge.18, 2005, pp.171-179.
- Ziehaus, Bernward, “New aspects on Celtic coin hoards in southern Germany,” in Morteani, G. and Northover, J.P. (eds.), *Prehistoric Gold in Europe*, Kluwer Academic Publishers, Netherlands, 1995, pp.597-608.
- Ziehaus, Bernward, „Keltische Münzwerkzeuge aus dem Nörtlinger Ries Ein Vorbericht,“ in *Abhandlungen der Braunschweigischen wissenschaftlichen Gesellschaft*, Bd.60, 2008, S.113-127.